

現代日本語の意味・用法と造語機能に関する研究

目次

- I 研究の概要……9
 - 1. 研究の目的……9
 - 2. 語彙研究の資料として見た国語辞典……13
 - 2.1 国語辞典と語彙の研究……13
 - 2.2 国語辞典で記される漢語に関する情報……15
 - 3. 実例を収集する資料としての新聞……22
 - 4. 本研究の構成……24
 - 5. 用語について……26
- II 自立用法をもつ一字漢語および二字漢語の形成に力のある一字漢語の分析……28
 - 1. 自立用法をもつ一字漢語……28
 - 1.1 はじめに……28
 - 1.2 具体的な事柄をあらわす名詞と自立用法……28
 - 1.3 どのような一字漢語が名詞とされているか……31
 - 1.3.1 単独で使われること……31
 - 1.3.2 消極的に名詞と認められるもの……36
 - 1.4 おわりに……39
 - 2. 字音語基の造語力……42
 - 2.1 はじめに……42
 - 2.2 造語力の弱い字音語基……44
 - 2.2.1 対象とする字音語基の範囲と資料……44
 - 2.2.2 現代語であまり使用されない熟語……45
 - 2.3 事例検討の対象とする語基の性質と記述項目……47
 - 2.4 字音語基「残」の造語機能……49
 - 2.4.1 「残」と後部分語基との意味関係……49
 - 2.4.2 和語の「残り」との比較……50
 - 2.5 「開一」と「閉一」……51
 - 2.5.1 対義関係……51

2.5.2	総合的な表現……	55
2.6	「併一」の二字漢語……	56
2.6.1	漢語の言い換え……	56
2.6.2	二字漢語と四字漢語とにおける他方への言い換え……	58
2.7	おわりに……	61
Ⅲ	二字漢語の意味・用法における諸問題……	63
1.	推論によるVNの外部表示の特殊化……	63
1.1	はじめに……	63
1.2	先行研究の概要……	65
1.3	メトニミーと外部表示の名詞……	66
1.4	前提関係……	69
1.5	推論と外部表示……	72
1.6	おわりに……	73
2.	名詞要素を内部にもつサ変動詞語幹における格助詞の用法……	75
2.1	はじめに……	75
2.2	VNのとりうる文型……	76
2.2.1	VNの一覧……	76
2.2.2	0項動詞……	78
2.2.3	1項動詞……	79
2.2.4	2項動詞……	80
2.2.5	3項動詞と4項動詞……	82
2.3	格助詞の増減……	82
2.3.1	格助詞の増加……	82
2.3.2	格助詞の減少……	85
2.4	格助詞の交替……	87
2.4.1	同一の名詞に対して複数の格助詞を使用しうるケース……	87
2.4.2	主要な格助詞と交替可能なデ格について……	88
2.5	おわりに……	92
3.	動作性複合名詞と動詞との連合における重複表現について……	93
3.1	はじめに……	93

3.2	資料と考察対象……	94
3.3	重複の形式的特徴……	95
3.3.1	統語的な型……	95
3.3.2	語構成……	97
3.4	動作性複合名詞の名詞的用法……	98
3.4.1	「V+N」型における名詞的用法……	98
3.4.2	「V・V」「V>V」型の名詞的用法……	100
3.4.3	修飾要素と重複の看過……	101
3.5	動詞が行為の終局面をあらわす重複……	102
3.6	「動作性複合名詞+して+動詞」型……	104
3.7	おわりに……	107
4.	重言（重複表現）についての整理……	108
4.1	はじめに……	108
4.2	言語遊戯としての重言……	108
4.3	話しことばにおける重言……	109
4.4	外来語の意味の明確化……	110
4.5	「名詞+漢語サ変動詞語幹」のタイプについて……	112
4.6	「動作を示す漢語名詞+和語動詞」のタイプについて……	116
4.6.1	ほかの名詞への置きかえが容易なケース……	118
4.6.2	「～（を）する」への言いかえで事足りるケース……	120
4.6.3	ほかの名詞にかえにくいケース……	120
4.7	おわりに……	122
5.	漢語略語の意味・用法について……	132
5.1	目的と対象……	132
5.2	略語使用の実態について……	133
5.2.1	新聞をもとにした使用実態の確認……	133
5.2.2	略語も元の語もあまり使用されないグループ……	134
5.2.3	元の語は使われるが、略語はあまり使用されないグループ……	138
5.3	「略語は使われるが、元の語はあまり使用されないグループ」について……	140
5.4	「略語も元の語も使用されるグループ」について……	144

- 5.4.1 略語と規範意識……144
- 5.4.2 略語と元の語の両方を用いる場合……147
- 5.4.3 意味・用法に関する略語の問題……149
- 5.4.4 格助詞と格成分……152
- 5.5 おわりに……154
- 6. 対義関係の二字熟語について……158
 - 6.1 はじめに……158
 - 6.2 二字熟語の抽出と対義語の確認……159
 - 6.3 語の読み方, 語種, 語義の複数性……160
 - 6.3.1 複数の読み方がある語……161
 - 6.3.2 読み方が1対1の関係にある対義語ペアの語種と語義数……163
 - 6.4 対義語の使用実態と用法記述……166
 - 6.4.1 新聞における使用状況……166
 - 6.4.2 対義語の用法記述……168
 - 6.5 おわりに……170
- 7. 異音同表記語について……173
 - 7.1 はじめに……173
 - 7.2 判別の手がかりとなる情報……173
 - 7.2.1 別語の存在を注記する……174
 - 7.2.2 非日常語の場合……175
 - 7.2.3 現代共通語としての性質の有無……177
 - 7.2.4 一方を標準的とする……179
 - 7.2.5 形式的な制限にもとづく使い分け……182
 - 7.3 読解におけるまぎらわしさを減らすための表記……182
 - 7.3.1 別漢字による表記……182
 - 7.3.2 漢数字と洋数字……185
 - 7.3.3 送りがな……185
 - 7.3.4 かな書き……189
 - 7.4 漢語同士の組み合わせについて……192
 - 7.4.1 読みのゆれと意味の異なり……192

7.4.2	別語同士の組み合わせについて……	194
7.5	おわりに……	197
8.	漢語の文章語について……	200
8.1	はじめに……	200
8.2	同音語のない漢語文章語……	201
8.3	位相……	201
8.4	改まったスピーチで使われる漢語……	205
8.5	コミュニケーション上の混乱が生じる可能性……	206
8.5.1	同音語の発生……	207
8.5.2	同表記語の存在……	208
8.5.3	一般的な語義との関係……	209
8.6	おわりに……	210
IV	字音形態素の造語機能……	211
1.	字音形態素「新」の造語機能……	211
1.1	はじめに……	211
1.2	「新+動名詞」について……	213
1.2.1	「新」が付きやすい動名詞……	213
1.2.2	「再一」との比較……	214
1.2.3	「新+動名詞」が用いられる要因……	216
1.3	「新」の位置と意味……	217
1.3.1	「新」による名詞修飾の性格……	217
1.3.2	「A新B」が出現する条件……	218
1.4	「新」の多義性……	221
1.4.1	「新しい」の多義的解釈……	221
1.4.2	「新一」における多義的解釈の検討……	222
1.5	おわりに……	225
2.	「新」と「初」……	226
2.1	はじめに……	226
2.2	「初」の読み方……	226
2.3	「新」と「初」の比較……	227

3. 字音形態素「同」と照応……232
 - 3.1 はじめに……232
 - 3.2 先行研究の概要……233
 - 3.3 「同一」の二字漢語について……234
 - 3.4 「同一」による言語単位の拡張……236
 - 3.5 先行詞の部分利用……241
 - 3.5.1 複合語内の1語を照応表現に用いるタイプ……241
 - 3.5.2 先行詞の接辞性語基を含まない照応……243
 - 3.6 おわりに……245
4. 接尾辞的な一字漢語と類義の二字漢語における造語機能の比較……247
 - 4.1 はじめに……247
 - 4.2 資料と分析対象……247
 - 4.3 造語力, 周辺の意味……248
 - 4.3.1 後項としての用法に欠ける二字漢語および略語……248
 - 4.3.2 後項として一般的か非一般的か……249
 - 4.3.3 周辺の意味の差……250
 - 4.4 造語機能の比較……251
 - 4.4.1 結合対象の重なる一字漢語と二字漢語……251
 - 4.4.2 結合対象の重ならないもの……252
 - 4.4.3 結合対象が部分的に重なるケース……254
 - 4.5 一字漢語と二字漢語の関係の諸相……258
 - 4.5.1 類義語グループにおける比較……259
 - 4.5.2 対義関係……263
 - 4.5.3 多義について……266
 - 4.6 おわりに……269
5. 国語辞典と四字漢語一辞書にのる語とのらない語……271
 - 5.1 はじめに……271
 - 5.2 語の構造的な面からの観察……272
 - 5.2.1 四字漢語の語構造……272
 - 5.2.2 四字漢語の意味的な構造……273

5.2.3	二字漢語の造語機能と意味的な構造……	274
5.3	四字漢語の意味・用法の面からの観察……	276
5.3.1	接辞的な二字漢語を含み，説明不要なケース……	277
5.3.2	要説明の要因とそれを有さない四字漢語……	279
5.3.2.1	ほかの語との関係など……	279
5.3.2.2	意味の限定……	283
5.3.2.3	名詞間に見られる意味的な特徴……	286
5.4	おわりに……	288
6.	名詞＋名詞の四字漢語について……	289
6.1	はじめに……	289
6.2	分析対象とする四字漢語……	289
6.3	分析……	290
6.3.1	人名詞を含む四字漢語……	290
6.3.1.1	人名詞同士の結合……	290
6.3.1.2	前部分として……	291
6.3.1.3	後部分として……	293
6.3.2	組織名詞を含む四字漢語……	294
6.3.2.1	組織名詞同士の結合……	294
6.3.2.2	前部分として……	295
6.3.2.3	後部分として……	296
6.3.3	物名詞の場合……	298
6.3.4	抽象名詞の場合……	299
6.3.4.1	具体名詞としての用法が一般的でない二字漢語……	299
6.3.4.2	抽象名詞としての用法に衰えの見える二字漢語……	301
6.3.5	場所名詞の場合……	303
6.3.6	時間名詞の場合……	303
6.3.6.1	前部分として……	303
6.3.6.2	後部分として……	305
6.3.7	方向をあらわす名詞の場合……	306
6.4	「名詞＋名詞」の語における重言……	307

6.5	おわりに……………	310
7.	三字漢語・四字漢語の形成における注意点……………	314
7.1	はじめに……………	314
7.2	造語における検討項目……………	314
7.3	接辞抜きでも済むケース……………	316
7.3.1	「要一」の語……………	317
7.3.2	「要一」の長い語の場合……………	318
V	おわりに……………	328
1.	本研究で問題としたこと……………	328
1.1	意味・用法について……………	328
1.2	造語機能について……………	332
1.2.1	二字漢語……………	332
1.2.2	三字漢語・四字漢語……………	333
2.	今後の課題……………	335
	参考文献……………	341
	付記……………	353

I 研究の概要

1. 研究の目的

本研究では、数多くの漢語語彙をとりあげ、現代日本語において、それらがどのように使われているのか（意味・用法）、新語が必要になった際に、漢語を用いて、どのような複合語や派生語が生産されているのか（語構成）、といったことを分析することを目標としている。「走る」「投げる」などの和語や「ゴール」「トップ」などの外来語の場合、単独で語として用いられるものが少なくないが、漢語の場合、「鉄」「運」など一字で語として用いられるものが比較的少数で、「回転」「海水」など、二字の形で語として用いられる場合が非常に多い。そして、このような二字漢語の意味を考えようとするれば、「回」も「転」も似た意味で並列関係にある、あるいは、「海水」は「海」が「水」を連体修飾する修飾関係にあるというように、語構成への考察を欠かすことができない。意味・用法と語構成をあわせて扱うというのは、そのような事情による。

現代語の漢語については、野村（1974）、野村（1975b）、野村（1978）などの一連の研究が早く、それにより、漢語の語構造などについての語彙論的な研究が進展し、さらに、仁田（1980）や影山（1980）、影山（1993）、小林（2004）などにおいて、文中における漢語のふるまいという、構文論的な視点が加わったとされている。このような研究の流れから考えれば、構文論的な分析をさらに深めるなどの方法がとられるべきとも見られるものの、本研究では、語彙論的な観点も必要だと考え、どちらかの立場にかたよることなく、記述的な態度で考察を加えたいと思う。小林（2004, p. 5）で、「野村氏の研究によって、漢語の内部構造はかなり明らかになった」とあるように、文法論的な見方の重要性を論じる小林の研究においても、野村による語彙論的な見方が否定されているわけではなく、研究の目的によって、どちらのアプローチが有効なのかは、かわってくるだろうと思われる。たとえば、本研究の分析対象の一部である、対義関係の二字熟語の場合、「高・低」「上・下」など、対義関係にある一字漢語が、「高級・低級」「上院・下院」など二字で使われる場合には、どの程度の割合で対義関係が成り立っているのか、対義以外の意味関係はどのようなものがあるのか、といった点を問題にしているが、そこでは、文中での漢語のふるまいといった点は、あまり考察のポイントにはならない。重点の置き所があいまいだとの批判も想定されるが、ひとまず本研究では、語彙論的な見方と文法論的な見方のどちらもが大切だと考え、分析にあたって参考すべき指摘がある場合には、いずれの立場のものであっても、積極的に取り入れる態

度で臨むこととする。

また、本研究の背景には、「漢語整理」を行うための基礎資料となる研究にしたいという考え方があり。漢語整理とは、漢語のうち、一般の人にわかりにくい漢語と、日常的に用いられる漢語とを区別し、むずかしいものについては、和語などを用いて、わかりやすい表現に改めることをいう。どんな漢語に整理が必要なのかを検討するにあたっては、まず多くの漢語について、その性質を考察して、特徴を明らかにしておく必要がある。この点については、菊沢（1926, p. 71）に次の指摘がある。

漢語整理の標準は、何を基礎としてするかといえば、漢語が国語として存在する場合の長所及び短所を十分に明にするとゆう事である。この長所短所を十分に心懸けていないで、徒に漢語の整理に着手しようとしても、それは甚だ危険であり、却つて整理の目的を達し得ない様な結果に終るかもしれない。

この文章の後で、漢語の長所の例として、語が短くて簡潔なこと、短所の例として、同音異義語が多いことをあげている。このように、漢語の性質をよく知ってから漢語の整理を行うという立場にたつならば、意味・用法や語構成についても、詳細に検討する必要があることがうかがわれる。

それでは、現代語において、漢語整理がなぜ必要かという点、同音異義語が多くて、コミュニケーション上のまぎらわしさがあることのほかに、次のような事情があげられる。

- ① 語構成に関する意識がはたらかず、重複が起りやすい。
- ② 語構成および意味が勘違いされて、一般的でない使い方がなされることがある。
- ③ 文章の中には、会話では使われないようなむずかしい漢語が多く用いられ、会話と文章の差が大きい。
- ④ 話しことばの中に、むずかしい漢語が用いられ、聞き手にわかりにくい場合がある。

順番に説明する。まず、①であるが、重複は、「血のあと」あるいは「血痕」だけでよいところに、「血痕のあと」のごとく余分な「あと」が加えられるような表現のことをいう。「痕＝あと」であり、「血痕」が「血の痕」という意味になることについて、話者の意識が希薄になるために、このような言い方があらわれるが、この現象は、漢語においてよく見ら

れる。いくつか具体例を以下に示す。

詳しい詳細（「詳しい」が不要）

要衝の地（「要衝」に場所の意味が含まれる）

純国産製（「産」につくるという意味が含まれるので「製」は不要）

自分で自答した（「自答」に「自分」の意味が含まれる）

林立して立っている（「林立」に「立つ」という意味が含まれる）

治安が正常化に戻りましたら（「化」と「戻る」で動作を示す表現が繰り返されている）

いずれも、テレビやラジオから拾った例であるが、重複は国語辞典や誤用に関する本でもとりあげられることのある現象であり、類例は多い。

次の②も①と似た面があるが、余分な要素が繰り返されるわけではない点で異なる。たとえば、「去来」というのは、「いろいろな思いが行ったり来たりすること」であるが、「来」にしか意識が向かなくなると、「有名人のだれだれが私のはたらく店に去来した」のように、単なる「来る」の意味で使ってしまう誤用が生じる。あるいは、ある民放のニュースで、オリンピックで活躍した選手のユニフォームを、博物館に「あげる」「贈る」「贈呈する」「贈与する」という文脈において、「寄与」という語がアナウンサーによって用いられたのを見かけたことがある。このような使い方は、「③おくりあたえること。〔節用集文明本〕（『大辞林 第3版』）のように、比較的、大きな国語辞典では、記載するものが見られるものの、現代語における「寄与」の使い方としては、決して一般的とはいえない。①②ともに、使われていない漢語をむりに使おうとすることで生じる問題であり、日常語を使えば防ぐことは可能である。

次の③であるが、たとえば次のような指摘がなされることがある。

近頃は新聞社の方々の一方ならぬ努力によって、紙面はあかるく表現はやさしくなってきた。けれどもまだまだ漢字漢語が多すぎるのではなかろうか。たとえば「多い」といえば足りるところを「多大である」，「正したい」でいいところを「是正したい」，「近づく」で十分であるのに「接近する」と書いてある，といったように。

（原（1955, p. 3））

あるいは、ある大学の図書館において、「通路が狭隘のため、かばんはロッカー利用が便利」という紙がはってあるのを見かけるが、新聞などと異なり、硬い文体である必要がなく、留学生なども目にするであろう場所に、「狭隘」が出現するという現象も問題であり、利用者のことを考えれば「せまい」などが適切だろうと感じられる。

最後に④である。たとえば、学生同士の会話の中で、普通の話しことばとしては、「一緒に」「ともに」などを用いればすむところに、「付随して」という言い方が行われることがあるが、「付随」を文章語と認識し、(くだけた)会話で用いることばではないと理解している人にとっては、違和感の強い表現である。あるいは、国会などで「こわす」「損なう」ですむところに「毀損」という単語が、議論の最中にたびたび使われる。このような例からは、相手にわかりやすい表現をする意識が薄いようにも思われるが、わかりやすい表現を心がけていても、気づかずに、つい伝わりにくい言い方をしてしまうということもある。例を一つあげる。『旅行セールス入門』(小田毅・宮内順(1997) ストリーム)という本では、旅行ツアーを申し込む客との会話において、旅行会社の側が注意すべき点を説明する部分があるが、接客の用語としては、専門用語を使わずに、わかりやすいことばを使うことが提案されている。問題は、電話対応で使うことばの例をあげると、「たいへんお待たせしました」「おそれいりますが」などとともに、「○時頃帰社予定になっておりますが」という言い方が記載されている点である。「帰社」は、会社などではたらく人の間では、日常的に使うことばであっても、それ以外の人にとって、なじみのあることばとはいえない面がある。中高生などを主な対象とする『例解新国語辞典 第8版』や『ベネッセ表現読解国語辞典』などでは、「汽車」「記者」「喜捨」などはあっても「帰社」は立項されていない。ツアーの申し込みをする人には、学生や主婦、お年寄りなどもあるだろうから、「会社に戻る」などの言い方のほうが伝わりやすい。このように、自分たちにとってはあたりまえの表現であっても、相手にとってはわかりにくい表現である可能性についても考慮されることが大切である。

以上のように、相手に伝わりやすいことばづかいをするという目的において、漢語がそのさまたげになっている場面は、現代でも、よく見られることである。なお、③については、次のように、現代語で、わかりやすい表現への言い換えが提案されることもある。

○撤去は困難を極めています。→取り除くのは、難しくなっています。

○漁に支障を来しているのです。→漁のじゃまをしているのです。

○被災地の漁業を窮地から救うと期待されています。→漁業をよみがえらせると期待

されています。

これらは、放送のことばについて議論するNHKの放送用語委員会において、2012年10月に検討された事柄であり、委員会の様子を記している滝島（2013, p. 78）は、「視聴者に伝わりやすい易しいことばを選ぶようにしたい」とまとめている。

漢語整理という考え方をもって、詳細に漢語の分析を行った研究には、ワカバヤシ（1936）があり、多くの点について、筆者は、この研究を参考にしている。しかし、すでに刊行から数十年以上たっており、漢語の中には、当時、難語とされたようなものであっても、現在では日常語になっている場合もあり、現代語については、改めて、語の性質を検討する余地がある。たとえば、「使用」という二字漢語は、「当用漢字表」（1946）の時期につくられた言いかえ集などにおいて、「使う」などへの言いかえが望ましい例としてあがっていたが、現在では、日常的事ことばと受け止められているのではないだろうか。小学生向けの国語辞典である『例解学習国語辞典 第9版』では、「とくに大切なことば」として、赤字で記されている。したがって、ワカバヤシ（1936）を参照しながらも、当時とは異なっている点などに留意しながら、現代の漢語における特徴を記述的に考察するというのが、本研究の立場ということになる。

2. 語彙研究の資料として見た国語辞典

2.1 国語辞典と語彙の研究

本研究では、たとえば、「特急」（特別急行）のような略語の二字漢語や、「動脈硬化」のような四字漢語などについて、それぞれの意味・用法あるいは語構成などを論じるにあたって、なるべく多くの語例を収集した上で、帰納的に考察するという方針から、積極的に国語辞典を使用することにした。国語辞典は、商品としての性質をもつものであると同時に、日本語学の研究の成果を反映したものであるとしての性質もっており、「アカデミズムと実用とを繋ぐ、一種の応用言語学的産物」（倉島（2008））と位置づけられる。

ここでは、漢語を分析するのに有用な情報として、どのようなものが記載されているのか、という点に重点を置きながら、資料としての国語辞典の性質を概観する。国語辞典に記載される情報としては、木村（2011, pp. 159-160）で、次のような項目が示されている。

- ① 発音：語の発音，アクセント

- ② 表記：仮名遣い，漢字字体，語の漢字表記，送りがな，外来語の原綴など
- ③ 意味：語の意味，類義語，語誌，語源，位相，語感など
- ④ 文法：品詞，活用の種類，動詞の自他など
- ⑤ その他：語種，語構成，派生形，ことわざ，慣用句，用例，出典，など

このような辞書に記載される項目と，語彙論で研究対象となる項目を比べるために，安部（2009, p. 13）で提唱されている「主要な語彙的カテゴリー」を以下に記す。

意味，形態，語種，語構成，文法機能，文字，位相，文体，文化，計量的分析方法，意味体系的分析方法（まとまりとしての意味的分類・シソーラス研究）

意味や語種，語構成など，国語辞典の記載項目と重なる部分が少なくないことが，ここから見て取れる。安部（2009, p. 12）によれば，「文化」は，「近年の文化的研究（民族・民俗・言語文化学なども含む広義の）の進展を考慮」して，必要となる観点だとされている。

ここでは，大塚（2013, p. 38）が「最近刊行・改訂された国語辞書」で，一般向けのものということできりあげている次の 15 辞書をもとにして，漢語分析とのかかわりを述べる。

大辞泉 第2版

新明解国語辞典 第7版（新明解）

岩波国語辞典 第7版 新版（岩国）

三省堂現代新国語辞典 第4版（三現国）

新選国語辞典 第9版（新選）

明鏡国語辞典 第2版（明鏡）

広辞苑 第6版

三省堂国語辞典 第7版（三国）

学研現代新国語辞典 改訂第5版（学研）

現代国語例解辞典 第4版（現国例）

大辞林 第3版

旺文社国語辞典 第11版（旺文社）

小学館日本語新辞典（日本語）

集英社国語辞典 第3版 (集英社)

新潮現代国語辞典 (新潮現)

※大塚 (2013) の後に、『三国』『学研』『旺文社』は改訂されたものが出ており、ここでは、最新の版を示した。

2.2 国語辞典で記される漢語に関する情報

前述したように、国語辞典には、多くの情報が記載されるが、木村 (2011) の分類にそって、それぞれの項目と漢語の研究との関連を、特に本研究と関係が深いものを中心にして概観する。

[発音]

発音については、漢語には同音語が多い点が問題となる。「保証」「保障」「補償」の使い分けなどは、新聞社などでも悩むことのある例である。岩淵 (1965, p. 89) では、「市立」と「私立」は、どちらもシリツでは全然区別がつかなくて困るので、イチリツ、ワタクシリツと発音することがある。野球の「四球」と「死球」も大いにまぎらわしい。そこで新聞社では、記事を電話で送る時などは、「四球」をヨツダマと言ったりするそうである」というような、同音語の回避について言及されている。外来語の「フォアボール」や「デッドボール」を「四球」「死球」の代わりに使うのも、同じ心理によるものであろう。『三国』では、「市立」と「私立」、「信実」と「真実」など、「読みが同じで書き分けに注意する語」には、相互参照の矢印をつけて、注意を促している。「通行」「通交」「通航」のように、二つ以上の語に矢印がついているものも含めて、筆者が『三国』の第6版を用いて調査した際には、724の項目について (対象は二字漢語のみ)、このような処置がとられていた。単純に二倍しただけでも、1,448語は、書き分けや使い分けに注意が必要な漢語があることになる。同書の収録語彙は約8万語であると凡例で説明されているので、そのうちの約2%程度という割合である。このような同音語については、『学研』『三現国』などでも矢印による注意喚起が施されている。

アクセントについては、『大辞林』『新明解』『新選』『小学館』『集英社』『現国例』に記載が見られる。本研究では、アクセントにふれる部分は、ほとんどないものの、「福岡県では黄砂による被害が拡大しており～。同県では」のように、連体詞的に用いられる「同」の分析をIVで行う際に、アクセントへの目配りが必要になる。たとえば「同月」の場合でいうと、

「同月の生まれ」など「同じ月」の意味では、平板型のアクセントであり、「一〇月三日組閣、同月三〇日解散」（以上、『大辞林』より）など、「その月」（連体詞的な用法）という意味では、頭高型のアクセントであるというように、用法ごとにアクセントが異なる場合があり、以上のような、アクセントの型と用例の表示は、分析の基礎資料として有益になってくる。

[表記]

前述の表記に関する項目のうち、本研究とかがわりがあるのは、語の漢字表記や送りがない部分である。日本語では、「市」における「シ」と「いち」や、「大事」における「ダイジ」と「おおごと」のように、同一の漢字表記によって、漢語と和語の両方をあらわす場合が少なくない。それゆえ、漢語は「大事」のように漢字表記し、和語は「大ごと」「おおごと」のように、かな書きすることで、書き分けられることがある。読み手が迷わないようにするための配慮として、必要な処置であるが、かな書きについては、『三国』『新選』『明鏡』『学研』『三現国』などが、「大（事）」のように、（ ）などの記号によって、カッコ内の部分はかな書きが可能であることを示したり（『三国』より）、表記情報を示す欄を設けて、たとえば「漫画」は「マンガ」と書くことも多い（『明鏡』）というように示したりするといった対応をとっている。『学研』『新選』『明鏡』について、筆者が行った調査では、後の表1に見られるような語に関して、かな書きの選択肢が示されている。

表1には、語種の区別なく、かな書き可能な語の内訳を示してある。「漫画」と同様、俗語的な性質をもつ「軟派」がカタカナ表記されること、「細細（サイサイ）」と同表記になる「こまごま」がかな書きされることによって、両者の書き分けが可能なことなどがわかる。

送りがなは、「行う」「軽い」「申し込む」など、和語の表記において、漢字の読みをはっきりさせるためにつけるかなのことであり、漢語とは、直接の関係は有していない。しかし、たとえば「生物」において、可能性としては「セイブツ」「いきもの」「なまもの」といった読みが考えられるが、和語については、送りがなを用いて「生き物」としたり、かな書きを用いて「生もの・なま物」としたりすることによって、書き分けが可能になるように、漢語と和語の表記が同一になりうるケースにおいて、間接的に漢語と送りがなとのかがわりが生じてくる。「冷酒（レイシュ）」との読み誤りを防ぐために、「冷や酒」については、送りがなを省いて「冷酒」と書くようなことはしない、というのも同様の問題である。これらは、音は異なるが表記が同じになりうる語の問題であり、「異音同表記語」という用語でよばれ

ることがある。この問題については、Ⅲでくわしく扱う。

表1 品詞面から見た、かな書きされやすい語の内訳

	学研		新選		明鏡	
	語数	語例	語数	語例	語数	語例
名詞	112	できもの(出来物)	351	とおせんぼう(通せん坊)	216	きっかけ(切っ掛け)
形式名詞	7	ところ(所)				
サ変動詞語幹	6	ナンパ(軟派)	10	こまごま(細細)	7	かつあげ(喝上げ)
代名詞	1	うち(内)	5	おれ(俺)	4	わたくし(私)
動詞	32	ちぎる(千切る)	36	たなびく(棚引く)	179	できる(出来る)
補助動詞	13	おく(置く)	5	くる(来る)	12	まいる(参る)
複合動詞の後項	0		10	だてる(立てる)	7	つける(付ける)
形容詞	2	えらい(偉い)	15	すばらしい(素晴らしい)	35	いやらしい(嫌らしい)
補助形容詞	1	ない(無い・亡い)	1	ない(無い・亡い)	3	よい(良い)
複合形容詞の後項	0		1	かねない(兼ねない)	0	
形容動詞	33	おおぎょう(大仰)	62	へいちゃら(平ちゃら)	40	いいかげん(いい加減)
副詞	51	まんざら(満更)	72	ひときわ(一際)	75	まま(間間)
連体詞	4	名だたる(名立たる)	0		5	心ある(心有る)
接続詞	4	さようなら(左様なら)	10	したがって(従って)	6	ただし(但し)
感動詞	2	なるほど(成程)	3	くわばら(桑原)	6	あわれ(哀れ)
助詞	5	くせに(癖に)	0		1	ほど(程)
接辞(接頭語・接尾語)	20	け(気) おき(置き)	1	か(箇)	14	もの(物) ばる(張る)
造語成分	0		18	どころ(所)	8	がかり(掛かり)
連語	10	つまらない(詰まらない)	8	ございます(御座います)	35	について(に就いて)
あいさつ語	0		3	こんにちは(今日は)	0	
計	303		611		653	

[意味]

意味については、漢語の意味・用法を論じる本研究の性質上、関係する部分が多い。語の意味は、国語辞典において、もっとも重要な情報であり、いずれの辞書でも必ず記載されるものである。ここでは、新語義(新しい意味)の認定について見ておく。『三国』は、新語について、ほかの辞書に先んじて採用することが多いといわれるが、語の新しい意味の記述についても、積極的だという特徴が見られる。たとえば、

○絶版品は勿論、現行品もお引き受けします(『ミニカーマガジン』233)

という文で「絶版」を目にした際、「一度出版した本を重ねて出版するのを、やめること」(『岩国』)の意味でしか用いられないと理解していた筆者は、これを誤用かと推測したが、『三国』では、1988年発行の第3版から、「製造をやめること。「一ミニカー・一車」という意味と用例をのせており、上の用例が、臨時的な使用を示すものではないことが確かめられた。ほかの14の辞書では、この使い方は、ふれられていない。筆者の気がついた範囲で

は、ほかに「卒業」「着床」に関して、2008年刊行の第6版から、それぞれ「④〔俗〕引退。

「番組を一する」, 「②エレベーターのかごがある階に止まること。「停電時自動一装置」などが記述されており、これらもやはり、ほかの辞書では記されていない使い方である。本来的な使い方ではないというような理由から、ほかの辞書で採録を見合わされた意味・用法がある可能性も否定はできないが、少なくとも『三国』が積極的に現実に行われている使い方を取りいれていく方針であることはうかがえる。それゆえ、本研究で、漢語の意味・用法を分析するのにあたっては、『三国』の記述は貴重なデータとなり、また、それがほかの辞書で採用されていない意味・用法であれば、現状としては、ごく一般的な使い方とまではいえない可能性をもつものであることを推察する手がかりとなりうる。

類義語は、たとえば、「長寿」について「人間などの寿命が長いこと。長生き」(『岩国』)の「長生き」が示されるように、通常、語の意味の後に書かれることが多い。ただし、類義語であることをはっきりさせるほうが望ましいと考えれば、中学生や高校生を主な対象とする『例解新国語辞典 第8版』(『例解』)や『ベネッセ表現読解国語辞典』などのように、「類」のマークを用いて、類義語を語釈と別の枠に表示する方法をとるのも有効である。二字漢語に関して、『例解』の第7版を用いて調査したところ、4,777語において、類義語のマークがついていることが確認された。「明瞭」「明白」「判然」「歴歴」の四つが類義語とされる「歴然」のような語もいくらか見られる。この辞書は、約6万語を収めるとされるが、少数とはいえ数々の二字漢語において、類義の語が存在することがわかる。そして、たとえば「強国・大国」のペアでは、「大国」には「軍事大国」「交通事故大国」など、語の構成要素としての使用が見られるが、「強国」には、それが見られないというような語構成の問題や、「機転・融通」のペアでは、「融通」のみが「融通する」のようにサ変動詞として用いることが可能であるというような文法機能の問題などについて、ほかにも同じようなケースがあるのか、使い分けの注意点は、どういったことかなどを調べる際の資料として、上記の類義語データを活用することが可能である。

一方、「前方・後方」「入会・退会」のような、対義語の場合については、多くの辞書で「対」や「↔」などの記号を用いて、どの語が対義語であるのかが示されている。本研究では、「下院・上院」のように、語形に共通部分のある対義関係の二字熟語を取りあげ、「下院・上院」では、「下・上」における対義の関係が、熟語においても成立しているが、「下校」の場合は、「登校」が対義語であり、「下・上」で対義関係が成り立たない(「上校」は「学校にはいること。就学」(『大辞林 第3版』))、というような現象についてくわしく検討し、量的な割合

や用法上の注意点などを指摘する。

本研究では、共時的な分析を行うため、語誌や語源について、筆者自身で調査することは、ほとんどないものの、辞書に見られる、これらの情報は、分析上も参考になるものが少なくない。たとえば、「募金」について、『岩国』では、「醵金・寄付する行為の意は一九八〇年ごろ学校から広まった誤用で、現在かなり多用。教師が言った「一のお金を持って来なさい」などを寄付の金銭と誤解したせいかな」とくわしく説明している。「お金を募る」という語構成が意識されにくくなっていることの好例ととらえられるが、このような情報については、「語源」欄を設けて説明するものや、（ ）や [] などのカッコを用いて補足的な説明をするものなどがある。たとえば、「金欠病」は、『旺文社』では「語源」欄で「「貧血病」をもじった語」と説明され、「挨拶」は、『日本語』では「(「挨拶」は押す、「拶」は迫る意で、もと禅家の語。「一挨拶」などといい、禅問答のやりとりをする意から)」というように説明されている。

[位相]

位相は、「男女・職業・階級などの違いに応じた言葉の違い」(『岩国』) のことである。和語の「おれ(俺)」を例に、この観点について、前述の辞書がどのような扱いをしているか確認すると、後の表2のようになる。

ここでは、男女の使い分けに関する一文のみを抜き出している。現代語としては、主に男性が使うということでは、各辞書で共通するものの、過去には、男女ともに使われたことにふれるかどうか、地方によっては女性も用いる場合があることに言及するかどうかといった点において、対応に違いが見られる。

本研究では、「遺言」について、一般的には「ユイゴン」だが、法律では「イゴン」と読むことなど、Ⅲで異音同表記語について論じる中で、位相に関する記述を行う。あるいは、略語や語形に共通部分のある対義関係の二字熟語などを分析する際にも、専門分野で使われる二字漢語にたびたび言及することがあり、位相という観点が重要になる。

語感については、表2において使われている「くだけた」「乱暴な」「ぞんざいな」「荒っぽい」などの表現が、その語がもつ語感を知る上で重要な手がかりとなる。「くだけた」などの反対をいう場合には「改まった」「かたい」などの表現が用いられる。

表2 「おれ」についての各辞書の扱い

大辞泉	元来、男女の別なく用いたが、現代では、男子が同輩または目下に対して用いる。
新明解	男が同輩・目下の者(や身内)に対して使うだけた自称。
岩国	主として男が使う、だけた、または乱暴な言い方。明治時代ごろまでは、女が使うこともあった。
三現国	男性が使う、ぞんざいな言い方。
新選	男性が使う、ぞんざいな言い方。
明鏡	多く男性が使う。
広辞苑	男女ともに、また目上にも目下にも用いたが、現代では主として男が同輩以下の者に対して用いる、荒っぽい言い方。
三国	[男]自分をさす、かなりだけた言い方／方言によっては、男女とも使う
学研	男性が同輩や目下の人と話すとき、自分をさす語。
現国例	男子が同等もしくは目下に対して用いる、だけた言い方。
大辞林	上代から中古へかけてはもっぱら二人称として用いられた。中世以降、一人称として用いられるようになり、特に近世以降は一人称の語として一般化した。これは貴賤男女の別なく用いられたが、近世末期以降は、女性には一般に用いられなくなった
旺文社	男性が同輩や目下の者に対し自分をさしている。
日本語	男性の話し手が自分をさしている語。◆地方によっては女性が用いることもある。
集英社	主に、男性がだけた会話で自分をいう語。
新潮現	おもに男性が、同輩又は目下の者に向かって用いる。

[文法]

品詞は、いずれの辞書でも記述される基本的な情報である。漢語は、「海水」「会社」など、名詞が多く、「する」をつけてサ変動詞として用いる「検討」「掃除」などの類や、「な」をつけて形容動詞として用いる「確実」「温暖」などの類がそれに続く。それから、「一層」「極力」などの副詞もある。ただし、助詞・助動詞など、付属語には漢語は見られない。活用の種類は、漢語については、たとえば「論ずる」(サ変)と「論じる」(上一段)のように、一字漢語の場合に、活用のゆれが問題となることが多い。辞書では、伝統を重視するとされる『岩国』のように、「ろんじる→ろんずる」と表示する立場と、『三国』のように、現代語としては「論じる」が一般的だととらえ、「論ずる」は、「論じる」の項目の末尾に、その形があることを示すにとどめる立場とに、大きく分けられる。

動詞の自他について、和語の場合、「歩く」が自動詞、「壊す」が他動詞というように、形態から動詞であることが自明であるのが普通だが、漢語の場合、たとえば「演技」は「演技する」のように動詞として用いることもある一方で、「演技がよかった」のように名詞としても用いられるため、辞書には「名・自サ変」(『明鏡』)のように表示される。また、和語動詞の場合、「壊れる・壊す」のように、自動詞と他動詞とで形態が異なるものが多いが、漢語の場合、「エンジンが破損する／エンジンを破損する」のように、一つの形態が自他両用に用いられることも多く見られるため、辞書では「自他スル」(『集英社』)、「自他サ」(『新

明解』)のような方法で、これを示す。本研究では、Ⅲで「開店」「登山」など、名詞要素を内部に含む二字漢語について論じる際に、辞書における自他の表示が活用されることになる。

[その他]

漢語を主な分析対象とする本研究において、語種の区別に関する情報は、きわめて重要である。『新選』と『新潮現』が語種を表示しており、両者を用いて、語種の判別を行うことにした。語構成に関して、たとえば和語動詞の場合は、「かぶ-る」「かぶ・る」のように語幹と活用語尾とをハイフンや中黒で区切る方法が一般にとられている。本研究でたびたび扱う二字漢語については、やはりハイフンを用いて区切りを示すものと、かなで一続きに示すものと大きくわかれる。前者には、『大辞泉』『新選』『現国例』『小学館』『広辞苑』『明鏡』『学研』『旺文社』があり、後者には『岩国』『三現国』『集英社』が該当する。また、『新明解』『三国』『新潮現』『大辞林』などでは、たとえば「開発」の場合、「かい はつ」のように、スペースを使うことによって、形態的な区切りを示すようにしている。

派生形は、たとえば「寒い」の項目の末尾に記される「寒げ」のような形のことであり、用例は、「冬の寒い朝」(『新明解』)のように、語釈の後に記される、その語を実際に用いた場合の例文のことをいう。「市民」について見ると、『学研』では、見出し語の後に「市民階級」「市民権」などの複合語、派生語を示しており、また「新」について『小学館』では、用例として「新学期」「新発見」「新勢力」などを示している。本研究のⅣで扱う「新会社」のような三字漢語や「運転再開」のような四字漢語の場合、「新」と「会社」、あるいは「運転」と「再開」のそれぞれの意味・用法を理解していれば、三字漢語と四字漢語の意味も容易に理解されるとの理由から、辞書には記載されないことが多い。そのような原則をもとに考えると、「市民階級」のように、辞書に立項される語は、特別な意味をもっていると判断されたもの、「新学期」「新発見」などの用例は、意味に特別なところはないものの、よく用いられる形として示されたもの、というように理解することができる。なお、ことわざ、慣用語、出典については、ここでは省略する。

以上、国語辞典に記載される情報と、本研究で扱う項目との関係を概観した。ある現象について、少数の例であれば、内省によっても、語例をあげて分析することが可能であるが、数多くの例を集め全体的な概観を行った上で、個々の問題を分析するという方針で考えた場合には、第1段階の資料として、国語辞典は、きわめて有効なものである。しかし、ある

語が、実際には、どのように使われているのかという面を見るためには、国語辞典に加えて、実例を収める、ほかの資料を用いなければならない。次に、本研究で主な用例資料として使用する新聞について、その性質を検討する。

3. 実例を収集する資料としての新聞

新聞は、ことばの用例資料として、従来よく用いられてきた。また、近年は、新聞コーパスなどが利用でき、容易に数十年分の記事を検索できるようになっている。文章語としての性格をもつ語が多い漢語は、比較的、硬質な文体をもつ新聞において多用される傾向にあるため、新聞を資料として漢語の性質を考察した論考は少ない。漢語の意味・用法や語構成を分析するのに新聞を用いている研究としては、野村(1975b)、野村(1978)、荻野(1996)、荻野(1998)、山下(1999)、小林(2004)、村木(2004)、石井(2007)、山下(2013)などがあげられる。

ことばに関して、新聞の利点としては、次のような点が指摘される。

- ・扱う内容が多岐にわたり、一部の分野に限定されない。
- ・複数の人間によるチェックを受けた上で公表されるので、ことばづかいに関して、信頼性が高い。

新聞の場合、ある記事について、社会部、経済部など記者が所属する部署のデスクのほか、紙面の構成を行う部署、ことばや内容の正誤を調べる校閲部などが、それぞれの観点から記事のチェックを行っており、最初に書かれた原稿がそのまま紙面にのるわけではない。それゆえ、誤字・脱字、あるいは誤用などの点について、修正が施されているのが普通であり、一般的なことばづかいを知るための資料としては、信頼がおけると考えられる。

しかし、一方で新聞には、文字数などの面で、厳しい制限があるため、省略や臨時的な語の作成、あるいは略語など、一般人が日常的に書く文章とは、やや異なる性質があり、次のような指摘も見られる。

新聞の記事に、文章のきめ細かさなどは必要でない。早く、たくさんの情報を流してくれることを、私たちは、新聞に期待しているのだから、臨時一語の構造に多少無理なところがあろうと、意味がわかりさえすれば、いいのだし、それが一目見て早くと

らえられれば、なおいいのである。そうすると、どうしても、漢字をたくさん使って、手っ取り早く意味を合成し、各要素の間の論理関係は深く追究しないというタイプの文章ができて来る。現代新聞と臨時一語の深い縁が、こうして保たれるのである。

(林 (1982, p. 22))

同様の指摘が山田 (2000, p. 43) にもある。山田は、新聞にあらわれる四字漢語などについて、「新聞記事の複合語には臨時的なものもかなりあり、やや特殊な性格をもつといえるのではないか」と指摘している。なお、林 (1982, p. 22) では、小学校の国語の教科書にのる文章を、臨時一語を多く用いる新聞の反対に位置する文章としてとりあげ、そこには、ほとんど臨時一語は見られないと述べる。

また、略語と新聞の関係については、田中 (1999, p. 292) に「スペースに、きびしい制限のある新聞は、明治以来、数多くの略語・略称を生み出し、普及させ、そして一般語彙として定着させてきた」との指摘があり、語例としては、「軍縮 (軍備縮小)」「原爆 (原子爆弾)」「産休 (出産休暇)」「産直 (産地直送)」「特訓 (特別訓練)」などが例示される。また、省略については、新聞の見出しなどで「慎重審議求め」など、格助詞を省略した言い方などが多く見受けられる。

以上をもとにすると、次のようにまとめることができる。

- ・ことばの使い方や表記について、誤りの少ない資料として、新聞は信頼度が高い。
- ・多くの情報を盛り込む必要があるが、文字数に制限があるため、それを補うために、臨時一語、省略、略語などが多くあられやすい。
- ・臨時一語や省略などを主たる分析テーマとする場合には適した資料だが、新聞に見られるある単語が、一般の文章でも普通の語として通用するものかどうかについては、注意して判断する必要がある。

したがって、本研究では、大量のデータを収集するための基礎的な資料として新聞を用いるが、やや臨時的な使い方なのではないかと疑われるようなケースについては、適宜、雑誌や一般書籍、あるいは専門分野における使用例などを追加して、慎重に判断するように心がけた。ただし、上記のような注意点は存在するものの、比留間 (2012, p. 48) が「新聞記事は (随筆などを除けば) 文学的な言い回しは極力避け、誰にでもよく分かるように書かなけ

ればならない」と指摘するように、新聞が読みやすさを考慮して書かれる文章としての側面をもつことも確かであり、一般性をもつ文章の一つの形として、新聞のもつ価値が減じることはないと考えられる。

4. 本研究の構成

以下、本研究の構成について、概要を述べる。Ⅱでは、「鉄」や「茶」のように、文中で単独で用いられる、つまり自立用法をもつ一字漢語について、その範囲と性質を検討し、その後、現代語において、新しく二字漢語を生産する際に用いられうる一字漢語（字音語基）の特徴について論じる。自立用法の一字漢語については、数がそれほど多くないこと、典型的な例として「鉄」や「茶」などがあることは指摘されてきたが、個々の一字漢語について、どのような特徴があるのか、あるいは、国語辞典で一字漢語を名詞として扱う際の基準などについては、ほとんどふれられたことがない。Ⅳにおいて、接辞的に用いられる「新—」「—権」などの一字漢語をとりあげるが、それに先だって、まず単独で用いられる一字漢語について、その性質を把握することが必要であると考え、Ⅱで考察することにした。

二字漢語については、現代語では、もはや新語が作られることが少なくなっており、造語力や造語機能の問題としては、三字漢語や四字漢語を取り扱う必要があることが従来も指摘されてきている。本研究では、二字漢語については、既存の二字漢語の意味・用法を大きく扱うという方針をとるものの、現在でも造語に用いられる一字漢語が一部、存在する点に注意がいると考える。たとえば、「残額・残飯・残品」などにおいて、二字漢語の要素として用いられる「残」の場合、シャープペンシルの芯に関して、「残芯 3.5mm まで使える」というような表現がなされるが、「残芯」という語は、一般的な辞書には記載が見られない。しかし、文具などの分野では、珍しくない言い方であり、臨時的な語ではない。すると、「残」のような一字漢語は、「のこる」という訓の存在もきっかけとなって、新たな語（辞書にのっていない語）をつくる可能性がありそうだと予測される。このような、新しい語を生み出す可能性をもつ一字漢語については、造語力の問題として、既存の二字漢語の分析を行う前に、やはり検討しておかなければならない。

Ⅲでは、既存の二字漢語を考察する。特に、重複にかかわるグループと、二字漢語として認定するのに何らかの問題があるグループの二つについて、漢語整理を行う際に、注意が必要になる諸問題を検討する。

先に述べたように、漢語の場合、運用に際して、二字漢語の要素に対する語構成意識が希

薄になりやすく、余剰的な要素があらわれやすいことが、たびたび指摘されてきた。ところが、「ラーメン屋を開店する」「大学病院に入院する」など、名詞要素を内部に含む「開店」「入院」などのサ変動詞語幹については、一見、重複と見られるような言い方が、慣用的に認められている場合が少なくない。サ変動詞語幹になる二字漢語のうち、内部に名詞要素を含むものについて、どういうものが慣用的に用いられているのか、どういう場合に重複と感じられるのかなどについて、検討を加える。そして、Ⅲの最後の節では、従来、重言として問題視されてきた各種の表現について整理を行う。

Ⅲの後半では、漢語略語、語形に共通部分のある二字熟語、異音同表記語、について、その用法を検討する。漢語略語とは、「販促（販売促進）」や「特訓（特別訓練）」など、二字漢語の見かけをもっているものの、一字漢語同士が結合した「登山」「回転」のような二字漢語と異なり、意味を理解するには、四字漢語など元の形に戻す必要があるものを指している。漢語略語の中には、辞書によって、略語として扱うかどうかには認定のゆれが見られるものや、略語のほうが一般に用いられ、元の語がほとんど使われないものなどが混在しており、その整理が必要であるが、これまでそのような観点からは、ほとんど分析されたことがない。

語形に共通部分のある二字熟語について。たとえば「大字・小字」は、「ダイジ・ショウジ」の場合は漢語であるが、「おおあざ・こあざ」と読む場合には、これは和語である。それゆえ、このような語については、用例収集の段階で、文中でどの語種・意味として用いられているのかを慎重に見極めなければならない。そして、書き分けやまぎらわしさを回避する方法なども考慮に入れながら、その用法を詳述する必要がある。漢語とそれ以外の語種との区別という点は、異音同表記語にもあてはまる。たとえば「半生」という形は、「ハンシヨウ・ハンセイ」という読みをもつ二字漢語として解釈されうる一方で、「ハンなま」という、漢語と和語の混種語である可能性も否定できない。「研究」や「回転」など、一つの表記が一つの漢語しかあらわさないような語の場合には、用例収集→分析へと容易に進めていくことが可能であるが、異音同表記語などの場合は、用例収集→語種・読みの判別→分析というように、踏むべき手順が一つ多くなる。

Ⅳでは、新しい語をつくる、つまり造語の観点から、三字漢語および四字漢語を検討する。まず、現代日本語において、非常に造語力がある接頭辞として出現頻度の高い「新」「同」をとりあげ、その意味・用法の詳述を行う。ワカバヤシ(1936)では、「新」や接尾辞の「策」などのように、造語力があり、日本語になじんでいるような接辞的な一字漢語については、言いかえずにそのまま用いるという選択肢が示されていた。本研究では、よく使われ、語彙

調査などにおける出現頻度も高い接辞のモデルケースとして、これらの接頭辞を分析する。

次に、接尾辞的な性質をもつ一字漢語について、同様の意味をもつ二字漢語との比較を行う。たとえば、「東京発」「公園外」のような場合に「発」や「外」が接尾辞的に用いられているが、これらは「出発」や「外部」など、類似の二字漢語に置きかえることが可能な場合がある。一字漢語は、短くて簡潔である一方、二字漢語には、耳で聞いてわかりやすい表現であるという特徴が見られる。このようなケースを多く集めて、意味・用法について記述する。従来、接辞的な一字漢語を含む三字漢語と、二字漢語同士が結合した四字漢語とは、一緒に分析されるようなことがなかったが、類義ペアは少なくなく、使用実態を調べる必要がある。

IVの最後に、現代語の四字漢語について論じる。前述したように、国語辞典では、文字数の制限などもあり、説明しなくても意味が自明であるような四字漢語については、採用されないことが多い。それゆえ、大量の四字漢語を収集するには、ほかの資料を用いる必要があるが、新聞を用いた四字漢語の構造分析は、先行研究が存在することもあり、本研究では、文芸雑誌を用いて、四字漢語を収集した。文芸雑誌では、臨時的につくられたと見られるような四字漢語は、あまり出現しないものの、書きことばの資料であることでは新聞と共通し（漢語は、話しことばよりも書きことばにおいて用いられやすい性質があるとされる）、ある程度の数の四字漢語は、容易に集められ、意味・用法の検討には適していると考えたためである。その上で、国語辞典にのる四字漢語と、のっていない四字漢語とを比較し、どのような性質がある場合に、四字漢語が見出し語として立項されるのか、立項するまでもないと判断される四字漢語には、どのようなものがあるのか、といった点について議論する。次に、同様の資料を用いて、二字漢語の組み合わせにおいて、もっとも数が多い、「漫画雑誌」「海上交通」など、名詞＋名詞の四字漢語について、二字漢語の組み合わせには、どのような意味的な制限があるのかを検討する。二字漢語の場合は、辞書にのっていれば一般的な語、というような考え方が一応はなりたつが、四字漢語については、辞書にのらないのが普通であるため、用例資料を使って、どのようなものが一般的であり、また臨時的なケースはどのような場合かなどについて、細かく見ていく必要があると考える。

最後に、Vで全体についてのまとめと課題について述べる。

5. 用語について

ここでは、以下の論において筆者が用いている用語についてじゃっかん説明を加える。論

文については、初出のものの変更・修正を、表記のゆれなど最小限の部分に関して行うにとどめるという方針をとったため、ほぼ同じ事柄を指す場合の用語についてゆれが残っているためである。

まず、漢語と字音形態素、字音語基などの用語であるが、基本的には、中国語から借用した語および日本でつくられた語に対して、漢語ということばを総称として使用し、これを造語成分として眺めた場合には、字音形態素、字音語基という言い方をしている。それから、字音形態素、字音語基については、字音形態素は単語の意味的中核となり、単独で単語となりうる語基と、ほかの語と結合して用いられる接辞（性語基）とにわけられると考える。また、語基には、和語や外来語のものもあるが、漢語の語基をそれらと区別する上から、字音語基という呼び方をした。なお、漢語については、字音語という言い方もできるが、和語や外来語と並ぶ語種の一として、漢語が一般的であることから、これを使用した。

もう一つは、サ変動詞語幹（サ変語幹）と動名詞という用語についてである。「勉強する」「掃除する」など、「する」がついた形全体を（複合）サ変動詞と考え、「する」をのぞいた、「勉強」「掃除」などをその語幹とする観点から、サ変動詞語幹という言い方がなされる。一方、動名詞は、「勉強」や「掃除」が、名詞としての性質と動詞としての性質を兼ね備えた語類であるという点に着目して、影山(1993)以降、用いられるようになった用語である。筆者としては、従来用いられてきたサ変動詞語幹を使用するというのが、基本的な方針であったが、動名詞という用語を用いて論じている先行研究と、内容的に重なるような論考においては、それらに合わせて動名詞を筆者も使用したため、結果として、両方の用語が入りまじっている。それゆえ、本研究においては、「する」のつく漢語に対して、サ変動詞語幹あるいは動名詞を用いることがあるものの、どちらかを使用することによって、特別な意味合いをもたせているわけではないことを断っておく。

II 自立用法をもつ一字漢語および二字漢語の形成に力のある一字漢語の分析

1. 自立用法をもつ一字漢語

1.1 はじめに

漢語は、「建築・建造・建設」における「建」のように、二字漢語の要素となったり、「新会社」「生産的」の「新」「的」のように、三字漢語の前要素や後要素となって、接辞的に機能したりすることが多く、そのような使い方における特徴を分析する必要がある。その一方、「恩を売る」の「恩」や「鉄が不足する」の「鉄」のように、文中で単独で用いられる一字漢語も少なからず存在する。このような自立用法をもつ一字漢語にどのようなものがあり、いかなる使い方をされるのかについて、二字漢語や三字漢語の分析に先立って検討・整理を行おうというのが、ここでの目的である。

第1段階の資料として『新選国語辞典 第9版』（以下『新選』）を用いて、単独で立項される一字漢語を3,024抜き出した。このうち、「潰滅」の「潰」や「賄賂」の「賄」など、造語成分としてのみ使われるものをのぞき、「上の階」の「階」や「氏は旅行中」の「氏」など、名詞・代名詞としての用法が記載されている857語を用いて、一字漢語の名詞としての使われ方を検討する（筆者個人による調査のため、見落としの可能性はある）。形容動詞として立項される「酷」や副詞の「極（ゴク）」など、名詞以外のはたらきしかもたないものについては、以下では分析の対象外とする。「逸する」の「逸」のように、派生によりサ変動詞として用いられるものも同様である。

上述の857語の意味・用法の確認にあたっては、現代語における使い方を確認する目的から、『岩波国語辞典 第7版 新版』（『岩国』）、『旺文社国語辞典 第11版』（『旺文社』）、『学研現代新国語辞典 改訂第5版』（『学研』）、『現代国語例解辞典 第4版』（『現国例』）、『三省堂国語辞典 第7版』（『三国』）、『集英社国語辞典 第3版』（『集英社』）、『新明解国語辞典 第7版』（『新明解』）、『明鏡国語辞典 第2版』（『明鏡』）を主たる資料とした。

1.2 具体的な事柄をあらわす名詞と自立用法

普通、名詞は「主語になる」という点が、特徴としてあげられる。日本語では「が」をつけて主語であることを示すが、一字漢語の中では、「鉄」や「犀」などのように、目に見える具体的なものをあらわす具体名詞の場合、この特徴について確認しやすい。「鉄がある」「犀がいる」のように、「ある」や「いる」などの動詞を用いて、主語にたつという点が確

かめられるというようにである。一方、「優」や「劣」のような、目に見えない抽象的な事柄をあらわす名詞の場合、内省のみを頼りにしたのでは、主語になるのかどうか、自信をもっては答えにくい。それゆえ、辞書の用例や実際の使用を確認するなどしなければならないのであるが、まず、ここでは、具体名詞としてはたらく一字漢語を検討し、名詞用法の確認をしていくこととする。その中で、主語になりにくい具体名詞などがあれば、その要因なども記述していく。

まず、「鉄」のように、「～がある」の言い方がとれる、物名詞として以下のものがあげられる。なお、一つの漢字に複数の音があつてまぎらわしい場合は、丸カッコの中に読みを示した。用例が必要と思われる語については、同じく丸カッコの中に用例を掲げる。また、「室」が人と部屋の両方をあらわすように、多義の語の場合は、用法ごとに、そのつど示す。

餡 角 缶 牛 香(キョウ) 玉 金 銀 具 桂 券 劍 鍵 弦 舷 香(コウ)
冊(サク) 柵 札 棧 笏(シヤク) 銃 書 笙 鉦 簫 錠 尉 芯 栓 膳 箏
台 卓 痰 帙 茶 鉄 糖 銅 毒 肉 尿 杯 牌(ハイ) 箔 鉢(ハチ) 撥
(バチ) 判 盤 櫃 票 雹 鋌 瓶 符 譜 歩(フ) 麩 服 糞 塀 便(ベン)
ン) 袍 棒 帽(帽を脱ぐ『集英社』) 本 盆 幕(マク) 蜜 面 綿 麵 門
翼(翼が張っている『集英社』) 鈴(リン: 始業の鈴が鳴る『新明解』) 罌 聯 槽
紹 蠟 鐵

これらは、目で見て、手でさわることのできるようなものであり、「～がある」という言い方をすることが容易なものが多いと思われる。

次に「人や動植物の組織・器官」として、まとめられるものを示す。

胃 尻 腱 腎(腎機能・腎不全) 頭(頭が高い) 薬 髓(骨の髓まで) 腺 体
(タイ) 膻 腸 臺(臺が立つ) 胴 脳 胚 肺 鬢 腑(胃の腑) 苞 膜 葯
卵(受精(した)卵『三国』)

これらの場合、あまり日常的には、「胃がある」とか「肺がある」という言い方はなされない。このような言い方をするのは、「動物には二つ肺がある」のように、生物学的な話をするときなどであつて、これらの名詞が主語にくるかどうかを確かめる際に、思いつきやす

いのは、「胃がただれる」「臍が切れる」のような現象をあらわす表現や、「腸が弱い」「肺が苦しい」のような形容詞文によるものである。ただ、カッコの中に用例を示したような語については、上記の表現以外では、名詞として使いにくいようである。

次に、「～がある」ではなく「～がいる」の形式をとる人や動物について見ていく。

院 卿（キョウ・ケイ） 兄（ケイ） 妻（古めかしい言い方『新選』） 師 子（古めかしい言い方。君『大辞林』） 氏 室（家康の室『新選』） 主 衆（衆に先んずる『岩国』） 女（川村氏の女『新選』） 将 妾（古い言い方『明鏡』） 嬢（ふつう「お嬢さん」の形で『新選』） 臣 仁（「ご仁」の形が一般的） 祖（源氏の祖『集英社』） 僧 息（坂口氏の息『新選』） 賊 宅 男（山野氏の男『岩国』） 長 朕 通 敵 徒（学問の徒『明鏡』） 妃（妃となる『三国』） 兵 坊（かわいい坊だな『集英社』） 僕 魔

爵位をあらわす「公」「侯」「子」「伯」などは、一般には「公爵」「侯爵」「子爵」「伯爵」の形をとるかとも考えたが、「侯に列せられる」「公の遺訓」（以上『集英社』）のような自立用法も行われたようである。

動物には、次のようなものがある。

鱉 蛾 犀 象 蝶 狎 貂 獏 鷓 豹 竜

植物の例となるものに「籐」「蘭」があるが、これらは、「いる」ではなく「ある」をとる点で、上述の物名詞などと共通する。

人名詞は、「氏が決定した方針」「僕がやる」のように、意志的な動作の主語になるが、「市」や「党」など、組織をあらわす名詞も同様の性質をもつ。

課 局 区 軍 郡 県 市 社 州 塾 省 隊 団 町 庁 都 党 道 派
班 藩 府 部

最後に、場所をあらわす名詞について確認する。「駅に行く」「塾に来る」など移動動詞の対象となりうる場合が多い。

庵 院 (院の内外『三国』) 駅 園 京 郷 (ゴウ:郷に入っては郷に従え) 獄 (獄につながる) 室 (室を出る『岩国』) 社 宿 (品川の宿『三国』) 塾 衝 (交通の衝・衝に当たる) 場 (称賛の聲が場に満ちる『新明解』) 陣 宅 壇 地 宙
亭 (チン) 廟 房 (房の中『岩国』) 洛 (洛の内外『三国』) 陸 寮 炉 牢 湾

これらは、普通名詞の場合であるが、中国の国名が一字漢語であらわされる以下のものもある。

衛 燕 夏 漢 韓 元 吳 周 新 齊 楚 陳 唐

普通名詞からは、はずれるが、一字の漢語が自立した使い方をなされる、という点からは、これらをのぞくことはできない。

以上の中には、現代語として普通かどうかという見方を加えれば、「妻」のように古めかしい言い方になっているものも見られる。「帽を脱ぐ」というような言い方も、容易には用例が見つからず、「帽子を脱ぐ」が一般的な言い方であろうとも思われる。

1.3 どのような一字漢語が名詞とされているか

1.3.1 単独で使われること

先に見た、人や物をあらわす名詞と異なり、多少なりとも抽象的な意味をもつ語になると、その語の意味だけを頼りにしたのでは、名詞として自立用法をもつのかどうか、判断しにくい場合がある。たとえば、「斜(シヤ)」という語は、「ななめ」の意であるとされ、「斜に構える」のように単独で用いられるものの、「ななめを向く」や「ななめに移動する」などの「ななめ」を「シヤ」に置きかえることはできない。それゆえ、一字漢語については、意味だけでなく、単独で自由に使えるのか、非常に用法が限定されているのか、といった点について、記述を行わなければならない。ここでは、国語辞典において、どのような特徴をもつものが、名詞として分類されているのか、という点を、具体的に見ていくことにする。まず、次のような語は、日常的に用いられ、問題なく主語になると考えられる。

愛 案 鬱 運 縁 恩 我 会 回 害 格 学 額 勘 癌 気 義 逆 灸

級 急 行 (ギョウ) 曲 刑 罝 芸 劇 語 碁 業 根 紺 差 座 策 死
字 痔 軸 質 (シチ・シツ) 実 癩 週 術 旬 順 性 (ショウ) 賞 情 職
心 精 税 席 籍 説 線 禅 層 損 代 題 段 注 点 度 得 徳 難
熱 年 念 能 罰 (バチ・バツ) 番 非 品 封 分 (ブン) 弁 法 厄 用
欲 楽 (ラク) 理 利 量 獵 漁 礼 例 靈 論 和

たとえば、「別」ということばは、「別に」「別の話」などの言い方で使い、日常語ではあるものの、「別が」という形は、「雌雄の別が」のように、何らかの修飾語を伴うことが多い点で、上のものとは、一応わけて考えることとした。

学校に通う中で、身につくことばに「韻・音・画・句・訓・詩・章・繞・文」(国語)、「核・金・銀・酸・銅・燐」(理科)、「円・解・角・群・弧・式・商・積・倍・冪・辺・率」(算数・数学)などがあるが、これらは、家庭で覚える場合もあるだろうから、絶対に学校で覚える、というたぐいのものではない。また、算数・数学に関連し、

一 億 九 (キユウ・ク) 京 五 三 四 七 十 千 兆 二 八 百 万 零
六

などの数に関することばなども身につく。なお、

貫 斤 間 (ケン) 合 (ゴウ) 石 (コク) 刻 忽 糸 勺 尺 升 丈 仞 尋
寸 錢 反 斗 秒 分 (ブ・ブン) 毛 厘 里

など、単位をあらわす一字漢語があるが、これらは、なじみがある人とそうでない人で、理解度に差が大きいと思われる。たとえば、古典文学、古典芸能、時代劇などで「里」をよく目にする人と、このような分野に関心のない人とでは、この語の意味・用法に対する意識は相当に異なる。

以上のような語に加えて、専門的な概念をあらわすものとしては、次のようなものがあげられる。

闕 (心理学) 纓 (歴史) 甲 (カン：音楽) 楷・篆・隸 (書体) 戒・偈 (仏

教) 疖・疔・癰・癩 (医療) 性・節・態・拍 (言語) 易 (儒教) 持 (囲碁)
先 (囲碁・将棋)

専門的な事柄をあらわす一字漢語のうち、どの程度までが、たとえば小中高の教科書の中に出てくる語であるのかなどを今後調べる必要がある。

「愛」や「運」が「愛が」「運が」と自然に用いられるのに対して、「賀」や「件」などの場合、「賀が」「件が」とすると、いまひとつ落ち着かない言い方になる。これらは、「いわい」「事柄」などの意味をあらわすが、「米寿の賀」「例の件」など、何らかの修飾語が前につくのが普通であり、それがあれば、「米寿の賀があった」「例の件がかたづく」などの言い方も可能である。「の」を用いた修飾語が多く使われるものとしては、次のようなものがある。なお、「の」の前にいろいろな語が入りうるものは「(西南の) 役」のように、前部分を丸カッコの中に示し、「華燭の典」のように、ほかの言い方が見つけにくいものは、「典 (華燭の典)」のような形で示すこととする。

(社長の) 印 (西南の) 役 (別離の) 宴 (哲人の) 概 (今昔の) 感 (別人の)
観 (白昼の) 怪 (思い出の) 記 (その) 儀 (無我の) 境 (古都の) 景 (兵
馬の) 権 (彼の) 言 後 (その後) 期 (ゴ: この期) (若葉の) 候 (手の) 甲
(この) 号 (音楽の) 才 (受験の) 際 (100 円の) 残 (同好の) 士 (生計の)
資 (送別の) 辞 (この) 種 (古希の) 寿 (品川の) 宿 (困惑の) 状 (敵の)
勢 (女難の) 相 (水戸黄門の) 称 (不景気の) 徴 (この) 底 典 (華燭の典)
(いつもの) 伝 (帰国の) 途 秘 (秘中の秘) (自然の) 美 (社会の) 弊 (無
駄遣いの) 癖 (本能寺の) 変 (この) 辺 (東の) 方 (一方の) 雄 (検討の)
要

「後」については、「その後」以外で名詞的に用いられることがないことから、「その後」を句項目として独立して立項し、「後」は造語成分として扱う辞書も見られる。「その」や「この」などの連体詞に修飾される用法しかもたないような語については、名詞としての資格が、「鉄」や「愛」など一般的なものよりは、劣ると考えることもできるのかもしれない。似たような制約がある「期」については、名詞として立項するものが多く、「またの会う期」(『新明解』)のような用例をのせるものも見られる。古くには、「今は期を待つばかりなり／謡曲・

土蜘蛛」(『大辞林 第3版』)のような用法もあり、「後」とは、このような点で差があると判断されるのであろうか。

「の」が前にきやすい一字漢語の中には、次のように、動作的な意味を保持するものも見られる。

(紀貫之の)詠 (病中の)吟 (浜松の)在 (吉本の)作 (和歌の)集 (平氏の)出 (個人の)蔵 (平成七年の)卒 (髀肉の)嘆 (関係者の)談 (夏目漱石の)著 (王の)寵(を受ける) (空海の)筆 (大学者の)編にかかわる (安着の)報

この場合、「蔵」や「卒」のように、「の」によって修飾されていても、主語として一般に用いられることがなく、一字漢語で文が終わりになるようなものも見られる。

以上に対して、一字漢語が「の」の前にくる場合もある。

賀(賀の祝い) 豪(豪の者) 左(の問題) 在(のことば) 双(の腕) 対(のさかずき) 当(の相手) 緋(の衣)

「豪が」「当が」のような言い方は普通ではないから、単独では主語になりにくそうである。

関連し合う一字漢語が存在し、一つまたは複数を取りあげて論じる場合に、自立用法があらわれやすいという場合がある。たとえば、生物の区分としての「界・門・綱・目・科・属・種」などであり、「目は」「科は」などの言い方がされる。意味の似たものを並列させたり、「上中下」のように、ある基準から判断した順序をあらわしたりする組み合わせとしては、次のものがある。

衣・食・住／士・農・工・商／序・破・急／上・中・下／真・行・草／仁・義・礼・智・信／租・庸・調／知・仁・勇／忠・孝／律・令／呂・律

対立する二つの概念をあらわすものは、以下のとおりである。

因・縁／因・果／陰・陽／加・減／雅・俗／官・民／虚・実／幸・不幸（二字漢語とペア）／剛・柔／質・量／主・従／序・跋／勝・敗／乗・除／真・贗／真・偽／新・旧／粹・やぼ（和語とペア）／数・量／是・非／正・邪／生・死／静・動／正・副／拙・巧／善・悪／増・減／大・小／治・乱／長・短／得・失／発・着／朝・野／丁・半／有・無／和・洋

以上の中には、「義」「礼」や、「縁」「質」「量」など、それだけでも「が」がつくものも含まれるが、これらに特徴的なのは、「忠と孝がぶつかる」「正が勝つか、邪が勝つか」「丁が出るか、半が出るか」「雅と俗が」「官と民が協力して」「虚と実がからみあう」など、他方との対照の中で、主語となる可能性が高い点である。

「仁」や「信」というのが、たとえば習字で一文字だけ書かれて、壁に飾るというように、会話などでなく、書きことばとして単独で用いられるのと同じようなことが、記号的に用いられる次の一字漢語にもあてはまる。

緘 完 吉・凶 強・弱 卦 甲・乙 秀・優・良・可 上 入・切

成績の「秀・優・良・可」が、「優が一つ」のように会話でも用いられるのと同様のことが、「吉」「凶」「甲」「乙」などにもいえるが、これらは、一枚の紙などの上に、その一字だけが表示される用法をもつという点で、共通性が見られる。それゆえ、「完」や「入」を主語にすることは一般的でないが、ほかの単語から独立して用いられるという点では、名詞としてふさわしい性質を有していると判断される。独立して用いられる点で感動詞と共通するが、感動詞として分類されるのは、「喝」のように呼びかけをあらわすものや「咄」のように驚きをあらわすものであり、上記のものは、このような性質をもたない。

以上では、主語になること、あるいは独立的に使われること、という性質がはっきりしている一字漢語を主にとりあげ、これらは、具体的なものや人をあらわすことがなくとも、名詞として認識されやすいことを確認した。しかし、「その後」の「後」など、独立性の点で問題があり、名詞として扱われない可能性があるものにもふれた。次に、「名詞は主語になる」という点から考えると、何らかの難があり、また、「緘」「入」のような独立的な成分としての用法も見いだしにくいものを検討する。

1.3.2 消極的に名詞と認められるもの

ここでは、名詞として認めるのに、何らかの制限があるものを見る。まず、単独で用いられ、格助詞がつきうる点では、確かに名詞的だが、主語になるかどうか、という点では、容易にそのような例がみあたらないというような語があげられる。たとえば、「歡を尽くす」の「歡」のように、「を」が後にきやすいものである。

謁（謁を賜う） 閱（閱をこう） 冤（冤をそそぐ） 快（快をむさぼる） 活（活を入れる） 禁（禁を犯す・禁を破る） 檄（檄を飛ばす） 決（決を下す・決をとる） 堅（堅を誇る） 妍（妍を競う） 行（行をともにする） 刺（刺を通じる） 醜（醜をさらす） 漸（を追って） 装（装を新たにす・装をこらす） 端（端を發する・端を開く） 断（断を下す） 暖（暖をとる） 当（当を失する・当を得る） 霸（覇を競う・覇を唱える） 歩（ホ：歩を進める・歩を運ぶ） 蒙（蒙を啓く） 涼（涼をとる・涼を入れる） 要（要を得る） 藹（藹を積む）

たとえば、「蒙が啓かれる」のように、受け身の形であれば、主語になる可能性がないわけではないが、一般的には、これらは、上記のような慣用的な形で用いられることが多く、「歡」は、意味的には「喜び」や「楽しみ」に相当するものの、これらは「喜びがある」「楽しみがない」のような言い方が可能なのに対して「歡がある」「歡がない」のような言い方はできず、用法的にはこれらの語と異なっている。なお、ここにはあげていないが、「失をおぎなう」のように用いられる「失」の場合、「得と失とあい半ばす」（『学研』）のように、前述の対立概念をあらわすペアとしての用法もあり、これらを現代語で生きている用法と考えれば、名詞として扱われるが、一般的ではない用法と判断されれば、「失」は「失言」「失調」などに用いられる造語成分として記載されることになる（『明鏡』など）。それゆえ、名詞としての用法が限られている一字漢語にとっては、一つでも上述のような用法を持ち続けることが品詞的な扱いの点から考えれば重要になってくる。次に、「に」をとりやすい語を見る。

悦（悦に入る） 挙（挙にでる） 讒（讒にあう） 斜（斜に構える） 緒（シヨ・チヨ：緒に就く） 寝（寝に就く） 鈍（鈍になる） 縛（縛に就く） 輦（輦にならう） 訃（訃に接する） 幼（幼にして～）

このように、もっぱら「が」以外の格助詞と結びつく語について、名詞と認めるかどうかについて、『岩国』の1632ページにある「語類解説」では、次のように説明する。

名詞は事物を表すのに使う呼び名であって、活用しないことが文法上の特色である。

「山」「女」「インク」「会社」などの物や、「火事」「試合」「労働」「納税」などの事柄を始め、「紫」「甘さ」「重み」「混乱」「悲哀」「結論」「東」「関係」「三つ」など、それについて述べることができる対象の呼び名は、すべて名詞である。それゆえ多くの名詞は主語として使える。しかし中には、「迎接にいとまがない」の「迎接」，「すりひざで進む」の「すりひざ」のように、主語では使うことのないものもある。そういう単語も、呼び名として使い、また格助詞がつく点でも他の名詞と同様な性質を持つ。

このように、呼び名として使われる、という特徴を重視すれば、本節で見ているような一字漢語も、多くが問題なく名詞として扱われるのであるが、主語にならないというような点で、いくらか典型的な名詞からはずれるものもあり、その点は把握しておく必要がある。

「を」や「に」ではなく「で」が続く一字漢語に、一例のみであるが「対で話をする」の「対」がある。また、「際」「様」などは、「学校に行った際」「彼のいう様」のように、形式名詞的な使い方があるが、同じく形式名詞的であっても、「結論が出た観がある」(『明鏡』)のように用いられる「観」とは異なり、主語にはなりにくい。

慣用句などの中でしか用いられないのであれば、「句項目」という立項のしかたによって、名詞としての使い方が例外的であることが示されることもある。

寡（寡は衆に敵せず・寡をもって衆にあたる） 華（華を去り実に就く） 簡（簡にして要を得る） 軌（軌を一にする） 重（責任は重かつ大だ） 微（微に入り細をうがつ） 暴（暴を以て暴にかう）

なお、先に「～の蔵」「～の吟」などを、動作的な事柄をあらわすものとして、取り扱ったが、「する」や「なる」など、形式的な動詞と結合して、全体として述語として機能する次のような一字漢語もある。

珍（珍とする） 否（否とする） 密（密にする・密になる） 了（了とする）

「関する」「要する」のように、直接に「する」と結びつく用法ではないので、これらは、品詞としては、名詞である。

以上のように、主語にはなりにくいものの、ほかの格助詞がつきうる、という一字漢語がある一方で、格助詞が全般的につきにくい一字漢語も存在する。たとえば、十干の「庚」であるとか、「腎不全」の「腎」のようなものであり、これらは、辞書によって、名詞とするか造語成分とするかに、判断の差が見られる。まず、単独で使われる可能性はあるものの、主語にならないといった理由から、造語成分に分類されることがあるものとしては、十干の「甲」「乙」「丙」「丁（テイ）」「戊」「己」「庚」「辛」「壬」「癸」や七曜の「日」「月」「火」「水」「木」「金」「土」があり、「日月火水木金土」のような場合に、それぞれの独立性が高く、『新選』や『三国』のように名詞ととらえる立場がある一方で、このような使い方も、語の要素としての使い方だと考えて、造語成分とする『明鏡』のような立場も見られる。十干については、「十干の七番目はなんだっけ」という質問に対する「庚が七番目だよ」のような「が」の用法では、主語になりうるが、「庚」など十干の用法として、一般的ではないととらえれば、造語成分とするのでも筋はとおる。なお、「色即是空、空即是色」の場合、形式的には、それぞれ四字漢語に相当するものの、内容的には、「色」や「空」が主語的なはたらきをしており名詞として扱われやすく、造語成分と明記する辞書は、管見の限りでは、見あたらない。

最後に、主に合成語の一部として用いられるものの、必ずしも、造語成分あるいは接辞として扱われることが当然とはいえないものを見る。語例は、以下のものである。

強（三強の顔合わせ『三国』） 寓（村井寓『三国』） 寂（明治十六年寂『三国』）
祝（祝ご卒業『新選』） 述（山村博士述『新選』） 抄（『草枕』抄『三国』） 呈
（呈川上様『新選』） 同（林一郎、同二郎『三国』） 白（白一色『三国』） 盲
（盲詩人『三国』） 聾（聾学校・聾文化『三国』）

これらは、『』内に示した辞書では、名詞としての扱いを受けているものであるが、自立的に用いられることがないことを重視して、造語成分、接字、接頭語・接尾語などと表示されることもある。これらの一字漢語には、①「寓＝かりずまい」「腎＝腎臓」のように、は

つきりした実質的な意味を有しており、この点で、たとえば「寮」や「肺」のような自立用法をもつ一字漢語と差がないと見られること、②「祝」に「連体詞のように用いて」(『新選』)とあるように、あとに続く語との間に、切れ目が感じられ、独立した成分として認識されうること、③「明治十六年寂＝明治十六年に死ぬ」「山村博士述＝山村博士が述べる」のように、動作的な内容をあらわす一字漢語とその前にくる名詞との間に、格助詞が入るような関係が見いだせること、などの特徴が見られる。このようなことから、たとえば「購読」の「購」や「読」など、もっぱら二字漢語の造語成分としての用法しかもたないものと比べて、独立性が相対的に高いと判断されるのではないかと思われる。

以上、主語になるという、典型的な名詞の条件からは、はずれるものの、呼び名としての共通性をもつことから、名詞に分類されうる一字漢語を検討した。

1.4 おわりに

以上、ここでは、自立用法をもつ一字漢語について検討を加えてきた。その中で、辞書には名詞として登録されていても、主語になるかどうかという点を考えてみると、容易には、そのような使い方が見あたらない一字漢語があることや、辞書によって、名詞として扱うかどうか、判断の差が見られる一字漢語があることなどを明らかにした。全体的な論としては、以上のとおりであるが、さらに個別に検討すべき問題も少なくない。たとえば、①一字漢語の自立用法に、語感の面で注意すべき点があるかどうか、②自立用法で用いるかどうか、位相差などはあるのか、③専門的な語の場合、現代語で自立用法の用例が確認されるのか、などがある。①は、たとえば、「力(リキ)がある」のような使い方の「力」について、『三国』が俗語とするように、口語的なニュアンスが、ほかの一字漢語にも見られるのかどうかを問題としている。「族」は、暴走族などの略語としては「族のたまり場」のような使い方をするが、やはり俗語である。②は、一般的には、自立用法がない一字漢語について、ある分野では、そのような使い方が見られる、というような状況を問題としている。たとえば、『岩国』では、「雷(ライ)」について、「俳句では単独に用いることがある」として「雷落ちる」の用例を示している。また、「嬢」は「お」や「ちゃん」をつけて用いられるのが普通であるものの、「周囲に風俗のことを一切秘密にしている嬢はわずか8人」『SPA!』(2014年4月1日号)のように、水商売を扱う文書の中では、単独で「嬢」が用いられる用法が観察される。このような性質をもつ一字漢語がほかにないのか、調査の必要がある。③は、国語辞典において、名詞として一般的に記述される一字漢語において、用例が付されることが

あまりなく、実際に自立用法があるのかどうか、その分野に詳しくない人にとっては、推量しにくい場合を問題にする。たとえば、「尉」は、「(能楽で) 老人。また、その能面。老体をあらわす小尉 (小牛尉)・朝倉尉・笑尉・老舞の舞尉・皴尉など」(『集英社』)のように記されるが、小型の辞書では、管見の限り、用例が記されていない。意味から考えて自立用法があると考えたくなるものの、「小尉」「笑尉」など、造語成分としての用法もあり、そのような使い方のほうが一般的なのではないかとも考えられ、能に関する知識をもたない者にとっては、自信をもって名詞として判断することができない。中型辞書の『大辞林 第3版』を見ると、「この尉が御道しるべ申さうずるにて候／謡曲・竹生島」という用例がのっており、古い時代には、自立用法があったことがわかる。ただし、現代語での使用については、断言しにくい。そこで、『大辞林』の用例よりも新しい時代の用例を探したところ、現在のところ次のような例が確認できている。1914年の『能楽画報』の例から、年代順に並べる。

- 面のうちで一番種類の多いのは女の面と尉の面である (『能楽画報』7-6)
- 尉類中の典型とも称すべきものにして、顔面に品位あり。多種ある尉は、多く此面に原型をとりて変化せしめたるものとの説あり。(斎藤香村 (1934)『能面大鑑 上』能楽書院)
- 三光尉の名の由来は、三光坊という面打ちが創作した尉という意味のようである。素朴で明るい笑みを湛えているが、神秘的な要素も垣間見える。他の尉に比べると皴の彫り方は写実的で特徴がある。(西野春雄監修 (2012)『能面の世界』平凡社)
- たとえば「唐船」のように、生きている人間を主人公にした現在物という能に登場する尉もあります。多くの尉は頭部に植毛して鬘を結いますが、髪無し尉という植毛の無い尉もあります。(『同上』)

「能面」に関する書籍や記事を読んでも、「小尉」「舞尉」など個別の面が出てくることが多く、それらの総称としての「尉」は、さほど頻繁に使用されるわけではないという印象ではあるが、上述のような場合において、間違いなく単独での使用が見られることが確認された。このように、専門的な意味をもつ一字漢語については、定義の部分は辞書にくわしく書かれていても、用例が記されていない場合が少なくないが、名詞としての用法を証明するデータとして、用例の蓄積が大切なのではないかと考える。

このようなことを踏まえて、一字漢語の名詞に対する辞書などにおける表示方針を具体

的に考えてみると、次のようになる。

- 一、語釈から主語としての用法のあることが容易に推測でき、用例の不要な一字漢語の候補を検討する…目に見える生き物（「僧」「象」など）や物体（「券」「本」）など。ただし、自立しない一字漢語の多いことを考慮するなら、特に非母語話者にとっては、すべての名詞に自立用法の例文があるほうが望ましい。
 - 一、語釈からは、「が」がつくかどうか判断するのが困難な一字漢語の候補を検討する…抽象名詞全般（「雅」「義」など）や専門的な語（「尉」）など。このようなものに対しては、格助詞「が」の続いた用例を示す。
 - 一、「が」のつく用法が現代的か古風かを検討する（「妻」など）。
 - 一、通常、主語にはならないものの、特定の分野では単独で用いることのある一字漢語について検討する（「雷」など）。
 - 一、「が」のつく用法は、一般的でないものの、それ以外の格助詞がついた形でなら自立用法の見られる一字漢語の種類を検討する…「を」「に」や「の」などのついた形で用いられることが多いものについて、用例や「多く○○の形で用いる」などの注記が必要。この場合、『岩国』のように、名詞の定義を詳細にしておくことが求められる。
 - 一、文中で用いることがまれで、一字漢語単独で記号的に機能する一字漢語の検討（「緘」「入」など）。
 - 一、語の要素として機能し単独で用いることが一般的でないものの、たとえば「建築」「建設」の「建」のように、二字漢語の要素つまり造語成分として機能する一字漢語と比べて、相対的に独立性が高いと考えられる一字漢語の検討（「祝」「述」など）…単独で使わない点を重視し、造語成分または接辞として扱うのか、周辺的な名詞の類として扱うのか、どちらの立場をとるかについて明記する必要がある。
- 一字漢語には、単独で用いるかどうか母語話者であっても明確に判断しにくい場合があるため、以上のような点への配慮が行き届いた辞書があれば、実用的な面から見ても有益だろうと考える。

2. 字音語基の造語力

2.1 はじめに

ここでは、字音語基すなわち漢語の語基について、その造語力を検討する。語基とは、単語の意味的な中核となる単位で、単純語基（「登山」の「登」や「山」など）と複合語基（「想像以上」の「想像」や「以上」など）のように細分化される。

一般的に、漢語は造語力があるとされる。たとえば、「無回答」「肥大化」のような三字漢語、「独自課税」「教育格差」のような四字漢語の場合、国語辞典にのっていない語や臨時的な造語とみられる実例を、新聞や雑誌から容易にひろうことができる。これは、単純語基の「無」「化」や複合語基の「独自」「格差」に、複合語基と結合して新しい語を生み出す能力があることのあらわれである。

一方、単純語基がほかの単純語基と結合してできる二字漢語については、宮島（1969）、野村（1988b）、日向（1992）などで、現代語における生産性のおとろえが指摘されている。野村は、「防一」と「耐一」の語を比較し、「防」がもつばら単純語基と結合するのに対して、「耐」は「熱湯」「薬品」といった複合語基など、様々な語基と結合することを述べた上で、「もし、字音語基が今後も造語力をたもちつづけるとすれば、それは、この「耐」のような自由な結合力をもった語基による」（p. 213）と指摘する。また、同ページでは、新しい二字漢語が生まれにくいことについて、「種々のあたらしい概念は、つぎつぎにうまれているにちがいないが、それを漢字1字であらわされる語基どうしの結合形であらわすことの限度が近づいている」とされている。

このように、「今後」の字音語基の造語力を問題とするならば、自由な結合力をもつ、あるいは、もちつつある語基について、ほかにどのようなものがあるのかを調べて、その用法を明らかにする必要があると考えられる。

しかしながら、その一方で、たとえば「待期」（失業保険などの手続きをしてから、給付が開始されるまでの期間。「待機」とは別語）だとか、

○上半身はベルトで椅子の背に固定され、白衣が座面からひらっと垂れ下がっていた
（『文学界』63-9）

における「座面」のように、辞書類にのっていない二字漢語を普段の生活の中で目にする
ことが、決してまれではない事実を考慮すると、字音語基による造語の「現状」として、

どのような語基による二字漢語の生産が実際に行われているのか、あるいは、どの語基が単語の構成要素としての存在価値を失いつつあるのか、といったことについて考えることも必要ではないかと感じられるのである。

以上の前提にもとづき、本節では、単純語基同士が結びついてできる、二字漢語を主な観察対象とする。そして、以下のような分類を目標にたて、それに近づくための下準備として、具体的な考察を行う。

- ア 現代語で、単語の構成要素として使用されることがまれな語基（熟語の要素とならない、あるいは1語程度しか熟語のない語基）
- イ いくつかの既存の熟語があるが、新語をほとんどつくっていない語基
- ウ 新しい語を生み出している語基

検討対象とする語基の範囲を定めるために、ここでは、現在の「常用漢字表」（2010）に採用されている、2,136字を利用した。「常用漢字表」自体は、一般の社会生活において必要とされる、文字としての漢字の枠を定めたものであって、語基について記述したものではないが、この2,136という数は、それらの漢字を表記形とする、個々の語基の集まりとしてとらえることも可能であると考え、さしあたっての調査範囲としては、適当なものを見なすゆえである（ただし、後述するように、字訓のみが漢字表に収録されているものについては、ここでの考察対象には含めない）。

漢字表には、個々の漢字について、それを構成要素とする熟語例がのっているが、あくまで数例であって、網羅的ではなく、どれがほかにもいろいろな熟語例をもつのか、または、ほとんど熟語に用いられることのないものはどれなのか、といったことについて、表から判断することはできない。それゆえ、なるべく多くの資料にあたり、実例を調べてみる必要がある。なお、ア、イ、ウは、あくまで理屈の上での分類であり、実際には、きれいにわけきれぬわけでないことが予想される¹。

以下では、上記の問題について、2.2で造語力のとぼしい語基について概観し、アとイに所属する語基の候補となりそうなものを探る。それ以降では、ウの具体例となる語基と

¹ 「造語力がある語基」「造語力がない語基」という2分類だと、両者の間に様々な段階の語基が含まれることになるため、おおざっぱにすぎるくらいがある。これをさけるため、ここでは三つに細分化することにした。さらに細かい分け方も可能であろうから、あくまで暫定的な分類である。

して「残」「開・閉」「併」をとりあげ、その造語機能、意味・用法の事例検討を行う。

2.2 造語力の弱い字音語基

2.2.1 対象とする字音語基の範囲と資料

ここでは、国語辞典を利用し、熟語の構成要素として用いられることのまれな語基として、どのようなものがあるのかを調べることにする。

作業としては、まず「常用漢字表」にのっている2,136字のうち、字訓しか採用されていない、「扱」や「畑」など、77字を除外し、残った2,059字を検討対象とした²。これらの中で、熟語をほとんど構成しないものはどれかを探る手順として、『明鏡国語辞典』第2版（以下、『明鏡』。ほかの辞書についても、初出は省略なしの書名と何版であるかを記すが、2回目以降は、適宜略記する）を使用し、造語成分としての説明の中にあがっている熟語例を抽出した。『明鏡』では、先の2,059字のうち、「壺」「顎」「伎」をのぞく2,056字について、造語成分もしくは名詞としての意味・熟語例をていねいにあげている³。このうち、熟語の例が1例のみのものが73字ある。これら73の語基について、以下の作業を行った。

- ・『岩波国語辞典』第7版（『岩波』）、『新選国語辞典』第8版（『新選』）、『三省堂国語辞典』第6版（『三国』）、『大辞林』第3版、『新明解国語辞典』第6版（『新明解』）の漢字説明、もしくは造語成分の説明にある熟語を抜き出す。
- ・それらの熟語が『明鏡』の見出し語にあるかを確認する。

たとえば、「膳」について『明鏡』では、「膳本」の1例のみをあげているが、上述の辞書に記載されている「膳写」「膳録」のうち、「膳写」は『明鏡』でも見出し語として立項されているため、2.1であげたア、イ、ウの区分のうちのアには含めないことにした。作業の結果、以下の23語基については、いずれの辞書においても、『明鏡』と同じ熟

² 字訓しか採用されていない漢字の中には、「産駒」の「駒」や「虹彩」の「虹」など、字音での熟語例をもつものも含まれている。

³ 「壺」については、「一」の説明の中に、「金壺万円」など、証書類では多く大字の「壺」を使う。」とある。また、「伎」は、「常用漢字表」に採用されていない、字音の「ぎ」には、造語成分としての説明があり、「伎芸」「伎倆」「伎楽」などが例としてあがっている。「常用漢字表」で例示している「顎関節」や「顎音」「顎骨」「上顎」「下顎」などは、『明鏡』では立項されていない。これら3語基は、ここでは便宜上、考察の対象外としておく。

語のみ立項している。

挨→挨拶 憾→遺憾 嗅→嗅覚 惧→危惧 憬→憧憬 拶→挨拶 祉→福祉 煮→煮沸
沸 盾→矛盾 憧→憧憬 濯→洗濯 綻→破綻 酎→焼酎 捗→進捗 努→努力 賠
→賠償 雰→雰囲気 倣→模倣 肪→脂肪 易→貿易 拉→拉致 瑠→瑠璃 賂→賄賂

これらの語基について、書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJ）の2009年度版で事例にあたると、「嗅神経」「嗅細胞」「嗅粘膜」，「煮熟」などの熟語が出現している。「嗅神経」「煮熟」は、それぞれ「脊椎動物の第一脳神経。（中略）嗅覚をつかさどる」（『大辞林』），「煮つめること」（『日本国語大辞典』第2版（『日国』））と説明される。事例を見ると、「煮熟」は、和紙やかつお節の製造工程をあらわす語として使われている。これらを考慮すると、数多くの資料を検討した場合、たとえば「惧」や「祉」などにも、「危惧」や「福祉」以外の熟語例がでてくる可能性はあり、一つしか熟語がないとは断言できない。しかし、上記のような作業を積み重ねて、現代語における当該語基の使用範囲を、ある程度しぼっていくことは可能であり、「造語力がない」「熟語はわずか」といった情報の提供は、外国人など、学習者の負担を考えれば、あながちむだではないように思われる。

なお、『明鏡』の「菊」や「麵」には、熟語例が記載されていないが、見出し語として、「菊花」「残菊」，「麵棒」「麵類」が立項されているため、熟語が複数ある語基として扱った。代名詞として使われる「朕」には、熟語としての例が見つからなかった。

2.2.2 現代語であまり使用されない熟語

ここでは、2.2.1でふれた23語基以外の50語基について検討を加える。まず、50の語基のうち、29語基については、『明鏡』に見出し語として複数の熟語が立項されているので、当面の検討対象からは除いた。たとえば、造語成分の「燥」の箇所であげているのは「乾燥」のみだが、見出し語では「高燥」「焦燥」が立項されている。

したがって、以下ではそれ以外の21語基、「曖」「椅」「楷」「効」「穫」「距」「錮」「拷」「酢」「摯」「狩」「牲」「羨」「眺」「迭」「曇」「赴」「陞」「妨」「戟」「茂」をとりあげる。これらの語基については、2.2.1であげた5種の辞書におい

て、二つ以上の熟語が確認されたが、それらの熟語は『明鏡』では、いずれも立項されていない。たとえば、『大辞林』では、「効奏」を熟語例としてあげるが、『明鏡』にこの語は見られない。このような熟語が、『明鏡』にないだけなのか、ほかの辞書でも同様なのか、あるいは、使用されることがまれな語なのかなどは、確認する必要がある。

そこで、ここでは試みに、これらの熟語に関する、八つの国語辞典における立項状況、それから2009年度版のBCCWJと、1999年から2003年版までの5年分の朝日新聞CD-ROM（以下、「朝日」）における使用状況を後の表1に示した。

表からは、

- ・「木酢」は、複数の辞書に立項され、実例もある程度見られる。「酢酸」と意味的なつながりもある。
- ・「羨道」は、古墳が話題となる場合に用いられる歴史的な用語。「羨望」における「羨」とは別義で、辞書によって立項にばらつきが見られる。
- ・「測距儀」が3種の辞書に立項され、用例もいくらかあるのをのぞけば、あとの熟語は小型の辞書には立項されにくく、用例もまれである。

などのことが指摘できる。『新辞典』や『ベネッセ』で1語も立項が見られないのは、これらの辞書が凡例において、前者は「現代語を中心に収録した」と記し、後者は対象を「国語学習の途上にある高校生」とする、などと明記している点に一因があると考えられる。

このように、漢字の説明に使用されている熟語であっても、単語としては立項されていないなったり、用例がほとんど見られなかったりする場合がある。これらは、過去においては、それぞれの語基が、上述の熟語を生み出す力を備えていたものの、現代日本語においては、造語活動の結果としての、それらの熟語の存在意義は、希薄になっており、新しい語をつくる可能性にも欠けるものととらえられる。表にはない「距骨」や「距岸」「距腿」などの語をもつ「距」、あるいは「酢」や「羨」など、注意が必要な語基もあるが、これらの語基についても、現代語では造語力がない語基ととらえ、新しい語を複数生み出しているような語基とは、別扱いすることを考えてもよいのではないかというのが、ここでの一応の結論である。

表1 現代語における使用の有無を確認すべき熟語

見出し語	岩波	新選	三国	大辞林	新明解	新辞典	ベネッセ	日国	BCCWJ	朝日
曖曖	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
椅几	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
楷式	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
楷法	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
劾奏	-	-	-	○	-	-	-	○	0	0
多穫	-	-	-	-	-	-	-	○	0	1
秋穫	-	-	-	○	-	-	-	○	1	4
測距儀	-	-	-	○	○	-	-	○	15	14
党綱	-	-	-	○	-	-	-	○	1	0
拷掠	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
木酢	○	○	○	○	○	-	-	○	7	94
酬酢	-	-	-	○	-	-	-	○	0	0
摯突	-	-	-	○	○	-	-	○	0	0
巡狩	-	-	-	○	-	-	-	○	0	0
西狩	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
五牲	-	-	-	○	-	-	-	○	0	0
三牲	-	-	-	○	-	-	-	○	0	0
欽羨	-	-	-	○	-	-	-	○	0	0
羨財	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
羨溢	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
羨道	○	○	-	○	○	-	-	○	1	4
羨慕	-	-	-	○	-	-	-	○	0	0
眺覽	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
眺目	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
遠眺	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
臨眺	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
迭立	-	-	-	○	-	-	-	○	5	0
晴曇	-	-	-	○	○	-	-	○	3	0
赴援	-	-	-	○	-	-	-	○	1	0
陛見	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
妨害	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
妨遏	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
矛盾	-	-	-	○	-	-	-	○	0	0
生茂	-	-	-	-	-	-	-	○	0	0
茂績	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
茂行	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0
茂生	-	-	-	○	-	-	-	○	2	0
茂林	-	-	-	-	-	-	-	○	1	0

[注] 「新辞典」は『日本語新辞典』, 「ベネッセ」は『ベネッセ表現読解国語辞典』の略記。見出し語として立項がある場合は「○」, ない場合は「-」で示した。

2.3 事例検討の対象とする語基の性質と記述項目

ここから先では, 「新しい語を生み出している語基」をいくつかとりあげ, その用法を分析していく。以下では, 前述の二つのコーパスにおいて, 次に掲げる18種の国語辞典に

立項されていない二字漢語が、10語以上得られた字音語基を、新しい語を生んでいる語基としてひとまず取り扱うこととした。

明鏡 岩波 新選 三国 大辞林 新明解 新辞典 ベネッセ 日国 言泉 学研国語大辞典 講談社カラー版日本語大辞典 新潮現代国語辞典 講談社国語辞典 旺文社国語辞典 現代国語例解辞典 例解新国語辞典 広辞苑

このようにしてとりだされる語は、以前から存在していたものの、たまたま辞書に採用されていなかっただけかもしれない、という可能性は排除できない。それゆえ、厳密な方法とはいえないのだが、これだけの数の国語辞典にのっていないような語というのは、多くの日本語話者にとっては、なじみのない、新語と同じような存在であると解釈することにする。

なお、臨時一語的な結合形や、既存の語のもじりである結合形などは除外してカウントした。これらの作業をへた上で、以下では「残」「開・閉」「併」を取り上げて検討を加える。なお、「残溝（ざんみぞ）」（すり減った後で、まだ残っているタイヤのみぞ）のように、1字の漢字で表記される和語の語基が結合相手となっている熟語も、二字漢語とあわせてとりあげることにする。

語基と、それを構成要素として含む語の記述を行う際は、それぞれの用法や語種、品詞性、語基同士の意味関係、構文的特徴、類義語、対義語などが、主なチェック項目となる。意味関係については、以下に抜粋した、野村（1988b）の分類を利用する。N・A・Vは、それぞれ「体言類」「相言類」「用言類」の略号、修飾1は連用修飾、修飾2は連体修飾による区分である。なお、以下には例がないが、語基には「極」「現」など、用言を修飾する「副言類」もある。

- | | | |
|-----|---------------------|------------------------|
| 補足 | ① 〈N〉 + 〈A〉 胃-弱 民-主 | ② 〈V〉 + 〈A〉 就職-難 当選-確実 |
| | ③ 〈N〉 + 〈V〉 地-震 肉-食 | ④ 〈V〉 + 〈N〉 読-書 投-球 |
| 修飾1 | ① 〈A〉 + 〈V〉 静-観 新-任 | ② 〈V〉 + 〈V〉 競-泳 焼-死 |
| | ③ 〈N〉 + 〈V〉 皆-勤 全-壊 | |
| 修飾2 | ① 〈A〉 + 〈N〉 幼-児 硬-球 | ② 〈V〉 + 〈N〉 造-花 祝-日 |
| | ③ 〈N〉 + 〈N〉 牛-乳 国-旗 | |

- 並列 ① 〈N〉 = 〈N〉 道-路 波-浪 ② 〈A〉 = 〈A〉 温-暖 巨-大
 ③ 〈V〉 = 〈V〉 断-絶 破-壊
- 対立 ① 〈N〉 ⇔ 〈N〉 昼-夜 利-害 ② 〈A〉 ⇔ 〈A〉 長-短 貧-富
 ③ 〈V〉 ⇔ 〈V〉 取-捨 進-退

これらにもとづき、以下では、字音語基の個別的な分析を行う。

2.4 字音語基「残」の造語機能

2.4.1 「残」と後部分語基との意味関係

2.3でふれたチェック項目にもとづいて、ここでは「残」の意味・用法を記述する。

『明鏡』では、「残」に「のこり。あまり」、「そこなう。傷つける」、「むごい」の意味があるとし、それぞれ「残金」「残雪」「残務」、「残殺」「糜残」、「残虐」「残酷」「残忍」などを熟語の例としてあげている。このうち、国語辞典に見られない語が複数見られたのは、「のこり。あまり」のケースで、たとえば、「残室」「残胃」（手術で摘出されずに残った胃）「残便」などがある。「残」は用言類で、後部分には体言類がきており、修飾2の②の意味関係になる。

「残一」には、後部分語基が消費・排出などの対象物をあらわしている語が比較的多く見られる。たとえば、「残金」「残尿」の場合、元々100%の量の「金」「尿」が存在し、それが減少した結果を「残金」「残尿」があらわす。このことは語構成から容易に判断される。「残胃」「残便」なども、「全体としての胃が減少し、残った胃」「全体としての（大）便が減少し、残った便」というように理解することができる。ただし、数は少ないが、そのような解釈が適用できない語も存在する。「残幹」「残根」などがそれにあたる。

タバコは、葉の収穫をした後に、茎の部分が残るが、これを「残幹（ざんかん）」という。また、歯は、普段目で見える「歯冠」や歯肉の下にある「歯根」から構成されるが、歯冠部分が虫歯などによって失われた場合に、あとに残った歯根を歯科では「残根」と呼ぶ。これらの場合、「幹」や「根」が減少するのではなく、全体としてのタバコや歯から、部分としての「葉」や「歯冠」が離れていった結果、別の部分要素である「幹」や「根」が焦点化されて、「残幹」「残根」といった語が作り出されている。以下に「残幹」の用例をあげておく。

○タバコ農家にとっての悩みのタネ茎枯病。残幹をすき込むとどうしても出てしまうから、本当は畑の外に持ち出して焼いてしまいたい。（『現代農業』89-11）

2.4.2 和語の「残り」との比較

動詞「残る」の連用形である「残り」には、「残り香」「残り物」「残り湯」などの複合語の例が見られ、前の2語には、漢語の「残香」「残物」が類義語として存在する。したがって、「残—」と「残り—」との使い分けが問題となる。

宮島（1977b）で指摘されているように、一般的に漢語は文章語的で、和語は日常語的であるという傾向がある。『三国』や『新選』など、一部の国語辞典では「文章語」の注記が記されているので、それらを参考にして、国語辞典に漢語と和語の両方の立項が見られた7ペアを分類すると、おおよそ以下のようになる。

- ① 漢語が文章語的で和語が日常語的：残火—残り火 残滓—残り滓
- ② 漢語が一般的で和語があまり用いられない：残金—残り金 残高—残り高
- ③ 和語が一般的で漢語があまり用いられない：残物—残り物
- ④ 漢語と和語で意味にずれがある：残香—残り香 残菊—残り菊

②と③のペアについて、上述のコーパスによる使用状況を示すと、表2のようになる（「残り物」は「残りもの」で表記された用例も含む）。

表2 「残金—残り金」「残高—残り高」「残物—残り物」の使用状況

	残金	残り金	残高	残り高	残物	残り物
BCCWJ	39	0	598	0	0	37
朝日	163	0	3,036	0	0	131

④の「残香」と「残り香」は、意味が似通っているが、両方採録する辞書では、「残香」に、においの元に関する記述がないのに対し、「残り香」は「人のにおい」との限定が見られる。

漢語・和語ともに、あるいは一方が辞書に立項されていない語について、同様の区別をほどこすと、たとえば「残量」「残り量」では、漢語が一般的で和語はあまり出現しない

ため、②の例となる。また、「残肉」（残ったインク。印刷関係）、「残油」（原油を蒸留して、留分を留出した後に残る重質油。石油関係）など、専門語的な漢語に対して、和語の「残り肉」「残り油」は、雑誌やブログなどで、「夕飯の残り肉」「揚げ物の残り油」のように、日常語的に用いられているが、意味に差があるので、④としておく。このようにわけていった場合、「残飯」と「残り飯」の関係は、やや異質である。「残飯」は、日常語としてよいだろうが、複数の辞書で「残飯をあさる」を用例としていることや、「残飯処理」という言い方があることからもうかがわれるように、残ったメシには、マイナスの評価が伴う。一方、「残り飯」の方は、

- 「雑炊」は残り飯を土鍋に入れて煮たてたもので、水を増すところから、もとは「増水」と書いた。（嵐山光三郎（1996）『ごはん通』平凡社）

のように、活用できるメシの意で用いられ、この例を「残飯」に置きかえると違和感がでる。したがって、両者は日常語的である点で共通するが、評価的な意味において違いがある。

二字漢語が辞書に登録されやすいのに対し、和語の「連用形＋名詞」の語は、特別な意味をもたない場合が多く、見たり聞いたりすることはあっても、辞書にのっていないことがある。それゆえ、国語辞典をもとにした上で、さらに、実際の用例に数多くあたって、漢語との比較を行う必要がある。「残」と「残り」以外の語基におけるペアも多く集めて、どのような使用実態が見られるのかを、今後検討してみたいと考えている。

2.5 「開一」と「閉一」

2.5.1 対義関係

『明鏡』では、「開」と「閉」は、それぞれ「あく。あける。ひらく。」「はじまる。はじめる。」「新たに切りひらく。」「とじる。しめる。すきまなくふさぐ。」「やめる。終わりにする。」の意味を持つとされる。「開拓」「開発」「閉鎖」など、用言類の語基がならぶ二字漢語は、新しい語例は出現しておらず、辞書に見られない語があるのは、「開店」「開所」などと同様、後部分に体言類がくるパターンである。たとえば、陶芸で用いられる「開窯（かいよう）」「閉窯（へいよう）」や画廊・ギャラリーについて

の「開廊」「閉廊」などがある⁴。これらは、2.3であげた分類のうち、補足の④にあたり、「する」がついてサ変動詞として用いられる。

「開一」と「閉一」では、対義語のペアとなることが多いが、試みに『三国』であがっている補足関係の「開一」「閉一」の語を対義の観点から分類すると以下のようなになる。

- ・「開一」「閉一」でペア：開院・閉院 開園・閉園 開会・閉会 開館・閉館 開業・閉業（廃業） 開局・閉局 開校・閉校 開講・閉講 開山・閉山 開式・閉式 開所・閉所 開場・閉場 開栓・閉栓 開村・閉村 開庁・閉庁 開廷・閉廷 開店・閉店 開幕・閉幕 開門・閉門
- ・「開」と、「閉」以外の語基でペア：開映・終映 開宴・終宴 開演・終演 開国・鎖国 開戦・終戦
- ・「開一」のみ：開運 開花 開学 開眼 開基 開脚 開胸 開行 開港 開室 開塾 開署 開城 開帳 開田 開都 開頭 開道 開票 開封 開腹
- ・「閉一」のみ：閉経

※用例資料には「閉脚」「閉室」なども見られるが、ここでは『三国』に立項があるかどうかという基準で記したので、「開一」のみ」という扱いになっている。

「開口」「閉口」は、「話し出す」「困る」という、一般的な意味では意味にへだたりがあり、対義関係の語とはされないため、上にはかかげていない。ただし、

○顎運動時には、関節突起が下顎窩内を蝶番のように回転するので、下顎体が上下動して開口／閉口する。（『Surgeon』11-3）

のように、専門分野で使用される場合には、ペアになる。「閉経」は、国語辞典では対義の関係にある語をのせていないが、『活用自在反対語対照語辞典』『反対語対照語辞典』『反対語大辞典』などでは、「初経」や「初潮」を対義語（反対語）としている。断言はできないが、反対語辞典には、品詞表示がないため、「閉経」に名詞・サ変、「初経」

⁴ 国語辞典に記載されている「開展」は、「ひらけひろがること。また、くりひろげること。展開。」「進歩発達すること。」（『大辞林』）であるが、展覧会が開かれることを示す「開展」は、それとは別語である。

「初潮」に名詞といった表示をして、品詞上の違いを明示する国語辞典よりも、対義語（反対語）の認定範囲が広いのかもしれない⁵。

二つめの、「開」が「閉」とは異なる語基とペアになるタイプについて、用例を調べてみると、おおむね上述のペアがなりたつことが確認できたが、「開宴」には少し注意がいる。『三国』のほかに、この語を立項しているのは、『大辞林』『新明解』『例解新国語辞典』第7版（『例解』）と、比較的少数であり、対義語をのせているのは、『三国』のみである。「開宴」の「宴」の扱いは、『三国』が「宴会」「祭り」、『大辞林』が「宴」で、『新明解』『例解』は「宴会」となっている。ところで、宴会の一種に結婚披露宴があるが、そこで司会が使うのは「開宴」と「お開き」であり、「終宴」もしくは「閉宴」といった言い方は、縁起がよくないとされ、一般的ではない。したがって、通常の飲み会や忘年会などでは「終宴」であっても、披露宴の場合は別という注記があると、現実にそった形になる。

上の分類では、「開一」の語があって、「閉一」の語がないというものが、比較的多く見られるが、実際に「閉一」の語が使用されていないと考えてよいのかどうかを以下で検討する。このうち、「閉脚」は『大辞林』『大辞泉』などに、「閉塾」は『日国』に立項されている。「閉室」は、『大辞泉』で、見出し語としては立項していないが、「開室」の項目において、その対義語として記述されており、「開室日・閉室日」のように用いられる。また、『反対語対照語辞典』では、「開運・非運（悲運）」「開眼・失明」「開票・投票」、「開封・封緘（密封。厳封）」をペアとしている。「開基」「開田」「開都」「開道」に対する「閉基」「閉田」「閉都」「閉道」などは、そのような状況が現実に起こりにくいいためか、WEB 上などでも使われていない。

「閉帳」は、「本尊の開帳・閉帳」のように使用され、「閉学」「閉署」には、「〇〇大学の閉学」「〇〇署の閉署」のような例がある。「閉花」「閉行」「閉港」も同様である。「閉城」は、降参するための「開城」の対義語としてではなく、姫路城など、観光施設の営業時間を示す語としては、「開城」とともに用いられることがある。

「閉胸」「閉腹」については、医療分野で、

⁵ 荻野・野口（1996, p. 87）は、「新しい」の反対語は「古い」、「新」の反対語は「古」であり、「新しい」と「古」、「新」と「古い」が反対語として扱われることはないとした上で、「ある単語の反対語は、概念の反対のものうち品詞が一致するものであり、品詞が一致するものがない場合だけ、他の品詞のものが反対語とされる」という原則があるとしている。

○開腹・閉腹，開胸・閉胸は消化器外科手術の基本であり，……（『手術』62-13）

のように、「開一」とペアの語として使用される。ただし、「開胸」「開腹」は、単に切りひらくのではなく、「手術のために」という目的をとともなう。一方、「閉胸」「閉腹」は、手術が終われば当然なされるべき行為であると考えれば、一般向けの辞書では、「開一」のみの立項でよいとする判断はありうるだろう。ただし、そのような判断が、辞書の利用者にとってわかりやすいかどうかは、問題になりうる。「開頭」に対する「閉頭」も同じである。

単純に、「開一」の反対のことは「閉一」と考えることができれば簡単であるが、以上のように、語によって状況が異なるため、実際には、むずかしい点が多い。上記の語のほかから例を示すと、缶コーヒーや缶詰の容器に書いてある「開缶」の場合、消費者の側として、「閉缶」という言い方は、しないのが普通である。そして、生産者の側としても、中身を詰める際に、「充填」などは使っても、「閉缶」とはいわないようである。また、混種語の「開刃（かいば）」という語は、「銃砲刀剣類所持等取締法」の総則では、

○この法律において「刀剣類」とは、刃渡り十五センチメートル以上の刀，……（中略）……並びに四十五度以上に自動的に開刃する装置を有する飛出しナイフ……

と記され、刃物の分野で用いられるが、「閉刃」という言い方はしない。これは、ナイフを開いて使用する場合が重要なのであって、使い終わって収納する方にまで、単語を必要としないためである。「開缶」の場合も、重要なのは、缶をあけて食べられるようにする動作であって、しめることではない。しかし、どちらの場合も、しめたりとじたりする動作そのものは存在するため、個人的な使用としては、「閉缶」「閉刃」が出てくる可能性が残る。

以上をまとめると次のようになる。「開一」と「閉一」を比較した場合、「開一」「閉一」が対義関係であることが多いが、「閉」以外の語基とペアになることもある。辞書で「開一」の語しか登録されていなくとも、現実には、「閉一」の語が対義語として存在するケースもあった。対義の意味が意識されることで、新たな二字漢語がつくられる余地が残されているといえる。もっとも、「開一」の言い方のみが必要で、「閉一」が用意され

ていない場合もあるので、実際に反対の語形が存在するかどうかについては、一つ一つのケースを慎重に調べる必要がある。なお、ここでは、辞書で「開」と「閉」がペアとされているものについては言及しなかったが、これらについても、変動やゆれがないか、実態を確かめなければならない。

2.5.2 総合的な表現

宮島 (1977a, p. 31) は、「入一」に「入院」「入会」「入館」など、多くの語があることについて、言いわけられる点は、漢語の長所だが、「言いわけなければならず、ゆうずうがきかない、という意味では短所である」とした上で、「一般に「加入」とかいった総合的な表現でまにあわすことができれば、このような問題はおきない」と述べている。この指摘は重要だと思われるが、現実的な問題として、「入会」「入社」「入党」「入団」あたりは、すぐにでも「加入」ですませられるとしても、「入院」「入場」「入室」などは、「団体や組織に加わること。」(『明鏡』)の意味の「加入」ではややむずかしい。しかし、このような総合的な表現の可能性を探ることは、語彙整理の面から考えても意味のあることだと考えられる。

「開一」の語においても、後部分に施設などをあらわす語基が多く見られることは、これまで記してきた通りである。たとえば、「開店」では「新しい店が開かれること。また、開くこと。」と「商店で、その日の営業が始まること。」(『明鏡』)のように、二つの意味が記述される。このうち前者については、「開院」「開園」「開学」「開館」「開行」「開校」「開港」「開塾」「開所」「開署」「開庁」などにおいて、たとえば、「幼稚園を開園する。」とはせずに、「幼稚園を開設する。」のように、「開設」で間に合わせることが可能である。後者の意味の場合も、「10時開店→10時開業」のように、多くは「開業」を用いて言い表すことが可能である。問題は、山開きの意味の「開山」あるいは「自習室の開室」などにおける「開室」のように、「営業」「業務」ととらえにくい場合であるが、これらに対しては「開業」でなく「開場」が候補となる。辞書の定義では、「開場」は、会合や催し物などにおける会場をあけること、であるため、「開山」「開室」の言い換え語として用いるのは、むりがあるように思われるかもしれない。しかし、「開場」の目的語となる名詞を観察していくと、「プール」「ゴルフ場」「陸上競技場」「野球場」「運動場」などにおいて、その日・その期間のオープン時間を示すために用いられているケースが観察され、レインボーブリッジの「遊歩道」に対して、「平常開

場時間は次のとおり」（東京都報道発表資料、2009. 11. 25）といった例も見られる。このような「開場」の使い方を認めるならば、「～山の開山期間」「～室の開室時間」などにおける「開山」「開室」を「開場」ですませるという考えも、それほど非現実的ではないといえよう。

このような、「開設」「開業」「開場」を用いた言いかえは、「開花」「開胸」「開腹」などに対しては不可能であるから、別に考える必要があるが、少なくとも「開一」の後部分として数の多い、施設・場所などの場合については、3語だけでもおおよそまかなうことが可能である。「開業」「開場」などは、後部分に体言類がきている点では、「開院」「開所」などと同位の語とすべきで、厳密には、宮島のいう総合的な表現には、あてはまらないかもしれないが、「開院」「開所」など、対象が限定的な細かい表現よりも、広い範囲をカバーする語として、「開設」と同様の扱いをした。「開」や「入」以外にも、「退場」「退室」の「退」や「乗車」「乗船」の「乗」など、後部分に体言類をとる用言類は数多く存在する。それらを広く調べた上で、細かい言い方と、おおまかな言い方との分別を行えるようにするのが課題である。

2.6 「併一」の二字漢語

2.6.1 漢語の言いかえ

現代語に大量に入ってくる外来語について、それを漢語や和語で言いかえる試みがあるが、その一方で、同音異義語の多い漢語を、ほかのことばで言いかえることもある。たとえば、日本放送協会による『難語言いかえ集』では、「耳で聞いてわかりにくい放送のことば——漢語・文語調のことば・新聞用語・同音語などに、その言いかえの例をつけ」と「まえがき」に述べているように、漢語の言いかえが問題となっている。以下の表3には、『難語言いかえ集』における言いかえの内訳を示した。漢語については、単位数も表示してある。なお、一つの見出し語に対し、複数の言いかえ語が記載されている場合が多いが、ここでは、先頭に掲げてある言いかえ語のみを検討対象とした。たとえば、「欣幸」に対しては「喜び」「幸い」「満足」が記述されているが、ここでは、二字漢語の「欣幸」に和語の「喜び」が対応するという形で処理をした。また、「発する」「約す」などは、一字漢語と和語との混種語とはせず、一字漢語として扱った。

表3 『難語言い換え集』における言い換えの内訳

見出し語	言い換え語	語数	例
一字漢語	一字漢語	2	断じて→決して 輻→台
	二字漢語	7	発する→発表(する) 約す→約束(する)
	和語	37	該→その 新→新しい 難→むずかしさ
	句	27	被(圧迫者)→圧迫を受けているもの
二字漢語	一字漢語	15	恩義→恩 封緘→封 賓客→客
	二字漢語	313	永劫→永久 外貌→外見 分娩→出産
	三字漢語	31	再編→再編成 智者→ちえしゃ 邦人→日本人
	四字漢語	18	共催→共同主催 政情→政治情勢 陸運→陸上輸送
	六字漢語	1	窯業→陶磁器製造業
	和語	1,697	哀憐→あわれみ 介入する→わりこむ 店舗→みせ
	外来語	8	画室→アトリエ 私刑→リンチ 隧道→トンネル
	混種語	60	急設→急ごしらえ 周到→念入り 防諜→スパイ防止
	句	1,039	救難→災難を救う 厨芥→台所のごみ
三字漢語	二字漢語	8	跨線橋→陸橋 無関心→平気 不可分→密接
	三字漢語	7	局部的→部分的 在泊中→停泊中 能動的→積極的
	四字漢語	4	勢力圏→勢力範囲 輸送料→輸送料金
	六字漢語	1	法曹界→司法弁護士界
	和語	27	再出発→出なおし 確定的→たしか 大腿部→ふともも
	混種語	10	愛煙家→タバコずき 空閑地→あき地 輸送量→輸送高
	句	65	遺留品→かたみの品 出炭量→石炭の生産高
四字漢語	二字漢語	4	一気呵成→一気 毀誉褒貶→評判
	四字漢語	2	千篇一律→一本調子 言々句々→一言一句
	和語	18	栄耀栄華→おごり 我田引水→身勝手
	外来語	1	流言蜚語→デマ
	混種語	2	金科玉条→守り本尊 五十音順→アイウエオ順
	句	41	悪戦苦闘→苦しい戦い 不撓不屈→どこまでもくじけない
五字漢語	句	1	不具廢疾者→からだの不自由な人
和語	二字漢語	6	著しく→非常(に) 憂える→心配(する)
	和語	16	赴く→行く 鑑みる→考えあわせる
	句	11	皮切り→始めとして 如何→かどうか
混種語	混種語	1	官辺筋→政府すじ
句	和語	1	これ努める→つとめる
	句	5	雨後の筈→次から次へと
計		3,486	

表からは、主に二字漢語が検討対象とされ、それを和語や句を用いて言い換えようとしたことがわかる。全体の約8割がこのようなケースでしめられている。また、二字漢語を二字漢語で言い換える場合には、「永劫」や「分娩」など、「当用漢字表」にない漢字を構成要素とする語が、「永久」「出産」など、表内漢字を要素とする語に言い換えられている場合が多い。なお、「ちえしゃ」のように、ひらがな書きへと、言い換え指定がなされている漢語も一部あるが、このような場合は、それを漢字で書くと「三字漢語」であ

る，ということで処理した。漢語を漢字で書くか，ひらがな，カタカナで書くかは，別問題とするためである。

以上に加えて，ここで注目したいのは，二字漢語から四字漢語への言いかえと，四字漢語からほかの語への言いかえである。後者については，表中の例にもあげたように，故事成語の類を一般的な語や句に置きかえる方向性が試みられている。これに対して，二字漢語から四字漢語への言いかえは，

銳意→一生懸命 海運→海上輸送 学徒→学生生徒 過半→半分以上 共催→共同主催 眷属→一族一門 合併→共同経営 昏睡→人事不省 需給→需要供給 出超→輸出超過 政情→政治情勢 全線→戦線全体 全文→文章全体 入超→輸入超過 捻出→無理算段 融資→融通資金 郵税→郵便料金 陸運→陸上輸送

のように，矢印の左側の二字漢語に対して，相対的にやさしい二字漢語同士を組み合わせた形で言いかえが行われている。このような言いかえからは，同音異義の多い二字漢語をさけ，意味の明確な四字漢語による表現を目指そうとした努力が見られる⁶。

次に，言いかえという観点から，「併一」の二字漢語と，それと類義の語を形成する「並行一」「同時一」の四字漢語について，考察する。

2.6.2 二字漢語と四字漢語とにおける他方への言いかえ

「互酬」と「相互支援」，「共営」と「共同経営」とは，意味的には似通っており，単語を構成する要素としての「互」と「相互」，「共」と「共同」との間にも類義の関係がなりたつ。このような場合，二字漢語は，短くて1語としてまとまっている感じがあり，四字漢語は，要素の意味から全体の意味が推測しやすい，といった特徴がある。どちらを優先させるかは，場合にもよるが，両者の使用状況は個別に確認する必要がある。

ここでは，以上のような前提にもとづき，「併一」と「並行一」「同時一」とを比較し，一方から他方への言いかえの可能性について考える。「併」は『明鏡』では，「ならば。ならべる。「一行・一発・一存」」「二つ以上のものをあわせる。「一殺・一設」「合一」」のように定義される。「併」が後部分語基のあらわす動作をくわしく述べてお

⁶ 武部(1989)には，「医籍→医師名簿」「勸解→和解勸告」「監護→監督保護」のような，二字漢語から四字漢語への言いかえが，「解説的」とあるとの指摘がある。

り、修飾1の②の関係にあたる⁷。一方、「並行」「同時」は、「併—」の語釈に用いられることのある語であり、「並行輸入」「同時上映」のように、後部分にくる、動作をあらわす要素を修飾する点で、「併」と意味的・機能的に類似する。なお、「並行」は、新聞などでは「併行」を使わず「並行」に統一しているが、一般には「併行」の表記も見られ、『新明解』では、「二つのものが並んで行く（交わらないで通っている）こと。」の意では「並行」だが、「相互に関連（似た点）の有る物事が同時に行われること。」の意では「併行」とも書く。」と注記している。このような実態に鑑み、ここでは、「並行—」を統一表記とするものの、用例における表記が「併行」であれば、そのまま引用する、という方針をとった。

表4に、前述の二つのコーパスと手元の実例からえられた「併—」「並行—」「同時—」の語を列挙した。

表4 「併—」の二字漢語と「並行—」「同時—」の四字漢語

併	併殺 併読
併	併映・同時上映 併催・並行開催／同時開催 併産・並行生産 併給・並行給付 併存・同時存在 併売・並行販売 併発・同時発生
並行・同時	併用・並行利用(並行使用) 併施・並行実施
並行・同時	並行通園 並行受講 同時入札 同時出品 同時抜菌 同時録音
その他	併営 併記 併催 併収 併設 併置 併録 併飲 並行運用 並行処理 並行審議 並行審理 並行測定 同時通訳 同時履行 同時刊行 同時加入 同時摂取

「併殺」は意味が特殊化していて、「並行—」「同時—」では、言いかえがむずかしい。「併読」に対して、「併」は「並行」とすることができるが、「読む」に意味的に近

⁷ 野村(2004)では、日本語において、出現率の高い二字漢語の結合パターンを語例とともに提示しているが、そこで5位にあがっているのが、「代弁、競泳、歓談、焼死、喚問、議決」など、前部分の用言類が後部分の用言類を修飾する〈V〉+〈V〉のタイプである。野村は、このパターンは「中国語ではそれほど生産性がたかくないが、日本語ではある程度の比率をしめる」(p.15)と指摘している。たとえば、「くらべて～する」という意味を持つ「比—」の二字漢語としては、文章語的な「比定」くらいしか、既存の語が見あたらないが、〈V〉+〈V〉にパターンとしての生産性があるため、「この書と今回の『パンとペン』、『編集者国木田独歩の時代』(角川選書)の三著を比読するとき、……」(『図書』743)における「比読」のような語が生じうる。この文章の書き手が「比定」をもとにして「比読」を造語した可能性はひとまずおくとして、読み手の側の語構成意識としては、「比定」からの類推というよりは、「くらべてよむ」を短く表現して「比読」となった、という程度にこの語を理解するのが普通であろう。このように考えるならば、2.2において造語力がないとした語基についても、それらが、〈N〉+〈N〉や〈A〉+〈N〉など、日本語において生産性の高い結合パターンにおいてであれば、新語をつくりうるのか、あるいは、そのようなパターンにおいても、もはや造語しにくいのかを調べる必要がある。

い「読書」は自動詞で、「～を読書する」とはいわないため、「並行読書」としにくい。ただし、「新聞を2紙購読する」のような文脈に限定して考えれば、「購読」を用いて「並行購読」といえないこともないが、事例は見つからなかった。

「並行・同時」のみの欄の語は、後部分の二字漢語に名詞性の要素が含まれている場合で、「併」と用言類の部分を用いた二字漢語に言いかえようとする、名詞概念が明示されなくなるので、意味はとりにくくなる。もっとも、このようなケースに近い、「併入」のような語もある。競馬では、「入線」という語が用いられ、「競馬で、競走馬がゴールラインに到達すること。」（『大辞林』）と記述されるが、仮に2頭の馬が「あわせてゴールラインに入る」ことを「入線」と「並行」「同時」を用いて単語にするならば、「並行入線」「同時入線」などが使用されてもおかしくはない。しかし、そのような状況に対して、スポーツ新聞などでは「併入」という言い方を使っている。

○アサヒライジングの全弟、コウヨウレジェンド（牡、古賀慎）はウッドで4週連続となる併せ馬を消化した。馬なりのまま5ハロン68秒0-13秒3で、内レオカミカゼ（古馬500万）と併入。（日刊スポーツ。2011.1.14）

この場合、「入る」先はゴールラインに限定されており、「部屋」や「建物」「敷地」などの解釈はありえない。このように、業界用語的な性格を帯びるが、体言類を含まない「併一」によって、「並行一」「同時一」の四字漢語と似たような意味をあらわすことは不可能ではない⁸。

「その他」にあげた語は、二字漢語と四字漢語とで、似た意味のペアが見られなかった点において、「併殺」や「並行通園」などと重なるが、意味の特殊化や名詞要素などが無い分、言いかえに、さほどむりがなさそうなものである。もっとも、二字漢語→四字漢語であれば、「併記」に対して、「並行記録」「並行記載」「並行記述」などを代わりに用いることが考えられるが、四字漢語→二字漢語の場合、「並行運用」に対して、「併用」

⁸ 「帰還」は「(特に、戦場から内地・基地に) 帰ること。『宇宙から無事一する』『一兵』(『岩波』)と定義されるように、場所に関する限定が比較的強い。たとえば、旅行中、外出先からホテルに帰る場合には、「帰還」は使いにくい。「帰」も「還」も動作を示す語基であり、「内地・基地」などの情報は含まないため、要素の意味を理解しても、語全体の意味の理解には直結しない。このような語は、特に、日本語を母語としない学習者にとっては、習得のむずかしいことばであることが予想される。主体や場所など、動作に関係する名詞概念について、何らかの限定を有する二字漢語を広く集めて、用法を整理したい。

は既存の語だが、意味に懸隔があり、言いかえ語としては使いにくい。一方、「運」は「水運」「海運」「陸運」など、「はこぶ」の意味でならば、二字漢語の後部分にくることがあるが、「運用」「運営」などにおける、「はたらかせる」の意味では、後部分語基としての使用は一般的でない。また、「並行審議」「並行審理」などは、「併審」のような形にすると、「審議」と「審理」との違いが見えなくなる、といった困難がある。

「併一」の後部分語基の国語辞典の語釈での扱いを見ていくと、「売→うる」「収→おさめる」のように、字訓の和語動詞を用いている場合、「記→かく」「用→つかう」のように、類義の和語動詞を用いる場合がある。このような意味を持つ後部分語基を、「販売」「記録」「運用」などの二字漢語に置きかえて、四字漢語としてあらわすということは、動作の部分を多少とも細かく言い表せる点で、書き手にとって、表現上、不都合は生じない（ただし、新聞などのように、記事のスペースが限られていて、短い表現が必要になる場合は別）。また、「併一」の語には、「併給」の「いっしょに・支給（給付）すること。」や「併存」の「いくつものものが、いっしょに存在すること。」（いずれも『三国』）のように、語釈の中で、用言類の二字漢語が使用されている場合があるが、これは、「併給」「併存」の概念的な意味が、「並行支給」「並行給付」、「同時存在」によっても、言い表すことが可能なことの傍証となる。

以上のように、「併一」の二字漢語を、「並行一」「同時一」の四字漢語を用いて言いかえることは、比較的容易であるが、四字漢語から二字漢語への言いかえは、二字漢語の分析意識がはたらきにくい現代語においては、やや困難である。なお、ここでは言いかえの可能性に重点を置いたので、「併催」と「並行開催」「同時開催」などにおける、使い分けの問題については、ふれることができなかった。二字漢語と四字漢語で類義になる語を多く集めた上で、改めてとりあげたい。

2.7 おわりに

本節のテーマは、「字音語基の造語力」であるが、字音語基に造語力があるかどうかという観点では論じなかった。すでに述べたように、二字漢語を生産する能力のおとろえは、諸氏の説くところであり、繰り返しをさけたかったためである。また、複合語基とも結合して、三字漢語の生産に寄与する、接辞性の語基については、ふれる余裕がなかったが、これについては、別に検討が必要である。これらの観点に代わり、ここではまず、造語力のない語基についてとりあげた。「造語力」といえば、造語力のある語基を研究対象

にするのが一般的である。そのような語基は、新しい概念に対応するためにも重要であるから、分析を行うのは当然といえる。しかし、造語力のない語基についても、現代語の中で、どの程度、それを構成要素とする語があるのか、学習者が覚えるべき熟語の範囲はどれくらいなのか、といった疑問にこたえるための下調べが必要だと思う。

それから、いくらかなりとも、国語辞典にのっていない語を生み出している語基を、暫定的にはあるが、造語力のある語基と見なして、造語機能や用法の事例検討を行った。

その中で、「和語との比較」「対義語の有無と意味・用法」「総合的な表現の可能性」

「四字漢語との比較、言いかえ」などを問題としてとりあげたが、これらは、それぞれ個別の検討課題として、数多くの語基について調べてみる必要がある。それにより、ここでのあらい分析を修正・改良していくことができるものと考えている。

Ⅲ 二字漢語の意味・用法における諸問題

1. 推論によるVNの外部表示の特殊化

1.1 はじめに

VN (Verbal Noun) とは、いわゆるサ変動詞語幹となる名詞のことを意味し、「走行」や「回転」などを具体的には指し示す。ただし、「走行・回転」の場合、「走」と「行」、「回」と「転」がいずれも動詞的要素であるのに対し、本節で扱うのは、以下のように、名詞的要素と動詞的要素から構成されるVNであり（たとえば以下の「換気」は「換」が動詞的要素、「気」が名詞的要素である）、その内部の名詞と外部表示となる名詞との意味関係、外部表示のタイプとが考察される。なお、以下では簡略化のため、VNという用語を「名詞的要素を含むVN」を指すためにのみ用い、名詞的要素を含まないVNに言及する際は、その旨を明記することとする。

○帰宅時間にあわせて部屋を冷暖房したり、長期不在時に部屋を換気するなどの利用方法を想定している。（日経新聞。2000. 6. 15）

○本土で就職していたが、沖縄県に戻り、方言と民謡に浸った。八重山では漁師になった。漁をしながら歌い、五十歳で初めてのCDを録音した。

（朝日新聞夕刊。2001. 1. 26）

上例のVNの問題点は、それらが含む名詞的要素「気」「音」が統語的にあらわれている名詞の「部屋」や「CD」と、包摂関係という、先行研究で度々指摘されてきた関係を有していないように思われる点にある。たとえば、以下の各例では、VN内の名詞と外部表示の名詞との間に包摂関係、つまりVN内名詞が外部表示に対して上位語に相当する関係、が確認される。

- a. 大学に入学する
- b. 電車／バスが発車する
- c. 神戸港に寄港する
- d. 富士山に登山する
- e. 新聞代を集金する

（影山（1980, p. 180））

上例のaでは外部表示の「大学」がVN内の「学」を具体化する役割を担っている。しかし、「イギリスでカレッジに入学する」がいえるように、名詞間の形態的な同一性は義務的ではなく、意味的な規定が満足させられていけばよい。ところが、このことをもとにして冒頭の二つの用例を見ると、「気」と「部屋」，「音」と「CD」との間には形態はもちろんのこと、意味的にも包摂関係はまったく認めることができない。なお「録音」に関しては、ニ格名詞に音を記録するための媒体があらわされ、ヲ格名詞に「音」が来る次のような用法が一般的である。

○テープに雨音を録音する

この場合、「テープに」の部分を除くと省略的な表現になるが、前述の朝日新聞の1月26日の記事ではニ格名詞が表示されていないにも関わらず、情報の不足が生じていない。また、CDは「雨音を録音する」の「雨音」と異なり、「対象目的語（対象）」ではなく、「結果目的語（結果）」である。このことは次の例を見れば、より一層明らかになる。

○もともと、スウェーデンは人口が八百万人程度と少なく、早くから海外市場を目指す傾向が強い。カーディガンズなど多くのアーティストもCDを録音するときは英語だ。（日経産業新聞。1996.6.26）

「英語」を使って、空のCDに音をふきこむことがこの例ではあらわされているが、仮にこの「CD」を「対象」とした場合、CDに入っている音を何かに記録する際に英語を使用する、ということになるが、それが意味をなさないことはいうまでもない。

本節では、この「CDを録音」におけるような「録音」の用法について考察し、VN内部の名詞的要素と外部表示との間には、3種類の意味関係を設定すべきであることを主張する。なお、先行研究（国広（1997））では「目的語＋和語動詞」における「常識による推論」の存在が指摘されているが、本節では、同様の推論がVN内の名詞的要素と動詞的要素との間にも存在することを明らかにし、関与する名詞的要素の数において、両者に異なりが見られることを指摘する。

資料として、1999年～2003年版の朝日新聞CD-ROMと2003年版の日本経済新聞CD-ROM、な

らびに日本経済新聞の日経テレコンを使用した。

1.2 先行研究の概要

VNの統語的な研究（ここでは名詞的要素を含むVNの先行研究のみをあげ、サ変動詞語幹全体の研究については割愛させていただく）は、筆者の知る限りでは影山（1980）、仁田（1980）が早く、島村（1985）、張（1992）、小林（1997, 2001, 2004）へと続く。包摂関係は影山が指摘し、張や小林に受け継がれている。小林（1997）では以下の「登頂」を例にとり、名詞間における所属関係という考えを提出している。

富士山に登頂する。

太郎が花子の手紙を開封した⁹。

小林（2001）は、所属関係について概略、外部表示（上記の例では「富士山」「手紙」）が全体、VN内の名詞（「頂」「封」）が部分をあらわし、その「部分」というのは相対的概念と見なし得る、といった趣旨のことを述べている¹⁰。そして、統語的な項（外部表示）は相対的概念の基準となる概念をあらわすため、項としての顕在化は義務的だとされる。以下に、先行研究（主に小林（2001））によるVNの分類を簡潔に記載するが、本節ではVN内の名詞と外部表示との意味関係に重点を置くため、「飲酒」や「処刑」など、項をとることができないとされるVNについてはふれないこととする¹¹。

【VNと項との関係】

- a. 項が任意的で包摂関係をつくるVN—入院, 預金
- b. 項が義務的で包摂関係をつくるVN—入学, 観戦
- c. 項が義務的で所属関係をつくるVN—登頂, 開封

⁹ 「手紙を開封する」のような例自体は、張（1992）で既に指摘がある。

¹⁰ 小林（2001）は「富士山の頂上に登頂する」を余剰的な表現とし、VN内の名詞が相対的概念の場合、基準となる概念を示す名詞のみが外部にあらわれることを指摘する。筆者の考えでは、たとえば「接岸」で「岸」は陸地の水面に接する部分と規定できるので、相対的概念かと思われ、「半島に接岸する」といえば、「半島」が基準をあらわすことになる。ただし、「半島西岸に接岸する」で「岸」が外部表示されていても、特に不自然ではなく、相対的概念を含むVNにとって、本質的特徴は基準となる名詞を外部表示することであって、外部表示における相対的概念を示す名詞の不在は必ずしも義務的なことではないように思われる。

¹¹ 項をとるVNととらないVNとの違いは島村（1985）で考察されている。

小林（2001）ではもう一つ、外部表示との間に、「包摂関係と所属関係両方」をつくるVNのための項目がたてられているのだが、相対的な概念とは考えられないものがあがっているため、本節では、【VNと項との関係】の各例のような基本的な分類カテゴリーには含めなかった。具体的には一部、後でふれることにする。

1.3 メトニミーと外部表示の名詞

メトニミー（metonymy）とは伝えようとすることの全てを言語化するのではなく、その一部を表現し、残りの部分は文脈などで補う言語的な操作である。たとえば「どんぶりをたいたげる」という場合、器である「どんぶり」を人が食べるわけではなく、その中身を食べるのだということは容易に理解できる。メトニミーを用いた解釈は1.1の冒頭の「換気」のようなVNと外部表示の間にも適用することが可能である。まず、「換気」が通常、「空気」の類の名詞を統語的にとることは以下に見られる通りであり、ここでは一般的な包摂関係が成立している。

○部屋の空気を換気する

1.1で見た「部屋を換気する」の場合、「換気」の対象として、空気ではなく部屋という空間が統語的にあらわれているが、部屋は空気を含む空間として容易に理解できるので、実際には「部屋の空気」を指すものと解釈できる。この場合、「部屋の空気を換気する」の「空気」と「換気」の「気」との間には包摂関係が成立しているため、「部屋を換気する」という表層形式から、即座に包摂関係の存在を否定する必要はない。以下の「除湿」「殺菌」において、それぞれ前の用例では「湿気」「菌」を含む「場所」が外部表示としてあらわれており、1.1の例と同類だが、後の用例では「水分」「細菌・ウイルス」が外部表示で、上の「部屋の空気を換気する」と同類であるといえる。

○奥行きも一六センチとコンパクトにし、押し入れやげた箱、ベッドの下などさまざまな場所を除湿できるように工夫した。（日経新聞。2001. 3. 7）

○589×380×275 1日に16 l を除湿（朝日新聞夕刊。2000. 7. 1）

○ウイルスを吸着するフィルターや、車内を殺菌する紫外線ランプが装備され、運転

席との間は隔壁で仕切られている。(朝日新聞。2003. 4. 11)

○吸入した空気に紫外線を照射して細菌やウイルスを殺菌する。

(日経新聞。2003. 4. 10)

上記の例と同様、メトニミーによる表現ではあるが、入れ物、もしくは場所とその中身の関係を持たない次のような例もある。

○専務は同業者三人と商談を兼ねて午後六時十分ごろに来店し、テーブルに着席してから約五分後になくなっているのに気づいたという。(朝日新聞。2000. 10. 4)

○国会で、無所属席に着席した。

「無所属席に着席」は通常の包摂関係による表現だが、「テーブルに着席」では「席」の具体例でなく、席と空間的に隣接するテーブルが外部表示される。山梨(1995, p. 34)にはこれと類似の事象をあらわす以下の例があり、山梨(1992, p. 93)で「空間／場所の隣接性に基づく表現」と定義される、トポニミー(toponymy)という、メトニミーの下位類でこれを説明している。

- a. 机に座って手紙を書く。
- b. 机(の前)に座って手紙を書く。

山梨の指摘どおり、上例のaはbのように解釈するのが一般的だが、その場合、「机の前」というのが、床であるのか椅子(席)であるのかなどについては明示されない。山梨は「机の前」というのはあくまで慣用的な解釈であり、「机の横」や「机の上」の解釈が不可能なわけではないことも指摘している。一方、「テーブルに着席する」の場合、「席」の明示化により、テーブルの上や床に座る、という解釈は排除され、「テーブル(の前)の席」とであると特定される。

このように、外部表示の名詞に対して、メトニミーによる表現を認めるならば、VN内の名詞と外部表示との間に、意味上の包摂関係が認められ、別の関係を仮定する必要はない。1.2で若干ふれたが、小林(2001)では、包摂関係と所属関係のどちらでも特定されるVN、という項目をたてて、そこに「着席」を含めている。具体的には「運転席に着席

する」が前者、「円卓に着席する」が後者の例としてあがっている。このグループの説明に、小林は「増税」をとりあげて、①「税」は相対的な概念で、「何の」の「何」にあてはまる名詞が項として必要であり、②「たばこ税を増税する」が包摂関係の例で、「たばこを増税する」が所属関係の例である、と主張している¹²。しかし、以下にあげるような自動詞的「増税」、あるいは「減税」は一般的であり、項（外部表示）が義務的とは考えにくい。なお、以下の例では他の部分、もしくは見出しに「何の」に相当する名詞が出現しているわけではなく、下線部の前の目的語が省略されている、とすることはできない。

○ディーン氏はブッシュ政権の金看板である大型減税の全面撤回を求めてきたが、反増税グループがこれを逆手に取った中傷テレビ宣伝を11月末にアイオワ州で放映。

「ディーン氏は増税すると言っています」と攻撃している。

（朝日新聞。2003. 12. 11）

○金融と財政政策を組み合わせる処方せんとしては、政府が減税し、その財源として発行する国債を中央銀行が引き受ける案がある。（日経新聞。2003. 5. 11）

「前・横」など、いわゆる関係概念や寺村（1968）の指摘する「沖」のような名詞であれば、「何の」で示される名詞が定義上必要不可欠で、「登頂」も「山」という、「項」にとっての基準概念を示す名詞は必要である。しかし、「税」にとって「何の」相当の概念は基準となる概念ではなく、具体化に必要な概念に過ぎないのであるから、「沖」や「頂」と同様の扱いはできない¹³。「席」についても同様で、映画館などを考えれば、「テーブル」類が定義上必要ないことは明らかであるし、外部表示抜きで「着席する」といえる。

以上で見てきたように、メトニミーという手段により、外部表示の表現形式の幅は広がるが、表面化されていない名詞とVN内の名詞との間には包摂関係が成り立っている。ここで扱ったVNとは対照的に、次に見るVN内の名詞と外部表示との間には、上記のような広い

¹² 寺村（1968）が「相対性」をもつ名詞、奥津（1974）が相対名詞を論じている。

¹³ 都内の大学生数名に「たばこを増税する」が容認可能かどうか尋ねたところ、大半が「つい言ってしまうかもしれないが、「たばこ税を増税する」の方がよい」という趣旨のことを述べた。また「税」の種類では「たばこ・酒・石油・自動車」など、具体名詞で「税」抜きの「{酒/石油}を増税する」が言えなくもないのに対し、「法人・所得・消費・相続」など抽象名詞では「税」抜きの言い方がまったく容認できない、という差がある。この点「値上げ（する）」という和語複合名詞は前者の名詞類には用いられ、後者の名詞類には用いられない、という「増税する」との並行性を見せるが、これらに関し、目下ははっきりした答えが出せないで、ここでは指摘にとどめる。

意味での包摂関係さえも存在しないので、第3の意味関係を設定することになる。

1.4 前提関係

前述の如く、「CDを録音」の「録音」は「対象」でなく、「結果」を外部表示しているが、同様の現象が「録画」にも見られる。

○これはNHK名古屋放送局の地域情報番組「おしゃべりらんち」のコーナー、「メッセージ60」に出演した人の声だ。同放送局内の見学者コースにもうけられた模擬スタジオで、情報発信したい人が六十秒のビデオを録画する。

(日経新聞夕刊。1997. 5. 27)

目的語に「結果」をとる動詞はいわゆる生産動詞、発生動詞とよばれる動詞群で、奥津(1996b-c, 1997a-b)で詳述されている。以下、Aが奥津(1996c, p. 85)であがっている生産動詞の例で、Bが奥津(同, p. 82)のあげる発生動詞の例である(奥津のあげる自動詞はここでは割愛する)¹⁴。

A: 沸かす, 焼く, 炊く, 建てる, (小説を) 書く, (絵を) 描く, 製造する, 製作する

B: 生む, 生やす, 点ける, 現す, 孵す

この二つの区別にそって、VNも以下のように分類できる¹⁵。

A: (長い曲を) 作曲する, (名古屋城を) 築城する, 作詞する, 作図する, 作文する

B: (子音を) 発音する, (裏声を) 発声する

¹⁴ 奥津(1996b, 1996c, 1997a, 1997b)では、〈始発〉のあるものが生産動詞、ないものが発生動詞とされる。たとえば「大山の水で湯を沸かした」なら、「大山の水」という〈始発〉が「湯」という〈結果〉に変化する。発生動詞の「生む」の場合、「子どもを産んだ」といえば、「子ども」はそれまで無であったのが有になるので、〈結果〉はあるが〈始発〉はないとされる。

¹⁵ 奥津(1996c, p. 82)でも指摘されているが、発生動詞は数が少ない。同様に発生動詞に相当する動詞的要素と、名詞的要素からなるVNも少ない。

これらのVNは内部に「結果」の名詞を持つと同時に、目的語にも「結果」をとっている。それゆえ、包摂関係は保たれており、VN内の名詞と外部表示とを論じる上では、生産・発生動詞以外のVNと何ら変わることがない。「録音・録画」がこれらと異なるのは、VN内の名詞が「結果」ではなく、「対象」であるという点である。「結果」のCDやビデオは、それらに入れるべく存在する「対象」としての音や画像を記録することにより産出される。以上にもとづき、結果目的語をとるVNを分類すると次のようになり、前者が一般的であるといえる。

- ① 結果目的語、VN内の名詞も結果—作曲，築城，作詞，作図，作文，発音，発声
- ② 結果目的語、VN内の名詞は対象—録音，録画

これまでの記述から明らかなように、本節で問題となるのは②の方であるが、ここにはVN内の名詞が「対象」で、結果目的語をとることがごく一般的な「執筆」を含めることができる。語構成的には「筆」という「対象」を「執る」という動作が示されているだけだが、「原稿を執筆する」のように結果目的語をとり、「毛筆を執筆する」のような包摂関係の例となる用法はない。したがって、「原稿を執筆する」において、「筆」が「対象」，「原稿」が「結果」をあらわす，という点で、「執筆」と「録音・録画」との間には共通性が見られ、このことが「結果」を直接目的語にとる「録音・録画」の用法が非合理的ではないと考える本節の立場に一つの根拠を与えるが、上述のように「執筆」は結果目的語のみをとり、対象目的語をとらない点で「録音・録画」とは区別される。

ここで、本節では②のVNの内部名詞（「対象」）と外部表示（「結果」）との間に、「前提関係」を一つの意味関係として設定したいと考える。なぜなら、コンテンツを含むCDやビデオは、そこに入れられる音や映像の存在が前提条件となっているし、原稿にとって筆の存在（現実には筆以外の道具が使われていたとしても、言葉の問題として）が前提となっている。つまり、「VN内の名詞が外部表示の名詞の存在にとって、なくてはならない存在に相当する」場合に両者間で生じる関係を前提関係と定義できる¹⁶。

ただし、前提関係を持つ外部表示は「結果」に限られるわけではなく、「対象」の場合

¹⁶ ここで前提関係という場合、たとえば「CDを録音する」という一つの事態において、記録される音と、その結果できるCDとの間において成り立つ関係のことを指すのであり、単なる物理的存在としての音とCDとの間には前提関係は当然存在しない。

もある。以下に具体例をあげる。

○関係者によると、最も重い処分は、心臓手術を執刀した第一外科教授と、患者確認の責任が大きい麻酔科教授の停職二ヶ月。（朝日新聞。1999. 6. 1）

○「医師はみな“良医”を演じることが仕事だと思い込まされてきた」と著者は話す。年間二百例の心臓バイパス手術を執刀する心臓外科医。

（日経新聞夕刊。2003. 7. 19）

○日本大使館に武装したグループが十数発の銃弾を発砲（朝日新聞。2003. 12. 1）

○実際、政府は対米配慮を実践してみせる。二十九日、イスラム・反米色を前面に押し出す野党主催のデモに催涙弾を発砲して指導者を逮捕。

（日経新聞。2003. 4. 23）

「執刀」はおよそ「メスを執って手術を行う」を意味するが、「執刀」の結果として「心臓手術」があるわけではなく、これは「対象」と考えられる。また「発砲」は「銃弾」を放出させるべく、拳銃などの機器を作動させることを意味するが、中にある銃弾は「発する」行為の生産物ではなく、これも「対象」と見なし得る¹⁷。この場合、「刀」や「砲」がいわば第1の「対象」，「心臓手術」「銃弾」が第2の「対象」とでも呼ぶべきであり、その点で「録音・執筆」とは異なる。しかし、「刀（メス）」の向かう先の「心臓手術」や、「砲」によって撃ち出される「銃弾」は、それぞれ前者の存在を前提としており、前提関係が成り立っている。なお、「拳銃を発砲する」という場合には、通常の包摂関係が成り立っており、「発砲」も「録音・録画」と同じく、包摂関係と前提関係の両方に関係している。

したがって、VN内部の名詞と外部表示の名詞との間に前提関係が成り立つのは、VN内の名詞が「対象」で、外部表示が「結果」である場合と、VN内の名詞と外部表示の両方が「対象」である場合の2通りがあるということになる¹⁸。

¹⁷ 「CDを録音」「ビデオを録画」「原稿を執筆」という行為が終了すれば、それぞれ「{CD／ビデオ／原稿}ができた」といえるが、「銃弾を発砲」しても「銃弾ができた」とはいえず、両者の違いがわかる。

¹⁸ 前提関係では外部表示がVN内の名詞の存在に依存しているといえるが、所属関係の場合、たとえば「大山に登頂」で「山」と「頂」はどちらか一方が他方の存在にとって一方的な前提となっているわけではなく、前提関係はない。「この曲の歌詞を作詞する」のような包摂関係の場合、「歌詞」と「作詞」の「詞」は別種概念を指すのではなく、同種概念における具体性に違いがあるだけであって、前提関係はない。

1.5 推論と外部表示

「作曲」や「築城」のような、元々内部に「結果」を含むVNが、その名詞の具体化のために、同じく「結果」を示す外部表示をとるのは自然なことと思われるが、「対象」を含むVNの「録音」や「執筆」が、どうして外部表示に「結果」をとることができ、「対象」を新たに外部表示化するのだろうか¹⁹。これに関して、ここでは国広（1997）が述べている「推論的派生義（推論義）」が関与していると考えられる。

ある動作・出来事が実現したら、たいてい次のあることが生じるものだという推論を下すことがある。言い換えれば常識による推論である。そういう推論によって生じる意味を「推論的派生義」と呼ぶ。（国広（1997, p. 223））

国広は推論義の定着した例として「筆を執る」をあげ、「文章を書く」という意味が推論義であるとしているが、これと同様のことが「執筆する」にも生じている。ただし、両者において異なるのは「筆を執る」では既に「筆を」によって、目的語の位置が占められているのに対し、「執筆する」ではVNの中に「筆」という目的語相当の名詞が含まれているため、表層において目的語の位置は空だ、という点である。だとすると、国広（1997）の規定する推論によって「筆を執る」という行為に伴って普通生じる「結果」をあらわす名詞が目的語の位置に来て良いと考えられ、実際「原稿を執筆する」で結果目的語があらわれている。「執筆する」には、「書く」という他動詞的動作が表面にはあらわれない形で関係しており、「執る」との間には「執る→書く」という継起的な関係が存在する。

ところで、目的語をとる「執刀」の用法は一般の国語辞典には全く記載されておらず、どの辞書においてもこのVNは自動詞的であるとされている。しかしながら、「執筆」と同じく常識による推論に従えば、刀（メス）を手で執れば手術を行うのが普通であるから「手術を行う」という意味が生じて、直接目的語に何の手術であるか、「対象」として明示されても良いはずであり、「執刀」を自動詞用法に限定するための強力な理由はないように思われる。それから、新聞・雑誌などで目的語をとる「執刀する」が多く見られる点

¹⁹ 「銃弾を発砲する」において、銃弾が拳銃などといった「砲」の中に物理的に含まれていることから、両者が包摂関係にあるとする考えもあり得るが、本節でいう包摂関係とは、あくまでVN内名詞と外部表示との概念的な上位一下位の意味で用いられており、物理的な含む、含まれるの関係について用いる用語ではないことをお断りしたい。

も、本節でこの用法を認める根拠の一つとなっている。

一方、「録音・録画」の場合には、「音を記録する」「画（像）を記録する」という行為の後に、「結果」としてのCDやビデオができるというよりも、「音・画像をCD・ビデオに記録する」という行為は見方を変えれば、「音・画像の入ったCD・ビデオをつくる」という行為である、と規定することができるだろう。それゆえ、「記録する」とことと「つくる」とこととの関係は同時的である。

最後に「発砲」だが、このVNの場合にも「発砲する」という行為を行えば、普通「銃弾」が飛び出るものだ、という推論が働いている。しかしながら、「拳銃を発砲したが、弾が入っていなかった」という事態はあり得るため、この推論はキャンセル可能である。

「発砲する」行為（引き金をひく、といった）と、その結果飛び出してくる「銃弾」との関係は同時的ではない。「銃弾を発砲する」といえば、「飛び出る」という事態が「発砲する」と継起的に関係している。

以上のVNは細部においては互いに異なる性質を持っているが、VN内の名詞と外部表示とが前提関係によって結ばれている、という大枠においては共通しているといえる²⁰。直接目的語として表示すべき名詞が、一つすでにVNの中に含まれているために、それ以外の名詞を目的語にとることができ、結果として二重ヲ格が回避されている点が、これらのVNの特徴の一つとしてあげられる。

1.6 おわりに

先に提案した前提関係も含めて、以下にVNを分類する。

- ① 包摂関係・外部表示が必須—入学，入庁，開会，閉館，発音，築城，提案，上映，立案，殺菌
- ② 包摂関係・外部表示が任意—入院，預金，送金，発砲，作曲，作詞，作画，作文，発声，増税，減税，組閣，布教，換気，除湿，借金，貯金，着席
- ③ 所属関係—登頂，開封²¹

²⁰ 「執筆・執刀」は意味の慣用化により、文字通りの意味に用いられないので、派生義が成立しているが「録音・録画・発砲」は特別の意味を慣用的に持つわけではなく、前にくる名詞によって述語全体のあらゆる意味が異なるだけなので、派生義は成立していないと考える。両者を同一カテゴリーに含めることに違和感があるとする立場もあり得るが、「空気を換気する」と同様の理屈で「万年筆を執筆する」をつくるのが、共時的には不自然であっても、形態論的に「不可能」であるとまでは言えないことを考慮するなら、両者を同類として、派生義の有無により下位分類する、という本節の立場をとるのは、さほど無理がないのではないかと考える。

²¹ 小林（2001，2004）を参照していただきたい。

④ 前提関係—録音，録画，執筆，執刀，発砲

「発砲」は次のような言い方に問題がないので，包摂関係において外部表示が任意であるとした。

○湾岸戦争当時は，自衛隊が海外で発砲した場合は憲法上の疑義を生じるとの論議が盛んだった。（朝日新聞。2003. 12. 11）

もっとも，包摂関係を有するVNは，外部表示が必須と任意とで区別されてはいるものの，外部表示が必須のVNも文脈により，外部表示によって通常満たされる概念が補完されているなら，統語的に外部表示を伴わずに用いることも可能なため，上述の分類における①と②は連続的な類である。具体例を以下にあげる。

○入庁したばかりの巡査時代はいくら飲んでも顔色ひとつ変わらない男だったが，ここ数年は少しのアルコールで酔うようになった。

（高村薫（1993）『地を這う虫』文藝春秋）

上例は，刑事が主役の小説の一コマだが，「巡査時代」という語があり，「入庁」先は「消防庁・金融庁」などではなく「警視庁」だと容易に理解される。したがって，外部表示の必須・任意とは意味的な基準にもとづいており，名詞と助詞の順序など，純粋な文法規則とは異なる。先の分類で「録音・録画・発砲」はVN内の名詞と外部表示とが，包摂関係で結ばれるのが基本的で，前提関係は派生的だと考えられるが，「執筆・執刀」は派生的な「文章を書く」「手術を行う」の意味で用いられ，前提関係のみを持つ。

本節で提案した前提関係を持つVNは，数の上では包摂関係を持つVNと比べて少なく，「執筆」を除くと，これらの用法を記載した国語辞典はない。しかし，この周辺的ともいえる用法においても，前提関係という明確かつ合理的な規則性が存在することを示し得たのではないかと思う。

2. 名詞要素を内部にもつサ変動詞語幹における格助詞の用法

2.1 はじめに

二字漢語「回転」「掃除」は、「する」をつけ「回転する」「掃除する」のようにサ変動詞として用いることが可能であり、サ変動詞動詞語幹（サ変語幹）とよばれる。「回転」「掃除」の場合、「回」と「転」、「掃」と「除」は、ともに動詞要素なのに対し、漢語の中には動詞要素と名詞要素とからなるものも多い。つまり、動詞要素「入」「落」と名詞要素「院」「馬」からなる「入院」「落馬」などである。和語の「入る」「落ちる」は、「弟が病院に入る」「家老が馬から落ちる」など、「病院」「馬」を統語的な項として表示するが、上記の漢語では、語内部に名詞要素が含まれるため、「弟が入院する」「家老が落馬する」のように名詞を文中に示す必要がない。ただし、前者は、病院を詳細に示す場合「都内の大学病院に入院する」など、名詞要素と同種の名詞をとることもある。これが名詞要素を含まない和語動詞や「回転」などの漢語と異なる点で、影山（1980）、仁田（1980）、島村（1985）、張（1992）、小林（2004）などで、どういう語が語内部の名詞要素と同種の名詞を項としてとるか、またはどんな名詞が統語的に表示されるかという点が議論されてきた。つまり、重点は漢語サ変動詞語幹の名詞要素およびそれと意味的に関係のある名詞に置かれてきた。

一方、動詞については、特に和語動詞などを中心に、どの動詞がどのような項をとり、何項動詞として用いられるのかといった点からの研究が積み重ねられており、上述の名詞要素を内部に含むものについても、それがいくつ項をとり、どの文型で用いられるのかといった面について、全体的に見渡す必要がある²²。たとえば、自動詞の「開店」と「読書」は、「なにがーする」の1項動詞として用いられる点で共通するが、「薬局が開店する」では、ガ格が動名詞内の名詞要素と同種であり、意味的にも1項であると解釈できるのに対し、「祖父が読書する」では、「読書」に含まれる「書」はヲ格に相当する要素であり、ガ格の「祖父」と合わせると、意味的には2項であると解釈されうる（仁田（1980）参照）。このような点についても、多くの語について、その傾向を調べなければならない。

- ① 名詞要素を含む漢語サ変動詞のとり文型
- ② 複数の文型をとりうる漢語サ変動詞について（格助詞の増減）
- ③ 一つの名詞が複数の格助詞で示しうるケース（格助詞の交替）

²² 寺村（1982）、石綿・荻野（1983）、仁田（1986）、益岡（1987）、仁田（1993）、国立国語研究所（1997）、石綿（1999）、日本語記述文法研究会（2009）など。

本節では、上記の点について以下で論じる。なお、以下では、名詞要素を含むサ変動詞語幹をVNと略記する（「回転」「掃除」など、それ以外のサ変語幹を除く）。

2.2 VNのとりうる文型

2.2.1 VNの一覧

本節では、名詞要素と動詞要素とからなるVNとして、異なりで1,073語をとりあげるが、以下の表1では、「店が開店する」「彼が店を開店する」のように、複数の文型をとりうるVNについては、文型ごとに記述しているため、全体としては1,373項目となっている²³。

意味的な項については、統語的な項と意味的な項の数とが一致するものとして「開店」、ずれるものとして「読書」が例となるが、「つぶあんが増量する」の場合、「つぶあん」は「量」の所有主体であり、「つぶあんの量」というようにとらえられる。「川が増水する」の場合も、「川の水が増える」ということであり、項数の増減はないものと解釈した。もちろん、どのようなVNと統語的な項との間に、このような用法が見られるのかを確認する必要はある。表からわかる全体的な特徴を記すと以下のようなようになる。

- ・文には主語があるのが一般的であり、VNにおいても、ガ格のない0項動詞は、ごく例外的である。
- ・1項動詞の「読書（する）」「出塁（する）」のグループに対して、ヲ格、ニ格が統語的に示されるのが、2項動詞の「捕球（する）」「乗船（する）」のグループであり、比較的、1項の場合と2項の場合とで所属語の割合が近いと見られるが、同様の関係が認められる2項動詞の「給油（する）」と3項動詞の「送金（する）」のグループでは、3項動詞に所属する語が2項動詞の半数以下になっている。
- ・3項動詞以上になると、ヲ格やニ格でVN内の名詞要素が外部表示されるのが一般的で、「折半」のように名詞要素が統語的な項と別種である場合は例外的である。

²³ ここでは、野村雅昭氏が作成した「現代漢語データベース」（『分類語彙表 増補改訂版』所収の二字漢語を基本的なデータとして、2万語以上に品詞性や語構造を付加したもの）のうち、名詞要素と動詞要素からなる約1,500の二字漢語を利用させていただいた。これについて、国語辞典および「CD-HIASK1999-2003 朝日新聞記事データベース」（「朝日」と略記する）を参考にし、サ変動詞の用法と文型の確認がとれた1,073語を本節の考察で扱う。分析にあたっての責任は、本節の筆者に存する。なお、この期間以外の記事も確認・利用する場合は、朝日新聞の記事データベース「聞蔵II」を国立国会図書館において使用した。

表1 VNの文型およびN(名詞)要素と統語的な項との関係

	項数	語数	例
0項動詞(VNする)		5	
VNする	1	5	停電(停電する) 閉廷(閉廷する)
1項動詞		544	
NがVNする			
ガ格とN要素が同種	1	61	開館(図書館が—する) 停船(不審船が—する)
ガ格が物を, N要素が動作を表す場合がある	1	4	完工(図書館が—する) 閉業(店が—する)
ガ格がN要素の所有主体を表す場合がある	1	28	増量(つぶあんが—する) 開幕(芝居が—する)
ガ格がN要素の存在場所を表す場合がある	1	11	増水(川が—する) 停電(1万世帯が—する)
VNが「NヲVスル」の関係にある	2	272	読書(妹が—する) 飲酒(未成年が—する)
VNが「NニVスル」の関係にある	2	113	出塁(選手が—する) 着席(男が—する)
VNが「NカラVスル」の関係にある	2	47	離日(大統領が—する) 降壇(講師が—する)
VNが「NトVスル」の関係にある	2	3	闘病(彼女が—する) 散華(彼が—する)
NIにVNする	2	3	着金(指定口座に—する) 落雷(電柱に—する)
NからVNする	2	2	出火(台所から—する) 発火(段ボールから—する)
2項動詞		700	
NがNをVNする			
ヲ格とN要素が同種	2	229	捕球(岡田がゴロを—する)
ヲ格が物を, N要素が動作を表す場合がある	2	8	施工(工務店が橋を—する)
ヲ格がN要素の所有主体を表す場合がある	2	36	免職(社長が幹部を—する)
ヲ格がN要素の存在場所を表す場合がある	2	10	除雪(叔父が玄関の前を—する)
N要素が格成分の意味とは重ならない	2	13	割愛(僕が本論の一部を—する)
VNが「NニVスル」の関係	3	23	収監(政府が犯罪者を—する)
VNが「NカラVスル」の関係	3	2	放校(学校側がいじめっ子を—する)
NがNにVNする			
ガ格とN要素が同種	2	3	着雪(塩分を含んだ雪が電線に—する)
ガ格がN要素の所有主体を表す場合がある	2	6	変貌(小倉が護憲主義に—する)
ニ格とN要素が同種	2	112	乗船(吉野がフェリーに—する)
ニ格がN要素の所有主体を表す場合がある	2	2	登頂(宮下が富士山に—する)
ヲ格が物を, N要素が動作を表す場合がある	2	1	着工(工務店がマンションに—する)
VNが「NヲVスル」の関係	3	187	給油(自衛隊がギリシャ艦船に—する)
NがNからVNする			
カラ格(ヲ格)とN要素が同種	2	27	離党(山田が自由党から—する)
VNが「NヲVスル」の関係	3	8	採血(看護師が患者から—する)
VNが「NニVスル」の関係	3	5	帰京(皇太子が御用邸から—する)
NがNとVNする			
ト格とN要素が同種	2	1	闘病(彼女がガンと—する)
VNが「NヲVスル」の関係	3	25	入籍(兄が彼女と—する)
NがNでVNする			
VNが「NヲVスル」の関係	3	2	被災(伯母が大地震で—する)
3項動詞		120	
NがNからNIにVNする			
ガ格がN要素の所有主体を表す場合がある	3	1	昇格(山本が係長から課長に—する)
ニ格とN要素が同種	3	3	入団(林が広島から巨人に—する)
VNが「NヲVスル」の関係	4	11	避難(住民が町から隣県に—する)
NがNにNをVNする			
ヲ格とN要素が同種	3	75	送金(投資家が海外に利益を—する)
N要素が格成分の意味とは重ならない	3	1	指南(師匠が弟子に剣術を—する)
ニ格とN要素が同種	3	5	入庫(社員が冷蔵庫に肉を—する)
NがNをNIにVNする			
ヲ格とN要素が同種	3	14	改装(大家が部屋を古民家風に—する)
ニ格とN要素が同種	3	6	換金(彼が株を円に—する)
NがNからNをVNする			
ヲ格がN要素の所有主体	3	1	除名(副会長が会から彼を—する)
NがNとNをVNする(NがNをNとVNする)			
ヲ格がN要素の所有主体を表す場合がある	3	1	命名(母親が彼を次郎と—する)
N要素が格成分の意味とは重ならない	3	1	折衝(社員が経営側と賃金問題を—する)
VNが「NニVスル」の関係	4	1	折半(彼が弟と利益を—する)
4項動詞		4	
NがNをNからNIにVNする(ヲ格とN要素が同種)	4	4	拡幅(市が道幅を片側2車線から3車線に—する)
計		1,373	

[注]「項数」は「意味的な項の数」をさす。

VN の特徴として従来よく指摘されてきたのは、VN 内部の名詞要素（以下「N 要素」と略記する）を具体的にするために、統語的な項として新たに名詞をとるということだが、それがよく当てはまるのは、統語的に 1 項動詞で意味的に 2 項動詞の VN と、統語的に 2 項動詞で意味的に 2 項動詞の VN との間である。この場合、統語的に 2 項の動詞として、ヲ格やニ格に詳しい事柄を示す名詞を表示することで、1 項動詞よりも具体的な状況をあらわすことが可能になる。たとえば、「センターが捕球する」でなく「センターがフライを捕球する」、「彼女が入院する」でなく「彼女が大学病院に入院する」といったように。一方、統語的に 2 項動詞、意味的に 3 項動詞の場合は、ガ格に加えてニ格にも名詞が示されることによって、1 項動詞の場合よりも具体的な状況をあらわすことが可能になる、つまり「男は公園の脇に駐車した」、「銀行が我が社に融資してくれる」などの例が考えられ、「車」「資」などを具体化せずとも情報的に十分である場合が多い。ただし、全体的には、このような傾向が見られるにしても、個別の語については、2 項動詞（意味的に 3 項動詞）として通常扱われる語が、実際には 3 項動詞（意味的に 3 項動詞）としても使われうるというケースもある。「課税」を例にすると、この語は、動詞の自他をのせている 10 数種の国語辞典で自動詞として扱われており、森田（1992）でも、「土地に課税する」はいえども、「相続税を課税する」とはいえないとされていた。しかし、朝日新聞の「聞蔵Ⅱ」を用いて、2000 年から 2012 年の記事を確認すると、ヲ格をとる例が 4,326 例中、1,139 例（26.3%）見られる。また、

○決算期で区切って法人税を課税することになっている。（山浦健・高橋恵美子・岩上義信（2009）『法人税・消費税の処理と節税法がわかる本』かんき出版）

のように、税の専門家の文章で用いられる場合も少なくない。このように、統語的に 2 項で十分であると考えられても、場合によっては、3 項動詞として使われる VN もあるので、一語一語詳細に観察する必要がある。

2.2.2 0 項動詞

自然現象の発生を示す「停電」のような VN は、ガ格に相当する「電」を内に含んでおり、統語的にガ格なしの文が作られることが、森山（1988）、石綿（1999）、日本語記述文法学会（2009）で指摘されている。ガ格なしで用いられることの多い VN としては、ほかに「鎮火」

「開門」「閉門」「閉廷」などがある。これらは、

○一時火が上がったが、間もなく鎮火した。

○505人が受験した札幌市白石区の札幌東高では、午後8時に開門すると受験生たちは学習塾の講師らに「頑張って」と励まされながら教室に入った。

のように用いられる（○の後に示す用例のうち、出典が書いていないものは、注23で説明した「朝日」からの用例）。これらは、文脈上わざわざガ格を示す必要がない場合は、VNのみで使用されるが、「火災が鎮火した」「水門が開門する」のように、ガ格を示すことも可能であり、その場合は1項動詞となり、一般的な動詞と違いがないと見ることもできる。ただし、上述のように、ガ格なしで使われる用法もあり、このことは、注意すべき点として記述しておかなければならない。

2.2.3 1項動詞

表1で項数が1となっている「ガ格が物を、N要素が動作をあらわす場合がある」「ガ格がN要素の所有主体をあらわす場合がある」「ガ格がN要素の存在場所をあらわす場合がある」について、「場合がある」としてあるのは、これらは「図書館の工事が完工する」「データ量が増量する」「川の水が増水する」のように、「開館」などと同様「ガ格とN要素が同種」のパターンで用いることが可能なためである。したがって、同種の名詞を統語的にとるVNのうち、動作や所有主体など、やや異なるタイプの名詞をとるVNを、特に注意が必要なものとして、別枠を設けたわけである。これらをガ格とN要素とが意味的に関係のあるグループとして一括すると、計104例になる。

残る445例では、ガ格とN要素とが別の種類をあらわす。「読書」「落馬」「就役」などの場合、1項動詞として用いるのが慣用的で、「単行本を読書する」「乗っていた馬から落馬する」「軍艦が任務に就役する」のように、あえて名詞を明示しようとする余剰性が感じられて、不適格な表現となる。445例の多くは、このような性質のVNだが、やや異なる理由から、名詞が明示されないものもある。「出家」が「家を出て仏門に入ること」のように、単なる「家を出る」以上の意味をもつと同様のことが、「応召」「成仏」「売春」「入幕」に見られ、これらはガ格しかとらない。また、

来日 訪日 入洛 帰洛 訪欧 滞欧 帰洛 上洛 来朝 離日 上京 出京

のように、場所が一か所に限定されている場合は、「日本」や「東京」などを項としてとることはない。なお、「宣教」も「教」が宗教一般ではなくキリスト教に限定されているため、「だれガーする」の形式をとり、ヲ格は表示されない。このような VN そのものの意味が要因となって、名詞が現れないケースのほか、VN の運用段階において、

- ・文脈上、N 要素と同種の名詞が VN を含む一文よりも先に出現する

という場合も、ガ格しか統語的に表示されない。たとえば、

○静岡県長泉町の県立静岡がんセンター（山口建総長，313 床）。（中略）外来患者や家族，面会者も利用でき，現在，1 日に約 50 人が来館している。

の「来館」のような場合、「県立静岡がんセンター」が「来館」の「館」と同種のをさすが、「来館」を使用する段階では、繰り返して書く必要はないと見なされ「がんセンターに来館する」のような形は出現しにくい。類例に「退庁」「退室」「脱党」「復学」「来会」「来校」「来社」など、出入をあらわす VN がある。ただし、新聞のような文字数を抑制する必要のある分野では、以上のような傾向が見られるものの、

○当館に来館して，資料の閲覧や複写などのサービスを受けることができます。

（国立国会図書館 HP。2013. 4. 1）

のように、新聞以外の資料では名詞を明記する場合も見られる。なお、「{電柱に／民家に}落雷し」の「落雷」のようにガ格が現れず、ニ格のみを伴って用いられることが多いもの、それから「台所から出火して」の「出火」のようにカヲ格のみを伴って用いられることが多いものなども、1 項動詞として扱った。

2.2.4 2 項動詞

2 項動詞では、「ゴロを捕球する」の「捕球」のように、N 要素と同種の名詞をヲ格にとる

タイプがもっとも多く、700 例中 229 例見られる。「手紙を開封する」「選手を評価する」における「手紙の封」「選手の価値」のように、統語的な項が N 要素の所有主体として解釈できるものが見られる点は、1 項動詞の場合と同様である。それから「上腕部を止血する」「庭先を除雪する」の「止血」「除雪」など、動作を行う場所がヲ格で表される場合が 10 例見られる²⁴。これらは、ヲ格と N 要素との関係が比較的明瞭なケースだが、N 要素とヲ格の意味に、やや開きがある場合が 13 例ある。つまり「割愛」「稽古」「上梓」「折檻」などは、N 要素と動詞要素（以下「V 要素」と略記する）との関係について、「～の意から」のような語源的説明が施されることがあり、N 要素と VN の要求するヲ格名詞とは意味的に離れる。たとえば、「空手の型を稽古する」の場合、「空手の型」と「稽古」の「昔のこと（を考える）」の意とでは、意味的な開きが大きい。

以上の例は、VN 内部の N 要素と V 要素との関係、それから VN と統語的な項との関係がいずれもヲ格の関係にあるものだが、項と VN との関係が N 要素と V 要素との関係と重ならない場合がある。たとえば、「収監」は「犯罪者を収監する」のように用いられるが、「犯罪者を監獄に入れる」と解釈され、「犯罪者」と「収監」はヲ格、「収」と「監」は二格の関係で結ばれる。類例は「投獄」「入手」「処刑」「揚陸」などである。

「が・を」の次に多いのが「が・に」の文型のもので、N 要素と同種のもので統語的な項になる場合と、N 要素と項とが V 要素とは別の格関係にあるものが大半をしめる。前者は「寄港」が「港に寄る」と解釈できるように、N 要素と V 要素の関係が二格で、「函館港に寄港する」のように、「寄港」と項との関係も二格となり共通する。次に、別の格関係について、「球を投げる」と解釈される「投球」を例にとると、N 要素と V 要素の関係はヲ格であるのに対して、「一塁に送球する」のように、「送球」と項との関係は二格となり、格関係が異なる。最後にデ格について記しておく。通常、デ格は必須的ではない要素として扱われるが、「被災」「被爆」においては、「だれガーする」のみの形では一般的に用いられず、

○東日本大震災で被災した母子家庭の状況（東京新聞。2013. 4. 3）

や「親が広島で被爆した」のように、デ格を伴うのが一般的であることから、2 項動詞に含めることにした。

²⁴ 「玄関前の雪を除雪する」と「玄関を除雪する」のように、対象物も場所もヲ格にとることのできるサ変語幹については、松本（1997）が詳しいので参照されたい。

2.2.5 3項動詞と4項動詞

3項動詞では、120例中75例が「が・に・を」の文型をとり、ヲ格がN要素に対して同種の名詞になる。「が・に・を」あるいは変化をあらわす動詞に見られる「が・を・に」の文型において、ニ格がN要素と同種であるケースは少数に限られ、「入庫」「換金」など、両パターンをあわせても11例しか見られない。なお、通常「私が友人と食費を折半した」のように3項動詞として用いられる「折半」の場合、

○開発費は5年間で500億円を見込み、官民で折半。

のように、デ格に主体をあらわす複数性の名詞が表示されることによって、ガ格が出現しない用法も有している。

4項動詞では、「拡幅」や「増量」で「だれがなにヲなにカラなにニーする」の形をとり、カラ格に、広げたり増やしたりする前の数値、ニ格にその後の数値が示される。4項動詞については、日本語記述文法研究会(2009, p. 20)で「起点と着点を同時にあらわすことは少なく」て、「が・から・を」か「が・に・を」で用いることが多いこと(「運ぶ」など対象を移動する動詞について)、「変化の前後を同時にあらわすことは少なく」て、「が・を・に」で用いることが多いこと(「変える」など対象を変化させる動詞について)、などが指摘されており、本節では、このような指摘を参考にし、3項動詞としたものが多いので、4項動詞としては、ごく限られたものを記載した。「拡幅」「増量」などの場合、「道を拡幅する」「つぶあんを増量する」のような2項動詞としての使用は問題ないが、「道を5メートルに拡幅する」「つぶあんを30グラムに増量する」のような、結果のみを示す3項動詞としての使い方では、比較される元の数値が示されず、やや情報不足の感がある。カラ格で元の数値を示すことによって、自然な表現となるため、これらのVNについては、3項動詞でなく4項動詞としての用法をもつものとして認定することにした。

2.3 格助詞の増減

2.3.1 格助詞の増加

「読書」や「解禁」は、それぞれ1項動詞、2項動詞のみの用法をもつVNだが、たとえば「服薬」は「患者が服薬する」のように1項動詞として使う一方で、「患者が漢方薬を服

葉する」のように、2項動詞として用いられることもある。表1からは、同様の性質をもつVNに、どのようなものがあるのかをうかがうことができないので、複数の文型をもつVNの種類と性質をここで検討する。なお、0項動詞→1項動詞、2項動詞→4項動詞の場合については、先述したとおりなので、ここでは説明を省く。

まず「服薬」のように、N要素と同種の名詞が追加されるタイプのVNには、次のようなものがあげられる。

ヲ格に表示 (112例) : 課税 返品 投資 派兵 黙秘 休場

ニ格に表示 (38例) : 在校 出廷 着座 入室 来場 登場 出勤 着任

カラ(ヲ)格に表示 (17例) : 下車 退場 退部 離岸 離陸

ト格に表示 (1例) : 闘病

次に、「ラジオ局 {が/を} 開局する」のように、自他両方の用法があるものであるが、同様のVNは「開館」「脱色」「閉館」「着色」など38例ある²⁵。自動詞用法では、N要素と同種の名詞がガ格にくるが、他動詞用法では、動作を行う人や組織がガ格にくる。

「海外に派兵する」に対する「海外に部隊を派兵する」では、N要素の具体化のために項が増え、「開館」では、図書館などが人の手によって開かれることを示すために他動詞となる、というように、これらの現象は比較的さまざまなVNについて見られる傾向である。したがって、前者は文中にN要素と同種の名詞が使われているかどうか、後者はヲ格を伴う使用が見られるかどうか、といったように、着目すべき点がしぼりやすい。これに対して、たとえば「焼香」は、「だれガーする」の文型で用いられる一方、「慰霊碑に焼香する」のように、行為の向かう対象がニ格で示されることもあるが、この場合のニ格のように、VN内部のN要素とは性質が異なるようなものについては、VN自体の意味から、そのような用法があるのかどうかを判断しにくい場合がある。辞書に自動詞とあればガ格をとること、他動詞とあればガ格とヲ格をとることなどが容易に理解されるが、ニ格あるいはカラ格については、自他の表示のみでは適切な語の運用にたどりつけない。

それゆえ、以下では、用例調査をもとにして、特にニ格に着目し、VNのとり項数ごとに

²⁵ 「開局」のように、自他両用の場合、自動詞よりも他動詞の用法において、一つ項数が増えているととらえる。発生的に見て、自動詞用法が早いのか、それとも他動詞用法が早いのかという点については、ここでの考察の対象外である。

記述する。まず、1項動詞→2項動詞の場合を以下に見る。

【NがVNする→NがNにVNする】

「給水」「配管」「放水」などは、業者や消防車などが行う仕事として、ガ格のみで用いられることもあるが、場所をニ格で示すことも可能である。「不安感が市場に台頭し」などという場合の「台頭」もここに含めた。「配車」「配膳」「排水」「貯金」にも、「営業所が配車する」のような1項動詞としての用法のほかに、「営業所が客の自宅に配車する」のように、ニ格をとる用法が備わるが、これらの場合は、さらにN要素と同種の名詞をヲ格にとる用法もある。つまり、「営業所が客の自宅にタクシーを配車する」のような形式をとる。

行為の向かう対象がニ格で示される例には、先に見た「焼香」や「合掌」「挙手」などがあり、「遺影に合掌する」「賛成(反対)に挙手する」のように用いられる。

ニ格が人のケースには、「授乳」「授業」「投球」があり、「母親が授乳する」「教師が授業する」「投手が投球する」に対する「乳児に授乳する」「児童に授業する」「打者に投球する」のような用法が見られる。これらは、乳児、児童(または生徒・学生)、打者に対する行為であることがVNの意味から明らかだが、相手を明確に示すため、あるいはVN自体に相手についての情報が含まれることに対する、話し手の意識の希薄化によってニ格が出現する。

ニ格に結果内容が表示されるものとしては、「改姓」「改名」「変心」「変節」「変身」「分村」などがあげられる。「山田が改姓する」のように、1項動詞としての用法のほか「山田が佐藤に改姓する」のように、2項動詞としても用いられる。

同様に、1項動詞と2項動詞の用法をもち、さらにカラ格もとやすいVNがある。「ガンが転移する」の「転移」は、1項動詞として用いられるほか、「ガンが肝臓に転移する」「ガンが胃から肝臓に転移する」のように、3項動詞としての使用も一般的である。「転業」「転勤」「転校」「転職」「分派」「転科」「転任」なども同様に、たとえば「山田が転職する」「山田がSEに転職する」「山田が営業からSEに転職する」のように、複数の文型で用いられる。前述の「改姓」「改名」は、「山田が改姓する」など、ガ格に「変える」前の状態が示されるので、カラ格は不要だが、「転移」「転職」などでは、そのような点が見られないので、カラ格によって表示することになる。

1項動詞が2項動詞(あるいは3項動詞)としても用いられるケースについては、以上のとおりである。VNのあらかず動作そのものに関心がある場合には、1項動詞として十分用いられるが(名詞要素を内部に含むので、「走る」「回転(する)」などより、単独でも情報量

が多い), 着点や結果など, 動作に付随する事柄に注意がむく際は, 2 項動詞としての使用が行われる。さらに, 移動の起点も重要な情報である場合は, カラ格も表示される。

次に, 2 項動詞としても 3 項動詞としても使用可能な VN を観察する。

【N が N を VN する→N が N を N に VN する】

この文型をとるのは, 変化をあらわす VN であり, たとえば「改装」は「店舗を改装する」のように 2 項で用いることも可能であるが, どのように改装するのかを二格で「店舗を古民家風に改装する」のように示すこともできる。同様の文型をとりうるのは「改作」「改訳」「成型」「翻案」「整理」「分類」「移調」などである。ヲ格に人をあらわす名詞がくるものとしては, 「減刑」「降格」などがあり, 「吉岡を降格する→吉岡を係長に降格する」のように用いられる。これらに対して, 3 項動詞になった場合に, 二格ではなくカラ格をとる VN としては「出金」があるが, 用法面で注意がいる。つまり, 国語辞典に記載される「お金を払う」という意味の場合, 「経費として 10 万円を出金する」のように用いられるが, 実例を見ると, 「口座から 30 万円を出金する」のように, 3 項動詞としては, 「引き出す」という意味で用いられ, 両者において「出金」の意味と文型が異なっている。

格助詞の増加に関して, 特に二格に注目して記述した。従来の VN の研究では, たとえば「入院」は, 「伯母が入院する」という言い方のほかに, 「伯母が大学病院に入院する」のように名詞を追加した言い方も可能である, というように, VN と意味的に関係のある名詞の性質に議論がかたよりすぎてきた。しかし, ここで見たように, N 要素と直接の関係をもたない名詞についても, VN ごとに用法が異なり, 詳細な記述が欠かせない。辞書にある自他の表示からは, 二格の有無については, 何も情報が得られないことに鑑みれば, なおさらのことである。以上を考慮するならば, やや個別の動詞グループの記述が多くなったきらいはあるものの, ここでのような観点からの記述が大切なことが理解されるであろう。

2.3.2 格助詞の減少

「握手」「絶交」などの VN は, 通常「が・と」の文型で用いられる 2 項動詞であるが, ガ格に「二人が握手した」「彼と彼女は絶交する」のように, 複数をあらわす名詞がくる場合には, ガ格のみの 1 項動詞として用いられる。同様の例としては, 「交雑」「交尾」「絶縁」「断交」「入籍」「合体」「挙式」「決闘」「交戦」「復縁」「離婚」「結婚」などがある。このような性質をもつ語については, 仁田 (1986) が主に和語の動詞を中心として指摘している。

もう一つ、格助詞の減少として検討が必要なのが、N要素が役職・任務などをあらわすVNの場合である。たとえば、「就任」では、「吉田が総裁に就任する」であれば、2項動詞であり、N要素とニ格とが意味的に類似する。ところが「就任」には、次のような用法も見られる。

○日銀は三、四日に二日間の日程で、金融政策決定会合を開く。黒田東彦総裁が三月に就任し、……（東京新聞。2013.4.3）

○ユーロ危機の震源地の1つとなったイタリアだが、11年に就任したモンティ首相の緊急財政で一時は落ち着きを取り戻した……（『ニューズウィーク』28-14）

この場合、ニ格で役職を示すのではなく、人の名前とともにガ格に表示されることになり1項動詞となる。「就任」は役職につく場合だが、やめる場合にも「小池氏が環境相を辞任する→小池環境相が辞任する」のような両方の言い方が可能である。「就任」「辞任」と同様の用法は、「帰任」「辞職」「失職」「退職」「留任」「着任」「赴任」「即位」「退位」などにも見られる。「就く」や「やめる」など、類義の和語動詞の場合、「吉田が会長に就いた」「山本が議員をやめる」とはいえるが、「吉田会長が就いた」「山本議員がやめた」だと、通常ニ格やヲ格で示される「会長」「議員」の部分がガ格に含まれていて、不自然な表現だと判断される。したがって、「吉田が会長に就任する」の形式は、和語動詞などと共通する用法であるが、「吉田会長が就任する」の形式は、VNに特徴的な形だと認められる。

このような言い方がVNにおいて見られることについて、順に考えると、①文の主語を書き手（話し手）が考える。その際、人の名前だけでなく役職まで含めたほうが情報量が多いという判断が働くこと、②「人名＋役職」形式の複合語は、ごく一般的であること、③「人名＋役職」の構成の主語に対する述語を考える。その際、「吉田会長が就く」はニ格が不足するので使用しにくく、「吉田会長が会長に就く」では、「会長」について重複感が大きくなり、どちらも不適切であること、④「吉田会長が就任する」であれば、「就任」に「任に就く」という関係が認められ、統語的にニ格をとらなければならないという意識が薄くなること、などの要因が働いていると推察される。「就任(する)」という動詞の意味から考えれば、ガ格とニ格をとることは予測されるが、ガ格の内部にニ格相当の名詞を含む用法は、やや変則的であり、上述のVNグループの有する一特徴となっている。たとえば「移籍」「入学」など、ほかのタイプのVNでは、「山田が巨人に移籍する」「吉田が大学に入学する」とはいえ

でも、「山田巨人が移籍する」「吉田大学が入学する」などの文は作り得ない。なお、「即位」「退位」の場合、「昭和天皇が即位する」「エリザベス女王が退位する」など、「人名+役職」の形でガ格となる用法が一般的で、人名部分と役職の部分分離した形で使用しにくいのか、「が・に」「が・から（を）」の文型で用いられることがまれである。また、これらに加えて、他者の地位を変更する意味をもつ「除名」では、「佐藤委員が古田さんを会から除名した」のように 3 項動詞として用いられるが、「自民党が西岡議員を除名した」のように、組織がガ格にたつ場合には、起点が明らかであるため、「自民党が西岡議員を自民党から除名した」の文型はとらず、2 項動詞として用いられる。

2.4 格助詞の交替

2.4.1 同一の名詞に対して複数の格助詞を使用しうるケース

ここでは、「空港 {から/を} 離陸する」の「離陸」のように、一つの格成分が複数の格助詞で表示されうるケースについて、ここでどのような種類があるのかを確認した上で、2.4.2 で主要な格助詞と交替しうるデ格について、詳しく検討する。

「離陸」のようにヲ格とカラ格で表示しうるものとしては、次のような VN がある。

離岸 離職 離任 離党 離陸 退院 退会 退席 脱会 出国 出所 降板

離脱などの動作をあらわす V 要素と場所や組織をあらわす N 要素とから構成される VN に見られる現象であり、このような VN に関しては、和語動詞の「離れる」がヲ格をとるにしても自動詞として扱われるのが一般的であると同様、自動詞として国語辞典などでは処理される。それから、「会う」などと同様に、ニ格とト格の両方を取りうる語としては「対面」「比肩」「反目」「協力」があり、さらに、ニ格とカラ格の交替を許す「借金」「取材」のような語も、わずかに存在する。

以上は、格助詞の交替があっても、自他の区別には関係が薄いケースであったが、「関係者 {に/を} 取材する」の「取材」のように、ニ格もヲ格もとりうる VN の場合は、ニ格の場合は自動詞、ヲ格の場合は他動詞として処理する必要があるというように、格助詞の交替と自他の区別が密接に関係する。2003 年版の「朝日」で見ると「～に取材する」が 45 例で、「～を取材する」が 220 例出現し、他動詞用法が優勢である。資料中、このようにニ格とヲ格の交替が見られたものについて、「聞蔵Ⅱ」で 2000 年～2012 年の記事を確認すると、次

のような結果が得られた。カッコ内の数字のうち、左がニ格の用例数で右がヲ格の用例数である。

加勢 (167/8) 欠場 (19/1,286) 助勢 (3/2) 施錠 (131/336) 着工 (407/360) 落第 (35/5) 罹患 (125/3) 留意 (411/26) 合格 (8,702/80) 放火 (3,142/144) 欠席 (460/1,805) 用心 (51/21) 協力 (22,614/71) 着手 (12,222/54) 注意 (6,626/1,505) 注目 (11,482/419) 調印 (4,912/186) 負傷 (41/1,765)

自動詞として扱われることの多い「欠場」「欠席」「負傷」などについて、「試合を欠場する」「会議を欠席する」「背中を負傷する」のように、ヲ格の例が多い点は注目される。この場合のヲ格を、広い意味で場所をあらわす名詞にとらえ、VN を自動詞として扱うのか、それとも対象などをあらわすヲ格と考え、VN を他動詞として扱うのか、判断にゆれが生じる部分であろう²⁶。

2.4.2 主要な格助詞と交替可能なダ格について

前述の VN の場合、複数の格助詞をとることは確かだが、「{に/を} 取材する」であっても「{を/から} 離陸する」であっても、「を」「に」「から」など、主要な格助詞間での交替であるため、注意されやすい。一方、ここで検討するダ格の場合、「ペンで書く」(手段)、「風邪で学校を休む」(原因)など、文の形成において副次的な要素を示すのに用いられることが多く、動詞が必要とする格助詞の記述においては除外されることもある。しかし、「紅白戦 {に/で} 登板する」のような場合、ニ格でもダ格でもほぼ同じ事柄をあらわしており、このようなダ格については、動詞の文型記述において、積極的にとりあげる必要がある。

資料中、もっとも多いのは、ニ格と交替しうるケースで、いくつかの種類にわけられる。まず、ニ格が移動の着点をあらわすと見られる VN としては「鎮座」「登壇」「登板」「入湯」「入浴」「奉公」「籠城」「服役」がある。これらは、「共同温泉 {に/で} 入浴する」「自室

²⁶ 多くの国語辞典で、「欠席」「負傷」は自動詞として扱われるが、『新明解国語辞典 第7版』では、「欠席」に「なにヲーする」「なにニーする」の文型で用いられるとの情報をそえて自他両用とし、「負傷」は他動詞としてのみ処理する。同辞典の「怪我」の項目を見ると、他動詞として扱われており、「指を一した」が用例にあがっている。このことから、「背中を負傷する」のような例についても、同様に他動詞の用法として扱われるものと推察される。なお、「欠場」については、同辞典でも自動詞とされる。

{に／で} 籠城する」のように用いられる。ニ格だと移動に着目、デ格だとその場での活動に着目した表現という違いが感じられるが、VN の直前の格助詞以外にも目をむけると、次のような違いも観察される。すなわち、ニ格で着点を示す場合、「共同温泉に無料で入浴する」「お屋敷に住み込みで奉公する」「粉飾決算の罪で福岡刑務所に服役する」のように、デ格を方式や原因など、ほかの意味的な役割を示すのに使用できるが、ニ格をデ格に交替した場合、「共同温泉で無料で入浴する」のようにデ格が連続してしまい、このような形は、実際には出現しにくい。例として「朝日」(1999～2003) で「入浴」について見ると、

- ・「温泉に入浴する」の類：28 例
- ・「温泉で入浴する」の類：34 例
- ・「温泉に水着で入浴する」の類：2 例

となる。「温泉で入浴する」の類の場合、それ以外のデ格やほかの格助詞が伴わないのが普通である。ただし、「登板」は「紅白戦に中継ぎで登板する」のほかに、「WBC で 2 試合に登板する」のような形式もとることがある。神尾 (1980, p. 56) は「シカゴで友人の家に泊った」などの例をあげて、「「で」をとる句はより広い場所を表わし、「に」をとる句は「で」によって示された場所に含まれるより限定された場所を表わしている」と指摘しているが、「WBC (で)」と「2 試合 (に)」も、「シカゴ」や「友人の家」と比べてやや抽象的な語ではあるものの、このような「で」と「に」の違いを反映したものととらえられる。

次に「控訴審に勝訴する」などにおけるニ格を対象としてデ格との交替を観察する。つまり、「控訴審で勝訴する」ということも可能だが、このような用法をもつ VN に「敗訴」「落選」「当選」「合格」「落第」「入賞」「入選」がある。次のような用例が見られる。

- 森口祐子プロにあこがれ、88 年に 7 度目の挑戦でプロテストに合格した。
- 一発勝負の昇格テストで合格したんだろ? (『週刊少年ジャンプ』46-17)

これらの VN の場合、上述の「入浴」などにおける着点のような、一般的に認められている意味役割が想定しにくい。仁田 (1986) を収録する仁田 (2010, pp. 321-322) では、「勝つ」(彼は勝負に勝った)、「落ちる」(彼は試験に落ちた)などを例に、「このニ格の示す広漠とした意味的關係を仮に《領域》と呼び、「動きや状態がそれとの関連で成り立つ領域を示

した項」と規定しているが、本節では、これに従い、「プロテストに合格する」などにおけるニ格を「領域」として分類することとする。このようなニ格の場合、「～に入浴する」などのニ格と異なり、「ゆく先性」(仁田(2010, p. 317))が希薄であり、デ格の場合と比較して、あまりニュアンスの差が感じられなくなる。

これらのVNの場合、たとえば「控訴審 {に／で} 勝訴する」「コンクール {に／で} 入賞する」「展覧会 {に／で} 入選する」などにおいては、置きかえが可能であるが、「控訴審で東京都に勝訴する」「コンクールで2位に入賞する」「展覧会で佳作に入選する」のように、ニ格で相手や順位・賞の内容を示す場合には、それぞれ後の名詞に対して、デ格は使用しにくく、ニ格の連続をさけるためには、前の名詞にデ格を用いざるをえないという制限が見られる。たとえば、「入賞する」について、「朝日」(1999～2003)で確認すると、

- ・「コンペに入賞する」の類：59例
- ・「コンペで入賞する」の類：116例
- ・「コンペで2位に入賞する」の類：144例

のようになる。「○位で入賞する」の形が3例見られるが、「○位に入賞する」のほうが圧倒的に多数である。「コンペで史上最年少で2位に入賞する」のような形も2例見られたが、例外的である。重要なのは、「コンペに2位で入賞する」の文型では、用いられていない点である。また、「コンペに入賞する」の類の場合は、ほかの名詞は出現しにくい。前述の、ニ格に着点がきてデ格と交替可能なVNの場合とは、これらの点で逆の傾向が見られ、ニ格に着点をとるVNと領域をとるVNとを区別して記述する必要性が認められる。

ニ格に動作をあらわす語や表現がきて、目的などを示すケースもいくつかある。「新薬の開発 {に／で} 協力する」の「協力」のような場合で、「尽力」「成功」「合意」などに同様の用法が見られる。これらの場合は、V要素とN要素との関係は「NヲVスル」(「合意」は「NガVスル」と見なす)である。

○長年の仇敵、北部同盟の元関係者との和解もタリバンが麻薬密売で成功した要因の1つだ。(『ニューズウィーク』28-25)

○フロリダ州のクリニックがMLBの調査に全面的に協力することで合意。

(『ニューズウィーク』28-23)

上記の例は、それぞれ VN の直前のデ格をニ格に変更することが可能である。「アメリカ {に／と} 協力する」のように、人・組織をあらわす名詞がニ格でもト格でも示しうるが、「アメリカと捜査 {に／で} 協力する」あるいは「アメリカに捜査で協力する」などの形をとることで、ニ格の連続、デ格の連続をさけることが可能である。「合意」にも、「アメリカがロシアと軍縮 {に／で} 合意する」のような形式が見られる。「尽力」「成功」では、格助詞を用いて文中に複数の名詞を示すことが比較的少なく、ニ格・デ格の配列の問題は生じにくいようである。

以上、ニ格とデ格における格助詞の交替を見てきたが、デ格とほかの格助詞との交替もわずかながら見られる。まず、ヲ格との交替としては、「手術 {を／で} 執刀する」「森林 {を／で} 散策する」「耳鼻科 {を／で} 受診する」などがある。『岩波国語辞典 第7版』の「第七版刊行に際して」の一文には、「内科で受診する」と使われていた「受診する」が、最近では「内科を受診する」でも多く使われることから、自他両用に変更したとある。指摘のとおり、ヲ格をとることが増えているが、

○当クリニックで検診を受診していただき、誠にありがとうございました。

(ふたむら内科クリニック HP。2013年7月7日)

のように、ヲ格に診察(内容)に関する表現がくる場合には、病院・診療科はデ格で表示され、格助詞に役割分担が見られる。「町を {着物／徒歩／自転車} で散策する」の場合も、「町で着物で散策する」のような言い方はとりづらく、「町」はヲ格表示するほうが自然となる。

最後に、カラ格とデ格の交替としては、「遺跡 {から／で} 人骨が出土した」における「出土」がある。また、「発祥」は「中国文明発祥の地」のように、複合語の後部分要素として用いることが多いが、「コメの先物取引が大阪の堂島で発祥した」のような使い方において、デ格のみならず、カラ格やニ格が出現することがあり、格助詞の使い方が安定していない。

以上、ここでは、デ格がニ格、ヲ格、カラ格と交替可能な場合のあること、特に数の多いニ格との交替においては、VN の種類により、デ格の連続をさける傾向とニ格の連続をさける傾向の二つが見られることが確認できた。このような交替は「試合 {に／で} 勝つ」のように、和語動詞などにも共通して見られる統語的な現象であるが、その一方で、上記の「入

浴」「合格」などの場合、V要素とN要素との間に想定される格関係は二格であるにもかかわらず、文中においてデ格が出現するということは、想定とのずれが生じることを意味し、このような点は一般の和語動詞などには見られないVN特有の特徴だといえる。したがって、たとえば「入浴」について、語彙的に二格の関係を内部に含むVNであるとした上で、統語的には、二格のほかにデ格もとりうるということを辞書に明記する必要があるというように、VNに関しては、語構造と格助詞の使われ方を両にらみした分析が欠かせない。

2.5 おわりに

以上、VN（名詞要素と動詞要素から構成されるサ変動詞語幹の二字漢語）における格の表現について検討してきた。これまでに考察したことを簡単にまとめると、以下のようになる。

- ア サ変動詞語幹の二字漢語は、「する」をつけて、動詞として用いられるため、その文型の記述が必要である。その際、通常の動詞と異なり、内部に名詞要素を含むサ変語幹については、統語的な項数と意味的な項数とがずれる場合がある点に留意しなければならない。
- イ 名詞要素と同種の名詞を統語的にとるかとらないかに関する判断が、分析者の主観に左右されやすい面があるので、この問題については、実例にもとづく分析が必要である。
- ウ 同一のサ変語幹であっても、用法によって格助詞の数が異なってくる場合がある。N要素と同種の名詞が統語的に表示されるケースは、そのうちの一部にすぎず、ほかのケースについても、丹念に記述されなければならない。
- エ 同一の名詞が複数の格助詞で表示可能な場合がある。辞書には、このような可能性をもつサ変語幹について、その情報を登録する必要がある。また、二格、ヲ格、カラ格と交替可能なデ格については、副次的な格として除外するのではなく、もれなく記述することが求められる。

文型や格助詞など、従来の研究で扱いが不十分だった問題について、紙幅を費やさざるをえなかったため、「{大黒ふ頭／佐世保}に接岸する」「{公共工事／土間／3棟}を施工する」など、名詞要素と意味的に対応する名詞において、どの程度の意味的なずれが許容されるのかといった点についての考察は課題として残っている。

3. 動作性複合名詞と動詞との連合における重複表現について

3.1 はじめに

「馬から落馬する」のような表現は、中世以来「重言（じゅうごん／じゅうげん）」あるいは「重ね言葉」などと呼ばれ、避けるべきものとされてきた。現代語にも、これに類する表現は見られる。たとえば二字漢語の「得票」は、「選挙で票を獲得すること。得た票」（『岩波国語辞典 第6版』（以下『岩波』））を意味する。「100万票近い得票」はコト（行為）をあらわす用法で、「得票を分析した」という場合はモノ（得た票）をあらわす用法である。これに対し、次のように、動詞の「得る」が「得票」を補語にとる言い方が行われることがある。

○治安維持の最優先を主張する右翼政党「法治国家的攻勢」が、初登場で約20%の得票を得た。（朝日新聞。2002. 1. 9）

この「得票を得た」は、次のように「票を得た」に置きかえ可能で、同紙でも上例と同じような文脈で、「票を得た」が用いられるのは次の11月11日の記事に見るとおりである。

○初登場で約20%の票を得た。

○全選挙区に候補者を立てた共産党は8%の票を得たが、獲得議席はゼロ。

（朝日新聞。2003. 11. 11）

これに対して、「得票を分析した」であれば「得た票（の内訳）を分析した」の意をあらわし、「得る」と「分析する」は異なる動作を示している。しかし「得票を得た」では「得た票を得た」といっていることになり、同語反復が生じている。ここでは、このような言い方を重複表現として扱うこととする。

上述の現象が生じる原因に関し、野村（1988, p. 45）に簡潔な指摘がある。野村は「現代語では、二字漢語が複合語であるという語構成意識が、ほとんどうすれてしまった」と述べ、意味の上からの証拠として「犯罪を犯す」「旅行に行く」「従来から」などをあげている。つまり、「犯罪」は「罪を犯す」ことであり、構文上に「犯す」を再び配するのは同語反復であって、本来的に奇妙なことであるが、そのような語構成意識が一般には喚

起されなくなり、「犯罪」が「罪」と同様に、単純な事物概念をあらわす語と認識されるようになったがために、「犯罪を犯す」という言い方が普通になされるようになった、ということである²⁷。野村の指摘は、本節の筆者も支持するが、野村（1988）は二字漢語全般についての論考であり、重複表現に関してこれ以上の言及はない。それゆえ、本節では野村の考え方をもとにし、どのような二字漢語（動作性複合名詞）に重複が見られるのか、また重複に伴う統語形式に、いかなるものがあるのかなどを考察する。なお、「山盛りに盛る」（池澤夏樹（2003）『静かな大地』朝日新聞社）のような「名詞（名詞＋和語動詞連用形）＋に＋動詞」の型でも同じ動詞の繰り返しが見られるが、本節でこの型は直接の考察対象としない²⁸。

3.2 資料と考察対象

本節では、主な資料として、99～03年版の朝日新聞CD-ROMと03年版の日本経済新聞CD-ROMを使用した。新聞記事は、コラムなど一部の例外を除けば、限られたスペースの中に、できる限り多くの情報を提供する目的にそって書かれるのであって、言語要素が必要以上に用いられる重複表現は、その目的からして、排されてしかるべき形式である。また、仮に記事の書き手が重複表現を用いたとしても、編集段階において、記事が複数の人間によるチェックを受け、その表現に修正が施されるがために、最終的な紙面上に、重複があらわれる可能性は減少する。それゆえ、厳しいチェックを受けても、それでもなお紙面にあらわれた重複表現は、慣用的な使用に、わずかなりとも近づいていると言えるだろう。したがって、一般に浸透している、もしくは浸透しつつある重複表現を採集する本節の目的にはかなうものと思われる。

本節では、サ変動詞語幹となる動作性複合名詞（複合漢語）と、それを補語とする動詞との間に生じる重複を問題とする。したがって、「馬から落馬する」のような複合漢語が動詞（述語）となっている場合は、直接の対象としない。また、「犯罪」「被害」のような、動作性要素を内部に含んでいても、国語辞書などで、「サ変」もしくは「一する」といった記述をされない語は対象外とする。サ変動詞語幹については、北條（1973）の「サ変になり得る名詞（漢語）」に記載されている名詞を利用した。

²⁷ 『国語学辞典』（1955）の「重言」の項には、「被害を受ける」「民主化になる」などの例があげられており、「意義的消化の不十分な漢語や外国語などの使用をあえてしようとするところから起る」と説明されている。

²⁸ この型については、慶野（1972）で古典にあらわれる用例を中心に詳述されている。

さらに付け加えるならば、本節でいう重複表現とは、動詞補語に相当する複合名詞の構成要素である動作性の字音形態素の意味と動詞（述語）の意味との重複を指す。動作性複合名詞の構成要素と動詞との関係は、おおよそ以下のように分類される。

【語構成要素と動詞の関係】

- ア 得票を得る 同一漢字で、音読みと訓読みの関係にあるタイプ
- イ 遺言を残す 漢字は異なるが、訓を同じくするタイプ
- ウ 複製を作る 名詞内の動作性要素の訓が一般に使用されないタイプ
- エ 献金を出す 類義的關係にあるタイプ

ア～エのうち、アとイは典型的な重複表現といえるが、ウやエ、特にエになると表記や読みの同一性が希薄になり、重複とみる話者と、重複とみない話者とでゆれが生じてくる。ただし、個人によっては、イの「遺」よりもウの「製」の方が動詞（述語）の意味と直結しやすい可能性も残る。また、エを類義的關係としたのは、仮に「自民党にお金を献じた」といった場合に、動詞を「出した」に置きかえても同一事象をあらわしうるためであり、文体的意味、ニュアンスなどにおける差異は、ここでは捨象してとらえている。以上に述べてきたように、本節では、複合漢語の構成要素と和語動詞との間に見られる重複をとりあげるが、重複自体は、たとえば「リサイクルして使う」（朝日新聞夕刊。2000.6.10）のように、外来語と和語動詞との間にも生じるので、漢語特有ではないが、比較的多く観察される漢語を対象をしぼったまでのことである。

なお「リサイクル」は「再生利用」の意を持つので、「リサイクルして使う」では「使う」の意味を持つ動作性要素が連続して用いられていることになる。つまり、単純に「リサイクルする」と置きかえることが可能である。したがって、以下では「動作性複合名詞＋して＋動詞」の型を、動作性複合名詞と動詞（述語）とが格関係にあるタイプと同様に、重複表現が観察できる統語形式として扱うこととする。

3.3 重複の形式的特徴

3.3.1 統語的な型

動作性複合名詞と動詞との組み合わせによる重複表現には、管見の限りでは、次の四つの統語的な型が見られる。

- A型 「動作性複合名詞＋が＋動詞」の型
- B型 「動作性複合名詞＋を＋動詞」の型
- C型 「動作性複合名詞＋に＋動詞」の型
- D型 「動作性複合名詞＋して＋動詞」の型

以下に型ごとの具体例をあげる。なお、例は資料内にあらわれた実例のみであるが、動詞の活用は、基本形に統一して表示した。

【重複の型と語例】

- A型 決済・清算が完了する・済む，調整が整う，内定が決まる，返事が返る
- B型 記録を記す，献金を提供する・出す，建築を建てる・造る，作文を書く，錯覚を覚える，受注を受ける，食事を食べる，設備を設ける，定義を定める・決める，得点を得る・獲得する，得票を得る，複製を作る，布陣を敷く，返事を返す，編成を組む，遺言を残す，予感を感じる，預金を預かる・預ける
- C型 遠征に行く・出る，区分に分ける，成人に成る，専用を使う，旅行に行く
- D型 改造して造る・作る，共存して生きる・生息する，渡来してくる，飛来してくる，連動して動く

ここには、資料内に少なくとも、5例以上あらわれる形式のみをあげており（中黒が使用されている語は合計で5例以上），以下で上にあがっていない形式を例示する場合は、それ以下しか確認できなかったタイプとして、理解してほしい²⁹。たとえば、「負傷を負う」は、朝日新聞に2例、「負傷を負わせ」（朝日新聞朝刊社会面。1999.6.5）と「負傷を負ったり」（朝日新聞朝刊政治面。2001.6.10）という形であらわれたが、どちらも取材相手の発話（国会議員と警察官による）であり、例外としての性格が強い。

もっとも、以下で考察する語構成の面では、【重複の型と語例】にあげた「得票・布陣」などと「負傷」は、「V+N」構造（名詞（N）が動詞（V）と格関係にある）を持つ点で共通しており、「負傷」が構造的に特殊なわけではなく、周辺例として扱う意味はあ

²⁹ 投書欄の記事は用例採集の対象外とした。

る。なお、新聞で「負傷を負う」が周縁的である、と言いだたとしても、インターネットや会話の中では、さほど困難なく拾うことができる言い方であり、日本語話者全体にとって、周縁的なのかどうか、判断が難しいところである。

3.3.2 語構成

【重複の型と語例】では、統語形式を共にする動作性複合名詞は、同一の項目に含めたが、語構成の面では、一項目中の全複合名詞が共通しているわけではない。たとえば、【重複の型と語例】のB型において、「布陣」と「得点」はどちらも動詞的要素（V）と名詞的要素（N）から構成される「V+N」（補足関係）の構造を持つものに対し、「調整」は二字共にVで「V・V」（並列関係）の構造を有する³⁰。それゆえ、語構成の観点から【重複の型と語例】にあげた動作性複合名詞をとらえ直すと、以下のように分類できる。なお、連用修飾的用法をもっぱらとする要素に関してはMを略記号として使用する。「>」は修飾関係をあらわす。

【語構成】

V+N 献金, 作文, 受注, 成人, 定義, 得点, 得票, 布陣, 遺言, 預金

V・V 改造, 記録, 決済, 建築, 清算, 設備, 調整, 複製, 編成

V>N 食事, 返事

V>V 錯覚, 渡来, 飛来, 連動

M>V 共存, 専用, 内定, 予感

N>V 遠征, 区分, 旅行

なお、【語構成】には、純和製漢語の「食事、返事」、古代漢語に由来する「遠征、旅行」など、語形成の事情から見れば、種々のものが含まれる。それを、「V>N」、「N>V」のようにとらえるのは、現代語としての分析意識にもとづくものであることをことわっておく。

3.4では、【語構成】のそれぞれの動作性複合名詞が具体的にどのような統語的ふるまいを見せるのかを実例を示しながら考察する。なお、先述の通り、【重複の型と語例】に

³⁰ 「+」（補足関係）、「>」（修飾関係）などの記号類は野村（1999c）による。

あがっていない動作性複合名詞の実例も提示するが、それは主に、【重複の型と語例】にあげた複合名詞の類例として、どのようなものがあり得るのかを確認するために行う。

3.4 動作性複合名詞の名詞的用法

3.4.1 「V+N」型における名詞的用法

【語構成】にあげた「献金」など、「V+N」の構造を持つ動作性複合名詞は、VとNが「を」格の関係にある場合がほとんどで、次のように、「動作性複合名詞+を+動詞」の形式で用いられる。いくつか以下に例をあげる。

○日本軍が英領マラヤ住民の内で華僑だけに当時の金で総額五千万ドルの献金を出させたことなどを指摘している。（朝日新聞。1999.12.7）

○ヤフーとマイクロソフトは日本での迷惑メールの定義を決め、発信者を規制する共通ルールを定める。（日経新聞。2003.11.8）

○望むとおりに財産を分けるために、遺言を残す人が増えています。

（日経新聞。2003.9.28）

○自ら宣誓文を読み、署名を書き込んだ。（朝日新聞。2002.2.26）

○申込書に「これまであなたが發揮した『変える力』を教えてください」という設問を設け、採用の参考にする。（朝日新聞。1999.3.11）

「署名」「設問」の例は、あまり紙面上にあらわれることのないタイプであるが、同じ構造で、3.2であげたイのタイプに属する「布陣」は重複形式が頻繁に用いられており、語構成意識が非常に希薄になった、つまり「布陣」の「布」が持つ〈しく〉の意が意識されなくなった動作性複合名詞だといえる³¹。

○党農林族も首相の挑発に乗る形で実力者による布陣を敷き、反撃態勢を固めている。（日経新聞。2003.11.29）

³¹ マイクロソフト社の Word を使用して「布陣を敷く」を入力すると、緑色のアンダーラインがあらわれ、そこにマウスポインタを合わせると「重ね言葉」という表示が出るので、語構成意識が強制的に喚起される可能性もある。

以上の例では、「布陣→陣」のように、動作性複合名詞の前要素を取り除いた形で、容易に置きかえ可能なものもあれば、「受注を受ける」の場合の「受注→注文」のように、前要素の削除と後要素の拡張が日本語の文として置きかえる場合には必要なものもある。なお、「献金」や「遺言」では、「献・遺」があることで、それぞれ「政治的な目的などで」「死後に」といった限定的な意味が動作性複合名詞に付加されており、「金を出す」「言葉をのこす」といった単純な置きかえでは意図した意味が明確にならなくなっている。【語構成】で唯一「に」格を有する「成人」でも「人になる」では現代日本語としては不自然で、単なる「人」ではなく、「大人」の意に「成人」が限定されて、「成人になる」という言い方が行われている。

また、「得点」は「得点を得る」という【語構成要素と動詞の関係】のアの形では、なかなか紙面にあらわれないが、【語構成要素と動詞の関係】のエの「得点を取る」の形になると比較的容易に用例が見つかる。

○得点を取るべき時に取りきれず、相手に簡単にボールを渡してしまう。

(朝日新聞。2001. 4. 16)

このことは、必ずしも「点を得る」と「点を取る」が同一事象をあらわしうるから「得点を取る」は重複であると判断されるわけではなく、話者には、「得点を得る」では〈得る〉の重なりを頼りに、複合語を分解する意識がまだ存在するのに対し、「得点を取る」では、動詞要素の違いから分解意識は失われ、「得点」を「点」と同一視する傾向があることを示しているといえよう。

ちなみに、「動作性複合名詞+に+動詞」型で、「区別して分けること。また、それぞれに分けた、その仕切り」（『岩波』）の意の「区分」にも、以下のような用例が散見される。

○コンペは、初めて起業する人と、起業経験のある人の、二つの区分に分けて行う。

(朝日新聞。2000. 7. 28)

ここでは、「区分」の「区」を名詞としてとらえたので、「V+N」型の名詞的用法と同じところできりあげた。また、「V>N」型の「食事」では、動作性複合名詞全体が「め

し。たべもの」（『三省堂国語辞典 第5版』，以下『三省堂』）の意のモノをあらわすとされ、「食べる」を述語とした以下のような用例があらわれる。

○調べによると，2人は23日午後11時ごろ，長女水咲ちゃん（2）が食事を食べないことに腹を立て，……（朝日新聞。2002. 2. 25）

「食事」を「めし」と同様にとらえる話者にとってこの例は適格文であっても、「食事」にモノの意を認めない話者にとっては、「食事を食べる」はかなり違和感があるだろう。

3.4.2 「V・V」「V>V」型の名詞的用法

動作性複合名詞の構成要素がどちらも動詞的な場合，次のような名詞的用法があらわれ，具体的なモノを動作性複合名詞が意味する。

○新たに大型の木造建築を建てるとなると建築基準法を一つ一つクリアしなければならぬ。（朝日新聞夕刊。2003. 11. 29）

○名護に近い宜野座（ぎのざ）村では，海神を表したローマの「真実の口」の複製を作り，イタリアのアマート首相と浦崎康克（やすかつ）村長が除幕した。

（朝日新聞。2000. 8. 17）

○指導要録は学校長が作成し保管する。学籍，成績などの評定のほか，所見欄には行動などの記録を書き込む。（朝日新聞。2002. 8. 17）

たとえば、「複製を作る」において、「複製」は意味的に「複製品」相当の物体をさしているが，さきほどの「V+N」型と異なり，動作性複合名詞全体がモノの意を持っているため，動作性複合名詞内の動詞的要素が述語となる動詞と意味的に重複している，といった事態は生じていない。「NHKは一日から一月八日まで一カ月余り特別編成を組んだ」（朝日新聞夕刊。2000. 11. 29）も同様の例である。しかしながら，同じく名詞的要素を含まない「共感」では「共感を感じる」とすると，「布陣を敷く」の場合と同じく，ワープロソフトの画面上に重ね言葉であるとの表示が出る。これは動詞とその補語のいずれも「感」を含む点に意味の重なりを認めたためかと思われる。ただし，「予感を感じる」「錯覚を覚え

る」では波線による喚起表示はあらわれないので、機械的に処理されているわけでもないようである。

それから、「M>V」の「専用」は、動詞的でも名詞的でもないふるまいを見せる点で【重複の型と語例】にあげた他の動作性複合名詞と異なる。

○この携帯電話は身分を明かさずに購入できる業者から入手し、テレクラで知り合った女性との連絡専用に使っていたという。(朝日新聞。2001. 9. 11)

この例の「専用」は「専用する」の意ではなく、「仕事用」という時の「用」と同じく接辞的に用いられており、「専用」の「用」と述語の「使う」との間に意味の上での重複が生じていない。

3.4.3 修飾要素と重複の看過

二字からなる動作性複合名詞に、何らかの修飾要素がつくことで、動作性の名詞から単純名詞に近くなり、重複が生じやすくなることがある。たとえば、「得点」は「高得点を得る」のように、より高次の結合の複合語内に含まれる場合に重複が起こるが、「得点を得る」という裸の形では、少なくとも紙面にあらわれることはめったにない。

○ルール改正で回転系エアが高得点を得やすくなった。(朝日新聞。2003. 1. 3)

「高点」を用いて「高点を得る」でも良いわけだが、二字漢語より結合次数の大きな複合語となることで、重複への意識が薄くなったものと考えられる。次の例も同様である。

○預金者がどちらかに2千万円の定期預金を預けると、……

(朝日新聞。2001. 11. 16)

以上のように、動作性複合名詞を含む高次の複合語が形成される過程において、動作性の構成要素の存在が見えにくくなり、動作性複合名詞単独では起こりにくかった重複が見過ごされて、生じやすくなっている。

このことは、以上の複合名詞にのみ当てはまることではなく、実は【重複の型と語例】

のB型のほとんどに当てはまることである。つまり、3.1に見た「得票」における「約20%の」や「～という返事を返す」における「～という」の部分のように、もっぱら動作性複合名詞はそれを連体修飾する要素を伴っており、【重複の型と語例】にあげた裸の形式で用いられるのは「作文を書く」「食事を食べる」「成人に成る」などわずかである。比較的用例の多い「布陣を敷く」でも「実力者による布陣を敷き」や「3・5・2の布陣を敷くローマは」（朝日新聞夕刊。2000.12.18）のように、連体修飾要素が付随するのが普通で、資料中に裸の形で用いられた用例はなかった。以上のことから、重複の生じやすくなる要因として、「動作性複合名詞に連体修飾要素が付くことによる動作性の希薄化」は重要な役割を果たしているといえるだろう³²。

3.5 動詞が行為の終局面をあらわす重複

ある程度の時間をかけて行う「工事」や「調査」など、活動をあらわす動作性複合名詞は動作の終了を意味しないため、それを明示するには、「工事・調査を完了する・終える」のようにする必要がある。これに対して、以下に見るように、「決済」には、動作の終了が含まれるとする国語辞書が複数ある。

- ・（証券または代金の支払いによって）売買取引を完了すること。また単に、支払い。
（『岩波』）
- ・〔代金や証券などの受け渡しによって〕売買の取引を終えること。
（『学研現代新国語辞典 改訂第3版』）
- ・代金の受け渡しを完了して、売り買いの取引をおえること。
（『新選国語辞典 第8版』）

次の例は上記の定義に沿う実例である。

○支払いはクレジットカードで決済した。（朝日新聞。2001.3.20）

³² 「建築」が単独では建物の意で用いられにくく、「木造建築」における「木造」のような連体修飾関係が付くとすわりが良くなる、ということがある。これは「建築」が「建物・建築物」の意で用いられやすくなるのに必要な条件ではあっても、本節で問題とする重複とは別の課題である。

上例の「決済した」は「済ませた」に置きかえても問題はない。これに対して、以下の例では、「完了」の意を含む「決済」が、「完了」の主語となっている。

○サラリーマンはお酒を買うのに、酒屋さんに日銀券を渡すことで決済を済ませることもできる。しかし、遠くの酒屋さんに注文する時には、現金を送るよりも、自分の銀行に送金を依頼するだろう。この場合、最終的な決済は、サラリーマンの銀行口座から、酒屋さんの口座にお金が移動して完了する。(日経新聞。2003. 5. 8)

上例で、後者の「決済」は行為の終了の意ではなく、『岩波』が指摘するように「支払い」程度の意味で用いられており、行為の終局面の表現は「完了」に委ねられている、といえる。前者の「決済を済ませる」のような、単に現金を手渡しする場面を意味する場合は、きわめてまれで、次のように、カード払いのような場合に、重複が生じやすくなる。

○口座の振り替えがうまく処理できず、公共料金の引き落としやクレジット代金の決済が終わらないまま週末を迎えた取引は、250万件に達する。

(朝日新聞。2002. 4. 7)

この例も、日経新聞2003年5月8日の記事における後者の「決済」と同様、「支払い(処理)」程度の意味で用いられている。類例をいくつかあげる。

○北朝鮮は、日本が長く植民地支配をし、その清算が済んでいない唯一の隣国である。(朝日新聞。1999. 11. 25)

○「調整が整った場合には着工する」と着工、完成時期を明示しなかった。

(日経新聞夕刊。2004. 12. 16)

○今回の合意内容を基に二〇〇二年に六%削減を達成するための法整備を整える手はずだった。(朝日新聞。2000. 11. 26)

本来、「済む」「整える」の意を含む「決済、清算」「調整、整備」が〈活動〉のみを示し、行為の終局面である〈達成〉は、それらを補語にとる類義の動詞によってあらわされるのが、このタイプの特徴である。動作性複合名詞のアスペクト的意味にかかわる重複表

現といえる。ただ、これらを重複と呼びうるのは、あくまで辞書的意味にもとづき、動作性複合名詞と動詞（述語）との意味をつき合わせた結果であって、上記の文脈では動作性複合名詞が終局面の意味を持たないと解釈されるがゆえに、動詞（述語）に「済む・整える」が用いられているので、文脈依存で重複が解消されていると考えることも可能である。

3.6 「動作性複合名詞＋して＋動詞」型

このタイプは、二字からなる動作性複合名詞の後部要素と同じ意味の動詞が「して」に続いてあらわれるのがほとんどで、たとえば、

○7月26日に発生した宮城県北部地震は、地下の2カ所の断層が連動して動いて起きた可能性が高いことが専門家による余震分布の分析で分かった。

（日経新聞。2003.9.7）

のように用いられる。これは、次のように、「動く」なしの形に置きかえることができる。

○宮城県北部地震は、地下の2カ所の断層が連動して起きた可能性が高い……

上例で「連動して」の主語は「2カ所の断層」であり、「起きた」の主語は「宮城県北部地震」であるが、ここでは主語とその述語が、それぞれ一対一で対応している。一方、9月7日の日経の記事では「宮城県北部地震」と「起きた」との対応関係は上例（「連動して起きた」）と同様であるが、「2カ所の断層」の述語として「連動して」と「動いて」の二つがあらわれている。「連動する」は「連」の意味を含む分、「動く」よりも具体性の高い動作をあらわすが、「動く」相当の意味も含む分、「2カ所の断層」が連なって動くことを示すには「連動して動いて」を重複表現と見なすわけだが、ここでは「連動して」が「共に」「一緒に」などと類似の、副詞的要素として用いられており、「連動」が含む「動」の持つ動作的意味の存在が意識されなくなったために、このような文が作成される。類例をいくつかあげる。

○ドイツ製のソーセージを練る装置を転用して使っていた。

(朝日新聞夕刊。2002. 4. 20)

○それは自然と共存して生きるということ。(朝日新聞夕刊。2002. 1. 10)

○このため、NTTに基本料を支払ったうえで一般の固定電話と併用して使うケースがほとんどだった。(朝日新聞。2003. 10. 4)

以上はいずれも次のA型で、B型の例は、管見の限りでは見あたらなかった³³。

A型：「 $\alpha + \beta$ 」して「 β 」

B型：「 $\alpha + \beta$ 」して「 α 」

つまり、「併用して使う」はあり得ても、「併用して併せる」という形式は実現性が薄いということである。二字の動作性複合名詞の各構成要素が別の動作をあらわし、動作性複合名詞全体が副詞的に、つまり動詞の修飾要素として機能する場合、後部要素があらわす「使う」や「動く」といった中核的動作は統語的に表示される必要があるのである。ただし、次の「繁殖」のように、語構成要素が類義の関係にある場合は、統語的にあらわれる動詞はどちらの要素とも類義関係にある。

○繁殖して増えてしまい、殺処分されるネコも激増している。

(朝日新聞。2002. 2. 18)

また、次の「改造」は、「手を入れる」と同程度の意味で用いられており、後続する「造る」とは、対象語の分化が生じており、特異である。

○廃屋になっていたかやぶき屋根の民家を改造して、研修施設を造った。

(朝日新聞。2000. 4. 9)

○押し入れを改造して作った書斎、……(日経新聞。2003. 4. 5)

³³ 資料外に「男に寄生して生きる女」(朝日新聞。2004. 11. 6)という実例が見られたが、これもA型のパターンに属する。

「改造」を用いて、新旧のモノをあらわすには、新しいモノを示す名詞に、助詞の「に」を用いた、次の統語形式が一般的だろう。

○居住者の高齢化が進む公共住宅団地の1階をグループホームやデイサービスセンターなどに改造しネットワーク化すれば、……（朝日新聞。2002. 10. 21）

ところで、「調査してくる」のような、「来る」を含まない動作性複合名詞に、補助動詞として「くる」がつくのと同様に、次の例では、「くる」を含む「渡来」に対して、「くる」が用いられている。

○基本的な構造は渡来してきた技術だが、……（朝日新聞。1999. 6. 15）

たとえば、「滑降してくる」を「滑って降りてくる」とすることはできるが、「渡来してくる」は「渡って来てくる」とはならないゆえ、上例の言い方は、複合名詞内の「来る」の存在が意識されなくなった結果、もしくは補助動詞の「くる」を無制限に適用した結果だと考えられ、次の例も散見される。

○飛来してくる弾道ミサイルを上層で迎撃するNTWは、……（朝日新聞。1999. 1. 22）

○2名の男性を後ろ手に押さえ、連行していった。（朝日新聞。2002. 5. 14）

○やがて年下の美青年を同行して行く。（朝日新聞夕刊。2001. 6. 27）

「行」を含む動作性複合名詞に、「くる」が補助動詞としてつく次の例は、動作性複合名詞内の「行」の意味が意識されなくなっている、との考えを補強する。

○市長選の候補者に同行してきたことを思い起こした。（朝日新聞。2002. 4. 9）

○ソ連や東欧から連行してきた約百人を死者の埋葬などに強制的に従事させていた。
（朝日新聞。2000. 7. 14）

上の例で、「行く」の起点から離れる、という性質は失われており、「一緒にきた」「連れてきた」というのと変わりがなくなっている。それゆえ、動作性複合名詞内の「行」の

語構成意識が失われている、と見なされるわけだが、逆の「渡来」や「飛来」に「いく」が補助動詞としてつく「渡来していく」「飛来していく」という言い方になると、「□行+してくる」に比して、紙面にあらわれる可能性は著しく減退し、容認困難といって差し支えないであろう。重複において、「いく」と「くる」のふるまいは対照的ではない。

以上、実例を提示しながら、「動作性複合名詞+して+動詞」型について考察した。ここではA型、B型という区別で、語構成と統語形式との関連性を指摘した。この型は、「V>V」もしくは「V・V」型の動作性複合名詞を含む「動作性複合名詞+して」全体が副詞的にふるまい、構成要素の一方の意味を示す動詞、もしくは二つの構成要素と同じような意味の動詞が述語にあらわれるのが特徴で（「同行」は「M>N」型で、副詞的ふるまいに合致した要素を元来含む）、名詞的要素を含んでいる「V+N」の動作性複合名詞や動作性要素がゼロの「N>N」構造の複合名詞（例 金策, 原因, 手術 野村 (1999c) より）では生じにくい統語形式である。

3.7 おわりに

本節では、動作性複合名詞の動詞性の構成要素に関する重複表現を考察し、語構成意識のうすれから生じる統語形式や語の組み合わせを記述してきた。

規範的にとらえれば避けるべき重複表現にも、一定の規則性が見られ、それなりの整理・分類が可能であることを示した。それゆえ、本節の記述が、複合語を構成要素に分解してとらえる可能性を持つ日本語学習者の読解指導などにおいて、なにがしかの参考になれば良いと考える。

4. 重言（重複表現）についての整理

4.1 はじめに

ここまでにおいて、重言に関連のある二字漢語について、現象ごとに個別に検討を加えてきた。しかしながら、このような重言（重複表現）について、どんな種類があり、これまでにどのような指摘が行われてきたのかについては、断片的な記述にとどまっていたので、以下で全体的な観察を行う。

4.2 言語遊戯としての重言

一般的に、重言は望ましくない表現とされているが、意図的に重複させることによって、おかしみを誘う場合がある。たとえば、綿谷（1964, p. 388）では、「たまたま一筆庵（英泉）の滑稽本『魂胆夢輔譚』（天保），三編中の対話に次のようなのがあった」として、以下の会話をあげている

- 「段々病氣のやまいがながくなってむずかしいので、病を直す医者殿が村内うちにねえもんで、山中のやまなかから馬でよんだ医者どのが、日中の昼なか馬から落馬して——」「眼中の眼の中へ土砂のすながとび込んで、途中から帰ったもんだから来ないから間に合わねえのう。爺さん、そうだらう」「にしゃアよく知ってだ、その通りでござる」「昔は江戸でも町内うちだの半紙の紙だのという洒落が時花（はや）ったけれども、今は子供でも云わねえわな」

そして「江戸に於ける重言の推移が、だいたい察しられるようである」（p. 389）と結んでいる。落語などにおいても、笑いを生む手段として重言が利用されることがある。また、井上（1989, p. 180）では、子どもどころ「月も星も出ていない暗い夜、年をとった婆さんが今年三つのおさな子連れて、一本道をひたすらまっすぐ行きました」のような、似た意味の重なった「重複表現をいくつも暗記し、それを披露し合って笑い興じていたのでした」と述べている。

このように、笑いのために、意図的に重言が行われることもある。しかし、現代の一般の文章や会話の中では、管見の限り、重言が笑いを起こす目的で用いられるのを見聞きしたことはほとんどない。だじゃれや比喩が同じ目的で頻繁に用いられるのとは対照的である。

4.3 話しことばにおける重言

前述の言語遊戯における重言を除いて、一般の言語使用においては、先に述べたように重言は望ましくないとされている。ただし、この場合も、話しことばで用いられるか書きことばで用いられるかで、許容度が異なるという指摘が多い。つまり、読み手が書かれている情報をじっくり理解していくことの可能な書きことばと異なり、話しことばの場合、会話の流れの中で聞き逃しや聞き違いが生じる恐れがある。それゆえ、たとえば「一番最初に」のような、書きことばであれば「一番に」か「最初に」だけでよいと考えられる表現であっても、話しことばでは、意味を強調する意義があり「耳で聞くことばとしては必ずしも冗長とは感じない」（柴田（2004, p. 108））と判断される。

奥秋（2011）は、アナウンサーやタレントなどの発言に見られる重言の数々をとりあげているが、これに対して、鴨下（2008）では、演出家という立場から、口頭語という視点で考えると許容できるレベルの表現があるのではないかと述べている。具体的には、「まだ未定」「先に先取点」「真っすぐに直進」「勝った勝因」「もう一度くり返す」「仕送りを送って」があがっている。鴨下によれば、書きことばでは、これらは誤用であるが、話しことばでは、たとえば「もう一度くり返す」という重複表現には「もう一度言う。ホシに気付かれるな」や「くり返して言う。ホシに気付かれるな」では表現として弱く「切迫した訓示、指示の調子にならない」（p. 99）という点を補う意義があると考えられている。

伝えようとする内容が明確になる点は、重言と見なしうる表現を用いることの利点だと、以上の指摘から理解される。ただし、「一番最初」「一番最後」についての「口ぐせになってしまうと、直りません」（奥秋（2011, p. 200））という指摘も無視できるものではない。なぜなら、話しことばと書きことばの違いを意識した上で「一番最初」や「一番最後」を用いる話者のほかに、強調や意味の明確化という意識をもって、単に人が使っているのを聞いたことがあるという理由などから、惰性で使用している話者も相当数いると考えられるからである。そうだとすると、「一番最初＝強調表現として、話しことばでは適切」とするのではなく、「一番最初＝話しことばで、強調表現として用いられる場合は適切」というように、話者の意識について言及しなければならないと考えられる。

また、これまでは、書きことばと話しことばという基準で重言の適否をとらえることが可能であったが、現在は、ブログやツイッターなど、話しことばに近いことばで書き込まれる文章が存在し、そこには「まだ未定」「まっすぐ直進」などの表現がたびたび出てくる。現象としては、①話しことばにおける重言がそのまま出現する、②話しことばと書きことばの

違いが意識され、使用が抑制的になる、という二つの可能性がありうる。①の場合を問題のある傾向ととらえるならば、話しことばに近い文体であっても、文字情報が残る点で改まった文章と異なるところがなく、強調などを行う積極的な意義がないから重複表現を用いる必要はない、という面が強調されることになるだろう。もう少しゆるくとらえて、公的な文章での使用は問題だが、私的な文章では許容される、というように、公私の区別を基準とすることも可能である。ただし、書きことば内での使い分けであり、話しことばと書きことばの場合よりも、使っている当の本人にとっては、注意力を働かせるのは困難であることも予測される。

4.4 外来語の意味の明確化

以下では、書きことばにおいても見られる重言について、どういう場合に許容されると指摘されてきたのかを検討する。まず、「平均アベレージ」や「アンケート調査」「キャラバン隊」「ムール貝」のように、外来語と漢語・和語とが組み合わさった表現を見る。

「アンケート調査」については、

- 医学論文で日本語の重言はあまりみられないが、外来語 (loan word) では自分でもうっかり書いてしまうことがある。「アンケート調査」なども、この例で、アンケートはフランス語の *enquete* で調査の意味であるから、アンケート調査は重言となる。

(『整形外科』38-11, 1988)

というように、原語の意味と照らし合わせて重言と判断する指摘もある。しかし、外来語は、日本語の一部であり、多少、原語の意味とずれることもあると見れば、「多くの人に同じ内容について質問して、意見の大勢を知るためにする(通信)調査」(『新明解国語辞典 第7版』)の「(通信)調査」を除く部分が「アンケート」の語で意識されており、単に「調査」の意味が繰り返されている、というのとは異なると考えることもできる。

原語の意味をもとに考えれば、「キャラバン隊」や「ムール貝」なども、「一団」「いがい(貽貝)」の意味を「キャラバン」「ムール」が有しており、重言ということになるが、ラクダに荷物をのせて、砂漠を回ることや「ムラサキガイの地中海型。殻表は黒ずんだ紫色。食用」(『大辞林 第3版』)と記される個別的な意味を「キャラバン」「ムール」が表し、それらがどういう種類に属するのかをはっきり示すために「隊」や「貝」がそえられていると

解釈される。「銃」の意味を含む「ライフル」を「ライフル銃」と表現するのも、「ライフル」という種類の銃」ということが明確になる効果がある。菊谷（1983）のあげる「ベレー帽」「ベニヤ板」「スモン病」なども同様である。

以上の例と異なり、単純に同じ意味が繰り返されている言い方の場合は、適当な言いかえが行われる。「平均アベレージ」は、その典型的な例で、「平均」の意味をもつ「アベレージ」に「平均」をそえても、何ら追加の意味は加わらず、同じ意味の語を並べただけにしかならないので、「平均」か「アベレージ」のみを使うのが望ましいということになる。「ネットワーク網→ネットワーク」も同じである。ところで、「ライフル銃」「ベレー帽」のように、外来語+漢語（あるいは和語）の順で、種概念+類概念を表す語は多いのに対して、「平均アベレージ」のように、外来語が後にくる語は、相対的に少なく、後掲の「資料」にあげた各重複表現においても、ほかに「排気ガス→排ガス・排出ガス」「製造メーカー→メーカー・製造会社」「製薬メーカー→製薬会社」などが見られる程度である。このうち、「排気ガス」については、「車を停車する」「ライトを点灯する」などと同様、「ガスを排気する」という関係をもつもので、比較的、許容されるタイプと見なされているが、このタイプについては、4.5で述べる。ここでは「製造メーカー」「製薬メーカー」について確認しておく。

これらの表現については、「メーカー」の意味が明確になるとする向きもあり、その場合「ライフル銃」「ベレー帽」などと同様の扱いになる。「ライフル銃」や「ベレー帽」の場合、「銃」や「帽」があることで、「ライフル」「ベレー」は「銃」「帽子」の一種なのだというように、確かに意味が明確になる。一方、「製造メーカー」「製薬メーカー」の場合、「製造」「製薬」があることで、どの要素について意味が明確になるのかが理解しにくい。筆者の感覚では、しいて「製造メーカー」「製薬メーカー」を許容される表現と見なすには、「メーカー」の部分で「会社」「業者」の意味で解釈しなければ無理なように思われ、その点で「最近では、メーカーをカンパニー、つまり会社とか商社とかという意味に受けとめる向きもあるようで、そうなりますと「製造メーカー」はおかしくないこととなります」（菊谷（1983, p. 42））という指摘が注目される。ただし、「メーカー」に「会社」の意味を認めるとなれば、たとえば「販売会社」「運送会社」を「販売メーカー」「運送メーカー」といってもよいことになるが、このような乱れは生じておらず、「メーカー」に「会社」の意味を加える必要はない。かりに、話者が「メーカー」の意味を明確にする目的で「製造メーカー」「製薬メーカー」を用いたのだとしても、それによって聞き手や読み手が「メーカー」を「製造業者」でなく「会社」「商社」の意味で受け取ってしまう恐れがあるのであれば、「製造メ

一カー」「製薬メーカー」を用いる積極的な意味は認めにくい。したがって、「製造メーカー」「製薬メーカー」と「ライフル銃」「ベレー帽」などと同列に扱うのは、無理があると考えられる。

以上、外来語を含む重言（と見なしうる表現）については、外来語が前後いずれにくるのかも考慮した上で、慎重に判断すべきことを主張し、前に外来語、後に漢語などがくる場合については、意味の明確化という利点が認められる場合があることを確認した。なお、外来語を含まない語で類例を考えると、「豌豆」に対する「豌豆豆」や、「怪談」に対する「怪談話」があげられるが、①外来語と異なり、昔から日本語に存在する和語・漢語からなること、②語構成が意識されうること、などの要因が働くためか、国語辞典などでは、「豌豆豆」「怪談話」を認めていないものが多い。

4.5 「名詞＋漢語サ変動詞語幹」のタイプについて

話しことばで、強調のために重言となる表現や、外来語の意味を明確にするために漢語や和語がそえられる表現が見られるが、話者が強調や明確化が特には必要ないと判断するときには、「一番最初→最初」、「ベレー帽→ベレー」のように、単純に、重複している要素が省かれた形で表現される。一方、「車を停車する」「ライトを点灯する」など、文中の名詞とサ変動詞語幹に含まれる名詞要素とが意味的に重なる場合、重複感が生じるのをさけたいなら、「車をとめる」「ライトをつける」など、動詞を漢語から和語に変更する必要がある。

この形式については、「花が開花する」「賞を受賞する」など、単純に同じ名詞概念が繰り返しあらわれていると感じられる場合は、重複感が強く伴うものの、「桜の花が開花する」「ノーベル賞を受賞する」など、新しい情報が名詞に加わっている場合は、許容されやすくなると指摘されてきた。重言の代表例としてあげられる「馬から落馬する」でさえも、「暴れる馬から落馬した」のような言い方であれば、相対的に自然な表現になるとされる（北原（2011, p. 172）。このように、名詞と名詞概念を含む漢語サ変動詞語幹との組み合わせについては、新しい情報を加えて、重複感を和らげるという観点から考察されることが多かった。

これに対して、以下では、名詞と漢語サ変動詞語幹の組み合わせに重複感を感じる場合に、動詞を和語に置きかえる手段は有効であるか、置きかえにくい場合もあるのかというように、そもそも重複感の伴わない表現をとることの可能性について見ていく。

ア 「名詞＋漢語サ変動詞語幹」の形が一般的ではないもの：馬から落馬する

イ 漢語サ変動詞語幹を和語などに言いかえることが可能：花が開花する

ウ 和語動詞を用いた表現があまり見られない：放水する

以上の三つの区別をたてると、まずアの「馬から落馬する」や「日本に来日する」などは、「暴れる馬から落馬した」や、「高校時代を過ごした」が「日本」を修飾している、

○大学卒業後、高校時代を過ごした日本に来日。(日経金融新聞。2006. 7. 18)

のような例では、確かに、単に「日本に来日する」などというよりは、相対的に自然となっているが、それよりも「馬から落ちた」「日本にきた」などの言い方のほうがはるかに自然であることはいなめない。したがって、新聞でも「日本に来日する」のような表現は、例外的にしか出現しない。

一方、イに相当すると思われる「花が開花する」や「病院に入院する」「賞を受賞する」「ハンコを押す」「工事に着工する」「色に変色する」などの場合、それぞれ「桜の花が開花する」「大学病院に入院する」「ノーベル賞を受賞する」「実印を押印する」「新築工事に着工する」「壁の色に変色する」のように、名詞に具体性をもたせることで、自然な言い方になると考えられている。中には「すでになじんだ表現で他の表現が思い浮かばないほど慣用として定着している」(飯田(2009))例として、「歌を歌う」「挙げ句の果て」「むやみやたら」とともにあがっている「芥川賞を受賞する」の「受賞」のように、ほかの語を用いた言いかえが困難と見なされるケースもある。また、「入院」なども、「病院に入る」では、患者としての場合もそこで働く人としての場合もあり、解釈に幅があるが、「入院」であれば、一定期間、患者として病院に入ることに意味が限定される、という点が強調されることがある。

しかし、「賞を受ける」や「病院に入る(患者として)」などが実際に使用しにくいのかは、実例で確認する必要がある。そして、次のような例は、容易に見つかる。

○これまでに新藤監督が3回、黒沢明監督が「ゲルス・ウザーラ」で、最優秀作品賞を受けている。(日本経済新聞。2014. 6. 29)

○物質に質量をもたらした「ヒッグス粒子」の予測は、南部さんが1960年代に発表し2008年のノーベル物理学賞を受けた素粒子理論「自発的対称性の破れ」が出発点だった。(毎日新聞。2013. 10. 9)

「～賞を受賞する」の形式になじんでいて、「～賞を受ける」に落ち着かない感じをもつ向きもありそうだが、上例のような言い方は、特に珍しいものではない。「病院に入る」の場合、

○麻生副総理・財務相が4月24日、「食いたいだけ食って、飲みたいだけ飲んで、糖尿病になって病院に入っているやつの医療費はおれたちが払っている」と発言したことについて、……（読売新聞。2013.5.30）

○東京・伊豆大島の小学1年、柳瀬海君（7）は自宅が土砂流に流され、父は行方不明に、母は大けがをして病院に入ったままだ。（産経新聞。2013.10.22）

のように、「ている」や「まま」などの表現が続くことで、患者として「病院に入る」ことが明確になっている。また、

○自分は生き残った。手術から3週間ほどで日本に戻り、広島県呉市の病院に入った時は涙が止まらなかった。（読売新聞。2013.8.15）

○今も首都圏の特養ホームはたいていいっぱいだ。住まいから離れた有料老人ホームや病院に入るのは珍しい話ではない。（読売新聞。2013.7.6）

などの場合は、文中の「生き残った」や「有料老人ホーム」などを頼りにして、医師・職員ではなく患者としての立場で病院に入る意であることが無理なく理解される。

「実印を押印する」「認め印を押印する」などは、「押す」を用いれば、簡潔な言い方になる。「開花」や「変色」「着工」についても、

○世田谷区の梅の名所、羽根木公園（代田4）で昨年より2週間ほど早く紅梅の梅の花が開いた。（毎日新聞。2013.12.28）

○酸化酵素が少なく、すり下ろしたりしても果肉の色が変わらない。

（毎日新聞。2013.12.6）

のように、「開く」（あるいは「咲く」）や「変わる」を用いて言い表すことが可能である。

「着工」については、類義の「とりかかる」に相対的に口語的な感じがあるのであれば、文型をかえて「新築工事を始める」とすることもできる。ただし、「開花が」「着工は」など、名詞としてこれらの語を用いる場合は、「咲き」「開き」あるいは「とりかかり」「始め」などの動詞連用形が使いにくく、容易には言いかえられない。しかし、言いかえずに漢語を名詞として用いるにしても、「西日本では、早くも桜が咲いている。関東で開花が見られるのは～」「～が丸の内に高層ビルを建築する。着工は、来年 3 月」などの表現をとるならば、「開花」や「着工」と同内容の名詞が文中で隣接することがないので（「桜の開花」「改修工事の着工」などと比較）、重複感が生じることはない。

最後に、ウの例とした「放水」について検討する。

○監視中の新関西空港会社の消防車が放水して冷却し、煙はまもなく収まった。

（毎日新聞。2013. 9. 13）

○日米の消防隊が模型のへりに放水する消火活動が行われた。（毎日新聞。2013. 11. 6）

この場合、「水を～」に入る適当な和語動詞の有無が問題となる。「水を出す」「水を（勢いよく）かける」などが候補となるが、「水をかける」は「植木用のホースで水をかけて、火を消した」など、個人の行為については用いられるものの、「消防車」「ポンプ車」や「消防隊」「自衛隊」など、組織などが主体となり、任務として水をかけるというような場合は、「放水」が一般的である。そして、上の例のように自動詞として用いられる分には、重複の問題は起こらないが、次のように、他動詞の使い方も見られる。

○通常の冷却装置が使えないことから、東京電力などの対策本部は、自衛隊などに依頼し、くみ上げた海水を放水する作業を 17 日に始めた。（朝日新聞。2011. 3. 21）

○当初は水が届かなかったとされていたが、東電社員の指示通りの場所に約 3 分間、12 トン分の海水を放水できたことが判明したという。（産経新聞。2011. 3. 19）

これらについて、「海水をかける」としても、意味の上ではまったく問題がない。しかし、「じょうろで水をかける」「バケツの水をかける」など日常的な事柄にも用いられる「かける」よりも、漢語「放水」のほうがかたい文章に合っていると感じられているものと推察される。

「発電→電気を起こす」のように、現代語では訓のない「発」を含んだ語であっても、何らかの和語を用いて表現することが可能であり、名詞要素を含む漢語サ変動詞語幹でないと言い表せない事柄がとりたてて存在するわけではない。ただし、「放水」のように、文体的に、やや和語への言いかえが困難な場合があり、このようなものについては、和語を用いた言い方も一般的な「賞を受ける」「病院に入る」などとは区別して扱うことも可能である。

以上、「名詞＋漢語サ変動詞語幹」の形式をとる表現については、名詞に新しい情報を加えることで、自然な表現になる点がこれまで指摘されてきたことを確認した上で、動詞の言いかえによって、重複感をなくす方法について検討を加えた。

4.6 「動作を示す漢語名詞＋和語動詞」のタイプについて

動作を示す名詞が前にきて、後にくる動詞との間に重複感があるケースとして、よくあげられるのは「犯罪を犯す」「被害を被る」などの言い方である。「犯罪」が「罪を犯す」，「被害」が「害を被る」という語構成をもつため、動詞の「犯す」「被る」と意味的に重なるというものである。後掲の「資料」にも示すように、新聞などでは、前者は「罪を犯す」「犯罪をなす」「犯罪を行う」，後者は「被害を受ける」「被害にあう」などに言い換えられることが多いが、「行う」や「受ける」でも、意味が「犯す」「被る」と類似し、根本的な解決にはなっていないという見方もある。「犯罪を犯す」については、重言と見る立場と、「犯罪」が「罪」と異なる意味・ニュアンスをもつことばになっているので、簡単には言い換えられず、「警察に捕まるたぐいの罪」ということで、「犯罪を犯す」を認めてよいという立場とにわかれる。

○犯ということばのダブリである。「罪を犯す」だけでよい。罪を犯すことを犯罪という。ところが、犯罪ということばは罪自体も表す。ここのところをよく踏まえておかないと、犯罪を犯すという重言を平気で使うことになる。(榊原 (1987, p. 271))

○国広哲弥さん (74) は「単に『罪』では、宗教的、道徳的な罪と区別しにくい。犯罪とは普通、法律に背く行為や刑事事件を思い浮かべるので、『犯罪を犯す』と言っても間違いとは言えないでしょう」と説明する。国広さんによると、「罪を犯す」から「犯罪」の熟語が生まれた。ところが、長く使われているうちに、「犯罪」が一つの名詞のようになり、再び「犯す」という動詞を補う必要が出てきたのではないかと、いう。(橋本 (2004, pp. 18-19))

国語辞典の中では、『明鏡国語辞典 第二版』が「重言のいろいろ」という欄を設けて、詳しく説明しており有益だが、「犯罪を犯す」の類は、「「～ヲ」に〈動作・作用の結果に生じたもの〉がくる、結果目的語の適切な用法であるもの」とされ、「遺産を残す」「歌を歌う」「建物を建てる」「彫像を彫る」「伝言を伝える」「犯罪を犯す」「被害を被る」が同様の例としてあがっている。「犯罪を犯す」などに重複を感じない話者の場合は、この記述を使用の根拠とすることができる。しかし、これらの言い方に重複を感じる話者の場合は、どのような表現がとりうるだろうか。大学生 111 人に以上の表現について、重複を感じるかどうかをたずねたところ、次のような結果が観察された。

遺産を残す：重複を感じる (44)・感じない (67)

歌を歌う：重複を感じる (34)・感じない (77)

建物を建てる：重複を感じる (26)・感じない (85)

彫像を彫る：重複を感じる (29)・感じない (82)

伝言を伝える：重複を感じる (29)・感じない (82)

犯罪を犯す：重複を感じる (29)・感じない (82)

被害を被る：重複を感じる (36)・感じない (75)

意味的に重複があるかを考える場合は、たとえば「犯罪」について、漢字抜きでも「罪を犯す」という語構成が意識できることが重要であり、現代人の感覚としては意識しにくくなっている、というのが「犯罪を犯す」などの言い方を積極的に認める立場における根拠の一つとなっている。確かに、「犯罪」ということばを用いる場合、全体で「法律上の罪」の意味で理解していて、あまり語構成を考えることはないようにも考えられる。しかし、「犯罪者」または「被害者」などの言い方においては、「登山者」「退会者」を「山に登る人」「会を退いた人」などと解釈する場合と同様で、「罪を犯した人」「害を被った人」のように、語構成を意識する可能性も大いにある。このような感覚も無視できるものではないと考えれば、重複感をもたれる可能性のある「犯罪を犯す」「被害を被る」について、何らかの形で重複感を和らげる表現が求められる。「犯罪を行う」「被害を受ける」などは、まったく同じ動作と漢字が繰り返されているわけではない点に、わずかであっても、和らげの効果があると考えられている。以下、「漢語名詞+和語動詞」の組み合わせに限りて考察する。

4.6.1 ほかの名詞への置きかえが容易なケース

「挙式」は、重言として「挙式を挙げる」の形をとることがあるとされるが、「挙」を省いて「式を挙げる」とするだけで、重複をさけることが可能である。たとえば、結婚情報誌『ゼクシィ首都圏版』（21-1, 2013）では、

○限られた予算内で理想の式を挙げるためにはお金の使い方も重要に。

のように「式を挙げる」または「結婚式を挙げる」「結婚式をする」が用いられ、「挙式」は

○天井の高いアトリウムでの挙式は大人気

など、名詞として用いるか、「挙式後」「挙式当日」など、合成語の要素として多く用いられている。「式」や「結婚式」といった名詞があるため、「挙式を挙げる」という形式の必要性が「犯罪」「被害」などの場合と比べて低い。「借金を借りる」「貯金を{蓄える/貯める}」なども、「金を借りる」「(お)金を{蓄える/貯める}」で間に合う。

「遺産を残す」は、「産を残す」とは言い換えられないが、「財産を残す」という別の名詞を用いている用例は少なくない。

○相続人以外の人に財産を残したいなら「遺言書」を作成しておきましょう。

(読売新聞。2012. 6. 16)

あるいは、十分な文脈が与えられていれば、「(お)金を残す」でも、死後に残す財産のことだと理解される。

○義母があなたに預金を分けないのは、嫌いだからではなく、息子の嫁に対する昔ながらの考えで、遺言で嫁にお金を残す発想がないからではないでしょうか。

(読売新聞。2013. 4. 24)

「捺印を押す→印鑑を押す」も同様に、ほかの名詞を用いた言い換えである。「伝言を伝

える」の場合、AがBにCへの伝言を依頼する場面では、「Bに伝言を頼む」や「～と伝言してください」などの形をとるので、「伝言を伝える」という表現を用いる必要性は低い。「伝言を伝える」が実際に用いられるケースとしては、Aの伝言内容をBがCに対して述べる、という状況が考えられる。

- どんな戦術をとるか。支援者は本人と協議も出来ず、具体的な相談もままならない。橋渡し役の弁護人は刑事事件の弁護が本来の役割で、支援者に旅田被告からの簡単な伝言を伝える程度だ。(読売新聞。2003. 3. 29)

ここでは、「旅田被告」(Aに相当)の伝言内容を「弁護士」(Bに相当)が「支援者」(C)に述べるという事柄を表すが、「伝言」の「伝」の主体は旅田被告、「伝える」の主体は弁護士と、両者で異なっているので、重複はないと見るべきであろうか。このような観点からは、同じニュースについて、次のように、新聞5社で実際の表現が異なる点が興味深い。

- 天皇陛下は10日、皇居・宮殿で英国のキャメロン首相と会見した。首相がエリザベス女王からの「在位60周年の記念式典でお会いできればうれしい」という伝言を伝えると、陛下は「感謝申し上げます」と述べ、東日本大震災での英国による救援活動にも謝意を伝えた。(毎日新聞)
- キャメロン首相がこの日、「お会いできればうれしい」とする女王の伝言を伝えると、陛下は感謝の意を示すとともに、1953年の訪英に触れ「なつかしく思い起こします」と述べられたという。(産経新聞)
- 宮内庁によると、英首相はエリザベス英女王の伝言として「天皇陛下の早期のご快復を祈っています。在位60周年の記念式典に陛下を招いており、お会いできればうれしい」との内容を伝えた。(朝日新聞)
- 宮内庁によると、英国で5月中旬に行われるエリザベス女王の即位60年祝賀行事について、首相が、陛下とお会いできればうれしいとの女王のメッセージを伝えたところ、陛下は「ご招待に感謝します」と応じられたという。(読売新聞)
- 公務復帰した天皇陛下は10日、来日したキャメロン英首相と皇居・宮殿で会見された。首相は5月に開催されるエリザベス女王の即位60年祝賀行事への招待の意向を改めて伝え、陛下は「女王陛下の心遣いに感謝します」と応じられた。

いずれも、2012年4月11日の朝刊で、毎日新聞と産経新聞は「伝言を伝える」を用いているが、朝日では、「伝言」を「伝言として」という形で使い、「伝える」とは隣接しない表現をとっている。読売では、「伝言」と類義の「メッセージ」を用いているが、単純な名詞であり、重複を感じさせない。日経も「伝言」を用いることなく表現している。「伝言を伝える」に抵抗がなければ、毎日や産経のように言い表すことになるが、「{伝える／伝えた} ことばを伝える」というような関係性が意識されて、「伝言を伝える」が使いにくいのであれば、朝日、読売、日経などのような表現をとるとというのが、現実的な方策となる。筆者個人としては、「伝言」行為にかかわる主体の関係性が複雑に感じられることもあり、「伝言を伝える」という表現は使いこなすことができない。読売のように、「伝言」でなく「メッセージ」という外来語を用いた、「メッセージを伝える」のほうが使いやすい。

先の大学生へのアンケートに見られるように、ある表現に重複を感じるかどうかには、ゆれがあり、「重言であり×」と「重言ではなく○」のうち、どちらか一つの考えで統一するのは困難である。それゆえ、上記のように、そもそも問題の生じない言い方というものを探ることも大切である。

4.6.2 「～(を)する」への言いかえで事足りるケース

「食事を食べる」は、「食事」がサ変動詞語幹であるため、動作を表す際は、「食事(を)する」と表現すれば、重複感をさけることができる。前述の「伝言」や「挙式」「貯金」「捺印」「借金」のほか、「布陣」「負担」も同様である。ただし、「布陣」や「負担」については、「～(を)する」の形だけでなく、「布陣を敷く」「負担を負う」の形で実際に用いられることも多く、これらについては、以下で別に見ることとする。

4.6.3 ほかの名詞にかえにくいケース

「犯罪」「被害」など、ほかの名詞に置きかえにくいと多くの話者に意識されている語がいくつかある（「罪を犯す」「害を被る」などの言い方を否定するわけではないが）。その場合、重複感を和らげるために「犯罪を行う」「被害を受ける」など、動詞をほかのものにかえて表現することがあり、「彫像を彫る」に対して「彫像をつくる」という言い方がなされることも多い。また、「布陣を敷く」に対して「布陣を並べる」「(3-5-2の)布陣で臨む」な

どの言い方をとるのも同様である。ただし、「布」を除いた「陣」は、合戦・戦争の場合に用いられる語であり、スポーツなどでは「背水の陣を敷く」を除くと、「陣を敷く」が使いにくい。そうすると、「布陣」を「陣」とは別の意味合いをもつ名詞として使う意義が感じられ、「布陣を敷く」の用例が少なからず見られる結果につながってくる。

「犯罪を行う」は、第三者の立場から客観的に犯罪行為を記述する際に適しており、新聞などのほかに、たとえば『平成 25 年度版 警察白書』では、次のような表現がとられている。

- 日本国内で犯罪を行い、国外に逃亡している者及びそのおそれのある者（以下「国外逃亡被疑者等」という。）の数は依然として多い。
- 暴力団は、企業や行政機関を対象とした不当要求、振り込め詐欺、強盗、窃盗のほか、各種公的給付制度を悪用した詐欺等、時代の変化に応じて様々な資金獲得犯罪を行っている。

「犯す」には、悪いことをするという意味が含まれるが、その点を表現したい場合に次のような言い方が選ばれることもある。

- ドロップアウトした子どもが犯罪に手を染めるケースもあるといい
(読売新聞。2014. 4. 26)
- いったん犯罪に手を出してしまっても、自らの意思でやめれば、罪を減免する。
(読売新聞。2011. 6. 12)

ここまで見てきた例と比べると、「負担を負う」は傾向が異なり、「負う」あるいは「担う」以外の動詞を用いた言い方が見出しにくい。

- これらの負担を負う若者の約 40%は失業者か非正社員になっています。
(朝日新聞。2013. 3. 30)
- 将来世代に不当で過大な負担を負わせるべきではない (朝日新聞。2013. 9. 11)

「これらの」「過大な」など、修飾要素が伴うことも多く、この場合、「負担する」の形は

とりにくい。このような、名詞としての「負担」は、意味的には、抽象的な「荷物」ともとらえられるが、「引き受けて自分の仕事・義務とすること。その仕事・義務、またはそれに対する責任」（『岩波国語辞典 第7版新版』）と記述されるように、「仕事」「義務」「責任」などの意味を要素として含んでおり、代わりになる適当な名詞がない。また、「負」「担」のいずれかを名詞として用いるわけにもいかないのが、重複を感じたとしても、ほかの表現をとることが極めてむずかしいケースである。なお「犯罪」など名詞要素と動詞要素とからなる二字漢語に見られる重複とは、語の構造が異なり同列に扱えないと見ることもできるかもしれないが、「名詞+を+動詞」の形式に見られる重複である点は共通しており、重言の例としてあげられることもあるので、一括してとりあげることとした。

4.7 おわりに

以上、ここでは、動作を示す漢語名詞と和語動詞との組み合わせについて検討し、漢語名詞をほかの名詞にかえたり、和語動詞をほかの動詞にかえたりすることによって、重複感を和らげられるかどうかを、それぞれの組み合わせについて探るべきであることを主張した。

重言は、慣用的に認められているものもあれば、会話の中で強調のために行われるものもあり、すべて排除すればよいというものではない。しかし、その一方で、単なる不注意などによって生じる重複に関しては、ある程度、厳しく修正を促すことが、ことばを丁寧にするという大きな目的のためには、必要だと考える。また、通常は用いるべきでない表現であるからこそ、笑いを目的とした芸や文章の中であえて用いられたときの効果が大きくなるのだともいえよう。なお、「まだ未解決」や「約 300 人ほど」など、接頭辞的な一字漢語と、同様の意味をもつ副詞や名詞との間に見られる重言については、IVで接頭辞について述べる際にとりあげる。

資料 重言と言いかえ

重言（重複表現）	備考（言いかえやコメント）
合性が合う（奥）	合性がいい
相許し合った仲（時）	相許した仲。許し合った仲
アタマ・バカ（奥）	バカ
頭をうなだれる（橋）	うなだれる

新しい発見でした（奥）	ひとつの発見でした。わたしにとって発見でした
後で後悔する（村・時・読）	後悔する。後で悔いる。後で悔やむ
誤って川に落ちた（奥）	方向を見失い川に落ちた
誤って転落（奥）	遊びに夢中になり転落 ※「誤って呼吸器を外し」「誤ってドングリを食べ」などとは、使い方が違う（奥）
あまり聞きなれない（奥）	聞きなれない
あらかじめ予告する（時）	予告する。あらかじめ告げる
新たに新設する（時）	新設する。新たに設ける
改めて再認識（奥）	改めて認識
（政情は）安定化に向かう（榊）	（政情は）安定に向かう
遺産を残す（村）	財産を残す
石つぶて（村・読）	つぶて
一月元旦（榊）	元旦
一時半過ぎ頃（村・読）	一時半頃。一時半過ぎ
一年中常夏（奥）	常夏
一番最後（村・時）	最後
一番最初（奥・榊・柴・村・時）	一番初め。最初。先ず最初に
いちばん初め（榊）	初め
一番ベスト（村・時）	一番。ベスト
一望のもとに見える（奥）	一望できる
一切を一任する（村・時）	一切を任せる。一任する
一層ベストを尽くす（橋）	※「ベスト」は最善，最良で，これを上回る段階はない（橋）
命がけで死守（奥）	死守
命が無事（奥）	無事
いまだ未解決（橋）	未解決
いまだに未完成（時・読）	未完成。いまだ完成していない。まだ完成して

	いない
いまだに未達成 (村)	未達成。まだ達成していない
いまだ未定 (奥)	未定
今の現状 (村・読)	現状。今の状態。今の状況
違和感を感じる (時)	違和感がある。違和感を覚える
後ろから羽交い締め (にする) (橋・共・時・読)	羽交い締め
後ろへバックする (村)	バックする。後退する
沿岸沿い (榊・村・朝・時)	沿岸。海岸に沿って。海岸沿い。海沿い
塩害の被害を受けました (奥)	塩害にあいました
縁談話 (奥)	縁談
炎天下のもと (池・榊・村・朝・時・読)	炎天下。炎天下に。炎天のもと
豌豆まめ (奥)	豌豆
多くの人材が輩出 (村)	多くの人材が世に出る。人材が輩出
屋上屋を重ねている (奥)	屋上屋なんです。屋上屋を架している
行った行為 (村)	行為
お歳暮の贈り物 (村・時)	お歳暮 ※「お中元の贈り物」も重言 (時)
思いがけないハプニング (村・読)	ハプニング。思いがけない出来事
およそ一時間ほど (村・時・読)	一時間ほど。約一時間。およそ一時間 ※「およそ千数百円」「およそ数万人」「およそ3キロ程度」も重言 (時)
改訂版に改める (村)	改訂する
快方の方向へ向かって (奥)	快方に向かって
帰って来れることができました (奥)	帰って来ることができました
各自めいめい (村)	各自。めいめい
隔週置きに (時)	隔週で。一週置きに
各世帯ごとに (読)	世帯ごとに。各世帯で
加工を加える (榊・村・時・読)	加工する。一部加工する
過去に前例がない (時)	前例がない。過去に例がない

重ねるとピタリと重なる (奥)	重ねると合致する。合わせるとピタリと重なる
火事を鎮火する (村)	鎮火する
過信しすぎる (奥・読)	過信する
各国ごとに (時)	国ごとに。各国で
勝った勝因 (奥)	勝因
かねてから (村・朝・時・読)	かねて
かねてからの懸案 (村)	懸案
過半数を超える (共)	半数を超える
我慢に耐える (村)	耐える。我慢する
関係各位の方々 (奥)	関係各位
元旦の朝 (柴・橋・時・読)	元旦。元日の朝
擬装トリック (奥)	トリック
期待して待つ (池)	期待
既分譲済 (国)	分譲済
旧交を交わす (村)	旧交を暖める
鳩首を集めて協議 (榊・村・時)	鳩首協議。鳩首密議
強制的に連行 (奥)	連行
京都に入洛する (榊)	入洛する
共有で所有する (村)	共同で所有する。共有する
許可が許されている (奥)	所有が許されている
極限を極める (村)	極限に達する。極限を究める
挙手を挙げる (奥)	挙式する
ぐっすり (と) 熟睡する (村・読)	ぐっすりと眠る。熟睡する
車の車間距離 (村)	車間距離
血痕の跡 (村)	血の跡
三十周年目 (奥)	三十周年。三十年目
決着が着く (村)	決着する。決着をみる。決まりがつく
決定的な決め手を欠く (時)	決め手を欠く
懸念の意を表明 (村)	懸念を表明

嫌悪感を感じる (村)	嫌悪感がする。嫌悪を感じる
後遺症が残る (村)	後遺症が出る。後遺症がある。後遺症をもたらす
木枯らしの風の吹く中 (榊・村)	木枯らし吹く中
後光の光 (奥)	後光
国歌斉唱を歌う (奥)	国歌を斉唱する。国歌を歌う
古来から (村・朝・共・読)	古来。古くから
孤立化させる (村)	孤立させる
最高記録をマークする (村)	最高記録を出す
最後の追い込み (村)	追い込み。最後の頑張り
最後の切り札 (奥・村)	切り札。とっておきの手
最後の天王山 (奥)	天王山
再婚し直す (村)	再婚する
再出発し直す (村)	再出発する。出発し直す
再照明を当て直す (村)	照明を当て直す。再び照明を当てる
最初の書き出し (村・読)	書き出し
先に先取点を (奥)	先取点を
昨夜来の雪 (村)	夜来の雪
さじ加減を加える (村)	さじを加減する
ざっと数万人 (村・読)	数万人
座を失って失脚 (村)	座を失う
辞意の意向を固める (村)	辞意を固める
仕送りを送って (奥)	仕送りをして
射程距離 (内) に入る (村・朝・共・読)	射程内に入る。射程 (圏) に入る。射程圏内に入る
就任七カ月経つ (奥)	就任七カ月
十分に充足する (村)	充足する
従来から (より) (奥・村・朝・共・読)	従来。以前から。以前より。これまで
入水自殺 (奥)	入水 (じゅすい)

十周年目の設立記念日に当たり（奥）	設立十周年に当たり
出身母校（奥）	母校
食事を食べる（村）	食事をする。食事をとる
初対面で会う（村）	初対面
初歩から手ほどき（村）	手ほどき
新採用をたくさん採りました（奥）	新採用者が増えました
すべてクリア（奥）	クリア
すべて完食した（奥）	完食した。すべて食べた
成功裏のうち（に）（榊・橋・村・朝・共・時）	成功裏に。成功のうちに
製造メーカー（榊・村・読）	メーカー。製造会社
製薬メーカー（共・時）	製薬会社
雪辱を晴らす（奥・時）	雪辱を果たす。雪辱する。屈辱を晴らす
戦後以来初めて（榊・村）	戦後初めて
戦争の戦局（村）	戦争の局面
全部の役員が総辞職（榊）	役員が全員辞職
全役員が総辞職（村）	役員が全員辞職。役員が総辞職
前夜来の雨。昨夜来の雨（村・読）	夜来の雨。昨夜からの雨。前夜からの雨
壮観なながめ（読）	壮観
そもそもの発端（読）	発端
第一日目（村・共・時・読）	第一日。一日目
第一番目（榊）	※気にならない（榊）
第一回目（読）	第一回。一回目
第三番目（池）	※どちらか片方でいいのです（池）
対前年度比（時）	対前年度。前年度比
第二回目（奥）	第二回。二回目
大変深刻に重く受けとめており（奥）	重く受けとめており ※もし強調表現として必要であるならば、「大変」か「深刻」か、どちらか一語でよいでしょう（奥）

互いに交換する (村)	交換する
多額の巨費 (村)	多額の費用
ただ今の現状 (時)	現状。ただ今の状態
食べられることができ (奥)	食べられる。食べることができる
単純なイーミーミス (村)	単純なミス
断腸をえぐるような思い (村)	断腸の思い
築百五十年経って (奥)	築百五十年
血の出るような血税 (村)	血税
中継がつながって (奥)	中継で (お伝えします)
中国の窮極の極意 (奥) ※料理に関して	中国料理の極意
貯金を蓄える (朝)	貯金する
ちょっと小耳にはさんだ (奥)	小耳にはさんだ
提携を結ぶ (時)	提携する
できる範囲の中で (奥)	できる範囲で
手ほどきを教える (村・時)	初歩を教える。手ほどきをする
電気の電源 (村)	電源
伝言を伝える (村・読)	言葉を伝える。伝言する
店頭の前 (奥)	店頭
突然卒倒する (時)	卒倒する
捺印を押す (池・榊・村)	捺印する
何よりも一番 (です) (榊・村)	何よりです。一番です ※それほどおかしいとは思わない (榊)
なれそめの初め (村)	なれそめ
二十九年ぶり (奥)	二十九年ぶり
日程はいまだ未定 (村)	日程は未定
二の舞を繰り返す (榊・村・時)	二の舞を演ずる。二の舞を演じる
ネットワーク網 (時)	ネットワーク
年内中 (に) (池・国)	年内 (に)
残り香を残す (村)	香りを残す。残り香を漂わす

排気ガス (村・共・時・読)	排ガス。排出ガス
バイパス道路 (奥)	バイパス
白亜の壁 (読)	白い壁。白塗りの壁
初めて創刊 (村)	創刊
旗本直参 (榊)	旗本
はっきりと断言 (村)	断言
発熱を出しまして (奥)	発熱のため
発売開始 (池・国)	発売。売り出し
ハンコを押捺する (村)	判を押す。押捺する
犯罪を犯す (池・榊・橋・村・時)	罪を犯す。犯罪をなす。犯罪をおこなう
伴走者を伴って (村)	伴走者とともに
被害を被る (池・榊・橋・村・共・時・読)	被害を受ける。被害にあう ※厳密に言えば「被害を受ける」という言い方も重ね言葉(村)
引き続き, 続行 (榊・村)	※文章では目ざわり。アナウンスなど会話語では, それほど気にならない (榊)
日ごろつねづね (村)	日ごろ。つねづね
ひそかに私淑する (榊)	私淑する
人の遺体 (奥)	(男性の) 遺体
非凡な才能に <u>た</u> けている (榊・村)	非凡な才能の
飛来してくる (国)	飛来する。飛んで来る
覆面をかぶって (奥)	覆面して
布陣を敷く (橋・村・時)	陣を敷く。陣を構える
再び再会 (奥)	再びお会いする。再会
プレゼンターの方 (奥)	※「方」は要りません (奥秋)
平均アベレージ (村・時・読)	平均。アベレージ
募金を募る (時)	寄付金を募る
ほぼ一年ぐらいまえ (村)	一年ぐらい前。ほぼ一年前
本を読書 (村)	読書
毎月ごと (読)	毎月。月ごと

毎日曜日ごと (に) (村・時)	日曜ごと。毎日曜。毎日曜日に。日曜日ごとに
前へ前進する (村)	前へ進む
まず最初に (村)	最初に
まず一することが先決 (村)	一することが先決。まず一すること
まだ時期尚早 (村・時・読)	時期尚早
まだ未解決 (共・時)	未解決
まだ未熟 (である) (榊・村)	未熟
まだ未定 (奥・橋・時)	未定
まだ未提出 (村)	未提出
真っすぐに直進 (奥)	直進
満十周年 (橋)	満十年。十周年 (橋)
満天の星空 (時・読)	満天の星
満面に笑顔を浮かべる (読)	満面に笑みを浮かべる
水を放水 (村)	放水
みぞれ交じりの雨 (雪) が降る (奥・読)	みぞれが降る
もう一度くり返す (奥)	くり返して言う
もう一度会社を復活 (奥)	会社を復活。会社を再建
もう一度再婚 (奥)	もう一度結婚
最も最大 (村)	最大
最も最適 (村)	最適
約一時間ほど (村)	一時間ほど。約一時間
約一年たらず (村)	一年足らず。約一年
約一年ほど (読)	約一年。一年ほど
約十五年ぐらい (奥)	十五年ぐらい
約十分ほど (共)	約十分。十分ほど
有事あるごとに (村)	事あるごとに
有名な名士 (奥)	名士
有名を馳せる (村)	名を馳せる
予感さえ感じられます (奥)	予感さえします

予算案が成立 (村)	予算が成立
余分なぜい肉 (村・時・読)	ぜい肉。余分な肉
よりベター (村・読)	ベター
来客が来られた (村)	来客が見えた
楽勝で勝てた (奥)	楽勝できた
楽観視 (榊・橋)	楽観 (榊・橋)
ラッシュアワー時に (時)	ラッシュアワーに。ラッシュ時に
離発着 (橋・朝・共)	離着陸。発着
療原を焼く炎 (村)	療原の火
留守を守る (村)	留守番をする。留守を預かる
連日暑い日がつづく (村)	暑い日がつづく。連日暑い
わきで傍観する (読)	傍観する
一緒に心中 (奥)	心中
わだちの跡 (時・読)	車輪の跡。わだち

〔注〕池＝池上 (2011)。奥＝奥秋 (2011)。国＝国広 (2010)。榊＝榊原 (1987)。柴＝柴田 (2004)。橋＝橋本 (2004)。村＝村石 (1992) / 朝＝『朝日新聞の用語の手引』 (2010)。共＝『記者ハンドブック 第12版』 (2010)。時＝『最新用字用語ブック 第6版』 (2010)。読＝『読売新聞用字用語の手引 第4版』 (2014)。一覧では、引用部分をのぞき、数字は漢数字でそろえた。また、二重敬語の「お～になられる」など、敬語にかかわる例は除外した。

5. 漢語略語の意味・用法について

5.1 目的と対象

略語は「既存の語の一部を省略してより短い語形をつくる造語法を縮約といい、縮約によって作られる語を略語という」（『日本語学研究事典』明治書院）と定義される。略語の作り方には、上略、中略、下略、「複合語を作っている各要素の一部分を省略する」（以下、この方式を先行研究にならい「多項省略」と呼ぶ）などがあるとされ、それぞれ「アルバイト→バイト」「警察官→警官」「テレビジョン→テレビ」「自宅浪人→宅浪」などが例としてあげられている。

本節は、「家裁（家庭裁判所）」（以下、カッコ内は略語の元の語を示す）「付属（付属学校）」など、主に漢字三字以上の元の語を二字漢語の形にした漢語略語について、使い分けや意味・用法の面から検討する³⁴。「独禁法（独占禁止法）」のように三字以上の略語もあるが、二字の略語には、日常的に使われる語が多くあるため、これを中心的にとりあげることとした³⁵。略語の作り方については、いくつもの研究があり、漢語において、その数が多いことも指摘されているが、いったん作られた略語とその元の語との使い分けを問題にしたものは、ほとんど見られない。この点で国立国語研究所（2004b, p. 95）の「本来の言い方が意識される場合には、それとの対比の中で、格調に欠ける俗っぽい言い方としての側面が浮かび上がってくることも確か」という指摘のような、改まった場では元の語、私的な場では略語でも、といった見方は参考になる。「携帯が壊れた、えー、携帯電話が壊れたので」（文化放送。2011. 7. 6）のような元の語への訂正がアナウンサーによって行われるのは、俗っぽい言い方を避ける意識のあらわれだととらえることができる。また、受け手の理解に対する配慮も働いているものと見られる。略語の使い方に関する論考が希少であることを考慮し、本節では、多くの漢語略語をとりあげ、議論のための材料を提供することを目的とする。

分析の対象とする二字漢語として、筆者の調査で『分類語彙表増補改訂版』から約23,000語を抜き出した。これらについて、『岩波国語辞典 第7版』（『岩波』）、『新選国語辞典 第9版』（『新選』）、『三省堂国語辞典 第6版』（『三国』）、『明鏡国語辞典 第2版』（『明鏡』）、『新明解国語辞典 第7版』（『新明解』）、『新潮現代国語辞

³⁴ 略語の作り方については、国立国語研究所（1988）、石野（1993）、窪園（2002）などが詳しい。

³⁵ 「大福」（大福餅）など、元の語に漢語以外の語種が含まれる場合であっても、略語においては二字漢語として処理した。

典 第2版』（『新潮』）において、略語としての記述が見られるかどうかを調べ、842語を抽出した。この842語の中に含まれない語をとりあげる場合は、初出の際にアスタリスクを語の脇に付する。

5.2 略語使用の実態について

5.2.1 新聞をもとにした使用実態の確認

略語とその元の語について（略語と考えるべきか迷うような例も含めて、以下では、便宜上「略語」「元の語」を統一的に使用することとする）,

- ・ 略語も元の語も使用されるグループ
- ・ 元の語は使われるが、略語はあまり使用されないグループ
- ・ 略語は使われるが、元の語はあまり使用されないグループ
- ・ 略語も元の語もあまり使用されないグループ

のように区別し、『CD-HIASK 2003朝日新聞記事データベース』（「朝日」）で用例を調査した。国立国語研究所（1961）では、「協会」と「教会」，「女性」と「女声」のような同音語について、各同音語セットを検討する観点として、「ともに一般語である」という基準を設け、「話しことばや新聞などで、一般に使われ、特に解説や注釈なしに通用すると思われる語を「一般語」とし、古語や特殊な専門語などは、「非一般語」とし」と説明している。本節で、新聞を用いて、略語と元の語を比較する上でも、このような区別は有効であると考え、前述のような4分類を行った。ただし、一般語か非一般語かの判定について、国立国語研究所（1961）では、「操作者の主観的な判断にゆだねられてしまう」という問題点を指摘している。本節では、筆者個人で同様の判断を行う危険性を考え、用例の数を基準に用いた。「朝日」での用例が、略語・元の語ともに10回以上であれば、「略語も元の語も使用されるグループ」、一方が10未満なら「元の語は使われるが、略語はあまり使用されないグループ」か「略語は使われるが、元の語はあまり使用されないグループ」、ともに10未満なら「略語も元の語もあまり使用されないグループ」とした。「10」という数をもとにするのは、国立国語研究所（1976）において、3種の新聞1年分について、使用度数が10以上の漢字については、「全体での順位と使用度数」や「使用された用法の種類」などを、詳細に記述しているのに対し、使用度数9以下の漢字について

は、「使用された語の種類と、それぞれの使用度数」のみを記述しているというように、一ケタか二ケタかで、扱いに区別を設けていることを参考にした。もちろん、国立国語研究所（1976）とは、10で区切る目的が異なるので、本節での分類の妥当性を保証するものではないが、略語と元の語について、同様の観点で検討した研究がない現状に鑑み、一応の目安として用いることとした。

分類の出発点に新聞を用いるのは、田中（1999）が指摘するように、新聞が略語の生産・使用の代表的な資料の一つと考えられるためである。田中（1999, p. 292）は「スペースに、きびしい制限のある新聞は、明治以来、数多くの略語・略称を生み出し、普及させ、そして一般語彙として定着させてきた」と述べ、「軍縮」「原爆」「産休」「産直」「特訓」などを例示する。このような略語の問題点については、5.5で述べる。

使い分けに関して、特に問題とすべきは、「略語と元の語も使用されるグループ」であり、また、改まった場面では、元の語を使用すべきだという、略語についての一般的な見方からすれば、その反例となりうる「略語は使われるが、元の語はあまり使用されないグループ」が問題となるが、その前に、「略語も元の語もあまり使用されないグループ」と「元の語は使われるが、略語はあまり使用されないグループ」について概観しておく。

5.2.2 略語も元の語もあまり使用されないグループ

略語も元の語も新聞でさほど使用されない例を表に示すが、「七味（七味唐辛子）」など、日常的には使う語と「肋膜（肋膜炎）」のような専門的な語が混在するので、二つめの資料として『例解新国語辞典 第8版』（『例解』）を使い、

- ア 二字漢語が略語として記述されている
- イ 類語や関連語として、略語と元の語の関係が示されている
- ウ 略語と同様の意味が、二字漢語の意味の一つとして記述されている
- エ 二字漢語か元の語の項目はあるが、略語の場合の意味は記述がない
- オ 項目がない

に区分した。『例解』を使用したのは、同辞典冒頭で「日本語の言語生活にとって基礎となる語句」を採用したとあり、古めの語も収める必要のある、上述の一般向けの国語辞典よりも、現代語に範囲がしぼれると考えたのと、「中学校で使われる最新の教科書をはじ

め、新聞・テレビや小説・評論文などによく出てくる」語を収めており、新聞のみを対象とした場合の不足を補うことができると期待されるためである。

表1 「略語も元の語もあまり使用されないグループ」の略語・元の語（345例）

<p>ア（34例）：⁵活動（活動写真）¹御意（御意のとおり）²近視（近視眼）⁶血沈（赤血球沈降速度）¹公安（公安委員会・公安調査庁・¹公安警察）⁵七宝（七宝焼き）¹私服（私服刑事）⁶写植（写真植字）⁵準急（準急行列車）⁵人絹（人造絹糸）⁶操短（操業短縮）³太鼓（²太鼓結び・³太鼓持ち・¹うちわ太鼓）⁵大黒（大黒天）⁴泰斗（泰山北斗）⁵大福（大福餅）¹茶巾（¹茶巾ずし・¹茶巾絞り）²茶番（茶番狂言）²跳躍（跳躍競技）³抵抗（²電気抵抗・¹抵抗器）³田楽（³田楽豆腐・³田楽焼き）¹特技（特殊技術）²屠蘇（屠蘇散）⁴南蛮（⁴南蛮煮・¹南蛮辛子）⁵入超（輸入超過）²罷業（同盟罷業）³弁天（弁財天）⁵奉書（奉書紙）¹本位（本位貨幣）⁵無機（⁵無機物・⁴無機化学・²無機化合物・¹無機質）⁶無電（⁶無線電信・⁴無線電話）²盲腸（盲腸炎）¹陽暦（太陽暦）⁶流感（流行性感冒）³六法（六法全書）</p>
<p>イ（16例）：¹案分（案分比例）³海綿（海綿動物）¹逆光（逆光線）²牽牛（牽牛星）¹祭日（祝祭日）²七味（七味唐辛子）²織女（織女星）⁶赤沈（赤血球沈降速度）⁵代数（代数学）²投擲（投擲競技）¹版權（出版権）⁵付属（³付属学校・¹付属の学校・¹付属小・中・高等学校・¹付属幼稚園）³仏文（²フランス文学（科）・¹仏文学・¹仏文学科）³仏滅（仏滅日）¹融点（融解点）¹洋紙（西洋紙）</p>
<p>ウ（26例）：³遠視（遠視眼）¹温泉（温泉場）²外電（外国電報）¹歌仙（歌仙連歌）²活版（活版印刷）¹記事（記事文）¹喜捨（歓喜施捨）¹兄弟（兄弟分）³見台（書見台）¹紅梅（紅梅色）¹黒点（太陽黒点）¹障子（明り障子）¹城代（城代家老）¹脊椎（脊椎骨）¹先勝（先勝日）¹先負（先負日）³大安（大安吉日）⁴大吉（大吉日）¹断章（断章取義）²中立（局外中立）²鈍行（鈍行列車）¹複線（複線軌道）²北画（北宗画）¹門弟（門弟子）¹夜学（夜学校）⁴陽転（陽性転移）</p>
<p>エ（150例）：¹一気*（一気飲み）²一向（一向宗）¹一種（¹第一種郵便物・¹第一種運転免許）¹一斉（一斉取り締まり）⁴陰金（陰金田虫）¹印税（印紙税）¹羽化（羽化登仙）¹絵本（絵本番付）⁵往復*（往復切符）¹往来（往来物）¹音響（音響効果）²開襟（開襟シャツ）¹開港（開港場）¹懐中（懐中物）²餓鬼（餓鬼道）¹火災（火災保険会社）¹割烹*（割烹店）¹感冒（流行性感冒）¹期末（学期末）³叫喚（叫喚地獄）¹教養*（教養課程）¹虚実（虚虚実実）³巾着（腰巾着）²紅蓮（紅蓮地獄）²軍記（¹軍記物・²軍記物語）³罫線（罫線表）¹軽便（軽便鉄道）¹下足（下足番）³月賦*（月賦販売）¹現業（現業庁）³献上（献上博多）²現物（現物取引）¹高音（高音部）¹効果（舞台効果）²広</p>

角（広角レンズ）²交換（²交換手・¹交換台）¹口述（口述試験）¹校正（校正刷り）¹拘束（拘束時間）²黄道（黄道吉日）⁴御託*（御託宣）¹琥珀（琥珀織）⁴五目（⁴五目ずし・³五目飯・⁴五目並べ）
²五輪（五輪塔）⁵金剛（⁵金剛石・²金剛砂・²金剛身・¹金剛杵・¹金剛神）⁴自在（自在鉤）²自作（自作農）³磁石（磁石盤）²自動（自動詞）¹赤銅（赤銅色）²写真（活動写真）¹赤口（赤口日）¹朱印（朱印状）¹遵法（遵法闘争）³蒸気（²蒸気船・¹川蒸気船・¹蒸気機関）⁵焦熱（焦熱地獄）³小品（小品文）²正味（正味値段）¹所轄（所轄警察署）⁴所作（所作事）¹心靈（心靈現象）¹水準（水準器）¹水上（水上競技）²水洗*（水洗便所）¹水疱（水疱疹）¹水路（送水路）¹正視（正視眼）²静物（静物画）¹石版（石版印刷）¹全権（全権委員）¹線香（線香代）¹前栽（前栽物）²善哉（善哉餅）²専制（²専制政治・²専制政体）⁴速記（速記術）¹大学（大学寮）²大根*（大根役者）³大樹（大樹將軍）³代書（代書人）¹体制（権力体制）¹太平（太平楽）⁴内裏（内裏雛）³他動（他動詞）²他力（他力本願）²単記（単記投票）¹炭酸*（炭酸水）²単利（単利法）²茶筌（¹茶筌髪・¹茶筌切り）
¹中日（中日辞典）¹長官（地方長官）¹追求（追加請求）³鉄火（²鉄火場・²鉄火打ち）¹鉄砲（鉄砲巻き）¹電機（電気機関車）¹天然*（天然ぼけ）⁴天秤（天秤棒）⁴伝馬（伝馬船）³電離（電気解離）
¹動画（動画映画）¹等外（等外官）¹道化（道化方）¹透視（X線透視）¹都下（東京都下）¹度数（頻度数）³緞帳（²緞帳芝居・¹緞帳役者）³南画（南宗画）²納戸（納戸色）¹日中（日中辞典）¹任意（任意出頭）¹人参（朝鮮人参）³年季（年季奉公）²俳諧（¹俳諧歌・¹俳諧連歌・¹俳諧の連歌）²陪席（陪席裁判官）¹博士（文章博士）³八分（村八分）³彼岸（彼岸会）⁴富強（富国強兵）¹貧血（脳貧血）¹副食（副食物）¹譜代*（譜代大名）²扶持（扶持米）³変格（変格活用）²変態*（変態性欲）¹放下（放下僧）⁴法貨（法定貨幣）¹封建（封建制）¹坊主（茶坊主）⁴紡績（¹紡績会社・³紡績糸）¹痲瘡（植え痲瘡）¹宝塔（多宝塔）¹防風（浜防風）⁴本草（本草学）¹万歳（千秋万歳）¹未決（¹未決監・¹未決囚）¹冥加（冥加金）⁴明朝*（明朝体）²明朝活字・³明朝体）²無産（無産階級）²無双（無双窓）¹名城（名古屋城）¹面相（面相筆）⁴門徒（門徒宗）¹門閥（門閥家）¹約款（普通契約約款）²力士（金剛力士）¹立体（立体図形）²両刀（両刀遣い）¹臨海（臨海学校）¹林間（林間学校）
¹連記（連記投票）²論理（論理学）

才（119例）：²愛染（愛染明王）¹異体（異体字）¹一尉（一等・陸（海・空）尉）¹一見*（一見客）
²一浪*（一年浪人）¹一士（一等・陸（海・空）士）¹一曹（一等・陸（海・空）曹）¹一天（一天下）
¹院殿（院殿号）¹淫売（淫売婦）³英和*（英和辞典）¹液肥（液体肥料）¹温感（温度感覚）¹回国（回国巡礼）¹会堂（教会堂）²学参*（学習参考書）¹学卒（学校卒業者）²花柳（花街柳巷）²気胸（²気胸療法・¹人工気胸術）²擬餌（擬餌針）⁴貴紳（貴顕紳士）¹急電（至急電報）¹旧派（旧派劇）⁴

踔躅（踔天踔地）¹漁灯（魚灯油）¹金紗（¹金紗御召・¹金紗縮緬）²今上（今上天皇）¹空冷*（空気冷却）²軍票（軍用手票）¹狛下（狛座下）⁴月旦（月旦評）²下馬（下馬先）³券面（券面額）¹合歡（合歡木）¹高工（高等工業学校）¹高商（高等商業学校）³荒神（三宝荒神）⁴後備（後備役）²極熱（極熱地獄）¹国府（国民政府）¹恨事（痛恨事）¹西海（西海道）²祭文（¹歌祭文・²祭文語り）⁵索道（架空索道）¹三界（三千大千世界）¹三業（三業地）¹三択*（三者択一）¹参着（参着払い）¹三百（三百代言）¹輜重（輜重兵）²卓袱（卓袱料理）¹四半（四半敷き）¹持仏（¹念持仏・¹持仏堂）¹社線（会社線）¹袖珍（袖珍本）²手拓（手沢本）¹正覚（無上等正覚）¹省線（省線電車）¹浄土（浄土宗）¹正法（正法時）²諸子（諸子百家）¹腎炎（腎臓炎）¹信士（清心信士）²正格（正格活用）¹西哲（西洋哲学）¹席亭（席の亭主）²接遇（応接処遇）¹善男（善男子）¹善女（善女人）¹禪門（禪定門）²側転*（側方転回）¹宅送（宅配運送）¹宅浪（自宅浪人）¹単一*（単一型乾電池）²単三*（単三型乾電池）¹単組（単位組合）²単二*（単二型乾電池）²地文（地文学）²中執（中央執行委員（会））³長欠*（³長期欠席・³長期欠勤）¹蝶蝶（蝶蝶髻）¹電探（電波探知機）⁵電蓄（電気蓄音機）¹電停（電車停留所）¹天魔（天子魔）³天目（²天目茶碗・¹天目台）³桐油（¹桐油合羽・³桐油紙）¹特出（特別出演）¹特進（特別進学）¹特薦（特別推薦）³特電（特別電報）²特配（特別配当）²特講*（²特別講義・²特殊講義・¹特別講習）²内債（内国債）¹納所（納所坊主）¹南海（南海道）²肉芽（肉芽組織）¹発泡（発泡薬）²半跏（半跏趺坐）²繁縷（繁文縷礼）³風琴（手風琴）⁶物療（物理療法）¹幣制（貨幣制度）³兵籍（兵籍簿）¹法文（法学部・文学部）³紡毛（紡毛糸）¹母艦（¹航空母艦・¹潜水母艦）⁵本膳（本膳料理）¹抹香（抹香鯨）¹万能（万能鋏）²民鉄（民営鉄道）⁵盟休（同盟休校）⁴遊資（遊休資本）¹郵税（郵便税）¹楊柳（楊柳縮緬）³両部（両部神道）¹露語（露西亜語）⁵肋膜（肋膜炎）³和英*（和英辞典）

〔注〕略語の左肩の数字は、その語を略語として扱う辞書の数。亀甲カッコの中の語は、『例解』以外の、前述の6辞書において略語とされているもの。

日常的に使われる「大福」「準急」「弁天」「六法」などのほか、「人絹」「七宝」など、専門的な語も多少は略語として立項される。イは（語の左肩の数字に各語ばらつきが見られる点も）、元の語と造語面では無関係の語とも見なしうる語があること、つまり二つの語形を略語関係と扱うか、類義語的な関係として扱うかにおいて、ゆれが生じうることを示している。たとえば「七味」は「七味唐辛子→七味」という省略を経て作られたとも、「七つの薬味」つまり「七味」ということで、一字漢語同士を結合させたものとも解

積されうる。このようなケースは、上略・下略の語に多い³⁶。エ・オには、一部「炭酸」「長欠」など³⁷、一般語としてよさそうなものもあるが、多くはやや専門的な語であり、新聞でもあまり使用されないことを考えるなら、場面によって略語・元の語を使い分けるというよりも、略語・元の語ともに受け手（読み手・聞き手）にとって、なじみのない語である可能性があり、原則として元の語を使う方がコミュニケーション上、支障がないケースだと考えられる。

5.2.3 元の語は使われるが、略語はあまり使用されないグループ

「元の語は使われるが、略語はあまり使用されないグループ」には、159例あり、これも「略語も元の語もあまり使用されないグループ」と同様にア～オに区分した。

表2 「元の語は使われるが、略語はあまり使用されないグループ」の略語・元の語（159例）

ア（22例）： ³ 外来（外来患者） ³ 各停（各駅停車） ⁵ 旧約（旧約聖書） ² 決選（決選投票） ³ 県会（県議会） ⁵ 格子（ ⁵ 格子じま・格子柄・[⁴ 格子戸]） ⁶ 国文（ ⁶ 国文学・ ⁶ 国文学科） ⁵ 獅子（ ⁵ 獅子舞・[² 獅子頭]） ⁴ 水彩（水彩画） ³ 中継（ ² 中継放送・[¹ 生中継]） ⁴ 駐在（ ⁴ 駐在所・[¹ 駐在巡查]） ⁶ 超勤（超過勤務） ⁶ 追試（追試験） ³ 当座（当座預金） ² 百科（百科事典） ⁵ 不動（不動明王） ⁵ 無線（無線通信・[⁵ 無線電話・ ⁵ 無線電信]） ² 毛管（毛細管・[² 毛細血管・ ¹ 毛細管]） ¹ 有機（ ¹ 有機物・[² 有機化学・ ² 有機化合物・ ¹ 有機栽培]） ¹ 有給（有給休暇） ² 有線（有線放送） ³ 郵便（ ³ 郵便物・[¹ 郵便局]）
イ（12例）： ¹ 悪天（悪天候） ³ 英文（イギリス文学・[³ 英文学・ ² 英文学科]） ⁴ 解析（解析学） ² 海道（東海道） ⁴ 幾何（幾何学） ¹ 極点（ ¹ 南極点・ ¹ 北極点） ² 樹脂（合成樹脂） ³ 上水（上水道） ¹ 全速（全速力） ⁵ 町会（町議会） ¹ 法王（ローマ法王） ⁴ 倫理（倫理学）
ウ（2例）： ² 外交（外交員） ¹ 鑑識（鑑識課（班））
エ（93例）： ¹ 王朝（王朝時代） ¹ 戒告（戒告処分） ¹ 海水（海水浴） ⁶ 海兵（ ⁶ 海軍兵学校・ ² 海兵隊） ¹ 外務（外務省） ¹ 下士（下士官） ⁴ 貨物（貨物列車） ¹ 監督（現場監督） ² 漢和（漢和辞典） ¹ 議会（帝国議会） ² 寄宿（ ² 寄宿舎） ¹ 揮発（揮発油） ¹ 業者（請負業者） ¹ 教職（教職課程） ³ 句読（句読点）

³⁶ 二つの語形的一方を略語と認定した場合、それが確かに略語であるのかという問題があるが、一方で、倉持（2006）が「三角」を「三角形」の略とすることについて「実質的に同義であることを示している」と指摘するように、両者が同じ意味だと理解しうる利点がある。略語でないとした場合、略語としてよいかという問題はなくなるが、両者を類義語的だと認めることになり、そのぶん使い分けに関して説明がある。

³⁷ エ、オのうち、筆者が比較的一般的だと判断した略語の右肩にアステリスクを付した。

¹警視(警視庁) ²原子(原子爆弾) ¹航空(航空会社) ¹購買(購買部) ¹国税(国税庁) ⁴西国(西国三十三所) ¹詐欺(詐欺罪) ²茶店(喫茶店) ²山水(山水画) ¹三枚(¹三枚おろし・¹三枚肉) ¹死傷(死傷者) ¹執行(強制執行) ¹事典(百科事典) ¹士道(武士道) ⁵師範(師範学校) ²社会(¹社会科・¹社会学・¹社会主義(党)) ¹十字(十字架) ¹主治(主治医) ¹商議(商工会議所) ¹常任(常任指揮者) ²神器(三種の神器) ²真言(真言宗) ²尋常(尋常小学校) ¹人身(人身事故) ¹人物(人物画) ⁵新約(新約聖書) ¹信用(信用取引) ²心理(心理学) ⁵人力(人力車) ¹水平(水平線) ¹整形(美容整形) ¹生物(生物学) ¹生命(生命保険会社) ¹生理(生理学) ¹世話(世話物) ¹先駆(先駆者) ¹選択(選択科目) ¹全日(全日制) ¹造形(造形芸術) ³装置(舞台装置) ¹対抗(対抗馬) ¹大麻(大麻草) ¹団塊(団塊の世代) ²地平(地平線) ¹通力(神通力) ⁵帝国(大日本帝国) ¹定時(定時制) ¹定番(定番商品) ²糖尿(糖尿病) ¹謄本(戸籍謄本) ⁴都会(都議会) ¹内申(内申書) ¹二階(二階建て) ¹日語(日本語) ¹農繁(農繁期) ²派遣(派遣社員) ¹非鉄(非鉄金属) ¹病原(病原体) ¹風景(風景画) ³腹膜(腹膜炎) ²普選(普通選挙) ¹物交(物物交換) ¹不明(行方不明) ¹望遠(望遠レンズ) ¹法務(法務省) ¹明王(不動明王) ²民主(民主主義) ³無期(²無期懲役・¹無期徒刑・¹無期禁固) ²木綿(¹木綿豆腐・¹木綿糸・¹木綿綿・¹木綿織) ¹猶予(執行猶予) ¹用水(用水路) ¹用務(用務員) ²予備(予備役) ¹立方(立方体) ¹臨床(臨床医学) ¹令状(召集令状) ¹連帯(連帯保証) ¹労働(¹労働者・¹労働組合)

才(30例): ¹医科(医科大学) ¹課徴(課徴金) ¹教練(軍事教練) ¹高女(高等女学校) ¹高配(高配当) ¹稿料(原稿料) ¹国大(国立大学) ¹五十(五十歳) ¹国警(国家警察) ¹参事(参事官) ¹歯大(歯科大学) ⁴失対(失業対策) ¹修論(修士論文) ¹常会(通常国会) ¹職組(職員組合) ¹心経(般若心経) ²心肺(人工心肺) ¹石化(石油化学) ¹全摘(全摘出) ³村会(村議会) ²大社(出雲大社) ¹中文(中国文学(科)) ⁴独文(ドイツ文学) ¹農試(農業試験場) ³八幡(³八幡宮・¹八幡神・¹八幡大菩薩) ³文部(文部大臣) ²薬大(薬科大学) ¹夜中(夜間中学) ²陸士(陸軍士官学校) ²労相(労働大臣)

「略語も元の語もあまり使用されないグループ」と異なり、才に該当する語が少ない。エにおいては、元の語の構成要素となる「貨物」や「人力」などの二字漢語そのものは、一般的な語である場合が多い。エの93語中、元の語が立項され二字漢語の項目がないのは、「外務」「主治」「商議」など25語である。このグループの略語が新聞であまり使用されないのは、「各停」「鑑識」「追試」「有給」「糖尿」「派遣」など、話しことばやくだけたスタイルの文章で用いられる略語であること、「労働{者/組合}」「有機{物

／化学}」など、略語では、どの意味で用いているのか判然としないおそれがあること、などが理由としてあげられる。また、「解析」「原子」「非鉄」「課徴」「海兵」など、専門家には通じて、一般読者になじみのない略語の場合にも、略語をさけて元の語が使用される。

5.3 「略語は使われるが、元の語はあまり使用されないグループ」について

元の語が、一般的に、また専門分野でも使われないなら、改まった場面であっても、略語を使用して差し支えないと仮定される。「朝日」の調査では、147例がこのようなグループに相当する。これを、①専門分野で、元の語を使用することが確認できたもの、②特定の専門分野で使用されるとの確認はとれなかったが、国立国語研究所の現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」で、元の語が10回以上出現するもの、③一般でも専門分野でもほとんど使用されないもの、に分けて表3に示す。

表3 「略語は使われるが、元の語はあまり使用されないグループ」の略語・元の語（147例）

<p>① 96例</p> <p>人：¹一佐（一等陸佐・一等海佐・一等空佐）¹区議（区議会議員）³公使（特命全権公使）¹厚相（厚生大臣）¹広報（広報係）¹住職（住持職）³将軍（征夷大将軍）²蔵相（大蔵大臣）²村議（村議会議員）⁵大使（特命全権大使）¹担任（担任教員）²町議（町議会議員）¹道議（道議会議員）³都議（¹東京都議会議員・²都議会議員）²内相（内務大臣）¹農相（農林水産大臣）¹府議（府議会議員）¹補欠（補欠選手）</p> <p>組織：²営団（経営財団）³県警（¹県警察・²県警察（本部））⁴高検（高等検察庁）³工高（工業高等学校）⁵市銀（市中銀行）²商大（¹商業大学・¹商科大学）²総評（日本労働組合総評議会）⁶地検（地方検察庁）⁶特高（特別高等警察）²農高（農業高等学校）³府警（府警察（本部））¹連合（日本労働組合総連合会）</p> <p>施設：¹官邸（総理大臣官邸）¹教会（教会堂）⁶空母（航空母艦）¹高架（¹高架下・¹高架線）¹神宮（大神宮）¹単線（単線軌道）</p> <p>活動：²一審（第一審）⁵運休（⁵運転休止・⁴運航休止）²回転（回転競技）³滑降（滑降競技）¹犠飛（犠牲飛球）¹競技（運動競技）⁴共闘（共同闘争）¹距離（距離競技）¹空撮（空中撮影）⁴空調（空</p>
--

<p>気調節) ⁵軍拡(軍備拡張) ⁶軍縮(軍備縮小) ¹実況(実況放送) ⁵障害(²障害競走・³障害物競走) ²信販(信用販売) ¹水泳(水泳競技) ⁴図工(図画工作) ³争議(労働争議) ¹体操(体操競技) ¹団体(団体競技) ⁶中退(中途退学) ⁴点滴(点滴注射) ⁵特撮(特殊撮影) ⁴特攻(特別攻撃) ¹複合(複合競技) ¹腹筋(腹筋運動)</p> <p>物：¹印紙(収入印紙) ¹外画(外国映画) ²家電(¹家庭電化・²家庭電器・¹家庭用電気器具・¹家庭用電気製品) ¹願書(入学願書) ²合板(¹合成板材・¹ベニヤ合板) ²辞令(辞令書) ⁶水爆(水素爆弾) ⁴沢庵(沢庵漬) ²電器(電気器具) ¹付録(別冊付録) ³木管(木管楽器) ¹洋画(西洋画)</p> <p>その他：¹陰暦(太陰暦) ¹液晶(液状結晶) ¹回忌(年回忌) ³額面(額面価格) ¹化成(化学合成) ³観音(観世音) ¹結核(¹肺結核・¹結核症) ¹光速(光速度) ³高卒(¹高等学校卒業・²高等学校卒業(者)) ²山陰(²山陰道・¹山陰地方) ⁵産休(出産休暇) ⁵酸欠(酸素欠乏) ¹事件(刑事事件) ²祝日(国民の祝日) ⁵新派(新派劇) ¹選抜(選抜高等学校野球大会) ²単式(²単勝式・²単式簿記) ¹単体(単一個体) ⁵年休(年次有給休暇) ²燃費(燃料消費率) ¹無実(無実の罪) ²無配(無配当)</p>
<p>② 14例：¹紀元 207 (¹西洋紀元 0) ⁴空爆 228 (空中爆撃 1) ⁶終電 94 (終電車 18) ⁵出超 125 (輸出超過 19) ³商事 703 (商事会社 40) ³新卒 134 (新卒業者 0・[新卒者 50]) ²談合 153 (²談合入札 3・¹談合請負 0・[入札談合 17]) ¹特注 129 (特別注文 11) ¹独房 151 (独居監房 0・[独居房 25]) ⁶特急 854 (特別急行列車 5・[特急列車 61]) ⁴発禁 44 (発売禁止 11) ³風船 436 (³紙風船 14・³風船玉 7) ¹物証 69 (物的証拠 31) ¹不敵 106 (大胆不敵 56)</p>
<p>③ 37例：¹暗躍 80 (暗中飛躍 0) ¹一軍 88 (第一軍 0〈野球で〉) ³駅弁 148 (駅売り弁当 1) ¹介護 7,266 (介抱看護 0) ¹犠打 50 (犠牲打 0) ¹共催 247 (共同主催 7) ⁶魚雷 272 (魚形水雷 1) ⁵機雷 127 (機械水雷 0) ⁵空輸 187 (空中輸送 3) ⁵軍配 109 (軍配団扇 0) ⁶経済 28,672 (経世済民 10) ⁴刑事(³刑事巡査 0・¹刑事係巡査 0) ²交番 364 (交番所 8) ²個展 224 (個人展覧会 0) ¹呉服 185 (呉服物 2) ²三脚 269 (¹三脚架 1・²三脚椅子 1) ²私鉄 270 (¹私営鉄道 0・¹私設鉄道 2・¹私有鉄道 1) ⁴市電 156 (¹市街電車 6・⁴市営電車 0) ¹尺八 231 (一尺八寸 0) ¹車検 591 (車両検査 9) ²主食 413 (主食物 3) ⁶春闘 51 (春季闘争 0) ¹植林 262 (植樹造林 0) ¹設営 131 (設立経営 0) ²全入 5 (²全員入学 0・¹全員入園 0) ¹総見 4 (総見物 0) ⁵速達 148 (速達郵便 4) ¹代休 62 (代替休日 1) ¹打率 217 (安打率 0) ¹中編 39 (中編小説 6) ⁶電卓 219 (電子式卓上計算機 0) ⁵特訓 134 (特別訓練 8) ¹土俵 410 (土俵場 0) ¹二軍 80 (第二軍 0〈野球で〉) ⁴菩薩 809 (菩薩薩埵 0) ⁵野選 6 (野手選択 0) ¹陸運 144 (陸上運輸 0)</p>

[注] ②③の略語・元の語の右に「中納言」での用例数を示す。山カッコ内の注記は本節の筆者による。「刑事」は「巡査」か「巡査長」かなどの判断が不可能なため、数字は略した。

「談合（談合入札・談合請負）」「新卒（新卒業者）」「特急（特別急行列車）」などは、元の語では用例が乏しいが、亀甲カッコ内の形は出現するので追加表示し、②の例として扱った。「選抜」なども「選抜高等学校野球大会」より「選抜高校野球大会」という、略語と元の語の中間的長さの語が頻出する。①に含めた「区議」「都議」など役職をあらわす語や、「高検」「官邸」など組織をあらわす語は、内容的に新聞でよく使う語であり、短い形が好まれるが、それぞれの分野では、元の語も使用される。このように範囲をしぼると、③の37例は、改まった場面では元の語、私的な場面では略語でも、という見方から外れるケースとして考えられる。もっとも、「中編」と「中編小説」の場合などは、インターネットなども参考にした場合には、元の語も使用が見られるので、②の例として考えた方がよいのかもしれない。

「駅弁」「個展」など、日常的に使う語は、新聞やインターネットでもおおよそその使用状況が調べられるが、専門的な語は、その分野の資料にもあたる必要がある。調査例として、「土俵」「犠打」「魚雷」「機雷」の場合を表にまとめて記す（各語の後に、それらを略語とする国語辞典名を記す）。

表4 「土俵」「犠打」「魚雷」「機雷」の使用実態

<p>土俵（『新潮』『広辞苑 第6版』『大辞泉 増補・新装版』『学研国語大辞典 第2版』『講談社国語辞典 第3版』『講談社日本語大辞典 第2版』『学研現代新国語辞典 改訂第4版』『角川必携国語辞典』）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝日新聞・聞蔵Ⅱビジュアル（1985～2010）：「土俵」12,496件。「土俵場」6件。 ・毎日新聞・毎日Newsパック（1987～2010）：「土俵」11,898件。「土俵場」18件。 ・『大相撲中継』（212。2011年）：「土俵」138件。「土俵場」0件。 ・『相撲』（60-12。2011年）：「土俵」96件。「土俵場」0件。 ・日本相撲協会の「相撲規則 土俵規定」に「土俵」の定義がある。「土俵場」の記述はない。
<p>犠打（『新選』『広辞苑』『大辞泉』『小学館日本語新辞典』『角川必携国語辞典』『日本国語大辞典 第2版』）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞蔵Ⅱ（1985～2010）：「犠打」14,107件。「犠牲打」3件。 ・毎日Newsパック（1987～2010）：「犠打」8,980件。「犠牲打」2件。 ・プロ野球・公認野球規則：「犠牲バント」「犠牲フライ」の説明あり。「犠打」「犠牲打」はない。 ・『公認野球規則』（セントラル・リーグほか（編）プロフェッショナル・ベースボールコミッショナー

<p>事務局) : 1956年版の索引に「犠牲打」「犠打」あり。57年版で「犠牲打」が削除される。</p>
<p>魚雷 (『岩波』『新選』『明鏡』『新明解』『新潮』『広辞苑』『大辞林』『大辞泉』『例解』『小学館日本語新辞典』『旺文社国語辞典 第10版』『学研現代新国語辞典』『角川必携国語辞典』『日本国語大辞典』)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 聞蔵Ⅱ (1985～2010) : 「魚雷」1,507件。「魚形水雷」4件。 ・ 毎日 News パック (1987～2010) : 「機雷」987件。「魚形水雷」2件。 ・ 防衛白書 (1970～2011) : 「魚雷」91文書。「魚形水雷」0件。
<p>機雷 (『岩波』『新選』『明鏡』『新明解』『新潮』『広辞苑』『大辞林』『大辞泉』『例解』『小学館日本語新辞典』『旺文社国語辞典』『学研現代新国語辞典』『角川必携国語辞典』『日本国語大辞典』)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 聞蔵Ⅱ (1985～2010) : 「機雷」1,322件。「機械水雷」0件。 ・ 毎日 News パック (1987～2010) : 「機雷」921件。「機械水雷」1件。 ・ 防衛白書 (1970～2011) : 「機雷」281文書。「機械水雷」0件。

[注] 「防衛白書」は、防衛省のHP内で表示・閲覧した。

いずれの資料においても、元の語はほとんど出現しない。国語辞典などでは、語源的な情報として、元の語の表示が必要な語であっても、実際には元の語が使用されないというケースがあるのかどうかについては、実態を把握するために、以上のような観察がいる。なお③の語については、森岡 (1988) のいう「略語意識」を考える必要もある。森岡 (1988, p. 9) は、「菩薩」「学徒」を「今では省略の意識が失われているかと思うが、どうであろうか」と述べており、上述の6辞書で「学徒」を略語としたものはないが、「菩薩」は4辞書で略語とされている。「魚雷」や「土俵」などを略語と意識することは、ほとんどないだろうが、「駅弁」「個展」「車検」「代休」などになると、略語とはっきり意識する人もいれば、元の語を意識することなく使用している人もいるようである。略語意識の薄れを検討するには、別途、大規模な意識調査などが必要となるが、全体 (842語) のうち、4%程度の略語・元の語のペアにおいて、元の語が使用されにくくなっていること、それが略語意識の薄れに関連する、といった問題が生じていることをここでは指摘しておく。

なお、③の語と森岡 (1988, p. 6) が略語とはよばないとする「(会)社命(令)」「(飛行)機影」との違いについても付言しておく。「社」「機」などは、森岡の言うように「会社」「飛行機」の意味を代表し「出社・本社」「機体・機長」を造語する機能をもつが、③の各要素に、その機能はない。また③は、元の語が通常使われないうって

も、たとえば「犠打」が『最新スポーツ大辞典』（1985。国書刊行会），『スポーツ用語辞典』（1988。成美堂出版），『球技用語事典』（1998。不昧堂出版）などの専門語辞典に「犠牲打」の略語として記述されたり、「機雷」が「機雷 機械水雷を略した名称」

（井上和彦（2007）『国防の真実 こんなに強い自衛隊』双葉社）のように、専門的な内容の文献の中で、用語の定義を行う場合に出現したりするなど、場面は限られるが、略語意識が喚起される場合もあり、この点でも「社命」「機影」などとは区別される³⁸。

5.4 「略語も元の語も使用されるグループ」について

5.4.1 略語と規範意識

「略語も元の語も使用されるグループ」について、一覧を以下に示す。

表5 「略語も元の語も使用されるグループ」の略語・元の語（191例）

1 (112例)
1-1
人： ³ 一塁（一塁手） ¹ 右翼（右翼手） ² 外相（外務大臣） ⁴ 外野（外野手） ³ 県議（県議会議員） ¹ 左翼（左翼手） ² 三塁（三塁手） ⁴ 市議（市議会議員） ⁶ 常務（常務取締役） ⁶ 専務（専務取締役） ⁶ 総理（ ⁵ 内閣総理大臣・ ¹ 総理大臣） ¹ 内野（内野手） ² 二塁（二塁手） ² 文相（文部大臣） ⁵ 遊撃（遊撃手）
組織： ⁴ 医大（医科大学） ² 音大（音楽大学） ⁶ 家裁（家庭裁判所） ³ 漁協（漁業協同組合） ⁶ 高校（高等学校） ⁶ 高裁（高等裁判所） ⁵ 高専（高等専門学校） ⁴ 工大（ ³ 工業大学・ ³ 工科大学・ ¹ 工業（系の）大学） ³ 財団（財団法人） ¹ 私学（私立大学） ¹ 市大（市立大学） ⁵ 私大（私立大学） ¹ 社団（社団法人） ⁵ 職安（職業安定所） ³ 信金（信用金庫） ⁵ 生協（生活協同組合） ³ 選管（選挙管理委員会） ² 選対（選挙対策（委員会）・ ¹ 選挙対策委員会・ ¹ 選挙対策本部） ⁵ 短大（短期大学） ⁴ 地銀（地方銀行） ⁶ 地裁（地方裁判所） ⁵ 中学（中学校） ³ 電工（電気工業） ¹ 都庁（東京都庁） ² 農大（ ² 農業大学・ ¹ 農科大学） ¹ 美大（美術大学） ⁵ 民放（民間放送） ⁶ 労組（労働組合）
施設： ⁴ 快速（快速電車） ² 原潜（原子力潜水艦） ⁵ 原発（原子力発電所） ³ 高速（高速道路） ⁴ 施設（ ³ 児童福祉施設・ ³ 老人福祉施設・ ¹ 児童養護施設・ ¹ 養護施設） ⁵ 電鉄（電気鉄道）
その他： ⁴ 駅伝（駅伝競走） ¹ 学祭（学園祭） ⁶ 化繊（化学繊維） ¹ 管制（航空交通管制） ⁶ 警察（ ⁶ 警

³⁸ 「個展」は「個」に「個人」，「展」に「展覧会」の意味があり，「社命」などと同様のようにも思われるが，国語辞典間では略語とするかどうかで，ゆれが見られる。

察署・²警察官) ²検察 (¹検察官・²検察庁) ²共産 (²共産党・²共産主義) ⁶健保 (健康保険) ⁶国
体 (国民体育大会) ²社保 (社会保険) ²総体 (総合体育大会) ¹入管 (入国管理局・出入国管理)
⁴万博 (万国博覧会) ²保険 (²健康保険・¹生命保険) ⁴陸上 (陸上競技) ⁶労災 (³労働災害・³労働
者災害補償保険・¹労災保険)

1-2

場所：²極楽 (極楽浄土) ²山陽 (²山陽道・¹山陽地方) ³中国 (³中国地方・³中華人民共和国) ³中部
(中部地方) ²東海 (²東海道・¹東海地区) ³東北 (東北地方) ²南極 (²南極大陸・²南極圏) ³北極
(²北極圏・¹北極星) ²列島 (日本列島)

その他：⁴安保 (²安全保障・¹(相互)安全保障・²安全保障条約・¹日米安全保障条約・¹安保闘争) ²維
新 (明治維新) ⁶国鉄 (⁴日本国有鉄道・¹(日本)国有鉄道・¹国有鉄道) ¹震災 (¹関東大震災・¹阪
神・淡路大震災) ³戦国 (戦国時代) ²大戦 (¹世界大戦・¹第一次世界大戦・¹第二次世界大戦) ⁴中
華 (⁴中華料理・³中華そば) ²通産 (¹通商産業・¹通商産業省) ⁵日舞 (日本舞踊) ⁴平安 (²平安京・
⁴平安時代)

1-3

人：¹院生 (大学院生) ¹警官 (警察官) ³行員 (銀行員) ¹在日 (在日韓国・朝鮮人) ¹獣医 (獣
医師) ¹被告 (被告人)

組織：⁶参院 (参議院) ⁶衆院 (衆議院) ³都銀 (都市銀行)

その他：¹御免 (¹御免なさい・¹御免ください) ⁴御覧 (御覧なさい) ²消防 (¹消防隊・¹消防車・¹消防
自動車・¹消防署員)

1-4 (16例)：⁴衛星 (³人工衛星・¹衛星放送) ³外債 (外国債) ³機銃 (機関銃) ³行革 (行政改革) ³
下水 (下水道) ⁵原爆 (原子爆弾) ⁵口座 (³銀行口座・³預金口座・³振替口座) ¹産廃 (産業廃棄物)
⁵重文 (重要文化財) ⁶団交 (団体交渉) ¹団地 (住宅団地) ⁴中絶 (²人工妊娠中絶・²妊娠中絶) ¹
貯金 (郵便貯金) ³特許 (特許権) ¹風俗 (風俗営業) ²補選 (補欠選挙)

2 (63例)

人：²犠牲 (犠牲者) ¹経営 (経営側) ¹候補 (候補者) ⁶戦犯 (戦争犯罪人) ¹配下 (支配下) ¹不良
(不良少年・不良少女)

組織：³球団 (野球団)

施設：²改札 (改札口) ³学食 (学生食堂) ²急行 (²急行列車・¹急行電車) ³球場 (野球場) ¹下宿 (¹
下宿屋・¹下宿先) ¹水道 (上水道) ⁵夜行 (夜行列車)

活動：¹個人（¹個人競技・¹個人タクシー）¹再編（¹再編成・¹再編集）⁴時短（時間短縮）¹聴取（事情聴取）⁴定昇（定期昇給）⁶電解（電気分解）²透析（人工透析）³特捜（特別捜査）⁶入試（入学試験）⁶配転（配置転換）⁵部活（部活動）¹舞台（舞台劇・舞台公演）⁵量産（大量生産）¹連打（連続安打）

物：⁴携帯（携帯電話）³合繊（合成繊維）¹自伝（自叙伝）¹青果（青果物）⁴卒論（卒業論文）²端末（¹端末機・²端末装置）¹中古（中古品）⁵定期（⁴定期乗車券・⁵定期預金・¹定期貯金・¹定期保険・¹定期取引）⁵鉄筋（⁴鉄筋コンクリート・¹鉄筋コンクリート建築）⁴電話（電話機）³日記（日記帳）²文庫（文庫本）¹麻酔（麻酔薬）³明細（明細書）

学問・教科：¹科学（自然科学）²国語（国語科）²地理（地理学）¹独語（独逸語〈用例は「ドイツ語」で採集〉）⁴物理（物理学）¹歴史（歴史学）

その他：²一線（第一線）¹一報（第一報）¹五分（五分五分）³三角（¹三角形・³三角法）¹新鋭（新進気鋭）¹推力（推進力）¹大義（大義名分）⁴大卒（²大学卒業・¹大学卒業（者）・¹大学卒）⁵中卒（³中学校卒業・¹中学卒業（者）・²中学校卒業（者））³蛋白（²蛋白質・¹尿蛋白）¹特番（特別番組）³土建（土木建築）¹二次（第二次）¹武道（武士道）¹連結（連結決算）

3（16例）：¹一番（一番目）：一番列車。一番星／⁴外語（³外国語学校・¹外国語大学・¹外国語）：渋谷外語学院／⁵会席（会席料理）：豆腐会席。うどん会席。そば会席／¹懐石（懐石料理）：京懐石。オリジナル懐石／²喫茶（喫茶店）：カラオケ喫茶。歌声喫茶。ジャズ喫茶／⁴教委（教育委員会）：県教委。府教委。都教委／¹国交（国土交通）：国交省。国交相／⁴市会（市議会）：市会議員。名古屋市会／¹周波（周波数）：高周波。低周波／⁶小学（小学校）：小学一年生／⁵償却（減価償却）：償却資産／¹証券（証券会社）：ネット証券。大手証券／³商高（商業高校）：唐津商高／¹農水（農林水産）：農水産業。農水分野。農水産品（「農林水産」も単独では使いにくい）／¹非常（非常事）／¹連勝（連勝式）：連勝単式。枠番連勝。連勝複式

〔注〕「警察」「検察」など意味分野の異なる複数の元の語があるものは「その他」に含めた。

1と2は略語に自立用法があるもの、3は略語がもっぱら合成語の構成要素としてあらわれ、自立用法は元の語に備わるケースである。会席料理を出す店の側で「和食や会席」と言うことがあり、専門分野では、3の語に関して、自立用法がありうるだろうが、ここでは一般的にはということと分類した。自立用法をもつ略語を1と2とにわけたのは、2の語は、略語が俗で元の語が正式という、略語自体の性質が使い分けの基準となるが、1はそのほかにも、元の語を優先する何らかの要因が想定しうるためである。1-1の語は「○○

市議」「〇〇家裁」など、前部分に固有名がきて合成語全体としても固有名に相当するもの、1-2 は固有名であるか、元の語に固有名相当の語が含まれるものである³⁹。1-3 は人の恒常的身分をあらわす語、公的組織の名前、あいさつのことばなどである。その身分の人や組織に所属・関係する人に対し、失礼にならないようにとの配慮から元の語が用いられる。1-4 は、元の語が法令名の中で使われる、または元の語の規定が法令中にあるものを集めたものである。規定があるとは「人工妊娠中絶とは、胎児が、母体外において、生命を保続することのできない時期に、人工的に、胎児及びその附属物を母体外に排出すること」（母体保護法）のような場合である。以上に見たような特徴が、規範意識を喚起する要因として働く場合には、元の語が優先的に使用される。

5.4.2 略語と元の語の両方を用いる場合

文字数制限のある新聞などでは、同一記事で同じ語を複数回使う場合、

○米海軍のロサンゼルス級攻撃型原子力潜水艦サンタフェ（中略）が入港した。同港への米原潜入港は…（朝日新聞。2003. 12. 11）

のように、元の語をまず示して2度目から略語を用いる、という使い分けがある。上述の191例の略語と元の語が、同一記事内にもとにあらわれているケースを「朝日」で観察すると、132例において該当例が見つかり、傾向としては、

- ① 元の語が先、略語が後（91例（68.9%））：例 行政改革→行革 合成繊維→合繊
大学院生→院生 労働災害→労災 産業廃棄物→産廃 定期昇給→定昇 入国管理
→入管
- ② 内容を限定する要素が略語につくと、略語が元の語に先行することもある（14例（10.6%））：例 公認候補→候補者 県警の聴取→事情聴取 阪神高速→高速道路
- ③略語が元の語に先行する場合もある（27例（20.5%））

³⁹ 森岡（1988, p. 12）は、「国鉄」や「国連」に略語意識が伴うのは「固有名詞のため」と述べる。略語意識が伴うとは、同時に（正確に思い出せない場合があるにせよ）元の語が意識されるということであり、改まった場面などでは、略語でなく、元の語を使おうとする意識が起こりやすいものと考えられる。

のようになる。③に含めたのは、

駅伝 改札 急行 球場 共産 警官 原爆 行員 高校 口座 国語 在日 再編
参院 三角 私大 自伝 水道 短大 中古 都庁 特許 南極 入試 部活 文庫
明細

である。これらは、総じて一般的によく使われる語で、元の語を先に示すことなく使われたり、一つの記事内で交互に使用されたりする。このうち、表5で2に含めた「部活」「改札」「文庫」などについて、たとえば「部活」は、以下のように、複数の資料で略語・元の語双方が出現している⁴⁰。

表6 「部活」と「部活動」

	雑誌	新聞	国会
部活	309 (87.5)	89 (40.1)	35 (32.4)
部活動	44 (12.5)	133 (59.9)	73 (67.6)
計	353 (100)	222 (100)	108 (100)

新聞では、「部活」「部活動」の割合に大きな差がない。雑誌の場合、「部活」がかなり優勢だが、部活動の指導者の発言やプロのスポーツ選手がインタビューを受ける場合などには、「部活動」が使用されており、正式名称を使おうとする規範意識が働く場合もあると考えられるので、両者を使用する態度にまったく差が見られなくなっているわけではない。

一方、表5で1に含めた「警官」や「共産」などでは、資料によっては、元の語に使用が極端に偏る傾向がある⁴¹。「警官」の場合を表7に示す。

40 雑誌はベースボール・マガジン社の『熱中!野球部中学部活応援マガジン』『熱中!バレー部中学部活応援マガジン』『熱中!バスケット部中学部活応援マガジン』『熱中!卓球部中学部活応援マガジン』『熱中!ソフトテニス中学部活応援マガジン』の、2011年発行の5, 6, 7号を使用した。「国会」は「国会会議録検索システム」の2006～2010の5年分。新聞は、前述の「朝日」。

41 「新聞」は「朝日」の1999年から2003年の5年分。新聞は基本的にCD-ROMを使用するが、最近の用例や2000年以前の例を見る場合は国会図書館のデータベース用端末で「聞蔵Ⅱビジュアル」「毎日Newsパック」を使用した。『警察白書』は2007年版から2011年版の5年分。

表7 「警官」と「警察官」

	警察白書	新聞	国会
警官	0 (0)	3,181 (41.4)	59 (10.5)
警察官	549 (100)	4,501 (58.6)	505 (89.5)
計	549 (100)	7,682 (100)	564 (100)

新聞や国会，特に前者において，「警官」の使用が特に前者で目立っているが，白書では「警察官」が統一的に使用されており，正式名称を使おうとする意識の高さがうかがえる。同じく，「共産（共産党）」を「しんぶん赤旗」（2012.6.3）で確認すると，「共産党」6件，「日本共産党」36件，「共産」0件である。「共産党」は一般の人の発言，「日本共産党」は党側の文章にあらわれる。略語自体が回避されるのではなく「民主，自民の二つの政党」「朝日」（朝日新聞の意）などは出現している。この点について，表現対象が自身か他者かという観点からまとめると，次のようになる。

表8 略語・元の語と対象者（人や組織）

使う語と対象者	特徴	例
略語・自身について	短い語形を優先。当事者，関係者である場合	院生。在日。*芸大
略語・他者について	短い語形を優先。対象はなじみのある相手や競合相手など	警官。共産。自民
元の語・自身について	改まり。正式名を前面に出す意識が強い	警察官。共産党。自民党
元の語・他者について	改まり。相手への配慮	獣医師。銀行員。民主党

統一感という点を考えると，自他両方に略語を使う，あるいは元の語を使うというのは，統一のとれた語の用い方である。自身に関しては略語を使うが，他者には元の語を使うという場合は，相手のことはていねいに表現し，自身には敬語を使わないという敬語使用における原則と並行的にとらえられる。一方，自身については元の語，他者には略語という場合は，統一感・改まりに欠ける使い方となる。

5.4.3 意味・用法に関する略語の問題

「消防」は「消防隊」「消防車」「消防署員」など、複数の元の語がある。したがって、文脈によって、どの元の語の意味で使われているのかを推測する必要があるが、「消防がかけつくと、このホテル二階の一室で女性が倒れていた」（テレビ朝日。2011. 11. 27）のような場合には、いずれの元の語の意味なのか、それとも総称的な意味が別にあると考えるべきなのか、あいまいになる。このような元の語が複数想定される略語を多義が生じているケースとして考えると、既述の略語と元の語について、辞書に記載されていない意味が生じている場合として、以下のようなものがある。

中編（中編小説）→「映画」の場合も／点滴（点滴注射）→点滴が外れる（「チューブ」のこと） 点滴が漏れる（「薬剤」のこと）／夜行（夜行列車）→「バス」の場合も／鑑識（鑑識課（班））→鑑識さん（鑑識担当の警察官のこと）／管制通管制→管制の指示に従い（管制官のこと）／広報（広報係）→「広報紙」の場合も／国税（国税庁）→国税のメスが入る（「国税局」の場合も）／震災（関東大震災。阪神・淡路大震災）→「東日本大震災」の場合も

これらは、みな上略・下略の語である。「夜行バス」や「東日本大震災」などの元の語から、「バス」や「東日本大」の部分が省略されて形成されたものと考えられ、「夜行バス」の略語としての「夜行」と「夜行列車」の略語としての「夜行」というように、それぞれ元の語とは意味が変わらないといえるだろうが、略語の側が結果として多義になっている点は注意される。これらは、辞書にのっていない意味・用法ではあるが、既存の略語の場合と同様の省略方法を経たものと理解され、誤用と見なされる可能性は低い。これに対して、

学食（学生食堂）→学食を食べる（「食べ物」のこと）／*社食（社員食堂）→社食を食べる（「食べ物」のこと）／*駐禁（駐車禁止）→駐禁を切られる（「切符」のこと）／土建（土木建築）→土建のもっているトラック（「業者」のこと）／燃費（燃料消費率）→燃費は5～6km（「1リットルあたり」を省いたような言い方）／*物販（物品販売）→物販を買う（「商品」のこと）

などの多項省略の語では、元の語にない意味的な要素を追加して略語を用いており、元

の語の意味や語構成が意識されると、誤用との判断が起こることもある。「学食」を例にすると、

○学食を食べたあと、散歩がてらに山の方へ歩いていくと、…（全国学食友の会
（編）（1998）『全国大学学食巡り』MIT）

のような使用例が見られ、「食べ物」の意味で用いられているが、「学生食堂」には、このような使い方はない。「食」があることから、「朝食」「夕食」などにおける「食事」の意と同じだと解釈したものであろうが、これを誤りと見るか、意味の拡張として認めるかという点で、判断にはゆれがありそうである。また、

- ○製品を量産する ○ヒットを量産する
- ○製品を大量生産する ×ヒットを大量生産する
- ○労組と住民が共闘する ○米軍と武装勢力が共闘する
- ○労組と住民が共同闘争する ×米軍と武装勢力が共同闘争する

のような場合においても、元の語が使用しにくい。「量産」の場合、元の語の「大量生産」は「（生産単価を下げる、または特別な需要量に应ずるため、近代工業的な生産手段で）同種の生産物を同時にたくさん作ること。」（『岩波』）と記述される。「量産」「大量生産」ともに、たくさん生産できるという、プラスの意味で使う場合もあるが、資源を大量に消費し、ごみを多く生み出すということで、マイナスの側面が強調される場合もある。しかし、先ほどの例のように、スポーツで「量産」を用いる場合はプラスの意味でしか用いられず、「大量生産」には、そのような使い方が、

○超特大ホームランを大量生産してたちまちファンのアイドルとなった。（『ベースボールマガジン』3-1。1974年）

という孤例が見られたが、上述の新聞データベースや野球雑誌などでの調査の限りでは、このような使い方はほかに見いだせなかった。また、「共闘」の「闘」は「社会運動・労働運動などで、権利を獲得するためや要求を通すために争うこと」（『明鏡』）だが、2

例めの方は「相手に勝とうとしてたたかい争うこと」（『明鏡』）の意味である。そのため、前者の意味でしか用いられない「共同闘争」には置きかえにくい⁴²。最後に、元の語よりも限定的な意味で本来用いられていた略語の意味が、その限定を弱めつつあるケースを「時短（時間短縮）」で確認する。「時短」は「労働時間の短縮」で、労働時間に限らない「時間短縮」と異なるが、近年はパチンコで「台の図柄の変動する時間が短縮される」意で使われたり、「口の広いフライパンを使うのも時短のコツ」（『NHK きょうの料理』55-1。2010年）や「効率よく調理できるストックのおかずをまとめて作っておくと時短にもなり」（『栄養と料理』77-8。2011年）のように、料理に関して使用されたりするようになっている。「朝日」の1999年から2003年分の記事の時点では、77件の「時短」が確認できるが、いずれも労働関係の内容で、調理の例はない。また「忙しい人向けの時短ネイル」（NHK 総合テレビ。2012. 5. 14）、「東京から静岡間で約10分の「時短」が可能に」（新東名新聞号外（NEXCO 中日本発行。2012年））などの例もあり、「労働」という限定が外れてきている。このような例は、現段階では「時短」しか見いだすことができなかった⁴³。略語と元の語とでは、意味が変わらないのが一般的であるが、以上に見たように、略語に独自の用法があったり、略語の意味が変化したりする場合があるため、詳細に観察する必要がある。

5.4.4 格助詞と格成分

「音大（音楽大学）」「球場（野球場）」など、略語と元の語は、品詞的な面で違いがないのが普通だが、元の語にサ変動詞語幹が含まれる場合は、検討がいる。つまり多項省略の略語には「行政改革」「共同主催」など、元の語の後部分にサ変動詞語幹が含まれるものがあるが、略語として「する」がつくのかどうかは、語ごとに異なるからである。「する」がつく場合、格助詞と格成分に元の語に含まれるサ変動詞語幹（以下、サ変語幹）とのずれがあるかどうかを調べるのが以下の目的である。842例中、元の語の後部分にサ変語幹が含まれる多項省略の略語は61例あるが、そのうち、次の30例はサ変動詞と

⁴² 2例めの「共闘」を「共同闘争」からの略語ではなく、「共」と「闘」という一字漢語同士が結合してできた語であり、たまたま語形が共通するだけに過ぎないと見なすこともできる。その場合、「都会」が「都議会」の略語である場合と「繁華な場所」である場合とで同一語形である場合や、「中絶」が「人工妊娠中絶」の略語である場合と「途中でやめる」の意である場合とで同一語形である場合などと同様の例となる。

⁴³ 思想的に出版物を取り締まる意の「発禁」が、安全面での理由から、携帯電話アプリケーションの発売を禁止するような場合に使われる例も、まれに見られたが、「時短」ほど確かな用法とも断定しきれなかったため、本文では扱わなかった。

して用いられない。

安保 各停 行革 空冷 軍拡 軍縮 時短 車検 写植 信販 全入 大卒 宅浪
 中卒 団交 超勤 定昇 特撮 特捜 特配 特攻 特講 入管 入試 発禁 普選
 物交 補選 野選 陸運

残る 31 例をサ変語幹とする。略語・サ変語幹の一方に「する」のついた用例が見あたらなかった「化成・合成」「植林・造林」「特進・進学」「盟休・休校」を除き、それ以外の 27 例について、格助詞の増減の観点からまとめたのが表 9 である（略語の右に元の語の後部分に含まれるサ変語幹を示す）。「空調」は、サ変語幹とする辞書がないが「ダイキンのエアコンが快適に空調する」「お部屋を空調する」のような用法があるので、「する」のつく語に含めた。

表 9 略語と元の語に含まれるサ変語幹との格助詞の比較

①	一浪・浪人 介護・看護 空撮・撮影 空爆・爆撃 空輸・輸送 設営・経営 中退・退学 追求・請求 電解・分解 特出・出演 特薦・推薦 配転・転換
②	暗躍・飛躍 運休・休止 空調・調節 操短・短縮 側転・転回 電離・解離 陽転・転化
③	接遇・処遇 長欠・欠席（欠勤） 特注・注文 量産・生産 連打・安打
④	共催・主催 共闘・闘争 特訓・訓練

①は「一が {一浪する／浪人する}」「一を {空爆する／爆撃する}」など、略語とサ変語幹（以下、元の語に含まれるサ変語幹の意で使う）のとり格助詞が一致するものである。②は「陽転」の「陽」が「陽性」を意味し、「一に転化する」の「一に」に相当するように、略語の前部分にサ変語幹の格成分にあたる意味が含まれ、略語の場合にとる格助詞が減少するものである。③は略語の前部分の意味が要因で、格助詞の減少があるものである。「学校を欠席する」「会社を欠勤する」に対し、「長欠」は学校や会社を休むのが「長い」点が焦点となり、「一を」で場所を示すことがない。「(役割) {として／で} 処遇する」「(原料) から生産する」「(場所) に安打する」などの格助詞・格成分も「接遇」「量産」「連打」ではあ

らわれない⁴⁴。「特注」は「一に一を {特注/注文}」のように、略語とサ変語幹とで格助詞が一致するのが普通だが、「麺はスープに合うように特注した低加水麺」など、「特別」という点が強調される場合には「一に」を伴わないことがあるため、①の例とは区別した。④は、略語において格助詞が増えているケースで、「共催」「共闘」は、「主催」「闘争」をともに行う相手が「一に」で表示される。

「特訓」は、やや異質で「訓練」と違う格助詞や格成分をとる。「訓練」は指導する相手を「一を」で示すが、「特訓」は同様の使い方（「選手を特訓する」）のほか、「シュートを特訓する」のように物事を格成分とする。また「小学生の長女にこま回しを特訓する奥谷」（日経新聞。2008.6.18）のように、「一に」をとることがある。「を特訓」の形で「聞蔵Ⅱ」「毎日 News パック」の2006～2010の記事を確認すると、

表 10 「～を特訓」の格助詞と格成分

	聞蔵Ⅱ	毎日
(人) が (人) を特訓	8	1
(人) が (物事) を特訓	70	47
(人) が (人) に (物事) を特訓	2	5
計	80	53

となるが、「上司が新入社員を特訓した」のような例はさほど多くなく、物事を目的語にとる場合が、かなりの割合をしめる。以上、サ変語幹を含む語が略語となった場合に「する」を伴うのかどうか、伴うのであれば、元々のサ変語幹との違いがあるかどうか、という点も、個々の語について調べてみないと明らかではないため、略語を検討する際の一つの観点となると考え、記述を行った。

5.5 おわりに

以上、ここでは、漢語略語の意味・用法、使い分けなどを記述してきた。多くの略語は、改まった場面では元の語、日常会話などでは略語でも、という使い分けがなりたつ

⁴⁴ 「各打者が同一回に続けて安打すること」の「連打」に対し、「連続安打」は「ある打者が安打を打った回の次の回の打席でも安打すること」または「連続安打は4試合でストップ」のように「複数の試合にまたがり安打すること」という違いがある。

が、「元の語でなく略語がもっぱら使用されるケースもあること」「略語と元の語が、一つの文や文章の中で併用されるケースもあること」「元の語に比して、独自の用法や誤用的な使用が略語に見られる場合もあること」などの主張を行った。今後の課題としては、話しことばにおける略語の調査、和語・外来語の略語との比較、略語の認定について、などがあげられる。また、ことばと社会という観点から漢語略語を眺めてみると、ここまでの記述をもとにして、①略語の長さ、②略語の形態、③語種・位相、④意味・用法、⑤略語使用の動機、などに関して、問題点が考えられる。

まず①については、なぜ略語が生じるのかという疑問に対して、「長いから」「発音上の便宜」といった指摘がなされることがあるが、それは、日本語において、二字漢語を中心に多くの単語が二字漢語が3拍ないし4拍であることから、それを基準に考えると、長いと感じられるということであって、5拍や6拍の語が長いという客観的な基準があるわけではない点が問題である。「冷蔵庫」「扇風機」「情報収集」「アイスコーヒー」「サイクリング」「コミュニケーション」「カーペット」などは、日常的に使う語であるものの、略さずとも不便はないはずである。「スマートフォン」を「スマホ」,「アプリケーション」を「アプリ」と略すことについて、「もとの語でもたいした長さじゃないんだから、ちゃんと言えればいいじゃないか」(大橋巨泉談。TBS ラジオ。2011. 10. 29)との指摘があるが、漢語・外来語の略語増加の是非について考える上で、きわめて重要な感覚であるように思われる。

②の略語の形態について。典型的な漢語略語は「家裁」「安保」のような多項省略の語であるが、ワカバヤシ(1936, p. 148)が指摘するように、多項省略では語形変化が起こっているため、耳で聞いてわかりにくいという特徴がある。ワカバヤシは、たとえば「日本郵船」を略すなら、「日郵」でなく「郵船」であるべきだとし、文脈上「日本郵船」が先に出てきていれば、「郵船」だけでも、十分理解できると述べている。辞書にも登録されやすく、典型的略語とされる多項省略の語よりも、元の語との音のつながりが崩れていない、上略・下略の方式に重きをおく、数少ない貴重な指摘である。

次に③の語種・位相であるが、通常、略語の使用が問題とされる場合、外来語や若者の使うことばがとりあげられることが多い。たとえば、「セクハラ」「パソコン」や「ケータイ(携帯電話)」「パンキョー(一般教養科目)」などである。俗であるなどの理由で批判的に扱われることがあるが、略すこと自体が問題なのであれば、新聞・雑誌で用いられる、本節で見てきたような略語もその対象となるはずである。しかし、そのような言及

がなされることは、ほとんどない。それゆえ、略語自体が問題なのか、それとも外来語や若者ことばに対する批判の一部として略語がとりあげられているのか、あいまいさがある。略語は語形からは意味が推測しにくく、わかりにくさがつきまとうことが難点であり、それは語種・位相の別を問わず問題にすべきである。「魚雷」「駅弁」などのように、元の語がほとんど使用されないケースは全体から見れば少数であり、多くの略語においては、「それは何の略語?」というような、会話・読解の中断が引き起こされることは珍しくないと思われる。

次は意味・用法である。もしも、発音上の便宜や、文字数制限などの理由から略語がつけられるのであり、略語を使用する人にとっては、なんの困難もなく使いこなせているのであれば、上述したような、略語独自の用法や誤用的な例というのは、生じないはずである。不規則な語の使い方は、略語を読まされたり聞かされたりする側にとっては、理解しづらいという感覚を伴う。

略語使用の動機として、若者が使う略語などの場合は、仲間意識を高めるためである、あるいは、ことば遊びであるといった点が指摘されることがある。新聞や雑誌などの場合は、文字数制限という点が大きな動機となっている。新聞・雑誌には、やむなく略語を使うという側面があるが、若者語にはその意識はとぼしい。若者語における略語は、仲間同士での会話などにおいて使われるのが主であり、比較的、受け手の数が限られるのに対し（ブログ・ツイッターなどにより、受け手の範囲は拡大しつつあるため、公共性の有無の点からわかることも一応可能である）、新聞や雑誌では、不特定多数を対象としているため、受け手の数が相当に多いという特徴がある。したがって、田中（1999）の指摘のように、略語の「普及」という面から見れば、確かに新聞の略語使用を肯定的にとらえることも可能ではあるが、そもそもむずかしい専門的な内容の語を、さらに略した形で提示することにより（5.4.2で指摘したような使用順序という工夫も見られるものの）、受け手の理解・記憶の負担が伴うというマイナスの面も無視すべきではない。その点では、若者語の中の略語よりも、新聞や雑誌における略語の方が深刻である。なお、文字数について付言するならば、インターネットの存在により、文字スペースは物理的に大きな問題ではなくなっている点が注目される。紙の新聞に書ききれない部分はウェブ版に記す、といったスタイルが活用されるならば、紙面上にすべての情報をムリに詰め込む必要がなくなるため、略語使用を減らしうる可能性があるからである。もちろん、現実的ではないという意見もあるだろうが、略語の使用を抑制する方法の一つとして一考の価値はあると思う。

以上をまとめれば、5拍以上でも大して長くないという意識のもとに、同音語の有無に留意して造語・借用を行い、なるべく略語はつukらないこと、もしつukらざるをえないのならば、文脈の中で臨時的に形成されたとしても、理解が容易な上略・下略の方法によることとし、元の語と意味・用法がずれないように注意すること、受け手の範囲が多岐にわたり、理解されないおそれがあるのなら略語の使用を控えること、などが略語に対処する方法として考えられる。

6. 対義関係の二字熟語について

6.1 はじめに

対義語の観点から見ると、漢字二字の語は、「安全・危険」「延長・短縮」など、語形に共通性のないタイプと「高級・低級」「下院・上院」のように、語形に共通部分のあるタイプにわけられる。後者は「高・低」「下・上」といった、語基としての対義関係が熟語でも維持されていると考えられるが、ここでは、このような語形に共通部分のある二字熟語について考察する⁴⁵。

熟語として常に対義関係にあるのであれば、学習上も効率がよいのだが、実際には、たとえば「高書」と「低書」とは対義語でない、あるいは「下校」の対義語は「登校」であって「学校に入ること」の意味の「上校」ではないといった、熟語における対義関係の不成立が少なくない。この点について、教科研（1964）や野村（2002）では、「出・入」の熟語を例に、「出社」の対義語は「入社」でなく「退社」、「出場」の対義語は「入場」でなく、「欠場」か「休場」といった指摘を、それぞれ行っている。このような先行研究の指摘を参考にした上で、本節では、主に以下の三つの点について、検討を加える。

- ア 対義関係の語基について、語形に共通部分のある熟語を多く観察した場合、対義関係になるのが一般的なのか、対義でない場合が多いのか。
- イ 二字熟語には和語や混種語も含まれる。熟語の語種の割合は、どのようになっているのか。複数の読みをもつ語は、どれくらいあるのか。
- ウ 辞書上は、対義語として記述されるペアであっても、実際の使用は、どちらか一方にかたよっている、あるいは、用法に関して、対応・非対応が見られる、といったことはあるのか。

イについて、少し補足する。「朝刊・夕刊」は漢語と混種語のペアで、語種が異なる。また「小字・大字」は「しょうじ・だいじ」、「こあざ・おおあざ」で対義関係になるのであって、「しょうじ」と「おおあざ」、「だいじ」と「こあざ」とではペアにならない。細かいようだが、二字熟語が複数の語種、複数の読みを許容するものである以上、個々の状況を確認

⁴⁵ 対義語と似た用語に「反対語」「対極語」などがあるが、ここでは便宜上、対義語を通して使用することとする。各語の定義については、田中（2002）に詳しい記述がある。対義語（反対語）の分類については、荻野・野口（1996）、村木（2002）などがあげられる。なお、紙幅の都合上、ここでは対義語の先行研究を十分示し得なかったが、荻野・野口（1988）に詳細に記されているので、あわせて参照されたい。

していく必要がある。

6.2 二字熟語の抽出と対義語の確認

反対語辞典は、ある単語の対義語がどれなのかを知るには適しているが、語形の共通性から、対義語であると予想される場合については、当然ふれていない。それゆえ、ここでは、以下のような手順をふんだ。まず、対義関係の語基をとりだす目的で、『岩波国語辞典 第7版』（以下『岩波』と表記）の「漢字母項目」を使用し、対義関係の語基のペアを127抜き出した。具体例は、「失・得」「暖・冷」などだが、「今」と「古・昔」のように、複数の語基と対応関係がある場合は、「今・古」「今・昔」でそれぞれカウントした。次に、『大辞林 第3版』を用いて、以上の語基を含んだ二字熟語を確認し、そこから、語形に共通部分のあるペアを2,291例抽出した（「古漬（け）」のように、送り仮名がカッコ内に表記されている場合は、漢字のみの表記が可能な語として、資料に加えた）。これが本節での基本的な資料である⁴⁶。

続いて、これらのペアに対義関係の場合があるのかを確かめるために、『大辞林』以外に、反対語辞典では、『反対語大辞典 第53版』（東京堂出版）、『反対語対照語辞典』（東京堂出版）、『活用自在反対語対照語辞典』（柏書房）、国語辞典では、『日本国語大辞典 第2版』（『日国』）、『大辞泉 増補・新装版』を使用した。いずれかの辞書で対義語とされるペアとして、1,392ペア（60.8%）が確認でき、7ペア（0.3%）が「関連語」とある。対義語・関連語どちらも書いてないものを「その他」とすると、891ペア（38.9%）がこれに該当する。よって、単純に考えれば、語形に共通部分のある二字熟語が10ペアある場合、対義関係のものは6ペア程度となる。

辞書にある対義語ペアに限定すれば、以上の結果になるが、語釈などから類推して、対義語扱いが可能なものや、類義関係と見なしうるものもあり、「その他」の範囲は、ある程度せばめられる。計2,291ペアがあり、内訳は以下ようになる。

対義語：1,392 ペア（60.8%） 横断・縦断 減量・増量
準対義語：128 ペア（5.6 ペア） 高給・低給 手広・手狭
関連語：7 ペア（0.3%） 遠流・近流 黒房・白房

⁴⁶ 「取・捨」「是・非」「肥・瘦」は、語形に共通部分のある熟語が見あたらなかったため、2,291ペアの中には含まれていない。

準関連語：23 ペア (1%) 単勝・複勝 小吉・大吉
語基同士が対義：33 ペア (1.4%) 加減・加増 存滅・亡滅
類義語：39 ペア (1.7%) 気魂・気魄 弔詞・弔辞
その他：669 ペア (29.2%) 案内・案内 下質・上質

辞書では、対義語・関連語とされていないが、意味から考えれば、対義語・関連語扱いしても、不自然ではないと考えられるものを「準対義語」「準関連語」と記してある。たとえば、「高給」は「薄給」が対義語とされるが、「薄給」は「低給」と類義のため、「高給・低給」で対義語ペアとしてもよさそうである。同様に、「大事(だいじ)」の対義語は「小事」とされるが、「細事」は「小事」と類義関係にあり、「大事・細事」にも、対義関係を認めてよいのでは、という疑問がおこる。「低給」は、現代語では、あまり使われない、というようなことから、それほど気にしなくてもよいのかもしれない。ただし、村木(1989, p. 94)において、「美点」と「欠点」、「長所」と「短所」のように、語形に共通部分のある場合、反義対が成り立ち、その結果、共通点のない「美点・短所」の反義性が弱まるとされているのに対して、上記の例では、語形上の条件はクリアしている分、扱いはむずかしい。

「手広・手狭」は「手広い・手狭い」で対義語とされ、形容動詞としても、ほぼ同様の関係としてよさそうである。「黒書」は、語釈で「官庁が出す白書に対していう語」(『大辞林』)と注記がなされるように、辞書の使用者の立場からすれば、対義語とされていても、特に不自然ではない。このようなペアを、対義語・関連語と認めるならば、二字熟語における対義語の割合は、若干増えるが、私見を含むので、あくまで参考程度の結果である。

「語基同士が対義」としてあるのは、「加減」の「加」「減」、「存滅」の「存」「滅」のような場合で、もう一方の二字熟語は、「加増」「亡滅」のように、似た意味の語基同士が結合したものであるため、二字熟語同士は、対義関係にならない。また、「その他」には、「黒鳥・白鳥」のように、「上下関係」として解釈できるペアもあるが、多くは明確な意味関係が見いだしにくい。

6.3 語の読み方, 語種, 語義の複数性

前述の2,291ペアのうち、少なくとも1,392ペアについては、辞書で対義語同士であることが確認できるものであり、語形に共通した点のあるペアとして、学習者は理解することができる。しかし、たとえば、「大事」には、「だいじ」と「おおごと」の読みがあるが、「小

事」と対義関係になるのは、「だいじ」の方であり、「おおごと」ではない。また、「失意」は「得意」が対義語だとされるが、「失意」が単一の語義のみ記載されるのに対して、「得意」には、複数の語義がたてられることが多く、「失意」と対応するのは、そのうちの一つに限られる。『大辞林』では、「得意」に五つの語義をのせるが、「失意」と対立するのは、①の「望みがかない満足していること」の場合である。このようなペアについては、読みや語義が1対1の関係にあるペアに比べて、学習上、注意が必要になる。それゆえ以下では、読み方、語種、語義の順番で、数や種類の不一致が見られるのかいなかを確認することにする。

6.3.1 複数の読み方がある語

上述の1,392ペアの読みの数の内訳は、次のようになっている。

表1 語形A（縦軸）の読みの数と語形B（横軸）の読みの数の比較

	1	2	3	4	5	7	計
1	996	112	20	2	1	1	1,132
2	133	70	11	2	0	0	216
3	14	12	6	2	0	0	34
4	2	5	0	0	1	0	8
5	0	1	1	0	0	0	2
計	1,145	200	38	6	2	1	1,392

〔注〕「減・増」の「減」のように、五十音で先にくるものを語形A、後にくるものを語形Bとした。

71.6%の996語では、読みの数が二つの語形の間で、1対1になっているが、「小事・大事」のように、一方の読みは一つだが、他方には二つある、というケースが245ペア(17.6%)見られる。「小字・大字」同様に、両語形に二つずつ読みがあるものも、70ペア(5%)存在する。「小臣」の読みは「しょうしん」のみだが、「大臣」には「おおいぎみ」「おおいもうちぎみ」「おおいみ」「おおいまえつぎみ」「おとど」「たいしん」「だいじん」など、7通りの読みの可能性があり、「小臣」と対応するのは、「たいしん」となる⁴⁷。このような極端な差のあるペアは、表からわかるように、わずかであるが、2対1、2対2、3対1程度のペアは、

⁴⁷ 見出し語の読みの数としては、「大臣」には七つの読み方があるが、「だいじん」は「国务大臣」の意味と「大尽」とも表記する「お金持ち」の意味とで、別々に立項されているので、見出し語に「大臣」の語形で記載されている語の数としては、八つとなる。

めずらしくない。

2対1の場合を例に、どのようなペアがあるのかを見てみると、①「庶家（しよけ）・嫡家（ちゃくか・ちゃっけ）」のように、発音は異なるものの、意味は同じであるもの、②「外壁（がいへき・そとかべ）・内壁（ないへき）」など、読みは異なるが、意味が類似するもの、③「下図（かず・したず）・上図（じょうず）」のように、読みも意味も異なるもの、などにわけられる⁴⁸。このうち、①は意味とのかかわりが薄く、対義語に関しては、②③が特に問題となる。たとえば『大辞林』では、「内壁」の項目に「外壁」を対義語として記すが、読みをふっていないので、辞書使用者が、「がいへき」でなく「そとかべ」と読む可能性が皆無でない。字音の「ないへき」には、字音の「がいへき」で読まれるだろうとの理由から、読みがふられないのかもしれないが、日本語母語話者において、音訓の区別が希薄になってきていること、日本語学習者には、その区別がそもそも困難であることなどに鑑みれば、問題なしとはいえない。同辞典で、「上唇（じょうしん）」の対義語に「下唇」をあげ、「かしん」の読みをふっているように、読みが複数ありうる語形には、いちいち読み方を記すことで、対義語同士の音訓の一致を使用者にうながすことは、ある程度、可能である。③の場合は、「下書き」の意味の「したず」と「下に示した図」の「かず」とがあり、「上図」とは「かず」が対応する。「上図」の対義語には「下図」があげられているが、読みがふられていないので、「したず」で解釈されることを防ぐのであれば、「かず」の読みをふる必要がある。同形語の処理として、たとえば『岩波』の「人足（にんそく）」の項目では、補足的説明に「「ひとあし」と読めば別の意」と記しているのが注目される。これを参考にして、「下図（かず）」「したず」と読めば対義語ではない」のように書くのも、煩雑さをいとわなければ、ありうる方法である。

一つの語形に読み方が複数あれば、対義語との関連において、そのぶん扱いを慎重にする必要が出てくる。②は細かく指示するなら「がいへき」「ないへき」、「小声・大声」の「こごえ」「おおごえ」のように、語種が一致する方が、「そとかべ」「たいせい」など、語種が異なる場合よりも（意味的に類似するが）、対義語ペアとして使いやすい、といった注記を加えることができる。

⁴⁸ 音訓の点からわけると、「大事」の「だいじ」「おおごと」のように、音訓の対立を含むものが245のうち114例、「客体」の「かくたい」「きゃくたい」のような、いずれも字音であるものが105例、「白糸」の「しらいと」「しろいと」など、両方、字訓であるものが26例となる。

6.3.2 読み方が1対1の関係にある対義語ペアの語種と語義数

先に記したとおり、996の二字熟語ペアは、いずれも一つの読み方しかもたないが、これらを語種の面から眺めると、996ペアがあり、内訳は次のようになる。

漢語・漢語：796 ペア (79.9%)

和語・和語：156 ペア (15.6%)

混種語・混種語：40 ペア (4%)

漢語・混種語：2 (0.2%)

和語・混種語：2 (0.2%)

約8割が漢語同士の対義語ペアである。語種にずれがあるのは、4ペアに限られ、漢語・混種語は「借金・貸金」「朝刊・夕刊」、和語・混種語は「古顔・新顔」「古漬・新漬」という内訳である。「夕刊・朝刊」「新顔・古顔」「新漬・古漬」は、いずれの辞書でも対義語ペアとして記載されるが、「借金・貸金」は、『反対語大辞典』と『反対語対照語辞典』にのみ掲げられている。これは、語種の違いが考慮されたか、「返金」「貯金」などを典型的な対義語として認めることによっておこる不一致かと思われる。『反対語対照語辞典』では、「借金」に「貸金」のほか、「返金」「貯金」「預金」を反対語としてあげている。このような現象は、「遠縁(とおえん)・近縁(きんえん)」にも見られる。「近縁」は、「ごんえん」と読む場合もあるので、1対1の関係ではないが、「とおえん」「きんえん」の場合の意味は対義語的である。しかし、両語を立項する国語辞典での扱いを見ると、

- ・対義語の記号あり：大辞林，大辞泉，日国，明鏡国語辞典（第2版）
- ・対義語の記号なし：岩波，三省堂国語辞典（第6版），新明解国語辞典（第6版），学研国語大辞典（第2版），言泉（初版），新潮現代国語辞典（第2版），広辞苑（第6版）

のように、対義語としない方が優勢である⁴⁹。混種語と漢語という、語種の違いを重く見れば、対義語としくいととも考えられるが、「遠い血縁」「近い血縁」（『岩波』の語釈より）の

⁴⁹ 辞書の略称は、『新明解』（『新明解国語辞典』），『三国』（『三省堂国語辞典』），『新潮』（『新潮現代国語辞典』），『学研』（『学研国語大辞典』），『明鏡』（『明鏡国語辞典』）とする。

ように、意味的には、対義語としない理由が見いだしにくい⁵⁰。

次に、996 ペアの『大辞林』における語義数を確認する。以下に見るように、56.6%の 564 語が単義の語同士が組み合わさった対義語ペアであることがわかる。

表2 語形 A (縦軸) と語形 B (横軸) の語義数の比較

	1	2	3	4	5	6	計
1	564	100	20	3	1	0	688
2	102	106	19	6	0	0	233
3	22	20	7	4	1	1	55
4	3	7	0	3	3	0	16
5	2	0	0	0	0	2	4
計	693	233	46	16	5	3	996

語義数も 1 対 1 のペアに「暖房・冷房」「自薦・他薦」などがあるが、これらは、どの意味で対義関係にあるのかを確認する必要がなく、読みや意味の点からいえば、もっともセットで理解・使用しやすい語群であるといえる。

これに対して、2対2の「遠景・近景」や2対1 (1対2を含む) の「悪事・善事」など、複数の語義があるペアは、どの意味の場合に対義関係になるのか、いずれの場合も対義なのかといった点に注意を要する。2対2の場合を例に、『大辞林』の語釈でこの点を検討する。表にあるように、106ペアが2対2の関係にあるが、「以外・以内」「城外・城内」など、35ペアは『大辞林』でなく、ほかの辞書で対義語としているもので、ひとまずここでこの検討対象からはずしておく。残り71ペアのうち、二つの意味ともに対義関係がなりたつとされているのは、「外部・内部」「単数・複数」など、32ペアである。これに対し、一方の意味は対義だが、他方の意味では対義関係でないとされるものが39ペアある。後者の場合、「遠景・近景」「硬貨・軟貨」など、対義語のマークはついていないが、意味は多分に対義的であるペアと、「十悪・十善」「外心・内心」のように、意味にへだたりのあるペアとが含まれている。「遠景・近景」は、単に遠くの景色、近くの景色という場合は、対義語とするのが一般的だが、写真・絵画などで手前・遠方の景色という場合は、辞書によって、対義語としないかどうかにゆれが見られる。「硬貨」については、「紙幣」と対義関係と

⁵⁰ 「遠縁」は立項しても、「近縁」は立項しない辞書が見られる。ただし、「生物で、分類上、近い関係にあること」(『岩波』)の意味では、「近縁種」のように使用される。それゆえ、『現代国語例解辞典 第4版』のように、「近縁種」の形で立項するという方法もあるが、その場合、「～の近縁」など、「近縁種」以外の形で使えるかどうかは説明がないことになる。

するのが普通であるが、形からいえば「軟貨」が対義語であることが期待される。意味の点でも、「鑄造貨幣以外の通貨。紙幣」（『広辞苑 第6版』）とあり、「硬貨と紙幣が対義関係、紙幣と軟貨が類義関係、それゆえ硬貨と軟貨も対義関係」と解釈される可能性は十分ある。このように、「ハードカレンシー・ソフトカレンシー」の意味では「硬貨・軟貨」の対義関係は安定しているが、もう一方の意味では「あまり使われない。硬貨・紙幣の組み合わせが普通」のような注記が、厳密に言えば必要なのかもしれない。

同様に、一方の意味では対義関係が安定するが、他方の意味は、扱いに注意がいるペアとして「始点・終点」をとりあげる。数学のことばとしては、「始点・終点」でよいとして、電車・バスでこれらを使う場合、「起点」という別の語が関連する。国語辞典は、この意味の場合に関し、①「終点」の対義語を「起点」のみ記し「始点」の立項がない（『岩波』、『集英社国語辞典 第2版』（『集英社』）、『新潮』）、②「始点」を立項するが、「終点」の対義語として、記号をつけるのは「起点」のみ（『三国』、『小学館日本語新辞典』（『小学館』）、『大辞泉』、『明鏡』）、③「終点」の対義語に、「起点」「始点」両方がかかげている（『現代国語』、『新選国語辞典 第9版』（『新選』）、『新明解』）、というように、かなり扱いにばらつきが見られる。

辞書での扱いは、上記のとおりであるが、話者の意識を確かめるため、ここでは、鉄道関係者（JR 東日本、東京メトロの運転士、駅員）、バスの運転者（都営バス、東急バス、京王バス）、一般の成人男女の各 20 名に、「電車、バス、道路について、「終点」の反対の意味のことばは何ですか」の質問にこたえてもらうという、ささやかな調査を試みた。次の表がその結果である。

表 3 「終点」の対義語意識

	起点	始点	始発	出発地点	始発駅	始発の駅	始点/始発駅	始発/始発駅	起点・始点	始発・始点	始点/出発点	計
電車	1	5	9	0	1	0	2	2	0	0	0	20
バス	8	1	7	1	0	0	0	0	0	2	1	20
一般	0	5	12	0	0	1	0	0	2	0	0	20

バス会社の時刻表に「起点・終点」との記載があり、両者を短縮した「起終点」もあることなどから、バス関係者の間では、「起点」がある程度、規範的な語であることがうかがえる。しかしバスの運転者に「起点」を知らない、使わないという人が複数あり、その人たちにとっては、「始発」が「終点」の対義語になっている。電車・一般では「起点」をあげる

こと自体まれで、「始発」に集中する。興味深い意見として「「～線の始発は〇〇時」「～線の始発は〇〇駅」のように文脈で区別できるので、意味がまぎれることはない」「正式には「起点」(始点) だけど、通じないから「始発」を使う」などがあった。「始発」の対義語が「終点」なのか「終着(駅)」なのかという点も含め、使い分けの詳細な記述には、より大きな調査を要するが、少なくとも辞書で規定するほど「終点」と「起点」あるいは「始点」との組み合わせは安定せず、日常語としては「終点」「始発」の方が意識されやすい点は確認できた⁵¹。

以上のように、単語に語義が複数存在する場合、対義語の組み合わせも複雑な様相を見せることがあるので、語形や語種に一致が見られたとしても、実態把握には、踏み込んだ検討が必要となる。

6.4 対義語の使用実態と用法記述

6.4.1 新聞における使用状況

ここまで辞書にもとづいて記述してきたが、以下では実際の使用面を考える。前述のとおり、561 ペアは読み・語義ともに1対1の関係で語種も一致しており、解釈にあいまいさのないペアだといえる(以下、語種の一致しない(「借金・貸金」「夕刊・朝刊」「新漬・古漬」)は念のため議論から除く)。これらについて、現代語で使うかどうかの観点をもりこんだ場合、単純に考えれば、

- ① 対義関係の語がどちらもよく使われる。
- ② 一方はよく使われるが、他方はあまり使用されない。
- ③ どちらの語もあまり使用されない。

のように分けられる。561の各ペアの所属グループを判断するため、ここでは『CD-HIASK2003 朝日新聞記事データベース』(「朝日」)における使用状況を確認した。国立国語研究所(1961, p. 16)で「話しことばや新聞などで、一般に使われ、特に解説や注釈なしに通用すると思われる語を「一般語」とし、古語や特殊な専門語などは、「非一般語」として扱った」

⁵¹ 「始発は〇時」の場合は「終電」を対義語的に使うのが普通だが、辞書では「終電」は「終電車」の略と記され、語釈は「終電車」で行うことが多く、二字漢語としての説明がない。「初電」が「終電」の対義語と記述されることもあるが、日常的な語とは言いがたい。なお、反対語の大規模な意識調査を行った研究としては、荻野・野口(1988)、荻野・野口(1996)がある。

とあるように、新聞を一般に使われる語を知るための資料として適切だと考えたためである。

かりに、両語とも 100 回以上あらわれたペアを①、一方は 100 回以上出現したが、他方が 0 のペアを②、両語とも 0 のペアを③ということにすると、以下のような該当例をあげることができる。

①に相当 (33) : 下院・上院 外科・内科 曲線・直線 軽視・重視

②に相当 : (17) : 近郊・遠郊 順調・逆調 大胆・小胆 侵入・侵出

③に相当 : (180) : 悪果・善果 醜行・美行 勝報・敗報 左獄・右獄

案外、①に相当するペアは少ない。②に相当するペアは、左に回数の多い語を記しておいた。つまり「近郊」や「侵入」に対し、「遠郊」「侵出」は、資料中には使用例がなかった。

「侵出」は、「進出」「浸出」など、同音語との衝突をさける意味合いもあり、ほかの国・領土に攻め入る意味では、類義の「侵攻」がよく用いられる。③の語は、新聞に限っていえば、あまり使われないと考えてよいだろうが、たとえば「降順・昇順」のように、パソコン関係では使うというようなものもあるので、資料の差も考える必要がある。上のペア数に含まれない 331 ペアには、「激減 (481 例)・激増 (82 例)」「後部 (342 例)・前部 (79 例)」など、①に近いもの、「高級 (1,150 例)・低級 (2 例)」「優位 (422 例)・劣位 (1 例)」など、②に近いもの、「西進 (1 例)・東進 (8 例)」「貧農 (9 例)・富農 (0 例)」など、③に近いものなど、さまざまなペアが含まれ、資料によっては、各ペアの所属に相違が出そうである。

以下では、上記の①のペアについて、用法の具体的な記述を試みるが、「単眼 (110 例)・複眼 (123 例)」「南西 (398 例)・南東 (397 例)」「北西 (417 例)・北東 (626 例)」「左端 (123 例)・右端 (119 例)」の 4 ペアは除外し、29 ペアを対象とする。理由は、以下のとおりである。まず、「複眼」は、連載記事のタイトルとして用いられたものであり、一般的な文章に出たものではないことが除外理由となる (ただし、ことばとしては、小学生向けの辞書にも記載されている)。「南西・南東」「北西・北東」は、『反対語対照語辞典』で認められているペアだが、多くの辞書では「南西・北東」「南東・北西」で対義語としており、典型性が若干劣ると考えられるので、念のため除外する。

問題は「左端・右端」である。これらは、用例は複数見られるものの、辞書に記載された「さたん・うたん」なのか、話しことばでも用いられる「ひだりはし」「みぎはし」なのか

がはっきりしない。辞書調査では、このペアは、読みが1対1の漢語ペアとなるが、実態としては、読み2対2で、語種は漢語・和語の2とおりがあがるペアである。しかし、和語の場合を立項する辞書はない。『大辞泉』では、「左端・右端」の語釈に「左のはし。ひだりはし」「右のはし。みぎはし」とあるが、単独での「ひだりはし」「みぎはし」の立項はないので、これらを既存の語と見なしてよいのか、語釈だけにあらわれた語と考えるべきなのかが不明である。記事などの書き手は、「さたん・うたん」のつもりで書いたとしても、読み手が「ひだりはし・みぎはし」と解釈する可能性があることを考えれば、なんらかの対応が必要である。処置としては、①漢語・和語両方を立項し、文体差の注記を施す、②漢語のみを立項し、「文章語」などの限定を加える、③和語のみを立項し、漢語は現代語の一部ではないと見なす、④両方立項しない。和語の方は、意味が透明で、辞書にのせるまでもないと思なす、などが考えられる。②は『三国』で行われている方法である。「意味が透明」という理由は、ことばの専門家であれば納得できても、一般の辞書利用者は、理解に苦しむであろう。このような、類義の漢語・和語のケースについては、さらに事例を多く集めて検討する必要がある。

以上の4ペアをひとまず対象外とし、29ペアについて、次で考察する。

6.4.2 対義語の用法記述

ここでは前述の29ペアの用法を検討する。類義語には、意味・用法を詳述した研究が多くあり、成果が国語辞典などに反映されることもある。一方、対義語については、用法上の共通点や違いを記述したものが、管見の限り、あまりない。荻野・野口(1988)は、反対語辞典の調査を行い、大量の語について分類を施しているが、先行研究にふれた箇所では、「従来の反対語の研究は「私はこう考える」式のものが多く、実際のデータを収集し、それを根拠にして論じるということがほとんどなかった」(p.129)と指摘している。

類義語では、置きかえ可能な文脈がある一方で、片方しか使えないような、注意が必要な場合もあり、使い分けの明確化が必要なものに対して、対義語では、意味が反対であることから、そもそも置きかえ可能な文脈や、細かい使い分けを意識する必要性が低いと考えられているのかもしれない。だが、対義語の用法差をくわしく記述しておいた方がよい場合もある。たとえば、「高め・低め」の2語の使い方として、野球などで「高めのボール」「低めのボール」は、どちらも普通の言い方だが、「低めに集める」に対し、「高めに集める」とは、普通いわない。なぜなら、低めのボールは、打ちにくいから投手にとっての目標になりうるが、

高めのボールは、長打につながるおそれがあり、「集める」という意図的な動作としては、言い表しにくいためである。このことを理解していない書き手の場合、「高めに集める」を用いてしまうことがある。このような場合を考慮するならば、対義語についても、どちらも使える場合、一方しか使えない場合などを詳述する必要がある。

以上のような観点にもとづいて対義語を記述している先行研究としては、森田（1996）がある。森田では、「対義関係にある言葉が用法、特に他語との結合関係で歩調のそろっていない場合がかなり多い」（p. 218）と述べた上で、「鋭い男／鈍い男」では対応しているが、「鋭い批評／×」では非対応、「建築は許可区域以内なら可／許可区域以外は不可」では対応するが、「×／君たち以外は内緒だ」では非対応、といった例をあげて、用法差を詳述している。

森田には、様々な例があがっており、非常に示唆的なのだが、用例資料を限定していないため、同様の記述をほかの者が行おうとした場合、対応・非対応を一つ一つ確認していくよりほかなく、作業者の負担が大きい。そこで、本節では、対義語の用法を既述する作業手順として、以下の項目をひとまず設定した。

- ア 『大辞林』『大辞泉』『岩波』『三国』『新選』『明鏡』『新明解』『小学館』『集英社』『現代国語』『例解新国語辞典 第7版』『ベネッセ表現読解国語辞典』における、29 ペアについての用例を確認する。
- イ 一方の語にしか記載されていない用例について、「朝日」および「書き言葉均衡コーパス」（以下、BCCWJ）の2009年度版を使用し、他方の語への置きかえが可能かどうかを確認する。
- ウ よく出現する連語、造語成分としての用例を適宜追加する。

このような方法をとることの利点は、①基本的な連語、複合語、派生語の例がとりだせる、②用法の対応・非対応を実例から確認できる、などであり、完全にではないが、比較的、作業者の内省に頼らずにすむ。たとえば「下院・上院」の用例として、「下院議員」「上院議員」が複数の辞書にあり、対応する組み合わせとしてとりあげることができる。そして実例を見ると、前部分としてだけでなく、「米下院」「米上院」のような後部分としての用法、「下院で審議する」「上院で審議する」のような、連語としての用法に対応が見られる。ただし「上下院」のように、両者を一語にした場合、「上」が前にくるのが慣用的であり「下上院」と

ならないといった、順序の違いも考慮しなければならない。同様の例に「海軍・陸軍→陸海軍」「戦前・戦後→戦前戦後」などがある。ただし、「出入港」と「入出港」のように、2とおりの組み合わせが可能な場合がある。いずれも港で船が出はいることをさす点で共通するが、マリーナなどにおいてそこに普段停泊している船が海に出て、その後戻ってくるという方向性を考慮すると「出入港」、ほかの港・国から来た船が港に入り、それから出ていくという方向性を考えると「入出港」というような、強調点の違いがあるようである。

上述の29ペアについて、それぞれの用法を一覧にしたのが次のページの表4である。

表にあるとおり、かなり用例を追加してある。たとえば、「減税・増税」は、上述の国語辞典には、造語成分としての用例が記載されていないが、実例を見ると、「減税措置」「増税措置」、「大幅減税」「大幅増税」のような前後要素としての用法がある。これに対し、「大勝・大敗」「朝方・夕方」などは、実例にあたっては、適当な造語成分での用法が見られなかったが、このような差は、個々に確認する必要がある。また「下旬・上旬」「軽視・重視」など、後部分用法はあるが、前部分用法が見あたらないペア、「後任・前任」「公設・私設」など、その逆のケースなども、調べてみないとわからないことである。このような対照表を考えることで、各ペアの対応・非対応の実態を示すことができる。もちろん、表にあげる語の数や選択には、さらに検討を要する。

6.5 おわりに

本節では、6.1 であげた、三つの問題について検討してきたが、課題も含めて、二字熟語ペアの検討項目としては、以下のような点が考えられる。

意味…対義かいなか。対義でないなら、どんな関係なのか。

読み方…読みは一つか複数か。複数なら、どの読みで対義関係にあるか。

語種…語種は一致するのか不一致なのか。

語義数…意味は単義か多義か。多義ならどの意味で対義関係になるのか。

品詞性…対義ペアの品詞性が一致するか、ずれがあるか。

未登録の読み…辞書に未登録の読みがあるかどうか。

新語義…辞書にない意味の有無を確認する。

新語・臨時語…辞書に未登録のペアがあるかどうか。一方が既存の語で、他方が新語・臨時語として確認されるか。

表4 対義の二字熟語の用法別対照表

前部分	後部分	連語
下院	一議員。(一選挙。)	(英一。米一。上一。)
上院	一議員。(一選挙。)	(英一。米一。)
下旬		(七月一。)
上旬		(五月一。)
年下	(一女性。一男性。一君。)	(二歳一。)
年上	(一女性。一男性。一女房。)	二歳一。
外科	一医。(一病棟。一室。一手術。)	一般一。整形一。脳一。形成一。
内科	一医。(一病棟。一般。)	(一般一。心療一。神経一。)
海軍	一省。一大臣。一記念日。一軍縮条約。	(米一。陸一。)
陸軍	一省。一大臣。一記念日。一中野学校。	(米一。)
曲線	一美。(一的。)	双一。
直線	一美。(一的。一距離。一コース。一運動。)	半一。
軽視		(株主一。国連一。)人命一。(国会一。)
重視		(株主一。国連一。)経済一。(最一。)
減額	一修正。(一交渉。)	(大幅一。賃金一。)
増額	(一修正。一交渉。)	(大幅一。賃金一。自動一特約。)
減収	(一分。一減益。)	(大幅一。)
増収	一分。一増益。(一計画。)	(大幅一。)
減税	(一措置。一効果。)	(大幅一。酒税一。住宅ローン一。)
増税	(一措置。一効果。)	(大幅一。酒税一。)
最古		日本一。世界一。現存一。
最新	一型。一版。一式。一情報。	(当時一。)
後任	一者。一人事。(一候補。)	
前任	一者。一地。一校。	
事後	(一チェック。一処理。一報告。一強盗。)	
事前	(一チェック。一運動。一協議。一工作。)	
戦後	一派。一生まれ。一処理。一補償問題。	(戦前一。)
戦前	一派。(一生まれ。)	
公設	一秘書。一市場。一民営。	
私設	(一秘書。一道路。一図書館。一応援団。)	
公的	一年金。一機関。一扶助。一資金。(一病院。)	
私的	一年金。一自治。一制裁。(一流用。)	
降格	一人事。一処分。	(2軍一。2部一。)
昇格	一人事。一試験。一運動。	(1軍一。1部一。内部一。)
高温	一殺菌。一障害。	(異常一。)
低温	一殺菌。(一障害。一やけど。一麻酔。)	(異常一。)
出港	(一予定。一バレード。)	(緊急一。入一。)
入港	(一予定。一バレード。一歓迎式。一拒否。)	(緊急一。出一)
歳出	(一額。一予算。一カット。)	(一般一。)
歳入	(一額。一予算。一欠陥。一関税。)	
最小	一限。一限度。一血圧。一公倍数。	世界一の独立国。(史上。一。)
最大	一限。一限度。一血圧。一公約数。一多数。	世界一のタンカー。史上。一。
勝者		(1回戦一。)
敗者	一復活戦。	
勝訴	(一判決。)	(原告一。全面一。逆転一。)
敗訴	(一判決。一者。)	原告一。(全面一。逆転。)
大勝		
大敗		
連勝	(一ストップ。一)一。一単式。一複式。	連戦一。五一。
連敗	(一ストップ。)	連戦一。三一。
朝方		
夕方		
暖房	一中。一装置。一設備。	(全館一。)床一。中央一。冷一。
冷房	一中。一装置。一設備。一病。一車。	全館一。
無料	一サービス。一アプリ。一電話。一奉仕。	入場一。送料一。
有料	一サービス。一アプリ。一道路。一トイレ。	
優勢	一勝ち。(一領域。)	(自民一。)
劣勢		(民主一。)

〔注〕対応のある用法を先に示し、非対応の用法を後に示す。丸カッコのついた用例は、筆者が追加したもの。それ以外は、前述の国語辞典に記載されている用例。

同音語・表記…似た意味の同音語があるか。それは別語か表記の違いか。

一般語・専門語…一般的には対義関係にないものの、専門語では対義ペアになる場合があるかどうか。

文体…対義のペアの間に文体差があるかどうか。

類義語との比較…ある語の対義語が複数ある場合、それらの使い分けはどうなっているか。

使用状況…日常的に用いられるペアであるかどうか。

用法…造語成分としての機能、連語上の組み合わせの比較

なるべく細別して示した。「同音語・表記」の項目は、「下船」に対する「じょうせん」が「上船」「乗船」で別個に立項されることもあれば、「乗船」の注記に「上船とも書く」のように処理されることもある例などを検討するものである。「新語義」は、数学で使う「外接」に対し、「外接のハードディスク」など、「外付け」の意味の場合などに対応するため、「新語・臨時語」は、既存語の「海域」「無糖」に対する「陸域」「有糖」のような語に対応するための項目である。

7. 異音同表記語について

7.1 はじめに

二字漢語の意味や用法を分析しようとした場合、「今日」「半生」のように表記される語については、実際の用例において、それが「コンニチ」「ハンショウ／ハンセイ」などの漢語であるのか、「きょう」「ハンなま」のような和語・混種語であるのか、文脈から判断し、両者を区別していかなければならない。その場合、「ハンショウ／ハンセイ」と「ハンなま」については、文脈からどちらの意味で使われているのか、比較的、判別しやすいが、「今日」については、意味が重なる部分が大きく、どちらの読みであるのか、決定的な手がかりがないことも少なくない。ここでは、このような組み合わせについて、できるだけ多くの例をあげて、表記上の対策を検討する。

このような組み合わせは、「同形語」「同表記異語」「異音同表記語」などとよばれるが、ここでは、たとえば「発意（ハツイ／ホツイ）」のように、同一語における読みのゆれのケースも扱うため、音が異なり、表記が同じということで、広い範囲をカバーすることができる異音同表記語を統一的に使用する。この点は、大島（1992）を参考にしている。異音同表記語の種類など、理論的な点は、石綿・佐竹（1986）、佐竹（1987）、大島（1992）などで示されている。本節では、これらの研究を参考にして、現代の国語辞典で、どのような書き分け・読み分けのための情報が記述されているかを具体的に検討する。

資料としては、水谷（編）（1987）の付録「同字異訓熟語集」（875の組み合わせを採録）を用い、各語について、『三省堂国語辞典 第7版』（『三国』）、『新選国語辞典 第9版』（『新選』）、『明鏡国語辞典 第2版』（『明鏡』）で表記・読みに関する記載情報を確認した。たとえば、「生物」を例にとると、これには読みとして、少なくとも「いきもの」「セイブツ」「なまもの」などの可能性が考えられるが、誤読防止を考えるのであれば、「生き物」「生物（セイブツ）」「生もの」などのように、送りがなやかな書きをまじえた書き分けについての情報が必要になる。上記の3辞書では、これらの点についての記載が豊富であることから、基礎資料として使用することにした。なお、新聞・放送の分野で用いられている用字・用語辞典も、現場で用いられる資料として、補足的に適宜参考にする。また、すでに例を示したように、単語の読みを示す場合には、原則として漢語はカタカナ、和語はひらがなで表記する。ただし、辞書の引用部分や実際の表記のしかたを示す場合には、この限りではない。

7.2 判別の手がかりとなる情報

7.2.1 別語の存在を注記する

たとえば、「依存」における「イソン」と「イゾン」のように、二つの読み方が一つの表記に対して存在する場合、読みのゆれが起こることは問題であるが、意味については同一の事柄をあらわしており、特別の注意はいらない。しかし、「有為」における「ウイ」と「ユウイ」の場合は、仏教語の「ウイ」と役に立つことの意をもつ「ユウイ」とでは、意味の開きが大きい。それゆえ、このような場合は「「ゆうい（有為）」は別語」（『明鏡』）のように示してあることで、読み手は、文中で目にした「有為」がどちらの意味で用いられているのかを注意深く判断するよう促される。「境界（キョウカイ／キョウガイ）」について、「きょうがい（境界）は別語」とするのも同様である。このような表示は、資料の中では『新選』で積極的にとられており、次のような語において、「～と読めば別語」という注記がつけられている。

悪性（アクショウ／アクセイ） 安居（アンキョ／アンゴ） 開眼（カイガン／カイゲン） 唐紙（からかみ／トウシ） 気骨（キコツ／キぼね） 逆手（ギャクテ／さかて） 教化（キョウカ／キョウゲ） 境界（キョウカイ／キョウガイ） 警策（キョウサク／キョウザク） 経典（キョウテン／ケイテン） 口舌（クゼツ／コウゼツ） 工夫（クフウ／コウフ） 講師（コウシ／コウジ） 再建（サイケン／サイコン） 在米（ザイベイ／ザイマイ） 作物（サクブツ／サクモツ） 作法（サクホウ／サホウ） 座頭（ザがしら／ザトウ） 直筆（ジキヒツ／チョクヒツ） 実体（ジツタイ／ジツテイ） 地味（ジミ／チミ） 正気（ショウキ／セイキ） 身上（シンショウ／シンジョウ） 数奇（スウキ／スキ） 成敗（セイハイ／セイバイ） 精兵（セイビョウ／セイヘイ） 大家（タイカ／タイケ） 大勢（タイセイ／タイゼイ／おおぜい〈「おおぜい」には注記なし〉） 旅人（たびニン／たびびと） 知行（チギョウ／チコウ） 追従（ツイジュウ／ツイショウ） 手書き（てかき／てがき） 天人（テンジン／テンニン） 同行（ドウギョウ／ドウコウ） 年頭（としがしら／ネントウ） 半生（ハンショウ／ハンセイ〈「ハンなま」はなし〉） 百姓（ヒヤクショウ／ヒヤクセイ） 評定（ヒョウジョウ／ヒョウテイ） 仏語（フツゴ／ブツゴ） 分別（フンベツ／ブンベツ） 変化（ヘンカ／ヘンゲ） 法文（ホウブン／ホウモン） 末期（マッキ／マツゴ） 役所（ヤクショ／ヤクどころ） 遊行（ユウコウ／ユギョウ） 利益（リエキ／リヤク）

これらは、二つの見出しのいずれにおいても、他方が別語であると記されているものであるが、次のような語においては、一方（スラッシュの左側の語）にのみ、「～と読めば別語」との注記がある。

内面（うちづら／ナイメン） 間尺（ケンジャク／まシャク） 好事（コウジ／コウズ） 高台（コウダイ／たかダイ） 高潮（コウチャウ／たかしお） 降伏（コウブク／コウフク） 先手（さきて／センテ） 施行（セギョウ／シコウ） 造作（ゾウサク／ゾウサ） 中間（チュウカン／チュウゲン） 生物（なまもの／セイブツ） 人体（ニンテイ／ジンタイ） 名代（なダイ／ミョウダイ） 声明（セイメイ／ショウミョウ） 幕下（バック／まくした） 無人（ムジン／ブニン） 山川（やまがわ／やまかわ）

一方のみに注記が必要な理由が何かあるのかもしれないが、確実なことがいえないので、ここでは指摘にとどめる。なお、「何人（なにびと）」の項目には「「なんにん」と読めば別語」と記されているが、「なんニン」は見出し語になっていない。「三人」「五人」の「三」「五」のような数字と同様、「何（なん）」は「何回」「何度」など、様々な表現に用いられ、特別な意味をもつこともないため、個別には立項されないのだろう。このような方法は、ほかの数字の場合にも有用である。たとえば「腹八分」などにおいて使われる「八分（ハチブ）」は立項されるのに対して、時間の「ハップン」は「なんニン」と同様に見出し語になることは一般的でないが、「ハチブ」の項目において、「「はっぶん」と読めば別語」のように、同じ表記の語があることを示すというようにである。

国語辞典を利用しながら文章を書くという前提が必要ではあるが、このような注記があることにより、書き手の側には、表記に関して、まぎらわしさのある語なのだという内省が生まれて、文脈を工夫したり、ほかの表現にかえたりするといった対策がとられることが期待される。

7.2.2 非日常語の場合

たとえば、『広辞苑』や『大辞林』といった中型の国語辞典には記載されている語であっても、小型の辞書には、のっていない語というのものもある。そして、日常的な生活を送る

上では、小型辞書にのっている程度の語が理解できればよいという考え方をすれば、資料中に含まれている異音同表記語に関しても、複数の辞書にのっていないような語については、たとえば、一般の学生や留学生が学習する語彙の中からは、はずしてもよいという見方も可能であるとする。本節で用いる三つの辞書において、次の語については、いずれの読みの場合も、語が立項されていない。意味が一つに限られ、分野の特定が可能な語については、山カッコの中にそれを示した。

合端 (あいは／あいば) 秋上 (あきあげ／あきあがり) 異客 (イカク／イキヤク)
有体 (ウタイ／ユウタイ) 打金 (うちがね／うちキン) 産子 (うぶこ／うぶご)
大頭 (おおあたま／おおがしら) 大札 (おおサツ／おおふだ) 押手 (おして／おしで)
掛花 (かけはな／かけばな〈華道〉) 風道 (かざみち／フウドウ) 火床 (カショウ／ひどこ)
極官 (キョツカン／ゴツカン) 小返 (こがえし／こがえり) 雑筆 (ザッピツ／ゾウヒツ)
三品 (サンピン／サンボン) 信楽 (しがらき〈固有名〉／シンギョウ〈仏教〉)
直心 (ジキシン〈仏教〉／ひたごころ) 実方 (ジツかた／ジツがた〈歌舞伎〉)
聖道 (ショウドウ／セイドウ) 新切 (シンきり／シンぎり) 順流 (ジュンリュウ／ジュンル〈仏教〉)
心法 (シンポウ／シンボウ) 背向 (そがい／ハイコウ) 足力 (ソクリキ／ソクリョク) 体相 (タイソウ／テイソウ) 竹切 (たけきり／たけきれ)
点付 (テンつき〈漢文〉／テンつけ) 根抜 (ねぬき／ねぬけ) 吹通 (ふきとおし／ふきどおし) 縁付 (へりつき／へりつけ) 本間 (ホンケン／ホンま) 物着 (ものぎ／ものぎせ〈能〉) 山子 (やまこ／やまご) 脇手 (わきて／わきで)

このうち、「信楽 (しがらき)」に関しては、地名であることから小型の辞書にはのりにくいものであり、一般的に用いられないわけではない。また、「点付け」は「点」と「付ける」の意味から容易に合成語の意味が予測できるため、立項されなかったのだろう。「吹き通し」は「吹き抜け」「吹き抜き」のほうが一般的な語であることが、単独で立項されない理由であろうが、『明鏡』では、「吹き抜き」の項目で、語釈のあとに類語として「吹き通し」をのせている。このような語をのぞけば、おおむね、日常的に用いられる語は、含まれておらず、基本的な異音同表記語のセットからは、省いてよさそうである。

7.2.3 現代共通語としての性質の有無

前述の語とは異なり、語が立項されてはいるものの、一方の読み方（の語）が古い言い方であったり、方言的な言い方であったりして、共通語で書かれる一般の文章としては、他方の読みに限定されやすい場合というのがある。まず、「古い言い方」「古語」などの指標がついている語を『三国』で見えていく。

悪性（アクショウ〈古風〉／アクセイ） 行方（いきかた／ゆきかた→いきかた／ゆきがた〈古風〉／ゆくえ） 入目（いりめ〈なし〉／いれめ〈古風〉義眼） 入札（いれふだ〈古風〉①入札（ニューサツ）。②投票／ニューサツ） 女子（おなご〈古風〉女子（ジョシ）。女性／ジョシ） 数奇（サッキ〈古風〉→スウキ／スウキ／スキ〈「数寄」の表記のみ〉） 地頭（ジあたま／ジがしら〈なし〉／ジトウ〈歴史〉） 首巻（シユカン〈なし〉／くびまき〈古風〉） 中間（チュウカン／チュウゲン〈歴史〉） 仲間（チュウゲン〈歴史〉／なかま） 評定（〈古風〉ヒョウジョウ／ヒョウテイ）

これらのほかに、雅語を示す場合もある。

青嵐（あおあらし〈雅語〉／セイラン） 遠近（エンキン／おちこち〈雅語〉） 山人（サンジン／やまびと〈雅語〉） 千万（センバン／センマン／ちよろず〈雅語〉） 大君（タイクン／おおきみ〈雅語〉）

次に『新選』の場合を見る。

在方（ありかた／ザイかた〈古めかしい言い方〉） 異人（イジン／ことびと〈古語〉） 上様（うえさま〈もとは「じょうさま」と読んだ〉／かみさま〈古語〉） 上人（うえびと〈古語〉／ショウニン） 大人（うし〈古語〉／おとな／タイジン／ダイニン） 御方（おかた／おんかた〈古語〉／みかた） 傀儡（カイライ／くぐつ〈古語〉） 警策（キョウサク／キョウザク〈古語〉） 御座（ギョザ／ゴザ〈古語〉／おザ） 公達（きんだち〈古語〉／コウタツ） 下人（ゲニン〈古語〉／しもびと〈なし〉） 乞食（コジキ／コツジキ〈古めかしい言い方〉） 月代（さかやき／つきしろ〈古語〉） 左右（サユウ／ソウ〈古語〉） 地下（ジゲ〈古語〉／チカ） 霜月（しもつき〈古語〉／

ソウゲツ) 醜女 (しこめ〈古語〉／シュウジョ) 受領 (ジュリョウ／ズリョウ〈古語〉) 人気 (ジンキ／ニンキ／ひとけ／ひとげ〈古語〉) 精兵 (セイビョウ〈古語〉／セイヘイ) 知行 (チギョウ〈古語〉／チコウ) 直面 (チョクメン／ひたおもて〈古語〉／ひためん)

このうち、「さかやき (月代)」については、古語のマークがついていないが、「つきしろ」の項を見ると、②の意味で「さかやき」となっているので、「さかやき」も古語と見なせば、いずれの読みでも、現代語として用いられる語ではないということになる。「ひためん」も、「ひたおもて」が類語としてあがるが、「顔をかくさずに向かいあうこと」の意味だけが古い言い方であり、「能楽で、面をつかわないこと」は、現代でも能の世界で一般的な語なのかどうかといった点を、個別の問題として調べる必要がある。

最後は『明鏡』である。「大君」について「タイクン」は立項されず、「おおきみ」に「古語」と記され、あるいは「大根」に「古名は「おおね」との注記が施されるほか、次のような語に、古い言い方としての注記がある。

在方 (ありかた／ザイカタ〈古い言い方〉) 行方 (いきかた〈なし〉／ゆきかた〈なし〉／ゆきがた〈古風〉／ゆくえ) 一日 (イチジツ／イチニチ／ひとひ〈古風な言い方〉) 一分 (イチブ／イチブン〈古風な言い方〉) 一角 (イッカク／いっかど〈古い言い方〉／ひとかど) 売子 (うりこ〈現在では「販売員」という言い方が普通〉／うれっこ) 大風 (おおかぜ／おおふう〈やや古い言い方〉) 大道 (おおみち〈古風な言い方〉／タイドウ〈なし〉／ダイドウ) 片方 (かたえ〈古い言い方〉／かたかた〈古い言い方〉／かたほう) 金山 (かなやま〈古い言い方〉／キンザン) 口舌 (クゼツ〈やや古い言い方〉／コウゼツ) 工夫 (クフウ／コウフ〈現在では「工事作業員」という〉) 中間 (チュウカン／チュウゲン〈江戸時代〉)

このうち、「うりこ」については、正式な言い方としては「販売員」であっても、口語的な場面では、「売り子」または「売りこ」の表記で、「東京ドームのビールの売り子」などのように、現代でも用いられるので、使い分けの問題として検討がいる。もっとも、表記上は、このペアについては「売り子」「売れっ子」のように、送りがなを用いた書き分けが行われるので、判別の面からは問題が小さい。また、『明鏡』では、「てかず (手

数)」について、「お手数をかけて」のような使い方の場合、「てスウ」の古風な言い方として注意喚起している。「てかず」には、「ボクシングで、パンチを出す回数」(『明鏡])など、現代語としての意味もあるので、単純に、古い言い方として扱うわけにはいかない点が特徴的である。

次に方言や俗語を見る。これらの表示がある場合、共通語で書かれる一般の文章では、書き手が意図しているのは、これらの性質をもたないほうの読みだと判別しやすくなる(もちろん、絶対的な基準として用いることができるわけではない)。まず、方言としては、数は多くないが、次のような語について、記載が見られる。

南風 (ナンプウ/みなみかぜ/はえ 〈主に西日本でいう『明鏡』) 〈九州・沖縄などの方言『三国』) 〈中国・四国・九州で使う語『新選』)
新道 (シンドウ/シンみち 〈東京方言)『明鏡』)

俗語については、「手前 (てまえ/てめえ)」における「てめえ」などがあるが、この場合、「てめえ」と表記されることで、漢字表記される「てまえ」とは区別しやすい。ほかに、「博士 (ハカセ/ハクシ)」における、「ハクシ」の「俗な言い方」(『新選])としての「ハカセ」や、「[俗] 女をののしって言うことば」(『三国])の「めロウ (女郎)」(同表記語は「ジョロウ)」などがある。「ハカセ」は、その道に詳しい人という意味では「はかせ/ハカセ」などのかな書きも見られる。また、「めロウ」は「あま」など、ほかの語が女性をののしる場面で用いられ、対義語の「野郎」ほどには目にすることがない。

以上のように、「古い」「方言」「俗語」などの性格をもつ語の場合、これらは、一般的な共通語で書かれる文章の中には出現しにくく、もう一方の一般的な読み方に比べて、その読み方をしなければならない可能性は、かなりの程度低くなるものと思われる。このような基準で考えれば、一方が文章語の場合も、当然、視野に入れなければいけないが、異音同表記語が問題となるのが文章の中においてであり、一方が文章語であることが判別の決定的な手がかりとなるとも思えないため、ここでは扱わない。

7.2.4 一方を標準的とする

複数の読みの存在が、それぞれを別語と認定するようなものではなく、一つの語の読みのゆれとして考えられる場合、「毒気 (ドッケ→ドクケ)」のように、→を用いて、一方が標準

のであることを示す。「毒氣」については、いずれも同様の扱いをしており、「ドクケ」のほうが一般的であると判断できそうである。また、「出生（シュッセイ→シュッショウ）」も同様である。しかし、たとえば、「猪口（チョク／チョコ）」を例にすると、『三国』『新選』は「チョク→チョコ」のように「チョコ」を標準的と考えているのに対して、『明鏡』では「チョコ→チョク」と反対の判断をしている。「チョコ」は「チョク」の転（『新潮現代国語辞典 第2版』）であり、本来的な言い方として「チョク」をとる考えもありうる。それゆえ、このようにゆれの見られる語については、個別に実態調査を行って、一般に行われている読み方と伝統的な読み方とにずれがあるかどうか、どのように調整すべきかなどの点を考える必要が出てくる。本節の資料に含まれる語ではないが、「乳離れ（ちちばなれ／ちばなれ）」「初産（ういザン／ハツザン）」「精霊流し（ショウリョウながし／ショウロウながし）」の3例について、読みの傾向を精査した太田（2010）や「願望（ガンボウ／ガンモウ）」のうち「ガンボウ」が現代語として標準であることを詳述する塩田（2011）など（「助言（ジョゲン／ジョゴン）」など九つの組み合わせを扱っている）、語の読み方が常に問題となる放送の分野において、漢字の読みについて詳細に調べた研究が見られる。

以下に辞書ごとの→のついた語を示す。まず『三国』である。

木目（きめ→モクめ） 型式（ケイシキ→かたシキ） 高名（コウミョウ→コウメイ）
直答（ジキトウ→チョクトウ） 主従（シュウジュウ→シュジュウ） 中古（チュウ
ぶる→チュウコ） 内幕（ナイマク→うちマク） 肉食（ニクジキ→ニクシヨク） 発
意（ホツイ→ハツイ） 風穴（フウケツ→かざあな）

ここでは、たとえば「本文（ホンブン／ホンモン）」における「ホンモン」が「①→ほんぶん。②〔俗〕本題。」とされるように、その読み方独自の意味が部分的に当該辞書で認められている場合は除外している。また、「妄想」について『三国』では、「モウソウ」の項目で「〔もと仏教用語で、「もうぞう」〕」のように、過去の読み方として「モウゾウ」を示している。

次に『新選』である。

一日（イチジツ→イチニチ） 上向（うえむき→うわむき） 訓読（クンよみ→クン
ドク） 数奇（サッキ→スウキ） 主従（シュウジュウ→シュジュウ） 白子（しろ

こ→しらこ) 人力(ジンリキ→ジンリョク) 施行(セコウ→シコウ) 神器(シンキ→ジンギ) 俗名(ゾクメイ→ゾクミョウ) 男女(ナンニョ→ダンジョ) 風体(フウタイ→フウテイ) 法界(ホツカイ→ホウカイ) 発意(ホツイ→ハツイ) 本文(ホンモン→ホンブン)

このうち、「一日」「人力」に関しては、「イチジツ」「ジンリキ」の項目で「一日千秋」「人力車」の場合は、こちらの読み方で用いるのが一般的であることが、わかるように示されている。最後に『明鏡』である。

音読(オンよみ→オンドク) 型式(ケイシキ→かたシキ) 訓読(クンよみ→クンドク) 曝首(しゃれこうべ→されこうべ) 白子(しろこ→しらこ) 前世(ゼンセイ→ゼンセ) 同人(ドウニン→ドウジン) 水車(みずぐるま→スイシャ) 利札(リふだ→リサツ)

これらは、複数ある読みのうちの一方を標準的とするものであったが、別の表現をとることが望ましいとされる場合もある。たとえば、『新選』において、「仏国(フッコク/ブッコク)」は、仏の住む国の意である「ブッコク」は立項されておらず、フランスの意の「フッコク」については「→フランス(仏蘭西)」のように指示されている。あるいは、『明鏡』で「出場(シュツジョウ/でば)」は、「でば」が「→出場所」のように、「出場所」を用いるように示される。このような例としては、ほかに以下のものがある。

白子(しらこ/しろこ〔俗〕→アルビノ) 天火(テンカ(なし)/テンび→オープン) 生焼(なまやき→レア/なまやけ) 半切(ハンセツ/ハンぎり→盤台) ※以上『三国』から) /華道・花道(カドウ→いけばな/はなみち) ※『新選』から

どの語について、一方の読みが標準的であるか、あるいは、ほかの表現をとるのが望ましいのかといった点は、辞書によって判断が異なる場合が少なくないが、たとえば「しろこ→しらこ」「しろこ→アルビノ」のように、「しろこ」は望ましくないという判断で共通しているものもあり、このようなものを、たとえば日本語学や日本語の教科書の中でとりあげて、注意を喚起するという対策も考えられる。

7.2.5 形式的な制限にもとづく使い分け

一方の読みについては、単独で文中で用いられるのに対して、他方の読みについては、現代語においては、合成語や慣用的な表現の中で用いるのが一般的であるという場合がある。たとえば、「性悪（しょうわる／セイアク）」の場合、前者は「性悪な人」のように単独で使うが、後者は「性悪説」という合成語の要素として一般に用いられる。あるいは、「横手（よこて／よこで）」において、「よこて」は「家の横手」などさまざまな連語で用いられるが、「よこで」はもっぱら「横手を打つ」という慣用表現で用いられる。このような組み合わせについては、単独で用いられる場合は、おおむね一方の読みのほうに限られるという情報が、判別の役に立つ。このような性質をもつものを合成語と慣用表現の順で以下に示す。

- ・合成語：人頭（ジントウ／ニントウ〔人頭税〕） 手取（てとり〔手取り足取り〕／てどり） 内輪（うちわ／ナイリン〔内輪山〕） 引手（ひきて／ひきで〔なし〕／ひくて〔引く手あまた〕） 白玉（しらたま／ハクギョク〔白玉楼〕） 安心（アンシン／アンジン〔安心立命〕） 前置（ゼンチ〔前置詞〕／まえおき） 荷足（にあし／にたり〔荷足り船〕） 大業（タイギョウ／おおわざ〔大業物〕） 手当（てあたり〔手当たり次第〕／てあて） 利益（リエキ／リヤク〔御利益〕） 平城（ひらじろ／ヘイジョウ〔平城宮・平城京〕） 三葉（サンヨウ〔三葉虫〕／みつば）
- ・慣用表現：打出（うちだし／うちで〔打ち出の小づち〕） 大手（おおて／おおで〔大手を広げる／大手を振る〕） 気骨（キコツ／きぼね〔気骨が折れる〕） 死花（シカ／しにばな〔死に花を咲かせる〕）

以上、ここまでは、読み手の側が判別の手がかりとして利用できる情報について、国語辞典でそれをどのように表示しているのかという点に着目して記述してきた。上記のような情報が、読み手にとって役立つものであることは明らかであるが、それ以前に、書き手の問題として、読み手が読解に困るような表記をとらずに、読みやすい文章を心がけるといふ点があげられる。以下、これについて述べていく。

7.3 読解におけるまぎらわしさを減らすための表記

7.3.1 別漢字による表記

大島（1992）では、異音同表記語の解消方法として、「別の漢字で表記」「送り仮名」「語種による書き分け」の三つを示している。別の漢字で表記する点については、次のように指摘している。

「十分」を「充分」に、「大業」を「大技」に、「黒子」を「黒衣」に表記形を改めるのである。しかし、「根本」は「根元」とすることで「コンポン」との区別は可能になるが、「コンゲン」との区別ができなくなる。「人事」は、「他人事」とすることで「ジンジ」と紛れなくなるが、あらたに「タニンごと」なる語が生まれることになるのである。（大島（1992, p. 9））

別の漢字で書くことの長短が示されている。このうち、「ジュウブン」については、「(充分) → 十分・じゅうぶん」（『記者ハンドブック 第12版』）、「(充分) → ⑩十分」（『読売新聞用字用語の手引 第3版』）のように、「充」を用いない場合が多いが、「ジュップン」については、洋数字で「10分」と書くことで、「十分」との書き分けを行うことが可能になる。「根本」については、「根本（コンポン）」「根元（ねもと）」「根源（コンゲン）」のように書き分けられている。表記について、対応が安定しないのが「黒子・黒衣」の場合で、次のように、報道各社においても、対応にばらつきが見られる。

表1 「黒子・黒衣」の読みと表記に関する対応

朝日新聞の用語の手引 2010年版	くろご(黒子)→【慣】黒衣
NHK漢字表記辞典 初版	くろご 黒子《芸能》(「黒衣」【特】とも) (「クロコ」とも)
記者ハンドブック 第12版	くろこ 黒子〔歌舞伎、浄瑠璃など。「くろご」とも。「黒衣(くろこ)はなるべく使わない〕
最新用字用語ブック 第6版	くろこ(黒衣)→黒子(歌舞伎など。「くろご」とも)
産経ハンドブック 平成24年版	くろこ→黒子(「くろご」とも)
NIKKEI2011 用語の手引	くろご(黒衣)→黒子〔「くろこ」とも〕
毎日新聞用語集 2013年版	くろご 【慣】黒衣〔「くろこ」とも〕
読売新聞用字用語の手引 第3版	くろこ(黒衣)→黒子(=陰で働く人) 黒子に徹する/くろご(黒衣)→黒衣(くろご) (歌舞伎用語)

「常用漢字表」で「黒衣」の「衣」に「こ」や「ご」の読みは認められていないので、漢字表の範囲で書こうとするなら「黒子」になるが、慣用的に「黒衣」が一般的であるとの判断から「慣用」などのマークをつけて、こちらの表記を用いる社もあるわけである。また、「人事（ジンジ／ひとごと）」の組み合わせについては、「ひとごと」に対して、『三国』が「人ごと」および「ひとごと」、『新選』が「ひと事」の表記を示しており、これらの表記を

選択することによって、「ジンジ」とのまぎらわしさを、それから、「他人事」と書くことで「タニンごと」と読まれてしまうという二つの問題を解消することができる。もっとも、「黒子・黒衣」のように、専門分野の語の場合は、容易にかな書きにするわけにもいかない。個人的な考えになるが、専門分野の人に対して、報道などの側から、かな書きや送りがなを多くふることなどについての趣旨（読みやすさ、読み誤りの防止など）を説明し、今後書かれる文章においては、必ずしも過去の慣例にそう表記でなくともよいと考える意識をもってもらえるよう、働きかけが行われてもよいのではないかと考える。

以上のような点を参考にしながら、以下では、三つの辞書で、一方の読みについて、別の漢字のみ、あるいは別の漢字を優先的に示しているものを確認していく。なお、「荷担（カタン／にかつぎ）」のような場合は、「加担」の表記がとられやすいことに加えて、「荷担ぎ」のように、後者は送りがなで書き分けが可能になっており、このようなケースについては、ここではふれない。一覧では、同表記になる場合の漢字表記をまず示し、丸カッコの中に読み方を示す。亀甲カッコの中の表記は、カッコの直前の読み方にのみ当てはまるもの。

言分（いいブン／いいわけ〔言い訳〕） 一角（イッカク／ひとかど〔一廉〕） 初心（うぶ〔初〕／ショシン） 大柄（おおがら／オウヘイ〔横柄〕） 御方（おかた／みかた〔味方〕） 回路（カイロ／まわりみち〔回道路〕） 河岸（かし／かわぎし〔川岸〕） 花道（カドウ〔華道〕／はなみち） 鉄輪（かなわ〔金輪〕／テツリン） 金庫（かねぐら〔金蔵〕／キンコ） 強気（ゴウギ〔豪儀〕／ゴウキ〔豪気〕／つよき） 四角（シカク／よすみ〔四隅〕） 醜名（しこな〔四股名〕／シュウメイ） 数奇（サッキ／スウキ／スキ〔数寄〕） 入魂（ジッコン〔昵懇〕／ニュウコン） 生麩（ショウフ〔正麩〕／なまフ） 代代（ダイダイ／ヨヨ〔世世〕） 丁字（チョウジ〔丁子〕／テイジ） 点火（テンカ／とぼし〔灯〕／ともし〔灯〕） 取得（とりえ〔取り柄〕／とりドク） 余波（なごり〔名残〕／ヨハ） 端書（はがき〔葉書〕／はしがき） 白魚（ハクギョ／しらうお／しろうお〔素魚〕） 白面（ハクメン／しらふ〔素面〕） 白金（ハッキン／しろがね〔銀〕） 目下（めした／モッカ／めもと〔目元・目許〕）

歴史語の「タイフ／ダイブ」の場合、「大夫」と書かれ、「タユウ」は「太夫」というように統一されていれば、書き分けが可能になるが、「太夫」は主に歌舞伎で、「大夫」は主に文楽で、というように、現代において分野による書き分けがあるため、読みと表記の関係が複

雑である。また、国語辞典と異なり、報道各社では、「足下(あしもと/ソッカ)」について、「あしもと」については「足元」で統一しているので、「ソッカ」との書き分けが可能になっている。この方法を「足跡(あしあと/ソクセキ)」にも適用することを考えると、「足痕」が考えられ、インターネットなどでは使用例が見られる。あるいは、「足あと」という表記も行われており、読みやすさの点で優れる。国立国語研究所の書き言葉コーパス「中納言」では、「足跡」の757件に対して、「足あと」が35件という割合である。「あしあと」も「ソクセキ」も一般的に用いられる語であることを考えると、「足跡(ソクセキ)」と「足あと」の書き分けは、合理的な対処法である。

7.3.2 漢数字と洋数字

数は少ないものの、数を含む語において、たとえば、「ごふん、ろっふん、ななふん」のように数えられるものについては、これを洋数字で表記することにより、「五分五分」などにおける「ゴブ」との書き分けが可能になる場合がある。洋数字を用いることのできる語というのは、次のようなものである。

1時 1日 2世 2分 3世 4時 8分 10分

これらには、「一時(少しの間などの意)」のように、漢字表記が一般的である意味をもつ語も見られる。上記の語を洋数字で書き、「イツとき」「イチジツ」「ニセ」「シジ/シイジ」などを漢字表記することで、書き分けが可能となる。

7.3.3 送りがな

送りがなは、主に和語の動詞やそこから派生した名詞などにつけられるものであるが、これによって、漢語などとの書き分けが可能になる場合は少なくない。たとえば、「前後(ゼンゴ)」に対する「前後ろ」、「押し入り」と「押し入れ」などの場合である。以下に用例をいくつかの種類にわけて掲げるが、かな書きが可能なものについては、ここでは漢字を用いおき、次節で別に述べることとする。まず、「到着(ラクチャク)」のように、送りがなを必要としない活用のない語と、「落ち着き」のように、活用語から派生した名詞との組み合わせにおいて、送りがなが判別の手がかりとなっているものを示す。いずれかの辞書で、送りがなを省いた形が許容されている場合、() でかなの部分をつらぬく。

一通(イツウ)／一通り 飲料(インリョウ)／飲み料 有無(ウム)／有り無し 上物(うわもの／ジョウもの)／上がり物 延延(エンエン)／延び延び 御上(おうえ／おかみ)／御上り 御代(おダイ／みよ)／御代わり 御供(おとも)／御供え 音読(オンドク)／音読み 開放(カイホウ)／開けっ放し 歌手(カシュ)／歌い手 気障(キざ)／気障り 寄書(キシヨ)／寄せ書き 気配(キハイ／けはい)／気配り 寄付(キフ)／寄り付き 起伏(キフク)／起き伏し 逆上(ギャクジョウ)／逆上(がり) 共食(キョウシヨク)／共食い 共働(キョウドウ)／共働き 居住(キョジュウ)／居住まい 空間(クウカン)／空き間 空地(クウチ)／空(き)地 口伝(クデン)／口伝え／口伝て 区分(クブン)／区分け 訓読(クンドク)／訓読み 下向(ゲコウ)／下向き 下足(ゲソク)／下げ足 合口(ゴウクチ)／合(い)口 骨折(コッセツ)／骨折り 在方(ザイカタ)／在り方 在所(ザイシヨ)／在り所 先細(さきぼそ)／先細り 作付け／作り付け 作物(サクブツ／サクモツ)／作り物 差金(サキン)／差(し)金(さしがね) 指し切り／指切り 散散(サンザン)／散り散り 散髪(サンパツ)／散らし髪 死花(シカ)／死に花 死所(シシヨ)／死(に)所 重重(ジュウジュウ)／重ね重ね 首巻(シュカン)／首巻(き) 手書(シュシヨ)／手書き 死体(シタイ)／死に体 捨身(シャシン)／捨(て)身 出張(シュツチョウ)／出っ張り／出張り 取得(シュトク)／取り得 手練(シュレン)／手練れ 上下(うえした／ジョウゲ)／上げ下げ／上げ下ろし 上端(ジョウタン)／上がり端 勝負(ショウブ)／勝ち負け 食物(シヨクモツ)／食べ物 書物(シヨモツ)／書き物 真書(シンシヨ)／真書き 心配(シンパイ)／心配り 水中(スイチュウ)／水中市 生花(セイカ)／生(け)花 生体(セイタイ)／生き体 成立(セイリツ)／成(り)立ち 切切(セツセツ)／切れ切れ 先行(センコウ)／先行き 先取(センシュ)／先取(り) 洗髪(センパツ)／洗い髪 相乗(ソウジョウ)／相乗り 早生(ソウセイ)／早生まれ 素読(ソドク)／素読み 大通(ダイツウ)／大通り 抽出(チュウシュツ)／引き出し 添書(テンシヨ)／添(え)書き 投入(トウニュウ)／投(げ)入れ 当年(トウネン)／当(た)り年 読書(ドクシヨ)／読み書き 読本(トクホン)／ドクホン)／読(み)本 突出(トツシュツ)／突(き)出し 生木(なまき)／生り木 日照(ニッショウ)／日照り 入会(ニュウカイ)／入(り)会い 入札(ニュウサツ)／入(れ)札 能書(ノウシヨ)／能書(き) 廃物(ハイブツ)／廃り物

／廃れ物 抜糸 (バッシ) / 抜き糸 半切 (ハンセツ) / 半切り 部分 (ブブン) / 部分
分け 変種 (ヘンシュ) / 変 (わ) り種 変身 (ヘンシン) / 変 (わ) り身 編目 (ヘ
ンモク) / 編み目 捕手 (ホシュ) / 捕り手 床上 (ゆかうえ) / 床上げ 預金 (ヨキ
ン) / 預かり金 礼参 (ライサン) / 礼参り 落書 (ラクショ) / 落書き 落着 (ラク
チャク) / 落 (ち) 着き 陸続 (リクゾク) / 陸続き 立身 (リッシン) / 立ち身 立
方 (リッポウ) / 立 (ち) 方 / 立て方 留置 (リュウチ) / 留 (め) 置 (き) 冷酒 (レ
イシュ) / 冷 (や) 酒 連合 (レンゴウ) / 連れ合い

このうち、「入り会い」「留め置き」などは、「入会権」「留置郵便」などにおいて、慣用的
に送りながが省かれることがあり、この場合は、「ニューカイ」「リュウチ」と読まないこと
を個別に覚える必要がある。「落書き」については、「送り仮名の付け方」(1973)において、
「読み間違えるおそれのない場合」に送りながを省ける例としてあがっているが、「ラクシ
ョ」との読み間違いのおそれがあるので、問題である。

次に、活用語から派生した名詞同士の場合を見る。

足掛 (か) り / 足掛け 入 (り) 目 / 入 (れ) 目 打ち合い / 打ち合わせ 埋め木 /
埋もれ木 売 (り) 子 / 売れっ子 押し入り / 押し入れ 書き下ろし / 書き下し 掛
(け) 合 (い) / 掛 (け) 合 (わ) せ 紙切り / 紙切れ 切 (り) 込み / 切れ込み 食
い合い / 食 (い) 合 (わ) せ 口付き / 口付け 組合 / 組み合わせ 蹴上がり / 蹴上
げ 細切り / 細切れ 作付 (け) / 作り付け 仕上 (が) り / 仕上げ 地割 (り) /
地割れ 素通し / 素通り 外掛かり / 外掛け 立 (ち) 合 (い) / 立て合い 立 (ち)
木 / 立て木 付 (き) 合 (い) / 付け合 (わ) せ 手合い / 手合わせ 手当 (た) り
/ 手当 (て) 手懸かり / 手懸け 手直し / 手直り 手回し / 手回り 遠回し / 遠回
り 取っ付き / 取 (り) 付 (け) 取 (り) 分 / 取 (り) 分け 中入り / 中入れ 肉
付 (き) / 肉付け 値上がり / 値上げ 根付き / 根付 (け) 根回し / 根回り 冷え
冷え / 冷や冷や 火付き / 火付け 踏 (み) 切り / 踏ん切り 待 (ち) 合 (い) / 待
ち合わせ 見合 (い) / 見合わせ 見え隠れ / 見隠し 見返し / 見返り 水入り / 水
入れ 水切り / 水切れ 目明き / 目明 (か) し 役付き / 役付け 山越え / 山越し 山
焼き / 山焼け 湯冷まし / 湯冷め 夜明かし / 夜明け 横流し / 横流れ

これらの場合、たとえば、「切り込み」「切れ込み」において、「切り込み→切込み」のような表記を用いると、読み手の側としては、「きれこみ」との誤読の恐れが生じてくる。また、「気付き」「気付け」に対する「気付（郵便で）」や「行き方」に対する「行方（ゆくえ）」、「出で立ち」「出立て」に対する「出立（シュツたつ）」、それから「立場（たちば）／立て場」「目付き／目付」などが、送りがなをつけないのが慣用的な場合を含んでおり、上述の、送りがなをつけて区別される例と比べて、例外的である。実態としては、「立場」について、送りがなをつけた「立ち場」が散見されるが、「立ち」と「場」を組み合わせた送りがなとしては、一概に誤りとはしにくいところである。また、「踏（み）切り」は、「送り仮名の付け方」にも用例が示されるが、鉄道施設の場合は「踏切」のように、送りがなをつけずに表記される。これに関連して、「組合」については、送りがなをふらない表記のみが三つの辞書で示されているが、組織の意でなく、組み合わせることという動作的な意味では、「組み合い」でもよいのではないかという疑問があり、「組（み）合（い）」（『新明解国語辞典 第7版』。組織の意では「組合」）のように、これに対応する辞書も見られる。

以上と比べて、数は少ないが、非活用語同士の場合に、和語に送りがなをつけるものもある。

後身（コウシン）／後ろ身 後手（ゴテ）／後ろ手 四角（シカク）／四つ角 前後
（ゼンゴ）／前後ろ

また、「気風（キフウ）」と「気っ風（キップ）」、「木端（こば）」と「木っ端（こっぱ）」のように、促音表記の有無により区別されるもの、「身上（シンショウ／シンジョウ）」と「身の上」、「身代（シンダイ）」と「身の代」、「物怪（もつけ）」と「物の怪（もののけ）」のように、「の」の有無により区別されるケースも見られる。

以上のように、送りがなをつけることは、別の読み方との区別を行う上で、大きな働きをしており、安易にこれを省くことは、読み誤りにつながる恐れがあることがわかる。なお、「掛金（かけがね／かけキン）」の場合、「掛け金」という送りがなを用いた表記にしても、「金」の読みが特定されない。このような際に、「掛けがね／掛け金（かけキン）」（『三国』）のように、和語を含むほうを、かな書きにすることにより、書き分けが可能になる場合がある。次に、かな書きという対処法を検討する。

7.3.4 かな書き

大島(1992)では、漢語を漢字で、和語をかなで表記することにより、「セイブツ」と「なまもの」あるいは「おひれ」と「おびれ」の区別はできるようになるものの、「礼拝(ライハイ/レイハイ)」「工夫(クフウ/コウフ)」のように、いずれも漢語である場合には、区別が不可能であり、また、「工ば」「借や」のような交ぜ書きでは、読みにくさや入力の手間が問題になると指摘している。

これに関して、まず入力については、パソコンなどのかな漢字変換機能の向上により、交ぜ書きの入力はさほど困難ではない。また、読みにくさ(読みやすさ)については、個人によって判断が異なり、同表記であることにより生じるまぎらわしさと、どちらが読解の上で大きな問題となるのかは、容易には判断できないので、保留にしておく。ここでは、三つの辞書で、どのような語において、かな書きの選択肢が示されており、書き分けが可能であるのかを具体的に見ていく。なお、「足取り/足どり」「口つき/口づけ」「口伝え/口づて」「手がかり/手がけ」「手つき/手付け」「とっつき/取り付け(取りつけ)」「目つき(目付き)/目付」などについては、前述の送りがなの使い分けによって、判別が可能になっているものであり、以下の一覧からはのぞく。以下において、丸カッコ内のかなは、語種の区別を示すが、カッコの外のかなは、実際に用いる表記として、基本的にはひらがなで示しておく。「特ダネ」などは、カタカナが一般的な場合である。

まず、かな書きされる語が名詞である場合を見る。

足もと/足下(ソッカ) いきさつ/経緯(ケイイ/たてぬき) いつ/何時(なんどき) 一角(イッカク)/いっかど/ひとかど 一方(イッポウ)/ひとかた 内づら/内面(ナイメン) 内のり/内法(ナイホウ) うわて/上手(かみて/ジョウズ) 遠近(エンキン)/おちこち 大風(おおかぜ)/おおふう 大かた/大方(タイホウ) 大ごと/大事(ダイジ) 大どころ/大所(タイショ) おしろい/白粉(ハクフン) 男気(おとこぎ)/男け おなご/女子(ジョシ) 尾ひれ/尾びれ お札/御札(ギョサツ) おまえ・お前/御前(ゴゼン) おやじ/親父(シンプ) 外面(ガイメン/ゲメン)/外づら 掛けがね/掛け金(かけキン) かたがた/ハウボウ(漢字は「方方」) かたぎ/気質(キシツ) 片端(かたはし)/かたわ かな/仮名(カメイ) 空手(からて)/そら手 かわらけ/土器(ドキ) 寒気(カンキ)/寒け かん高/甲高(コウだか) 弓形(キュウケイ)/弓なり きょう

／今日 (コンニチ) 空言 (クウゲン) / そら言 苦渋 (クジュウ) / にがり 外法 (ゲ
ホウ) / 外のり 見物 (ケンブツ) / 見もの 合歓 (ゴウカン) / ねむ 紅葉 (コウヨ
ウ) / もみじ 小柄 (こがら) / 小づか こじき / 乞食 (コツジキ) こま / 独楽 (ド
クラク) こまごま / 細細 (ほそぼそ) 罪科 (ザイカ) / つみとが 最中 (サイチュ
ウ) / もなか 山間 (サンカン) / 山あい 山気 (サンキ) / 山け / 山つけ 下手 (し
たて / したで / しもて) / へた しっぺい / 竹籠 (たけべら) 醜女 (シュウジョ) /
しこめ 重石 (ジュウセキ) / 重し 出所 (シュッショ) / 出どころ 出来 (シュッタ
イ) / でき 所為 (ショイ) / せい 諸子 (ショシ) / もろこ 白子 (しらこ / しろこ)
／しらす しらふ / 白面 (ハクメン) しろもの / 代物 (ダイブツ) 心算 (シンサン)
／つもり 水気 (スイキ) / 水け 素振り (すぶり) / そぶり ぞうき / 造作 (ゾウサ
ク) 早生 (ソウセイ) / わせ ただ事 / 徒事 (トジ) ちょうず / 手水 (てみず) 長
刀 (チョウトウ) / なぎなた 築地 (ついじ) / つき地 月代 (つきしろ) / さかやき
つくし / 土筆 (ドヒツ) 爪はじき / 爪弾き (つまびき / つめびき) つらら / 氷柱 (ヒ
ョウチュウ) 出端 (では) / 出はな 道程 (ドウテイ) / 道のり 同胞 (ドウホウ)
／はらから どちら / どなた (漢字は「何方」) 日日 (ニチニチ / ひび) / 日にち 人
気 (ニンキ) / 人け 特種 (トクシュ) / 特ダネ 人事 (ジンジ) / 人ごと・ひとごと・
ひと事 ばち音 / 撥音 (ハツオン) ひなた / 日向 (ひゅうが) 町なか / 町中 (まち
ジュウ) 見様 (みざま) / 見よう めんこ / メンツ (漢字は「面子」) 役所 (ヤク
ショ) / 役どころ

このほか、「傀儡」「生麩」における「かいらい」(漢語)と「くぐつ」(和語),「しょうふ」
(漢語)と「なまふ」(混種語)のように、複数の読みについて、いずれもかな書きが可能
であると示されるものもある。

副詞がかな書きされる場合としては、次のようなものがある。

一寸 (イッスン) / ちょっと 一端 (イッタン) / いっぱし 早早 (ソウソウ) / は
やばや むしょう (に) / 無性 (ムセイ)

これらは、主に和語がかな書きされるケースであったが、漢語がかな書きされる場合もあ
る。

くふう／工夫 (コウフ)　じみ／地味 (チミ)　ちよく／ちょこ (漢字は「猪口」)　い
ちず／一途 (イツ)　丁字・丁子 (チョウジ (植物の場合かな書き, 植物を原料と
した香辛料, あぶらの場合は漢字表記)) / 丁字 (テイジ [「T字」とも])　てんとう
(「天帝」の意味は漢字表記) / 天道 (テンドウ)　熱気 (ネッキ) / 熱け　呂律 (リ
ョリツ) / ろれつ　和名 (ワミョウ) / ワメイ (動植物学で)

三つの辞書では, かな書きの選択肢が示されていない「一見 (イチゲン/イッケン)」に
ついて, 報道では「一見の客→いちげんの客」(『記者ハンドブック』『読売新聞用字用語の
手引』)のように, かな書きを示している社もある。このように, 漢語同士の組み合わせで
あっても, 一方が「くふう」「ろれつ」のように日常語としてなじんでいるなど, 何らかの
理由から, かな書きでも違和感がなく, 結果として書き分けがなりたつ場合もあり, さらに,
このような手段がとれる語がないか, 調べなければならない。

なお, 「一時 (イチジ/イツとき/ひととき)」「細目 (サイモク/ほそめ)」「三葉 (サン
ヨウ/みつば)」の場合, 意味による書き分けが示されることがある。『三国』では, 「いっ
とき」「ひととき」について, 「そのとき (だけ)」「(人がすごす) 少しの間」の意では, そ
れぞれかな書きでもよいとし, 今の 2 時間をあらわす古いことばの意ではいずれも漢字表
記が標準的と示している。また, 「細め」(細い程度)と「細目」(細い目), 「みつば」(植物)
と「三つ葉」(三枚の葉)のような書き分けも行われる。

「生物 (いきもの/セイブツ/なまもの)」の場合は, 送りがなとかな書きの両方が利用
されている。漢語の「セイブツ」は漢字書きとし, 「いきもの」は「生き物」, 「なまもの」
は「生もの」とするものである。「なま物」(『NHK 漢字表記辞典』)のように, かな書き部分
が異なる書き方もある。この方法は, 「生魚 (いきうお/セイギョ/なまうお/なまざかな)」
のような場合についても, 検討する余地がある。「生き魚 (活き魚)」「生魚 (セイギョ)」に
対して, 「生うお」「生ざかな」あるいは「なまうお」「なまざかな」とするものである。「な
ま魚」だと, 「うお」か「ざかな」かの迷いが残る。また, 「半生 (ハンショウ/ハンセイ/
ハンなま)」の場合, 「ハンショウ」と「ハンセイ」は漢字でよいとして, 「ハンなま」につ
いては, 「半なま麺」「半なまタイプのホウ酸ダンゴ」などの書き方が実態としては行われて
いる。なお, 「ハンショウ」はもっぱら「半死半生」の形で使用される。

以上のように, かな書きをまじえた誤読の防止は, 語の読み方をはっきりさせようとする

目的から考えれば、非常に有用な方法であり、さまざまなケースについて、実態の調査が深められる必要がある。

7.4 漢語同士の組み合わせについて

7.4.1 読みのゆれと意味の異なり

前述したように、「工夫（クフウ／コウフ）」のように漢語同士の組み合わせにおいて、一方をかな書きすることで、書き分けられる場合がある。一方、「礼拝（ライハイ／レイハイ）」のように、一方をかな書きする方法がとりにくい場合、「ライハイ」は仏教、「レイハイ」はキリスト教、というように、分野の区別をつけて、読み手には、文章の内容によって、どちらの読み方なのかを判断してもらうというケースもある。以下では、漢語同士の組み合わせの場合について、全体として、どのような傾向や書き分けのくふうがあるのか、どのような場合において、ほかの語で言いかえる可能性があるのか、といった点を検討する。

「当今（トウギン／トウコン）」の場合、「トウコン」は三つの辞書のいずれかには記載が見られるが、当代の天皇を意味する「トウギン」は、のせている辞書がない。このような例については除外し、複数の読みが、いずれも3辞書のどれかに記載されている場合として、148例をとりあげて検討を加える。

読みは異なるものの、意味は同じである組み合わせから、意味が異なり、通常、別語として扱われる組み合わせまで、以下の表2には、A～Eという区分を設けて示すこととした。

AとBは、読みにゆれのあるものとして扱われ、別語とするまでには至らないとされるものである（「ダンジョ」に対する「ナンニョ」など、用法が非常に限られ、かなりAに近いと思われるものでも、辞書などを参考に、念のため、読みにゆれが現在もあるものとして扱っておく）。反対にEに分類したものは、一般的に別語として扱われている組み合わせである。中間にある、CとDに入れた組み合わせについては、一部、読みのゆれとして扱えそうな意味の場合がある一方で、片方にしかない意味もあるため、単なる読みのゆれとも、まったくの別語とも判断しにくい。検討が必要な組み合わせとして、このような形で掲げておく。たとえば、Cの「仮借」の場合、漢字の六書の意味の場合は、「カシャ／カシャク」の読みでゆれるが、人を見逃すという意味の場合は「カシャク」に読みが限られる。また、Dの「合力（ゴウリキ／ゴウリョク）」の場合、力をかすという意味では共通するが、金品を与える意では「ゴウリキ」、物理学などにおける「合成力」の意では「ゴウリョク」にそれぞれ読みが限られる。

表2 読みのゆれと意味の違い

A(現代語では一方の読みが普通):音頭(オンドウ→オンド) 神器(シンギ/シンキ→ジンギ) 読書(トクショ→ドクショ) 妄想(モウゾウ→モウソウ)
B(読みのゆれがある):庵主(アンシュ/アンジュ) 遺言(イゴン<法律>/ユイゴン) 一日(イチジツ/イチニチ) 黒衣(コクイ/コクエ) 在世(ザイセ/ザイセイ) 思惟(シイ/シユイ) 施行(シコウ/セコウ<仏教では「セギョウ」>) 出生(シュツショウ/シュツセイ) 濁世(ジョクセ/ダクセ/ダクセイ) 男女(ダンジョ/ナンニョ) 猪口(チョク/チョコ) 通夜(ツウヤ/ツヤ) 同人(ドウジン/ドウニン) 読本(トクホン/ドクホン) 人数(ニンズ/ニンズウ) 末葉(バツヨウ/マツヨウ) 風体(フウタイ/フウテイ) 無人(ムジン/ムニン) 礼拝(ライハイ<仏教>/レイハイ<キリスト教>)
C(一方の読みに他方の読みがない独自の意味がある(スラッシュの左の読み)):仮借(カシャク/カシャ) 求道(グドウ/キュウドウ) 現世(ゲンセイ/ゲンセ<仏教で「ゲンゼ」>) 強力(ゴウリキ/キョウリョク) 乞食(コツジキ/コジキ) 再建(サイケン/サイコン) 祭文(サイモン/サイブン) 作物(サクモツ/サクブツ) 作法(サホウ/サクホウ) 首座(シュザ/シュソ) 主従(シュジュウ/シュウジュウ) 清浄(ショウジョウ/セイジョウ) 小人(ショウジン/ショウニン) 人外(ジンガイ/ニンガイ) 人力(ジンリキ/ジンリョク) 清規(セイキ/シンギ) 生年(セイネン/ショウネン) 精兵(セイビョウ/セイヘイ) 前世(ゼンセイ/ゼンセ) 莊嚴(ソウゴン/ショウゴン) 雑用(ゾウヨウ/ザツヨウ) 俗名(ゾクミョウ/ゾクメイ) 大家(タイカ/タイケ) 大人(タイジン/ダイニン) 大道(ダイドウ/タイドウ) 重宝(チュウホウ/ジュウホウ) 直答(チョクトウ/ジキトウ) 肉食(ニクショク/ニクジキ) 入水(ニュウスイ/ジュスイ) 人氣(ニンキ/ジンキ) 万能(マンノウ/パンノウ) 文言(ブンゲン/モンゴン) 法界(ホウカイ/ホツカイ) 本命(ホンメイ/ホンミョウ) 流説(ルセツ/リュウセツ) 竜馬(リュウマ/リュウマ/リュウメ) 和名(ワメイ/ワミョウ)
D(共通の意味・用法があるが、双方に他方の読みがない独自の意味もある):一世(イツセ/イツセイ) 豪氣(ゴウキ/ゴウギ) 高名(コウミョウ/コウメイ) 合力(ゴウリキ/ゴウリョク) 三世(サンゼ/サンセイ) 四時(シイジ/シジ) 正本(ショウホン/セイホン) 千万(センバン/センマン) 天道(テントウ/テンドウ) 万歳(バンザイ/マンザイ) 本文(ホンブン/ホンモン)
E(別語):悪性(アクショウ/アクセイ) 安居(アンキョ/アンゴ) 一見(イチゲン/イツケン) 一期(イチゴ/イツキ) 一途(イチズ/イツト) 有為(ウイ/ユウイ) 外面(ガイメン/ゲメン) 化生(カセイ/ケショウ) 気色(キショク/ケシキ) 気風(キップ/キフウ<「キップ」は「キフウ」の転とされるが、意味が特殊化していると考え、別語扱いにしておく>) 救世(キュウセイ/クセ・グセ・グゼ) 教化(キョウカ/キョウゲ) 境界(キョウカイ/キョウガイ) 警策(キョウサク/キョウザク) 形相(ギョウソウ/ケイソウ) 供米(キョウマイ/クマイ) 御座(ギョザ/ゴザ) 口舌(クゼツ/コウゼツ) 工夫(クフウ/コウフ) 経典(キョウテン/ケイテン) 講師(コウシ/コウジ) 好事(コウジ/コウズ) 香水(コウスイ/コウズイ) 後生(コウセイ/ゴショウ) 後世(コウセイ/ゴセ) 降伏(コウフク/コウブク) 在米(ザイベイ/ザイマイ) 左右(サユウ/ソウ) 食堂(ジキドウ/ショクドウ) 直筆(ジキヒツ/チョクヒツ) 地形(ジギョウ/チケイ) 地下(ジゲ/チカ) 地質(ジシツ/チシツ) 執行(シッコウ/シュギョウ) 入魂(ジッコン/ニュウコン) 実体(ジツタイ/ジツテイ) 地味(ジミ/チミ) 受領(ジュリョウ/ズリョウ) 所為(ショイ/セイ) 上下(ショウカ/ジョウカ/ジョウゲ) 正気(ショウキ/セイキ) 正当(ショウトウ/セイトウ) 上品(ジョウヒン/ジョウボン) 声明(ショウミョウ/セイメイ) 精霊(ショウリョウ/セイレイ) 地力(ジリキ/チリョク) 心中(シンジュウ/シンチュウ) 身上(シンショウ/シンジョウ) 人体(ジンタイ/ニンテイ) 頭巾(ズキン/トキン) 成敗(セイハイ/セイバイ) 造作(ゾウサ/ゾウサク) 大兵(ダイヒョウ/タイヘイ) 大夫(タイフ/タユウ) 知行(チギョウ/チコウ) 中間(チュウカン/チュウゲン) 丁字(チョウジ/テイジ) 追従(ツイジュウ/ツイショウ) 天人(テンジン/テンニン) 同行(ドウギョウ/ドウコウ) 難行(ナンギョウ/ナンコウ) 二世(ニセ/ニセイ) 熱気(ネッキ/ネツケ) 半生(ハンショウ/ハンセイ) 百姓(ヒヤクショウ/ヒヤクセイ) 無人(ブニン/ムジン) 仏語(フツゴ/ブツゴ) 文選(ブンセン/モンゼン) 分別(フンベツ/フンベツ) 変化(ヘンカ/ヘンゲ) 放下(ホウカ/ホウゲ) 法文(ホウブン/ホウモン) 末期(マツキ/マツゴ) 明朝(ミョウチョウ/ミンチョウ) 無性(ムショウ/ムセイ) 遊行(ユウコウ/ユギョウ) 利益(リエキ/リヤク)

ただし、ある読みと意味がどう対応しているかの判断が、辞書によって異なる場合も少なくなく、上記の例においても、Bの「濁世(ジョクセ/ダクセ/ダクセイ)」、Cの「作法(サクホウ/サホウ)」「首座(シュザ/シュソ)」、Dの「一世(イツセ/イツセイ)」、Eの「受領(ズリョウ/ジュリョウ)」「左右(ソウ/サユウ)」「所為(ショイ/セイ)」「百姓(ヒヤクショウ/ヒヤクセイ)」「放下(ホウカ/ホウゲ)」などについては、ほかのグループに所属させたほうがよいという可能性も残る。たとえば、三つの辞書では、「受領(ズリョウ・ジュリョウ)」に共通の意味は記されていないが、『大辞林 第3版』『集英社国語辞典 第3版』の「ズリョウ」の項目では「ジュリョウ」とも読むことが示されており、この点を考慮する

と、EでなくCの例として扱うべきかどうかで、判断がむずかしくなる。また、「礼拝（ライハイ／レイハイ）」のように意味はほぼ同じでも、それぞれの読みが用いられる分野が違うというものを、単なる読みのゆれのグループとしてよいのか、別語とすべきかなども、問題のある部分である。それゆえ、表2は、おおよその目安を示すものとして考え、個別の組み合わせについては、それぞれについて調査が必要であることを指摘しておく。

7.4.2 別語同士の組み合わせについて

先の表2において、Eの別語としたものについて、どのような書き分けや使い分けがあるか、あるいは言いかえが可能かどうかなど、全体的なおおよその目安を考える。言いかえについては、多くの漢語について、言いかえを示す『口語辞典 Hanasikotoba o hiku Zibiki』を参照した（以下の語例で→の右側に示してあるもの。原文のローマ字は漢字仮名交じりに改めた）。また、国立国語研究所（1961, p. 17）における「一般語」（話しことばや新聞などで、一般に使われ、特に解説や注釈なしに通用すると思われる語）と「非一般語」（古語や特殊な専門語）の区別を参考にして、異音同表記語について検討する。

A（ともに一般語）

A-1（別の字を用いる）：丁字（チョウジ）→丁子／丁字（テイジ）〈「T字」も〉

A-2（洋数字を用いる）：一期（イチゴ→一生。最後）／1期（イッキ）

A-3（かな書きにする）：いちず→ひとすじに。ひたすら／一途（イット→～よりほかない〈「～の一途あるのみ」の形を言いかえて〉） いちげん／一見（イッケン→ひとめ（で）。ちょっと見て） きっぷ／気風（キフウ） じっこん／入魂（ニュウコン） ぞうさ／造作（ゾウサク→建具。顔立ち。目鼻立ち） 熱気（ネッキ）／熱け

A-4（限定された形式で用いる）：後生（コウセイ〔後生畏る可し〕／ゴショウ） 好事（コウジ〔好事魔多し〕／コウズ〔好事家〕→物好き） 半生（ハンショウ〔半死半生〕／ハンセイ→一生（生涯）の半ば（半分） 利益（リエキ／リヤク〔御利益〕）

A-5 その他→気色（キショク／ケシキ） 直筆（ジキヒツ／チョクヒツ） 上下（ショウカ→かみもしもも。上の者も下の者も／ジョウカ→ジョウゲ／ジョウゲ→うえした。上と下） 心中（シンジュウ／シンチュウ→胸の内） 身上（シンショウ→身代。財産。暮らし向き／シンジョウ→身の上。値打ち。とりえ） 人体（ジンタイ／ニンテイ） 成敗（セイハイ／セイバイ→さばき。とりさばき。しおき） 大兵（ダイヒョ

ウ／タイヘイ) 追従 (ツイジュウ→追隨／ツイショウ→おべっか。お世辞) 同行
(ドウギョウ→道連れ。巡礼なかま／ドウコウ→連れ。道連れ) 分別 (フンベツ／
ブンベツ) 変化 (ヘンカ／ヘンゲ) 末期 (マッキ／マツゴ→死に際。今際の際)

ここに示したもののほかにも、「後生 (コウセイ) →後輩」と「後生 (ゴショウ) →①来
世。②お願い」, 「直筆 (ジキヒツ) →自筆」, 「気色 (キショク) →顔色」と「気色 (ケシキ)
→様子」, 「大兵 (ダイヒョウ) →大柄」と「大兵 (タイヘイ) →大軍」など、辞書に類語と
して記載されているような語が、かわりの言い方として利用できそうな場合も見られる。

B (一般語と古語, 古風な言い方, 歴史語)

B-1 (かな書きを用いる) : くふう／*工夫 (コウフ) →工事作業員 ずきん／*頭巾 (トキ
ン)

B-2 (限定された形式で用いる) : 口舌 (*クゼツ→口先。口前／コウゼツ [口舌の徒])

B-3 (その他) : 悪性 (*アクショウ→たちの悪い (よくない) / アクセイ→たちの悪い (よ
くない)) 左右 (サユウ→みぎひだり。あたり／*ソウ) 地下 (ジゲ／チカ→地面
(土) の下の〈「地下の」に対して〉) 執行 (シッコウ→執り行う。行う／*シュギョ
ウ) 実体 (ジツタイ／*ジツテイ) 受領 (ジュリョウ→受け取る／ズリョウ) 知
行 (*チギョウ／チコウ) 中間 (チュウカン／*チュウゲン) 天人 (テンジン・テン
ニン) 無人 (*ブニン→人手ずくな。手ずくな／ムジン)

※ 古語, 古風などの性質をもつ語の左には, *を付した。

以上のほか, 「外面 (ガイメン／ゲメン)」の「ゲメン」, 「所為 (ショイ／セイ)」の「シ
ョイ」, 「正気 (ショウキ／セイキ)」の「セイキ」, 「百姓 (ヒャクショウ／ヒャクセイ)」の
「ヒャクセイ」など, 文章語などとして辞書に記載される語において, 現代語としては, 一
般的でなくなりつつあるのではないかと思われるものもある。

次は, 一般語と専門語とのケースについて見る。〈 〉の中に分野を示す。

C (一般語と専門的な語)

C-1 (洋数字を用いる) : 二世 (ニセ 〈仏教〉 / 2世 (ニセイ)

C-2 (かな書きにする) : じみ／地味 (チミ 〈農業〉)

C-3 (限定された形式で用いる) : 救世 (キュウセイ [救世軍・救世主] / グセ <仏教>)
 在米 (ザイベイ [在米中・在米企業] / ザイマイ <農業>)

C-3 (その他) : 安居 (アンキョ / アンゴ <仏教>) 有為 (ウイ <仏教> / ユウイ) 教化 (キョウカ / キョウゲ <仏教>) 境界 (キョウカイ / キョウガイ <仏教>) 形相 (ギョウソウ → 顔つき。様子 / ケイソウ <哲学>) 講師 (コウシ / コウジ <仏教>)
 香水 (コウスイ / コウズイ <仏教>) 後世 (コウセイ → のちのよ。のちのち / ゴセ <仏教>) 降伏 (コウフク → 降参する。くだる。まいる / ゴウブク <仏教>) 食堂 (ジキドウ <仏教> / ショクドウ) 地形 (ジギョウ <建築> / チケイ → 土地の形) 地質 (ジシツ <織物> / チシツ) 正当 (ショウトウ <仏教> / セイトウ → 正しい。もともな) 上品 (ジョウヒン → 品のいい / ジョウボン <仏教>) 声明 (ショウミョウ <仏教> / セイメイ) 精霊 (ショウリョウ <仏教> / セイレイ) 地力 (ジリキ / チリョク <農業>) 難行 (ナンギョウ <仏教> → つらい修行 / ナンコウ <新聞・放送などでは「難行」は用いず「難航」で統一表記) 仏語 (フツゴ / ブツゴ <仏教>) 放下 (ホウカ / ホウゲ <仏教>) 法文 (ホウブン → 法律。法律の文章。法律と文学 / ホウモン <仏教>) 明朝 (ミョウチョウ → あすのあさ。あしたのあさ / ミンチョウ <印刷>) 無性 (ムショウ (に) → やたらに。むやみに / ムセイ <生物>) 遊行 (ユウコウ → 動き。めぐり / ユギョウ <仏教>)

最後に、どちらも一般的な語でない場合であるが、これには、

化生 (カセイ <生物> / ケシヨウ <仏教>) 警策 (キョウサク <仏教> / キョウザク <古語>) 御座 (ギョザ <皇室> / ゴザ <古語>) 經典 (キョウテン <仏教> / ケイテン <歴史>) 大夫 (タイフ <歴史> / タユウ <芸能>) 文選 (ブンセン <印刷> → 活字ひろい / モンゼン <書名>)

のような組み合わせが考えられる。「供米 (キョウマイ / クマイ)」において、「キョウマイ」は農業、「神や仏にそなえるこめ」の意である「クマイ」は、たとえば宗教のような分野の語としてとらえれば、一般語からは、じゃっかん距離があるように思われるが、どちらも一般語であるという判断を下す見方もできるかもしれない。

一般語同士の場合、書き分けや言いかえによって、両者の区別を設けるのがとりうる手段であるが、一方が古語や専門語である場合、そのような手段がとりにくいという考え方があ

することも否定できない。それゆえ、この場合には、古語や専門語のほうには、①読みがなをつける、②時代・分野を示す、③語の意味をそえる、といった対処を行うことが、書き手の側に求められる。

7.5 おわりに

「受賞」と「授賞」,「保証」と「保障」のように、いわゆる同音語に関しては、多くの研究があり、使い分けや注意点を示した辞書、ハンドブックなどもあるが、音は異なるものの、表記が同じである異音同表記語については、これまで、相対的に扱いが小さかったように思われる。しかし、ここで検討したように、その数は少数とよべるようなものではない。また、第一の資料として、異音同表記の語を多く集めた水谷（編）（1987）を用いることにしたのも、同表記になる可能性のある語について、国語辞典では、音が異なることにより、離れたページに記載されることになり、網羅的に収集することが困難であると考えたからである。したがって、水谷（編）（1987）以降に、新たに同表記になった事例などについては、ここでは把握できていない。大島（1992）でも指摘されるように、異音同表記語について、独立の用例集を作成し、書き分けや使い分けについて、詳細な情報を記していくことが必要である。この場合、「何人（なにびと／なんびと）」についても指摘したことだが、「何分（なにブン）」に対して、「何分（なんブン）」が同表記になるということであれば、「なんブン」単独で立項することはなくとも、「なにブン」の注記として、これらが同表記となることにふれておくという方法も考慮すべきだろう。

読み手側の問題にもふれておく。たとえば「二分（ニブ／ニブン）」という異音同表記の組み合わせがあるが、「ニブ」は、「割合で、十分の二。単位で、一分の二倍」の意で、「ニブン」は、「①二つに分けること。「財産を一する」「天下を一する」②春分と秋分（いずれも『大辞林 第3版』から）の意をもち、別語としてよさそうである。ところが、ときたま「ニブン」の①の意味の場合に、「ニブ」と発音されるのを聞くことがある。「ニブ」にこの意味を認めている辞書などは、管見の限りでは見あたらず、少なくとも現代語における「ニブ」の意味・用法としては、これは誤りととらえられる。しかし、このような言い方が、今後、世間に広まったとしたら（「ブンをわきまえる」が「ブをわきまえる」と発話されるの見聞きすることもある）、そのときには、「二分」を「ニブ」と読んでよいとするのかどうかの判断をせまられることになる。その際、「分」の漢字にもともと「ブ」の読みがあるので、「ニブ」をありえない読み方とするわけにもいかないという問題がある。このように、

異音同表記語については、それが有する既存の読み方のうち、いずれの読みを意図して書かれているのかを判別するという問題に加え、意味と読み方の対応にとりちがえが生じて、「天下をニブンする→天下をニブする」のごとく、本来的でない読み方が新たに行われるおそれがあるという点も、大きな問題点であるとする。長嶋（2007）で読み誤りの生じやすいことばとしてあがっている 195 の二字漢語について、種類ごとに分けると次のようになる。

表3 読み誤りの起こりやすい語の種類

種類	語数	語例
別語同士	22	一見(いちげん・いっけん) 追従(ついじゅう・ついしゅう)
読みのゆれ	20	共存(きょうそん・きょうぞん) 他言(たごん・たげん)
「常用漢字表」内の別の音読みで読んだもの	33	画策(○かくさく・×がさく) 余力(○よりよく・×よりき)
「特別なもの又は用法のごく狭いもの」を一般的な音読みで読んだもの	19	回向(○えこう・×かいこう) 疾病(○しつぺい・×しつびょう)
「常用漢字表」外の音を表内の音で読んだもの	6	還俗(○げんぞく・×かんぞく) 前裁(○せんざい・×ぜんざい)
「常用漢字表」内の音を表外の音で読んだもの	1	嫡男(○ちやくなん・×てきだん・てきなん)
「常用漢字表」外の音を表外の別の音で読んだもの	3	慰籍(○いしや・×いせき) 掠奪(○りやくだつ・×りようだつ)
漢字単独での音読みで読んだもの	6	種種(○しゆじゆ・×しゆしゆ) 問答(○もんどう・×もんどう)
漢字の訓読みで読んだもの	19	遠因(○えんいん・×とおいん) 釣果(○ちょうか・×つりか)
不必要な連濁が生じているもの	4	混淆(○こんこう・×こんごう) 普請(○ふしん・×ぶしん)
漢字の構成要素のもつ読みを用いたもの	30	寛恕(○かんじよ・×かんによ) 矮小(○わいししょう・×いししょう)
別の漢字の読みにひかれたもの	27	親炙(○しんしゃ・×しんせき・×しんきゅう)「灸(きゅう)」の字がある
その他	5	披瀝(○ひれき・×ひろう)「披露(ひろう)」との混同か
計	195	

〔注〕表中では、表記をひらがなに統一した。「特別なもの又は用法のごく狭いもの」は、「常用漢字表」において、漢字の音訓欄に一字下げで示されているものである。たとえば、「食」は一般的な音として「シヨク」があり、一字下げの音として「断食」などの「ジキ」がある。

別語同士、読みのゆれの場合は、どちらも「正しい」読みとして辞書にのる。「二分」は、「一見の客」を「いっけんのきゃく」と読んでしまうのと同様のタイプである。「常用漢字表」内の別の音読みで読んだもの」の上と「不必要な連濁が生じているもの」の下に太線を引いてあるのは、この範囲で表内に×とある読みは、確かに慣用的な語の読み方からいけば誤りであるものの、漢字のもつ読み方から考えれば、可能性としては、あり得る読み方として一括されるためである。それより下の「寛恕(○かんじよ・×かんによ)」「親炙(○しんしゃ・×しんせき・×しんきゅう)」などは、漢字自体には、×に示される読み方がないため、誤読として厳しく扱うことが可能なグループである。これらは、○×方式では単に誤りと扱われるも

のであるが、読めない語を何とか読もうと工夫した結果として見ることもできる。

現状では、表の中で×とされている読みであっても、今後、慣用音として認められる可能性もある。たとえば、本来「しょうこう」と読んだ「消耗」が「しょうもう」と読まれるようになったようにである。山口（2001, p. 2）では、「輸出」「装幀」「洗滌」など慣用読みとして認められているのであるから、慣用読みと誤読との境界線はどこに引かれるのか」と述べた後で、「手中」や「暴露」「明細書」を「てちゅう」「ぼうろ」「めんさいしょ」などと読む誤読については「慣用読みになって欲しくない」と述べている。もし、このような誤った読み方が定着し、異音同表記語が増えるのを防ごうとするのであれば（漢字で日本語を表記するという条件下において）、誤読の用例を大量に集めてパターンごとに分類し、注意したほうがよいものについては、国語辞典や学習参考書あるいはパソコン・携帯電話の校正支援ソフトの中に、注意事項として組み入れていくというのが現実的な対策であり、すでに部分的に行っている辞書も見られる。

8. 漢語の文章語について

8.1 はじめに

これまで重言や漢語略語、異音同表記語など、漢語に目立つ問題点について考察を加えてきたが、以下では、Ⅲの最後の項目として、同音語・同音異義語の問題について文章語とのからみから論じる。

漢語については、耳で聞いてわかりにくい難解なことばが多いことから、多くの人にとってわかりやすい、日常的なことばに言い換えようとする主張や試みが行われてきたことは、本研究の冒頭において、すでにふれたとおりである。本研究でこれまで見てきた略語や異音同表記語なども、同様にわかりやすい表現への改善が必要なグループであった。

しかしその一方で、大体においては、日常的なやさしいことばを使うことに賛成ではあるものの、公的な文章や改まった場における談話などにおいて、改まりなどを示すために用いることのできる、日常語とは別の語彙があってもよいのではないか、という疑問・課題がある。過去に、この点を課題として指摘した論考が見られるものの、具体的な検討は、これまであまり検討されていないようである。たとえば、手紙文の末文において、「略儀ながら失礼と存じますが」のように、「略儀」という日常会話にない漢語が用いられるのは、自分の知識をひけらかしたい、あるいは高級そうな文章に装いたいというようなものとは、漢語を用いる理由が異なっている。それゆえ、普通の文章や会話においては、なるべく日常語を用いるのが望ましいとする一方で、手紙や改まったスピーチなどに必要で、そのまま使用したほうがよいと認められうる漢語についても、あわせて考える必要がある。

その際、漢語における同音語の多さが大きな問題となる。たとえば、「銜気（のある人）」という言い方を聞いた場合、この語がすぐに思い浮かばず、「元気」のことかと考える人は少なくないだろう。紛らわしさの生じる可能性を広く考えれば、このように同音語の存在する文章語（「銜気」は文章語としておく）については、問題がないとはいえない。漢字があれば、区別がつくという意見もあるが、書かれた文章を読み上げる、演説やニュースなどでは、読み手は語の区別が容易であっても、聞き手には音声しか頼りにできるものがないから、紛らわしさは残る。このような点も考慮されなければならない。これまで、漢字廃止をと考える側からは、漢語は同音語が多いから、わかりやすい和語や日常的な漢語を使うべきだという主張は聞かれても、同音語のない漢語についてどう考えるのかは、明らかではなかった。また、漢字擁護を訴える側も、漢字によって同音語の区別がつくことが強調されるくらいがあり、同音語がない漢語について、どう考えているのか、その場合は漢字で書かなくても構

わないと考えているのか、といった点をはっきりとしていない。

以上のことから、ここでは、基礎的な作業として、同音語のない漢語の文章語を探ることとする。同音語がなく、手紙など、一定のジャンルでよく用いるような語であるならば、日常的な表現に言いかえる必要性というの、相対的に、それほど大きくはないと考えるからである。たとえば、前述の「略儀」の場合、小型辞書や『大辞林』『広辞苑』のような中型の辞典、さらに『日本国語大辞典』までも確認してみて、そこに同音語を見出すことができない。それゆえ、ryakugi は、少なくとも語の音については、ほかの語と紛れるかどうかを気にせずに用いることが可能である。

以下では、二字の漢語について、そもそも同音語のない文章語がどれくらいあり、どのような性質をもつのかという点を検討する。

8.2 同音語のない漢語文章語

漢語の文章語をとりだすために、ここでは『集英社国語辞典 第3版』を用いた。約 95,000 項目を収録し、小型辞書としては語数が多いこと、凡例で文章語について、「現代語のうち、主に文章や改まったスピーチに用いられる」というように、書きことばにとどまらず、改まった場における話しことばも考慮されていることなどが、資料として選んだ理由である。

まず、「文章」の記号がついている二字漢語で、同音の語があがっていないものを 2,750 項目抜き出した。次に、この 2,750 項目について、『広辞苑』『大辞林』『大辞泉』に同音語があるかどうか、『日本国語大辞典』に同音語があるかどうかを順に確かめると、

『広辞苑』『大辞林』『大辞泉』に同音語なし：1,445

『日本国語大辞典』に同音語なし：880

という結果になる。ここでは、『日本国語大辞典』まで見ていっても同音語の見られない 880 項目を、「同音語のない漢語文章語」として扱うことにする。

8.3 位相

880 項目のうち、「略儀」と同様に、手紙文において用いられることの多い語には、「賀春」「前略」「末筆」「乱筆」あるいは「所存」や、脇付の「猊下」「硯北」などがある。また、

相手への敬意を表す「賢慮」「懇書」「息女」「尊顔」「尊覧」「母堂」「来臨」や自分のことを控えめにいう「寓居」「愚論」「寸書」「大愚」などの敬語もあり、手紙で用いられることも多い。

俳句などで用いられる季語で、同音語をもたないものには、「季春」「薫風」「迎春」「月明」「極月」「残菊」「春風」「春眠」「瑞雲」「探梅」「仲春」「晩菊」「無月」「落雁」などがある。

これらは、文章語であることに加えて、よく用いられるジャンルがはっきりしており、現代語の一部として安定して使用されうる。一方、現代語としては、すでに古風な言い方となっており、歴史的な事柄を記す文章の中でないと使いにくい一群の語が存在する。

「帷幄」「夷狄」「磔刑」「北狄」「流刑」などである。これらは、語釈などに「昔」「～時代」というような表現が見られ、歴史的な語であるとの判断がしやすい。ところが、「帷幕」「出奔」「水軍」「大獄」「蟄居」「誅戮」「殿軍」などになると、たとえば「逃げ出して行方がわからないこと」（『集英社国語辞典 第3版』）と「出奔」が記述されるように、語釈のみからは、現代語で使われると考えてよいのか、判断しにくい場合がある。筆者の感覚では、「逃げる」「いなくなる」「蒸発」などの表現は使えても、「出奔」は現代のことを記す文章の中では使用しにくい。「大獄」なども同辞典で「重大な犯罪事件によって、多くの人逮捕され投獄されること」とあり、意味的には、現代語としても通用しそうであるが、用例に「安政の一」とあるように、実際には、歴史的な文脈でないと使用しにくい。このような語が、現代語で用いられる可能性があるのかないのか、ないとしたら、どのようにそれを示すのかといった点は、検討すべき課題だろう。なお、敬語のうち、特別な皇室敬語であるとして、現代の新聞・放送などでは使用されなくなっているものがある。「叡慮」「玉座」「御名」「勅命」「便殿」「綸言」などである。小説・漫画などにおいて「玉座」が用いられたり、「綸言汗の如し」という慣用表現の中で「綸言」が用いられたりすることがあるので、廃語となっているわけではないが、使用場面は限定的である。

差別的な意味や語感があって、一般には使用しにくい語がある。「駄舌」「熟蕃」「奴婢」「貧民」「文盲」などで、やはり歴史的な事柄として文章を書く場合などに、使用は限られてくる。差別的な意味の語ではないものの、「淫欲」「淫猥」「肉情」「肉欲」「女体」「陵辱」などといった語も、性的な内容を表しており、文学作品などを除いた、一般の文章やスピーチにおいては、必要度の低い語群である。

以上のような語を除き、新聞や書籍などの文章で一般的に用いられる漢語について、次

に考える。まず、これまでと同様に、『CD-HIASK 2003 朝日新聞記事データベース』を用いて、新聞記事を確認し、1年間に10件以上の用例が見られるものを抜き出すと、以下のようになる。なお、「当意即妙」の「即妙」のように、もっぱら語の一部として用いられるものについては、丸カッコの中に、その形を示した。

愛猫 安寧 鬱屈（うっくつ） 汚濁 汚泥 諧謔（かいぎやく） 街路 玉音（～放送） 許諾 漁網 空域 枯渴 極微 昨春 昨年 昨夜 殺戮（さつりく） 散逸 忸怩（じくじ） 自著 湿潤 収奪 受諾 出自 上腕 職能 書房 信憑（しんぴょう） 惜別 舌鋒 即妙（当意～） 断罪 稚拙 嫡出（～子） 追憶 追尾 通底 鉄壁 田園 天空 同日 徳目 独居 入魂 女人（～禁制） 廢絶 幕営 白日 迫真 白髪 破碎 発動 反骨 盤石 微弱 備蓄 筆舌 飛沫 美味 病変 風月（花鳥～） 不出 払拭（ふっしょく） 不惑 糞尿（ふんにょう） 文物 墳墓 文民 米作 平準（～化） 米飯 平明 別離 勉学 変転 忘却 亡母 墓前 没後 没入 本日 本編 本論 枚挙 末裔 末日 末弟 満悦（ご～） 満面 蜜月 未明 脈脈 明日 民需 命運 命脈 明滅 猛暑 木片 門扉 躍如（面目～） 擲揄（やゆ） 遊歩（～道） 擁立 余命 落日 樂土 慄然（りつぜん） 離任 略取 旅情 流浪 連綿 論陣 論難

数が多くなったが、ふだん見かける一般的な漢語文章語として、どのようなものが考えられるのかを見るために、あまさず掲げることとした。読みがながついている語は、「常用漢字表」（1981）にない漢字を含んでおり、読みがなが必要とされたものである。2010年の漢字表の改定により、「鬱屈」「払拭」など読みがなが不要となった語もある。「旭日」の「旭」は、漢字表にない字だが、朝日新聞では「栄典、称号、官職名及びこれに類するもの」として、「旭日（大綬章）」など漢字で表記することになっている。

また、使用される漢字が難解であっても、語としては一般的なものであることから、新聞社の方針として、かな書きを標準としている語として「あうん（阿吽）」「うんぬん（云云）」「こつぜん（忽然）」「へきれき（霹靂）」があるが、後の3語については、外部の人間が書いた記事などでは、「云云（うんぬん）」「忽然（こつぜん）」「霹靂（へきれき）」のような読みがなをつけた表記が出現する。「嗚咽」について、2002年版の『朝日新聞の用語の手引』には、記載が見られないが、「常用漢字表」に含まれない漢

字と読みを含むことから、記事では「嗚咽（おえつ）」と表記される。ただし、実際には、「おえつ」とかな書きされた例も見られる。同音語がなければ、漢字を用いずとも誤解なく理解されうることを示すケースである。

以上のほか、国立国語研究所の現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」で、「書籍」の用例を観察すると、「喀痰（医学）」「残余（経済）」「実需（農業）」「宿所（歴史）」「増悪（医学）」「側壁（建築）」「病変（医学）」「分与（法律）」「滅失（不動産）」などの語が、丸カッコ内に示した分野で集中的に使用されている。ほかに、特定の分野とは限定しにくいものの、「割譲」「喫緊」「屹立」「欺瞞」「具有（両性～）」「骨肉（～の争い）」「誤謬」「座臥（行住～）」「人倫」「絶後」「絶倫」「女体」「白垂」「白濁」「描出」「憤懣」「弁別」「沐浴」「利他（利他主義）」「靈力」「路傍」なども、比較的、容易に使用例が見つかる。新聞では、「屹立→そそり立つ」「欺瞞→偽り、ごまかし」「誤謬→誤り」のように、言いかえを行うことがあるのに対して、一般書籍には、それがないうえ、多く出現する結果になる漢語もある。

このほかにも、「暗涙」「悦服」「具陳」「辱知」「佇立」「闖入」「穉悪」「胴欲」「弥漫」「覆轍」「余蘊」「余殃」「魯鈍」など、小型の国語辞典でも、たいていのものに立項されているものの、用例を見つけるのが困難で、現代の文章で使用してもよいものかどうか、ためらわれる語が数百語残っている。もちろん、明治時代や大正時代、もしくは戦前・戦中あたりに書かれた文章に親しんでいる人であれば、知識として、このような語を知っているであろう。

○当時四国兵と上国兵との相違は、最初より講和の主張者たる長曾我部の老臣谷忠兵衛の説、これを尽して余蘊なしだ。

（徳富蘇峰（著）・平泉澄（校訂）（1981）『近世日本国民史 豊臣秀吉1』講談社）

しかし、理解語彙として、これらの語を覚えているとしても、それを現代の文章の中で普通に使えるかどうかということは、別問題である。たとえば、夏目漱石が使っている、という理由だけで、上述のような語を使用した場合、読み手には理解されなかったり、古くさいという印象を与えたりすることになりかねず、改まった文章を書くという目的が達成されない危険がある。こうしてみると、国語辞典などで文章語として扱われている語の中には、現代語で文章を書くときや改まった場で話をするときに、一般に用いるもののほ

かに、少し前の時代の文章を読むのに必要な語も含まれるとするのが現実的である。「文章語＝文章を書くのに用いる語」では、現代の書き手が「余蘊」などを使用しても、まったく問題がないと解釈できるが、実際には、そう簡単に用いられる語とは言いがたいためである。

8.4 改まったスピーチで使われる漢語

以上では、文章の中にあらわれた「文章語」を検討してきたが、ここでは、改まった場で話しことばとして用いられる漢語について考察する。用例の確認に用いたのは、「国会会議録検索システム」である。2013年の1年分を対象として見ていったところ、新聞や書籍では、あまり使われていないものの、会議録の中では、頻繁に出現する語として「今般（418件）」と「暫時（112件）」が観察される。たとえば、次のように使用される。

○今般、議員アントニオ猪木君は、議院運営委員会理事会に対し十分な説明がないまま、その了承を得ることなく、国会開会中の十一月一日から七日まで海外渡航に及びました。（2013. 11. 21）

○委員長（石井みどり君）暫時休憩いたします。（2013. 12. 3）

二つのうち、「暫時」について『集英社国語辞典』では、「漸次（ぜんじ）」の読み誤りとしての「ざんじ」を示していないので、同音語がないグループに分類されるが、「ざんじ【《漸次》「ぜんじ」の読み誤り】（『新明解国語辞典 第7版』）」のように、「ざんじ」の読みをもつ語として、「暫時」と「漸次」とを示す辞書もあり、これを同音語ありのケースに組み入れるなら、ここでは「今般」のみが検討対象として残る。

「今般」には、類義語として「このたび」「今回」「今度」などがあるが、このうち「今回」「今度」は日常語であり、改まった言い方として「今般」「このたび」が用いられるという関係にある。前述の「今般」の例は「このたび」に置きかえることができる。そこで、国会会議録における「今般」と「このたび」の用例を調べてみると、「このたび」は2013年に187件が出現している。先の用例のように、事実について客観的に述べようとするような場面では、「今般」も「このたび」も同じように用いられる。しかし、

○岸田国務大臣 今般、外務大臣を拝命いたしました岸田文雄でございます。

(2013. 3. 15)

○愛知副大臣 このたび復興副大臣を仰せつかりました愛知治郎でございます。

(2013. 12. 3)

というように、あいさつを述べる場面に用いられた両語の用例数を比較した場合、「今般（418件中4件）」に対して「このたび（187件中48件）」というように、「このたび」のほうが好まれる傾向にある。意味の上では、どちらを使っても誤りではないから、それ以外の理由によって生じた差である。両語は、語種に関して、漢語と和語で異なっているが、語感について、漢語は「硬質」「佻屈」、和語は「親近」「卑俗」という特徴を有することが指摘されている（国立国語研究所（1984, p. 141））。「今般」については、硬質という特徴が当てはまる。「このたび」は、

○民主党の岸本周平です。このたび、質問の機会を与えていただきましてありがとうございます。（2013. 6. 12）

など、敬語や感謝を表すことばとともに用いられることが多いことからうかがえるように、親近あるいは「柔らかさ」といった和語のもつ特徴が、あいさつをしたり、お礼を述べたりして、聞き手との良好な関係を保とうとする場面には望ましいと感じられて、「今般」よりもよく用いられる結果となったものとする。

まとめると、日常的なことばである「今回」「今度」に対する改まった言い方として、「今般」と「このたび」があり、書きことばだけでなく、話しことばとしても両語は用いられる。事実を客観的に述べる発話では、両方とも出現するものの、「今般」のほうが頻度は高い。一方、あいさつを述べる場面には「このたび」が好まれる。

同音語がある語の場合、たとえばツイキュウという音を聞いて「追求」「追及」「追究」のどれかと悩む時間が、一瞬であっても生じてくる。一方、「今般」のように、同音語がない漢語であれば、そのような問題がなく（ぞんざいな発音により「今晚」と紛れる恐れが皆無とはいえないが）、改まったスピーチに用いる語として、十分、通用するものとする。

8.5 コミュニケーション上の混乱が生じる可能性

上述のとおり、880の二字漢語については、同音語の問題がないので、一度その語を理解してしまえば、基本的にほかの語と紛れる恐れはないといえる。しかし、辞書にない新たな語がつけられる過程において、既存の語と同音になる可能性がある。また、同音語はなくても、ほかの語と表記が同じである場合や一つの語において、一般的な意味と文章語の意味とがある場合なども、受け手に正しく理解されない可能性をはらんでいる。

8.5.1 同音語の発生

880項目について、ジャストシステム社の「日本語入力システム ATOK 2014 for Windows」を用いて変換作業を行うと、次のような場合において、辞書にない変換候補が出現する。それぞれの組み合わせにおいて、左側が既存の二字漢語である。

[辞書にない二字漢語との組み合わせ]

識語一式後（結婚式などの後） 職能—食農（食と農） 塵勞—腎瘦（医学用語） 胴
欲—動翼（航空用語） 本墨—本類（本などのたぐい）

「500余名」などという場合の「余名」というのは、単独では用いられないが、数字とそれに続く「余名」で慣用的に用いられており、「余名」を一つの二字漢語と認めれば、「余命」と同音語の関係になる。

[数字を含む語との組み合わせ]

急便—九便 参着—三着 従妹—十枚 百般—百班

[接辞を含む語との組み合わせ]

角逐—各地区 蓄髮—地区初・地区発

[略語との組み合わせ]

鹵簿—ロボ（「ロボット」の略）

このような語の単位で同音語が存在する場合に加えて、「猯下—芸か」「博徒—漠と」「平臥—兵が」のような助詞の続いた形も、文単位で考えれば、同音の見られるケースとして扱うことができる。以上のように、いくつかの二字漢語については、現状で辞書にのっていない語との間に同音の関係が成立しており、今後増える可能性もある。

8.5.2 同表記語の存在

「月影（げつえい）」という語は、ほかに「げつえい」と読む語が見られないので、同音語という点では、コミュニケーション上、混乱の生じる恐れが低い。しかし、表記に関しては、「月影（つきかげ）」という和語と同表記になっており、読み手がどちらの読み方をすればよいのか、迷うことがある。880項目のうちには、同様の例がいくつか見られる。

黄色（おうしょく）—黄色（きいろ） 従妹（じゅうまい）—従妹（いとこ） 叔母（しゅくぼ）—叔母（おば） 酒癖（しゅへき）—酒癖（さけぐせ） 雪山（せつざん）—雪山（ゆきやま） 大本（たいほん）—大本（おおもと） 人人（にんにん）—人人（ひとびと） 襤褸（らんる）—襤褸（ぼろ） 鱗雲（りんうん）—鱗雲（うろこぐも）

「血肉（けつにく）—血肉（ちにく）」「天日（てんじつ）—天日（てんぴ）」「日日（にちにち）—日日（ひにち・ひび）」のように混種語との組み合わせもあり、そこには、漢語の「存知（ぞんち）」に対して、「存じる」の連用形「存じ」が「存知」と書かれることによって生じる同表記の組み合わせも含まれる。以上に加えて、同じ意味の漢語における語形のゆれとして扱われることのある組み合わせもある。

歳暮（さいぼ）—歳暮（せいぼ） 入水（じゅすい）—入水（にゅうすい） 直披（じきひ・ちよくひ） 博奕（ばくえき）—博奕（ばくち） 末裔（まつえい）—末裔（まつえい） 末弟（ぼってい）—末弟（まってい） 白衣（びやくえ）—白衣（はくい・びゃくい） 流刑（るけい）—流刑（りゅうけい） ※「入水」「直披」「末裔」「末弟」は、どちらの読みの場合も文章語とされている。

大きさが同じであることを表す「同大」の場合は、辞書にはのっていない「同大（その大）」との間で同表記となり、意味はまったく異なる。以上のような組み合わせの場合、意味に大きな開きがあったり、「黄色人種」と「黄色のハンカチ」のように、使い方が大きく異なる場合は、読みの確定がしやすいが、意味・用法が似ている場合は、区別しにくくなる。さらに、たとえば書き手は「しゅへき」の意味で「酒癖」と表記したとしても、読み手が「さけぐせ」しか知らなければ、「しゅへき」とは読まれないことになる。このように、読み手

の意図が正確に受け止められない危険性を考慮するなら、「しゅへき」のような語は、文章語として用いにくいということになる。

8.5.3 一般的な語義との関係

「一着」という語には、徒競走などで一番早くゴールに到着すること、衣服の一そろいのこと、といった日常的に用いられる意味のほかに、衣服を着るという文章語としての意味も存在する。これらの意味をすべて知っていて、状況に合わせて使い分けるといった話者ももちろんいるであろうが、普通の人の感覚としては、「一着」といえば、日常的な二つの意味をもつ語として理解しており、衣服を着ることは「着る」と「着用」で間に合わせるという人が多いのではないだろうか。衣服を着る意で「一着」を使うとなれば、「一着に及ぶ」の「及ぶ」のようなコロケーションも使いこなす必要があり、適切に用いたとしても、日常的な意味のほうしか思いつかない読み手や聞き手もいるだろうから、文章語の意味で使用することに一定のリスクが伴う。

同じようなことが「玉露（美しい露）」「発明（賢い様子）」「本壘（とりで）」「和風（おだやかな風）」などの語にも当てはまる。カッコの中に示した意味が、特定のジャンルで常用されているのであれば、「上等な煎茶」「新しいものを生み出すこと」「野球の壘」「日本風」とは別に、文章語としての地位が保たれるであろうが、そのような支えがない場合、もっぱら日常的な意味のほうで用いられる語となっていく。そうすると、賢い様子を表す「発明」に見られるように、文章語の意味に関して、「古風」「古めかしい」などの語感が付随してることがある。現代語として使われることのある意味であると自信がもてなければ、たとえば「和風」の代わりに「春風（しゅんぷう・はるかぜ）」を用いるなど、書き手もほかの言い方を考えるであろうから、おだやかな風の意味では「和風」が使われにくくなり、古めかしい言い方に近づいていくことになる。

同音語がない、たとえば「略儀」のような語の場合、ryakugi という語形や「略儀」という表記に聞き覚え・見覚えがなければ、「自分の知らない語」という認識に直結し、辞書で調べるなどの行動につながりやすい。しかし、以上で見たような同表記の語が複数ある場合や多義語の場合、自分が知っている読み方や意味でとらえてしまい、文章語としての読みや意味の存在を考えずに済ませてしまう可能性がある。正確な伝達という面から考えれば、同音語が複数あることと、あわせて問題にすべきである。

8.6 おわりに

ここでは、文章語としての使用に適する漢語の特徴として、同音語がないことという条件を設けて、それに合う二字漢語にどのようなものがあるのかを検討してきた。「今般」が改まったスピーチの中で多用されることからうかがえるように、同音語がない場合には、漢字に頼らずとも理解に支障は出ない。「嗚咽」が「おえつ」とかな書きされる場合も同様である。文章や改まった場でも、日常語を使えばよいという立場からすれば、「今般」は不必要な語となるだろうが、その場合は和語の「このたび」も同時に問題視しなければ片手落ちである。以上、繰り返しになるが、現代語で使いやすい漢語文章語の条件を考えるならば、同音語がなく、古めかしい語感を有さないものという結論になる。ただし、実際の漢語整理もしくは語彙整理においては、たとえば「掃除」（「相似」「送辞」などが同音）や「大切」（「大雪」「体節」などが同音）など、同音語はあるものの日常生活に必要な語や、「拝啓」（「背景」が同音）や「敬具」（「刑具」が同音）など、文章における必要性が高い語などをどう扱うかなど、同音語以外の要因も考慮されなければならないのは、いうまでもない⁵²。

⁵² 本研究では、『集英社国語辞典 第3版』で文章語と見なす語をとりあげて考察を行ったが、中にはほかの辞書で文章語とされていない語もある。したがって、何を文章語とするかについても、さらに議論が深められる必要がある。なお、同音語の発生については、水谷（1958）、ゆもと（1978）が詳しい。

IV 字音形態素の造語機能

1. 字音形態素「新」の造語機能

1.1 はじめに

日本語の形態素を分析する際、漢語由来のそれを字音形態素とよび、和語形態素や外来語(形態素)と区別することがあるが、ここでもこの言い方に従う。形態素は、単語の意味的中核となり、単独で単語となりうる語基と、常に語基と結合して用いられる接辞とにわかれる。たとえば「鉄」「花」は語基、「お墓」の「お」や「近代化」の「化」が接辞で、接辞はさらに、「お」や「無意味」の「無」など、語の前部分にくる接頭辞と、「化」や「好戦的」の「的」など、後部分にくる接尾辞とに細分される。また、野村(1977)があげる「建築」「再建」の「建」や「設備」「施設」の「設」など、一字漢語には非自立的なものが多いが、これらは意味がはっきりしており、語基として扱われるのが一般的である。

漢語の接尾辞は種類が豊富であることに加え、「的」は名詞に後接して結合形を形容動詞の語幹にする、といったように、接尾辞の品詞転換機能が注目されることもあり、多くの研究が重ねられてきた。「的」については、水野(1987)、山下(2000)、動詞化機能をもつ「化」については、野村(1978)、田窪(1986)などがある。

接尾辞に対し、接頭辞は品詞転換にかかわるものが、否定の接頭辞「無・不・未・非」など、限定的であることなどから、比較的研究が少ない。

しかし、品詞転換機能のない接頭辞でも、意味的に追究に値する現象があるのではないかというのが本節の出発点で、具体的には、接頭辞的な字音形態素「新」をとりあげ、以下の点を明らかにしたい⁵³。

ア、「新」は、名詞との結合が一般的だが、「新加入」「新発売」の「加入」「発売」など、いわゆる動名詞(「する」のつく名詞)と結合する場合もある。どの動名詞に「新」がつき、結合形はどのように用いられるのか。

イ、「新」は語頭にくることが多く、「新首相官邸」を「首相新官邸」ということはほとんどないのに対し、「新アニメ番組」は「アニメ新番組」ともいうが、このような違いがでるのはなぜなのか。

⁵³ 否定接頭辞以外の漢語の接頭辞を論じた研究としては、荒川(1986)、小林(2004)、斎藤(2004)などがある。

ウ、「新チーム」は、普通「新しく結成されたチーム」をあらわすが、まれに、選手の「新しい所属先」として解釈される場合もある。「新」の多義的側面によるが、後部分の語基の意味範ちゅうによって、どのような用法の分布がみられるのか。

「新」の造語力については、野村（1978）に実証的な報告があるが、意味について詳述したものは、管見の限り、影山（1999）と田中・上野（2002）とがあり、前者は1.4、後者は1.3と関連するため、それぞれ当該箇所であらわされることとする⁵⁴。

本節では『CD-HIASK 2003 朝日新聞記事データベース』を用い、1-6月の半年分の記事を対象に、「新」の延べ13,643例、異なり843例を抽出した。句形式の「3種の神器」、外国語の略語「CS放送」、および人名・地名・数詞を含む「小泉語」「イラク軍」「2トップ」などと結合する用例をそれらを含まない場合を一般用法とするのと対比的に、非一般用法と称する。両者の内訳は、

一般用法：延べ13,514例、異なり793例

非一般用法：延べ129例、異なり50例

である。一般用法を語種別に示したのが表1だが⁵⁵、雑誌・小説などからの用例、延べ2,000例ほどもひかえてあるので、文例として用いる。

表1 「新」の後部分語基の語種別語数

	延べ語数	異なり語数
和語	1,984(14.7%)	20(2.5%)
漢語	10,723(79.3%)	613(77.3%)
外来語	671(5.0%)	113(14.2%)
混種語	136(1.0%)	47(5.9%)
計	13,514(100.0%)	793(99.9%)

和語の延べ語数の割合が、異なり語数に比べて高いのは、「新顔」が595回、「新型」が1,218回出現したところによる大きい。外来語は「アルバム」「システム」など、「新

⁵⁴ 野村（1978）では、新聞に出現した字音語基のうち、「新」の使用度数は、接頭辞的な語基全体の中で「第」「大」「同」「約」につぐ5位、結合対象語基数は「同」「大」につぐ3位とされる。

⁵⁵ 語種の判定は『新潮現代国語辞典 第2版』によった。

との結合頻度が高いものがある一方で、「クラブ」「ホテル」など、1, 2 度しか出現しなかったものも複数みられるため、比較的、異なり語数が多い⁵⁶。以上の実例を用いて、先の疑問について、以下で順に考察する。

1.2 「新+動名詞」について

1.2.1 「新」が付きやすい動名詞

「新」は、名詞につくことが多いが、「新開発・新発足」など、動名詞との結合例もみられる。実際、どの程度の割合で名詞と動名詞が出現するのかを明らかにするために、前述の13,514 例の語基を品詞性の面から分類し、以下の表 2 に示す。

表 2 「新」の後部分語基の品詞性

	延べ語数	異なり語数
名詞	10,376 (76.8%)	701 (88.4%)
動名詞	3,138 (23.2%)	92 (11.6%)
計	13,514 (100.0%)	793 (100.0%)

表 2 からは、名詞が後接するのが一般的だが、動名詞もある程度結合することが、延べ・異なり両方からみてとれる。ただし、表 2 には「新監督」「新企画」のように、動作でなく、モノの意味で動名詞が用いられている場合も含めてあるので、動作の意味に限れば、いくらか割合が低くなる。

「新監督」の場合、「監督」はモノをあらわし、「鉛筆」「製品」など、単純な名詞が「新」と結合するのとはかわりない。以下では、モノでなく「〇〇が新発足した」のような動作の意の「新+動名詞」について、「新」と結合しやすい動名詞の特徴、「新」和「再」和との違い、「新+動名詞」の用いられる要因、などを検討する。以下に「新」と結合する動名詞を他動詞と自動詞とにわけて例示する。

他動詞：開発 採用 収蔵 設計 創刊 発掘 発見 発行 発売 連載 録音

⁵⁶ 荻野 (2002, p. 103) には、「数値」「典型的対象」「観点」に関し、延べ語数は「頻度」「テキスト」「言語行動」、異なり語数は「種類」「辞書」「言語体系」という特徴を有するとある。数値に関し、本節の表 1 の場合、和語は延べ語数が比較的多く、異なり語数が少ない。外来語は、延べ語数が少なく、異なり語数が相対的に多い。それゆえ、和語を後部分に含む「新」は、種類は少ないが多用され、外来語を含む「新」は、種類は多いが頻繁に使われるわけではないといえそうである。

自動詞：加入 加盟 登場 入荷 入団 発足

これらの動名詞と「新」との結合に際して、共通の特徴は、他動詞ではヲ格名詞、自動詞ではガ格名詞が、それぞれ今までになかった個体を表示するという点である。たとえば「〇〇を新開発」の〇〇は、広くいえば社会にとり新しい個体をさし、「新加入」「新入荷」では、「選手」「商品」などが、ニ格であらわされる「チーム」「店」など、社会よりも小さな範囲において新しい選手、商品であることを意味する。

〇東芝は28日、元ニュージーランド代表のフランカー、スティーブン・ベイツら7人が新加入すると発表した。(東京新聞。2008.4.29)

この例では、主題の「東芝」がニ格名詞に相当し、東芝にとって7選手が新しいことを「新加入」は示す。一方、「洗浄」「掃除」「閉鎖」などの他動詞や、「運動」「遠慮」「散歩」といった自動詞など、多くの動名詞には、「新」との結合例がない。「〇〇を掃除」「〇〇が散歩」という場合、場所や人物をあらわす名詞がヲ格とガ格にくるが、それらは社会や組織などにとって今までにない新しい個体としての意味をもたない、という共通点を有している。

1.2.2 「再一」との比較

1.2.1にあげた動名詞には「再」もつき「再採用」「再登場」などをつくるが、「京都の魅力を{新発見/再発見}」のような例では「新」「再」の置換が可能である。以下、同じ動名詞につく際の「新」「再」の共通点・相違点を整理する⁵⁷。

「再」は「再び」を意味し、たとえば「再登場」は先に「登場」が1度は行われている必要がある。それゆえ「アンコールに応じて〇〇が再登場」では、〇〇が既に舞台を降りていて、改めて「登場する」際に「再」が用いられる。一方「新登場する」には、「登場」が、以前あったという解釈はなく、「再」とは異なる。このような場合、単に「登場」のように動名詞のみ用いたとしても意味にほとんどかわりはないが、「新」があると、今までにない、という点のはっきりする。

「発売」「加入」など、ほとんどの動名詞は「新一」と「再一」とで明確な用法差がある

⁵⁷ ここでとりあげていない動名詞と「再」との結合に関しては、小林(2004)を参照されたい。

が、次の例では「新」と「再」とで置きかえが可能なようである。

○昨年、歌手生活 30 周年を迎え、新しいアレンジで再録音したマキシシングルの「なごり雪」=写真=を発売した。(朝日新聞夕刊。2003. 3. 15)

○かつて AOR とよばれた大人向けの落ち着いたロックをけん引した英国のベテラン。デビュー曲「フール」など過去のヒット作を新録音し、今の味わいを加えた。

(日経新聞夕刊。2009. 6. 5)

「録音」行為が 2 度目という点を重視すれば、「再」が用いられ、新しいということに重点があれば、「新」がつくようであるが、上の例は「アレンジして新録音した」、下の例は、「再録音し」としても意味的にさほど違いはないであろう。

○エレクトロニクス実装学会が創立十周年を迎えた。それ以前のハイブリッドマイクロエレクトロニクス協会とプリント回路学会が合併して再発足したもので、……

(日経産業新聞。2008. 12. 17)

○楽天とともに新しいメンバーが増え、パ・リーグは新しい体制で新発足することになる。(日経新聞。2004. 12. 1)

これらの「発足」も、それ以前にあった学会が名前を改め、再び「発足する」という意味で、前者では「再」が選ばれ、後者は今までと違うという点に重きが置かれ「新」が選択されているが、それぞれ「再」を「新」に、「新」を「再」に置きかえることも可能かと思われる。「再」と「新」の意味は、だいぶ異なるというのが通常の認識だと思われるが、上の例のように、過去の動作とのつながりが意識される文脈では(まったくのゼロから会社などが発足した場合は、「新発足」はありえても「再発足」とはならない)、「再」と「新」の用法が接近するというのは興味深い。このようなことは、アレンジ可能な「作品」や発足・解体などが起こる「組織」では見受けられるが、新しいと判断される対象(ガ・ヲ格名詞)が、通常、名前や構成の変化しない「人」である「加入」「入団」などの動作では類例がない。先述の「京都の魅力を{新発見/再発見}」だが、「発見」は「まだ知られていないものごとを(はじめて)見つけること」(『三省堂国語辞典 第 6 版』)で、「新彗星を発見」「万有引力を発見」では「新彗星」「万有引力」が今までにないものごとをあらわすが、「京都の魅力を

発見」のように、ヲ格にくる名詞が文字通りの意味では新しいものごとをあらわさない場合は、「今までに気づかれなかった新しい京都の魅力」程度に解釈する必要がある。京都の魅力は昔の人が発見していたが、現代人がそれとは違う側面を新しく見つけるということであれば「新発見」、発見という動作自体が改めて行われたということでは「再発見」となる。以上の例にみられるように、同一・類似の文脈においても、認識のしかたの微細な違いによって「新」と「再」の間で選択がわかれるといえる。

1.2.3 「新+動名詞」が用いられる要因

ここでは、「新選手が加入」のように、名詞に「新」をつければ、「選手が新加入」とほぼ同じ意味があらわされるのであって、わざわざ動名詞に「新」をつける必要はないのではないか、という疑問について考える。はっきりとした答えを提示するのは困難だが、「新+動名詞」の使われる文脈には、このことに関連するとみられるいくつかの特徴がある。

まず「新+動名詞」のガ格・ヲ格には固有名がきやすい。「高原が浦和に新加入」「シムシティを新発売」で「高原」「シムシティ」は人名・商品名だが、「新高原」「新シムシティ」はこの文脈では使用できず、名詞に「新」をつけ「新選手が加入」「新商品を発売」とすると肝心の情報（高原，シムシティ）が不足する。「高原が加入」「シムシティを発売」としても普通、新しい選手・商品として理解されるが、「新」を加えることで新しいという点は明確になる。これに対して、「散歩する」「検査する」といった動詞では、新しいと認定すべき対象が欠けているためか、「新散歩する」「新検査する」という形をとらない。

また、「〇〇にいちご味が新登場」「〇〇3種を新発売」において、「新しいちご味」「新3種」とはならず、「〇〇に新味」「新種を」では「いちご」「3」という大事な新情報を欠くため、このような場合も「新+動名詞」がしやすい。「新味・いちご味」や、先の例でいえば「新選手・高原」のような言い方も可能ではあるが冗長になる。ただし、見出しなどでは「〇〇に新味登場」のように示し、記事本文で具体的に何味なのかを書くスタイルは存在する。

「新+動名詞」が使われやすい状況としてもう一つあげられるのは、「新発売商品」のように、「新+動名詞」が、名詞を修飾する合成語の要素として用いられる場合で（「新発売の商品」のように「動名詞+の」の形もとる）、

新開発商品 新入荷商品 新発売商品／新収蔵資料 新発掘資料 新発見資料

などでは、単に「新商品」「新資料」とするよりも、具体性を帯びている点で、「新+動名詞」の形式を用いる表現上の価値がある。「新職員」「新雑誌」に対する「新採用職員」「新創刊雑誌」も同様である。

以上のように、名詞のがわに「新」をつけにくい場合や、名詞の示すモノが、どのように新しいのかを表現する必要がある場合に「新+動名詞」が多く用いられており、「新」が名詞だけでなく一部の動名詞とも結合して使用される要因が、わずかではあるが明らかにできたかと思われる。

1.3 「新」の位置と意味

1.3.1 「新」による名詞修飾の性格

「新」は、「台」「種」のような単独の語基、もしくは複数の語基からできていても1語として認識されやすい「会社」「球団」など、二字漢語と結合する際は、それらの前に位置するのが普通である。一方、「新アニメ番組」「新東京名物」では、それぞれ「アニメ」と「番組」、「東京」と「名物」のように2語以上が含まれるが、この場合「アニメ新番組」「東京新名物」のように「新」が語中にくることがあり、「新」の位置が問題となる。まず、ここでは、複数の語を含む合成語でも「新」が語頭にのみくるケースを考える。以下では、「新—」において「新」の直後の要素をA、それにより修飾される要素をBとして表示する。

現象として、以下のような場合は、「新」が語頭にくるのが一般的である。

- 関連をもつ新旧二つの対象が存在し、それらを「新」「旧」で区別する場合：

旧市民会館—新市民会館／旧首相官邸—新首相官邸

旧本社ビル—新本社ビル

- 役職名：新営業課長 新音楽監督 新財務大臣 新専務理事

- 意味を加減して、ABとは別の「新AB」を定義する場合：

印象主義—新印象主義／エンゼルプラン—新エンゼルプラン

保守派—新保守派／本格ミステリー—新本格ミステリー

- 固有名詞ABと関係のある別の固有名をつくる場合：

温泉町—新温泉町（町名）／京成電鉄—新京成電鉄（社名）

神戸電機—新神戸電機（社名）／阪急ハイキング—新阪急ハイキング（書名）

「新」「旧」は、田中・上野（2002）が意味・音韻の面からとりあげ、「旧」を含む語に、「旧石器」「旧大陸」のようにアクセント句が単一の「結合型」と、「旧ソ連」「旧国鉄」のようにアクセント句が分離する「分離型」とがあるとする。そして、「旧」には「旧校舎」「旧病棟」のように結合型と分離型の両方がみられる語があること、「新」は「新石器」「新大陸」のごとく結合型のみであることなどを示した上で、結合型の「旧」とは「新」が意味的に対応し、分離型の「旧」とは「現ロシア」「現 JR」の「現」が対応することを明らかにしている⁵⁸。本節の例でいうと、古い方の首相官邸と新しい方のそれという意味では「旧首相官邸—新首相官邸」という対応があるが、かつての首相官邸は今は首相公邸になっているという文脈では「旧首相官邸—現首相公邸」の対応関係が得られる。

AB の構成をもつ建物名や役職名・固有名は、それと類似のモノがあらわれた場合、AB 間にほかの要素を入れて形をかえるのではなく、その前あるいは後に修飾要素を加えるのが形態的に無標の方法だと考えられる。それゆえ、上記の AB では「新」が語中にくることがない。

「新」の後にくる、2 語以上からなる語にはこのようなものが多く、そのことが本節の冒頭で述べた、「新」が語頭にきやすいという観察結果につながる。

1.3.2 「A 新 B」が出現する条件

ここでは、AB との形の上での同一性が問われず「新 AB」と「A 新 B」の両方の形をとるのはどのような場合なのか、また形態的つながりとは別の何らかの理由で「A 新 B」の形が優先されることがあるのかどうかなどについて検討する。

まず、AB におけるそれぞれの意味関係を整理する。語基同士の意味関係については、齋賀（1957）や影山（1993）など複数の分類があるが、ここでは野村（1987）を参考にした。野村は、以下の 4 タイプを提示し、二字漢語、三字漢語、四字漢語の例をあげているが、ここには議論に関係のある四字漢語の例のみ抜き出した⁵⁹。

⁵⁸ 田中・上野（2002, p. 107）によれば、「旧 X」（「新 X」）の意味構造が「名詞 X が指すある複数の対象のうち「旧い」（または「新しい」）部分を示す」「限定修飾の構造（「旧 X」以外の X も存在することを含意）」の場合、アクセント句は結合型に、「名詞 X が指すある特定の対象が、かつてのものであり、現在は X ではないことを示す」「非限定修飾の構造（「旧 X」の X 部のみを言及）」の場合、分離型になるとされる。

⁵⁹ 野村（1987, pp. 142-143）は「修飾関係」を二分し、「完全消毒」「徹夜交渉」など「前部分の語基が後部分の述語成分の状態・程度などをくわしくする」ものを「修飾関係（1）」とし、「高級官僚」など、「後部分の体言類語基の性質や状態を、前部分の語基が修飾したり限定したりする」ものを「修飾関係（2）」とするが、本節では、「新」の名詞修飾の場合をとりあげているので、「修飾関係（1）」は考察の対象外とし、「修飾関係（2）」のみを本文において示した。

補足関係：栄養豊富 挙動不審 当選確実 実現可能
修飾関係：高級官僚 有価証券 消費電力 演奏技術
並列関係：党利党略 美辞麗句 不眠不休 自由自在
対立関係：竜頭蛇尾 寸善尺魔 西高東低 男尊女卑

補足関係の四字漢語は「地震を予知」のように要素間に格関係が想定でき、並列関係、対立関係はそれぞれ、似た意味、対立する意味の要素がならんだものとして理解されるが、これら3種の語において「新」が語中にくる例は、資料中にはない。たとえば、今までと異なる男尊女卑のタイプがあらわれた場合、それは「新男尊女卑」のように「新」が「男尊女卑」全体にかかる必要があり、「男尊新女卑」では意味をなさない。なお、「新男尊女卑」という言葉が生まれた場合、それは1.3.1であげた「意味を加減して、ABとは別の「新AB」を定義する場合」に相当する。

では、実際に、「新」を語頭と語中とで置きかえても意味的に類義なのはどのような場合なのか、手元の用例から既述の例以外のものをあげてみると、

新アニメシリーズ—アニメ新シリーズ／新着物ブランド—着物新ブランド
新建築工法—建築新工法／新東京名所—東京新名所
新物流拠点—物流新拠点／新プロレス団体—プロレス新団体
新流通業態—流通新業態／新IT戦略—IT新戦略

などがあり、

○六日からの新アニメ番組「コスモウオーリアー零（ゼロ）」

（日経新聞夕刊。2001.7.5）

○秋のアニメ新番組からまず注目は、「花田少年史」＝写真。

（朝日新聞夕刊。2002.12.27）

のように用いられる。「東京名物」のように前部分が場所をあらわしていたり、「プロレス団体」のように、「～に関する」という意味で前後の要素が関係する場合などがあるが、いず

れも前部分が後部分を修飾する関係にある点では共通する。野村（1987）では、修飾関係の例として、「新建材」があがっているが、ABのAと「新」は、いずれもBとは修飾関係にある。つまり、AとBとが修飾関係にある場合、「新AB」と「A新B」が類義になる可能性をもつ。

ところで「A新B」の形態では、「新」が直接修飾するのは、Bのみであり、Aは範囲外となるが、意味的に問題はないのだろうか。つまり「プロレス新団体」といった場合、「新」は「団体」のみを修飾するので、団体と称される既存の組織はそれまでに存在していても、「プロレス団体」に関しては、今までなかったという解釈が可能である。これに対して、「新プロレス団体」の方は、既存のプロレス団体に対し、それとは異なるプロレス団体が出現した場合に用いられるので、両者はまったく意味が異なるという結果になる。しかし、上にあげた「A新B」の語に対してそのような解釈は普通ではない。「プロレス新団体」において、市民団体や消費者団体はあったが、プロレス団体はこれまで存在しなかったとか、「東京新名物」に関し、京都名物や静岡名物はあったが、東京名物はなかった、といった解釈はせず、一般常識を頼りに、「プロレス団体」「東京名物」は従来もあったが、その中に新しいという性質をもったメンバーが登場したととらえるのが一般的であろう。それゆえ、そのような解釈は、「新アニメ番組」「新東京番組」という形に対する解釈と一致するため、両者での置きかえが可能になるといえる。

そして、以上の語は、前述した「首相官邸」や役職名の「財務大臣」と異なり、固定的な名称として呼び習わされているわけでもなく、「プロレスの団体」「東京の名物」のようにAB間に「の」を入れて句の形にしても、意味的に問題はないようである。一方、「首相官邸」を「首相の官邸」、「財務大臣」を「財務の大臣」とするには無理があり、両者に差がみられる。

さて、ABの前に「新」をつけるのが一般的な造語法だが、何らかの理由で「A新B」の形が選択されるということもあるのだろうか。これについては西野（2007）が参考になる。東京都の秋葉原駅と茨城県のつくば駅とをつなぐ鉄道の路線を「つくばエクスプレス」といい、「常磐新線」とよばれていたこともあったが、西野（2007, p. 105）では、「一新線」は「旧国鉄が新線を計画する時によく使った命名法」とされ、「総武新線」「東海道新線」などが挙例されている。つまり「常磐新線」は、「新常磐線」「第二常磐線」という名前になった可能性もあるが、「一新線」が旧国鉄に好んで用いられたという事情があり、その結果として、「A新B」の形が優先的に選ばれたものと考えられる。このような傾向や好みは「新B」の

結合に存在する場合には、「新 AB」よりも「A 新 B」が優先的に選ばれる。

以上、ここでは「新」の位置を論じたが、要約すると、2 語以上からなる語が特定対象や役職名、固有名などをあらわす場合、「新」は語頭にくるのが一般的で、語中にはきにくい。これに対し、合成語の前部分の要素が後部分を修飾する要素で、「新」を加えて「A 新 B」の形をとったとしても、既存の AB の存在が容易に確認できる場合には、「新 AB」「A 新 B」がほぼ同じ意味で用いられることもある。もっとも、修飾関係が要素間に認められる語であっても、「演奏技術」「高級官僚」「野球選手」のように「新」を冠することのまれな語の場合には、「新」の位置はそもそも問題になりえない。たとえば、「阪神に新選手加入」といった文脈において野球が話題であることはいままでのことでもなく、それを合成語の内部に組み込む必要性は乏しい。

1.4 「新」の多義性

1.4.1 「新しい」の多義的解釈

「新」は「新しい」を意味し、「新政権」は「新しい政権」、「新球団」は「新しい球団」である。しかし、次のような「新しい」の用法は、さして珍しくないが、これらを「新一」とした言い方は一般的でなく、「新しい=新」の是非は検討する必要がある。

○マコトは、新しい寝袋や下着を買って帰ると言って、電話を切る。

(丸山健二 (2003) 『虹よ、冒涇の虹よ (上)』新潮文庫)

○新しい店に出かけるより、いつものお店のほうが好き。

(現代日本語研究会 (編) (2002) 『男性のことば・職場編』ひつじ書房)

これらの例で「寝袋」や「店」は、話し手・聞き手など個人にとって「新しい」なのであって、モノそのものの新しさは問われず、「店」に歴史があっても問題はない。「下着」を新品とみなすのは、「下着を買う」についての常識的判断による。「新政権」「新球団」は普通、社会的に新しいことを意味するが、上の例では個人にとってモノが新しいことをあらわしており、「今までにそういうものがなかった」(『学研現代新国語辞典 改訂第3版』)と定義される「新しい」は、「何・誰にとって」今までそういうものがなかったのかという点に関して単純ではない。たとえば、「新しい店」が「新しくできた店」と「個人が初めて行く店」の両方の解釈を許すように、「新しい」は多義的である。

「新一」の場合、「新店」は新たにできた店をさすのが普通で、上例の場面で「新店」とはいわないが、多義的解釈を許す結合形はまったくないのか、もしあるのなら、その後部分語基はどういう種類のものかといった点を以下で検討する。なお、影山（1999）では、「まだ使っていない」の意味の「新品、新車」や「新しく（最近）作られた」の「新商品、新館」などを例に「新」の多義性が指摘されており、本節において「新一」の意味を考える上での基礎をなしている。

1.4.2 「新一」における多義的解釈の検討

先に、個人にとって新しいことを被修飾語が意味する場合、「新一」の形をとりにくいことを指摘したが、中古品に「新一」を用いると以下のようなになる。

- 「この車は」「車検がついて十六万。買うたばかりの新車やで」ナンバープレートは盗んだものと交換してある、と稲垣はいう。（黒川博行（2005）『迅雷』文春文庫）

中古車でも、話し手にとっては、新しい車（所有物）であるから、「新車」だと言い張る、一般常識を逆手にとった表現である。「バット」「冷蔵庫」なども中古品が普通に存在し、「車」と類似した特徴を有する。一方、「新一」が個人の所属先をあらわす例では、このような修辭的ニュアンスはない。

- 雇用保険被保険者証 雇用保険の被保険者であることを証明する証書。失業給付を受け取る手続きに必要なほか、転職先が決まっている場合は、すみやかに新会社に転出しなければならない。（COBS ONLINE。2008.7.12）

- 選手の引き抜きを防止するために作った「移籍後1年間は新チームでの出場禁止」の規定見直しも議論にのぼり始めた。（朝日新聞。2002.10.20）

これらの例で「新会社」「新チーム」は、新たに発足した会社・チームという解釈にならない⁶⁰。就職活動者・選手にとって過去・現在の所属先と違えばそれで良いが、「新車」と異

⁶⁰ 日本ラグビーフットボール協会のHP（2009年11月現在）に掲載されている、日本ラグビーフットボール協会規約の第13章には「社会人選手として登録されている選手は、退職後1年間は新しいチームで出場できない」とあるが、ここでの「新しいチーム」が「新規に結成されたチーム」に限定されないことは常識的に明らかである。

なるのは、所有物の場合は「未使用」という観点が入るため中古品と「新」との間に摩擦が生じ、「新」の使用に抵抗が起こるが、所属先には「未使用」が関連特徴とならず、相対的に不自然さを伴わない点である。「会社」「チーム」では、「今までの所属先—新しい（これからの）所属先」という対立が、「新—」の使用にかかわる特徴となっている。それに対し、一時的な滞在場所としての「会議室」「教室」などは、所属先などの解釈で新旧の対立をもち、個人にとって」という意味では「新しい会議室」および「新会議室」という形をとりにくい。これらの点について、いくつかの名詞を例として、「新しい」と「新」の対応を表3に記す。

表3 「新しい□」と「新□」との対応表

	惑星	横綱	教室	車	会社	恋人	分野
モノ自体「新しい」	○	○	○	○	○		○
モノ自体「新」	○	○	○	○	○		○
個人にとって「新しい」				○	○	○	○
個人にとって「新」				△	△	○	○

○は、一般的だと筆者が考える組み合わせで、△は周辺の結合例を示すが、可能性として残るものは空欄にしてある。「恋人」や「彼（氏）」「客」などは常に特定の相手が必要で、「恋人」「彼（氏）」「客」そのものの新しさを問うことが難しいので、上段が空欄となる。

○俳優・オダギリジョー(29)に新恋人が発覚した。(『週刊ポスト』38-1)

「惑星」「横綱」などは個人にとっての「今までの惑星—新しい惑星」「今までの横綱—新しい横綱」という対立をもたないため、個人にとって新しい惑星・横綱ということ自体ナンセンスとなる。「分野」についてすべて○としたのは、「新分野」には「21世紀の新分野『ナノテクノロジー』」(朝日新聞夕刊。2002.1.23)のような、社会・世間に今までなかったモノとしての用法が当然みられる一方で、

○民間の専門家の多くは彼らにとって新分野である農業の実情に未だ習熟していないこと等、……(『技術と普及』40-5)

のように、個人にとって新しいという意味での用法もあるためである。なお「—にとって」

などで、個人・グループにとって新しいことを明示する方法も見受けられる。

また、交配などによってできた新種の野菜を「新野菜」とよぶ場合、「新商品・新製品」などと同じ性格をもつが、注目すべきは、

○昭和 40 年代後半から欧米、中国の野菜が新野菜として注目されている。

(朝日新聞社(編)(1983)『新野菜の料理 100 選』朝日新聞社)

という「日本にとって」新しい野菜の意味である。欧米や中国では、新しくも何ともない野菜であっても、日本には目新しいわけである。「新野菜」と一括される野菜群が存在するため、「新野菜」という形に安定性が確保される。これは、個人にとって新しいという意味で用いられる際の「新会社」や「新チーム」に典型的な具体例が想定しにくく、「定義づけ→結合形の安定性」に結びつかないのとは大きな違いである。

「何・誰にとって」の「何・誰」を広くとれば「人類・社会」、もっとも狭くとれば、「個人」になる。間に「国家」「グループ」などの段階があり、「新野菜」は「人類・社会」「国家」「チーム」では、「人類・社会」と「個人」の解釈があった。「元素」や「惑星」などの「自然物」は、発見され、今までのモノと異なると確認されれば、人類にとって新しいことを「新一」で表示するのが普通である。「横綱」「大統領」などの「成員」や「委員会」「会社」などの「組織」は誕生した時点、「商品」「装置」といった「生産物」はつくられた時点で、それぞれ新しいと解釈される。それらは普通、世の中全般にとって新しいことを意味するが、「相棒」「恋人」など「相手・仲間」をあらわす名詞は個人にとって新しいことだけをさす。前者のグループと相手・仲間とはっきり二分されるなら単純だが、上述のように、所属・所有概念とかかわる組織や生産物の場合、個人にとって新しいことを意味する場合もあり、自然物と相手・仲間を両極とするならば、その間は連続的である。

以上のように、個人にとって新しいという意味での「新一」の形成は、社会にとって新しいという意味に比べれば、周辺的であるとの一般傾向が指摘できるが、「新分野」のように定型的パターンをもつ例もあること、「新会社」「新チーム」など、個人にとっての新しい所属先という解釈がさほど不自然でないケースも存在することなどを考慮するならば、個々の「新一」の結合形における用法の分布を調査することには意義があると考えられる。ここでは、「新しい—」だけでなく、「新一」においても多義的解釈を許す場合があること、名詞の意味範ちゅうによって「誰・何にとって」新しいのかに関して様々な違いがみられること

などを明らかにした。

1.5 おわりに

本節では、字音形態素「新」について、1.1 であげた 3 項目について論じ、品詞転換にかかわらない接頭辞であっても、意味の面から詳細に分析する必要があることを示した。荒川（1986）、影山（1999）、小林（2004）、斎藤（2004）などが漢語の接頭辞分析を、意味を中心に行っており、本節もそのような研究の一つとして位置づけられる。

上では、接頭辞と動名詞との結合、接頭辞の位置、接頭辞の多義性という三つの問題を「新」を対象にして論じたが、他の接頭辞を含めた上で問題ごとに検討し、各接頭辞の特徴および接尾辞との類似点・相違点などを明らかにする必要がある。また、類義の「新規」「ニュー」「ネオ」などと「新」との関係について整理することも考えている。

2. 「新」と「初」

2.1 はじめに

1では、「新」と「再」とが類義の表現として用いられる場合を見たが、ここでは「新」と「初」とに同様の現象が見られるかどうかを検討する。漢字2字で書かれる語のうちには、「新春」と「初春（しよしゅん・はつはる）」、「新秋」と「初秋（しよしゅう・はつあき）」とが互いに類義語であるというようなケースがある。このような現象が、二字漢語などと結合した場合にも認められるのを考える。

2.2 「初」の読み方

まず、「初」について、二字漢語と結合する場合の読み方を確認しておく。接頭辞としては、「はつ」が一般に用いられ、「しよ」で読む語は少ないが、「初対面」のように読みのゆれが認められる場合もある。「初」が二字漢語と結合している「初一念」「初対面」「初体験」「初舞台」の読みについて、大学生191人から得たアンケート結果では、次のようになっている。

- ・初一念：しよいちねん（152）／はついちねん（28）／両方（3）／わからない（8）
- ・初対面：しよたいめん（138）／はつたいめん（1）／両方（52）
- ・初体験：しよたいけん（4）／はつたいけん（170）／両方（17）
- ・初舞台：はつぶたい（191）

「初舞台」については、全員が「はつぶたい」で回答しており、読みのゆれはない。「初一念」は、知らない語という意見が多い。初見の語ではあるものの、「一念」が音読みなので、それと合わせて「しよいちねん」とするのが適当だと考えるか、「はつ」のほうが何となく読みやすいとするかによって、回答の内容を決めているようである。この場合は、「初一念」という語の知識が問題となっており、通常、読みのゆれとして扱われる場合とは性質が異なる。その語の意味・用法が理解されていて、なおかつゆれが生じる可能性があるのは、「しよたいめん」と「しよたいけん」であり、特に前者が「しよ」で読む傾向の顕著な、日常語としてまれなケースであることがうかがえる。このほか「初感染」「初年度」などが「しよ」の読みをもつが、一般的には、「初+二字漢語」（外来語と結合する場合も含む）の語は「はつ」と読む場合が多いと考え、以下では「初（はつ）—」の語に限って論を進めること

にする。

2.3 「新」と「初」の比較

「初（はつ）一」の語について、「新一」の場合と比較する。サ変動詞語幹がうしろにくる場合を見ると、「初」は「初会合」「初完封」「初公開」「初参戦」「初出場」「初勝利」「初対戦」「初登場」「初当選」「初登板」「初防衛」「初優勝」「初来日」などの結合形が見られる。一方、「新」は「新加入」「新加盟」「新監督」「新記録」「新登場」「新入幕」「新発見」「新発売」「新連載」のような語があるが、「新しい監督」「新しい記録」の意の「新監督」「新記録」など、「新」がサ変動詞語幹を連体修飾する場合が少なくない。連用修飾の場合、「初」と「新」が共通の語と結合する例は、あまり見られない中、「初登場」と「新登場」がともに連用修飾関係で用いられる点が注目される。

「ふなっしーが東京タワーに初登場する」（「ふなっしー」は、千葉県船橋市の非公認のご当地キャラクター）というような場合、「ふなっしー」は、以前から存在していて、各地で活動をしていたが、「東京タワー」に来るのは初めて、という意味を表す。一方、「新登場」は、

○注目される内外の要人の発言をコンパクトに伝える「プチインタビュー」も新登場します。（朝日新聞。2003. 03. 29）※新紙面の紹介で

のように、これまでにない物事が出現する場合に用いられ、これらの場合は、それぞれを置きかえるのは困難で、「初めて～する」と「新たに～する」に使い分けが見られる。

しかし、次のように、どちらの接頭辞でも、意味にほとんど違いが出ないケースもある。

○仏タイヤメーカー大手のミシュランは18日、レストランの格付けを星の数で示す「ミシュランガイド東京 2009」の掲載店を発表した。（中略）40店が新登場する一方、牛肉産地の不当表示を公正取引委員会に指摘された二つ星店「トゥエンティ・ワン」（ヒルトン東京内、10月に閉店）など17店が姿を消した。（朝日新聞。2008. 11. 19）

○飲食店のうち最高評価の「三つ星」は東京が14店、湘南1店の計15店。12版より2店減った。新たな三つ星の獲得店はなかった。二つ星は57店（東京53店、横浜3店、湘南1店）で6店が初登場。（2012年11月30日 日経MJ）

○東京商工リサーチ福岡支社は7日、「九州・沖縄の『日本一』企業」の調査結果をまとめた。(中略) 住宅地図のゼンリンや衛生陶器のTOTO, 単体で2047台のバスを保有する西日本鉄道などは“不動”の「日本一」だが, 今回は29社が脱落し, 37社が新登場または復活した。(読売新聞。2010.1.8)

○製品別のシェアや売上高などで“日本一”の企業は九州・沖縄に百四十一社——。(中略) 前回調査(一九九七年)の百三十八社のうち三十二社が姿を消したが, カステラの福砂屋(長崎市)など三十五社が初登場。(日本経済新聞。2001.1.11)

つまり, ある会社について, それが本や調査結果にこれまで存在していなかった, 新しいメンバーであるという点に重点が置かれれば, 「新登場」が用いられ, それらの会社が本や調査結果に出てきたのが初めてである点に重点が置かれれば, 「初登場」という表現になる。この場合, 「6店」「三十五社」のように, 主語が固有名(商品名やキャラクター名)でない点が重要である。前述した「ふなっしー」の場合, 既存の「ふなっしー」というキャラクターにとって, どこどこに登場するのが初めてであるというように状況理解がなされて「初登場」が用いられる一方で, 「ふなっしーが新登場する」では, 「ふなっしーという新キャラクターの出現」というような意味に感じられ, 「初」の代わりに「新」を用いるのは困難である。これに対して, 「プチインタビュー」の場合は, 紙面に「プチインタビュー」という名の新コーナーが出現するというように「「プチインタビュー」が新登場する」は解釈されるが, 「「プチインタビュー」が初登場する」では, どこかほかの新聞・雑誌にあったコーナーが朝日新聞に初めて出現するというような意味に感じられて, 「新」の代わりとすることはできない。

ところが, 「6店が{新登場/初登場}」「三十五社が{新登場/初登場}」などという場合, 店が新店なのか前からある店なのか, 会社が新会社なのか既存の会社なのかといった点, つまり主語の表す物事の新旧については, 焦点とならず, 本や調査結果に過去には記載されていなかった店・会社が出てきたことが示されれば, それで十分である。それゆえ, 「新たに登場する」意の「新登場」でも, 「初めて登場する」意の「初登場」でも, 表される事柄にほとんど違いがないという結果につながる⁶¹。

⁶¹ たとえば, 漫画「おそ松くん」のキャラクター・イヤミについて「イヤミは昭和38年, 連載中の「おそ松くん」に初登場」(産経新聞。2013.11.24)というように過去の事柄を描写する場合, 書き手の頭には「イヤミ」が既知の情報として存在するため, 「初登場」が用いられるが, 昭和38年当時に視点を置けば, 「「おそ松くん」に個性的なキャラクター「イヤミ」が新登場」といった書き方もできそうである。

もう一つ、「入幕」との結合において、一般には「相撲で、初めて幕内力士になること」(『大辞林 第3版』)の意である「新入幕」が用いられるものの、「初めて」という意味が意識されて「初入幕」と表現され、両者が類義関係になる。なお、十両に落ちた力士が再び幕内に上がる場合は「返り入幕」というが、「再入幕」という言い方も行われる。用例をいくつか示す。

○所要3場所での新入幕は、朝潮、武双山、雅山の4場所を抜いて昭和以降最速。

(『相撲』62-12)

○県出身幕内力士23年ぶり誕生(25日)鶴岡市出身の大岩戸(八角部屋)が31歳で初入幕。(読売新聞東京朝刊/山形2。2013.12.3)

○返り入幕の豊真将は豪風に突き落とされ、3敗に後退。(毎日新聞。2013.9.26)

○再入幕豊真将は、今年1月以来、4場所ぶり2回目の入幕。(『相撲』62-12)

「モンゴル出身力士として初入幕」など、「～として初めての入幕」という状況において「初入幕」が用いられることがあり、そのような場合には「新入幕」は使えない。しかしながら、上の例における「初入幕」では、県出身の力士で幕内力士になった人がいることは明示されており、「県出身者として初めて」の意ではなくて、大岩戸個人にとって初めての入幕という内容を表していることがわかる。この使い方においては、「新入幕」と置きかえ可能である。次の例では、同じ事柄について、一方は「新入幕」、他方は「初入幕」が用いられている。

○東農大から入った双大竜は福島県出身者として12年九州場所の玉ノ洋以来13年ぶりの新入幕。(産経新聞。2013.2.26)

○30歳で初入幕の双大竜は「立ち会いで当たり、突き落とすという自分の相撲ができるようになった。自分の相撲をとり、早く横綱と対戦できるようになりたい」と笑顔で話した。(産経新聞夕刊。2013.2.25)

「新入幕」と「初入幕」の用例数について、国会図書館(東京本館)の検索サービスを利用して、新聞5紙の2013年分の記事を調べると以下のようなになる。

表1 新聞における「新入幕」「初入幕」

	朝日新聞	産経新聞	日経新聞	毎日新聞	読売新聞
新入幕	64	84	60	99	95
初入幕	3	1	0	1	1

朝日新聞の「初入幕」の例は、「アフリカ大陸出身者として」というような使い方であり、前述のとおり、「新入幕」には置きかえられない。そして、表からは「新入幕」がいずれの新聞でも一般的であるものの、「初入幕」が皆無ではない点が注目される。

入幕に関して、初めてなのか2度目、3度目なのかというとらえ方をする場合には、「初入幕」という言い方をするのは、むしろ自然な発想だともいえる⁶²。ただし、マスコミなどでは、「新入幕」が常識とされるため、「初入幕」の出現が抑圧的になるのに対して、個人の自由で書かれるインターネットの文章などでは、「初入幕」の使用例が珍しくない。「新入幕」という言い方があるという知識や意識がなければ、単純に「初入幕」が選ばれるのであろう。もっとも、「新入幕」を知っていても、単調さをさける目的などから、あえて「初入幕」が用いられていると見られるケースもある。

- 角界を救うのはこの男 史上最速新入幕・マゲなし遠藤聖大が迎える正念場（見出し）
- 直後の番付編成会議で新十両昇進が決定し、初入幕となった名古屋場所を14勝1敗という見事な成績で優勝したのだ。（本文）（『週刊大衆』56-65）

あるいは、先ほどの産経新聞の例における「初入幕」やインターネット上の用例の一部にも、これと同様の発想が基盤としてあるのかもしれない。

以上のように、「登場」または「入幕」との結合において、「新一」と「初一」とが置きかえ可能な状況が例外的に生じている。「入幕」との結合においては、「新入幕」が相撲用語として正式な語と意識されて、資料によっては「初入幕」が出にくいということはあるものの、「初」の意味から考えれば、理にかなった語と解釈することも可能である。

通常、「新」と「初」の結合相手は大きく異なっており、両者の使い分けについて、あまり問題とされることはない。この点、「新」と「再」も同様である。しかし、前述したよう

⁶² 日本放送協会の編集による『スポーツ辞典 第2（相撲）』（1958）では、「新入幕」を「あらたに幕内力士になること。またはその力士をいう」としているが、「あらたに」だと、2度目か3度目かなどの意識は薄く、幕内力士に新しいメンバーが加わったという点を問題にする意味合いが強いように思われる。

に、限られたケースにおいては、両者の表す内容が接近する現象が見られることから、類義語研究の範囲に、このようなものも加えて検討することが肝要である。

3. 字音形態素「同」と照応

3.1 はじめに

連体詞的な性格を持つ字音形態素「同」は、一般の国語辞典では以下のように記されている。

- ・前にあげたものと同じものを繰り返し言う場合に用いる。その。「同氏・同年・同社・同校」（『岩波国語辞典 第6版』）
- ・（接頭）（前の語を受けて）その。「一社の方針」「一校では」（『新潮現代国語辞典 第2版』）

このような説明は、先行詞（antecedent）の中で同一指示を保証する形態素（「社」や「校」）を除いたほかの部分で「同」で置きかえ、「同一」で先行詞と同じ概念を指す、といっているのにはほぼひとしい。次の用例における「同」は、この説明に従う基本的な用法である。

○いま銀行のビジネスモデルで最先端を行っているのは、シティバンクを擁するシティグループと言えよう。同グループの最大の特徴は、連結決算経営。

（須田慎一郎（2002）『メガバンク破綻・再生の法則』角川書店）

この例における先行詞の「シティグループ」と照応詞（anaphor）「同グループ」の使い方は、前述の国語辞典の記述をもとにして、容易に理解されるので問題はない。しかし、実際の運用場面における「同」の使用は、上例のような、基本的な使用にとどまるものではない。たとえば、次の例では「同家」が他の語と結合して、先行詞よりも形態的に大きな言語単位を構成している。

○彼は妻の留守に平井の家を訪問して激論となったが一旦はしずまり、……同家台所にあった刺身包丁で平井の背後から刺殺し……

（松本清張（1976）『証明』文春文庫）

○そのわずか3日後の2月13日、警察庁は「会計経理をめぐる不適正事案の解明を図る」などとして、予算執行検討委員会を立ち上げ、同庁幹部ら7人が委員となっ

た。（『週刊朝日』。2004年4月2日号）

「同社の方針」や「同校では」の場合、「その社の方針」や「その学校では」のように、「その」を用いて置きかえることが可能であるが、「同家台所にあった」を「その家台所にあった」とすることは難しい。つまり、「同」による照応表現において、言語単位にある種の「ゆるさ」を見出すことができる。本節では、辞書的な定義からは推測しにくい、実際の運用場面における「同」のふるまいについて考察する⁶³。

本節では、資料として主に、99～03年版の朝日新聞CD-ROM と03年版の日本経済新聞CD-ROM を使用した。新聞記事で使われている読点はコンマに、縦組みで小数点に用いられる中黒はピリオドに変更してある。04年の新聞記事と週刊誌の記事は筆者が紙・誌面から拾ったものである。文字数に厳しい制限のある新聞においては、できる限り繰り返しや冗長ないまわしを避ける必要がある。それゆえ、先行詞の大部分を1字で補うことのできる「同」は頻繁に使用され、そのふるまいも一様ではないため、「同」の運用実態を観察するのに適した資料だといえる。

3.2 先行研究の概要

影山（1997, p. 48）で照応にかかわる「同」の用法が考察されており、以下の例があがっている。

○竹中工務店によると、……竹中氏と〔同社 | 経営者〕とは縁せき関係にある。

（新聞）

○角川書店は、……〔元 | 同社 | カメラマン〕が出張する際……（新聞）

影山は「同社経営者」を複合語、「元同社カメラマン」を派生語とした上で、おおよそ①「同社」が「それ」と同様の照応機能を果たす、②合成語内部に照応形があり、「語彙照応の制約」に抵触する⁶⁴、③「本読み」→「*それ読み」のように、語レベル以下の合成

⁶³ ここでは国語辞典を、語を使用する際の参照点として考える。なぜなら、本節で扱う「同」の用法は新聞・週刊誌など、報道色のあるメディアにおいては頻繁に用いられるものの、どの分野の書き物にも見られる用法というわけではなく、読み手が本節で見る「同」の用法に違和感があるならば（少なくとも筆者個人は違和感がある）、それは国語辞典で定義されるような「同」の意味・機能を参照点として認識しているからに他ならないためである。

⁶⁴ 影山（1997, p. 8）は語彙照応の制約に「語の内部の要素を文中の照応に利用することはできない」と

語に代名詞はあられない、④上の例における合成語は語⁺であり、このレベルでは語彙照応の制約が適用されない、という主張をしている。語⁺とは、影山の設定している言語単位で、上の「同社 | 経営者」でいえば、この形態素連続には縦線（罫線）部分で音声的な切れ目があり「音声的には句を思わせる反面、形態的にはやはり「語」と認めざるを得ない（影山（1997, p. 36））」という性格を持つ。そして「句ではないが通常の語（Word）よりも大きい単位（同前）」を語⁺と定義している⁶⁵。これは影山があげるように、「前 | 学長」や「文学部 | 哲学科」のような、語と句との中間的な単位をカバーする有用な言語単位であると考えられる。

3.3 「同一」の二字漢語について

ここでは、「同社長」のように二字漢語などと結合する「同」の用法の分析に先立って、「同車」「同行」など、一字漢語と結合する用法を検討する。「同」は「同社」「同大学」のような使い方において、前にでてきた名詞を代わりに指し示す連体詞のはたらきをしており、「その社」「その大学」のように、ほかの連体詞でおきかえることができるが、「同月」のような言い方の「月」には、自立用法がないため、「その月（ゲツ）が」の言い方ができないというように、「同一」の形式に入る一字漢語には、自立用法をもつものとそうでないものとが混在している。その点について以下で整理を行う。用例の確認には、「CD-HIASK1999-2003朝日新聞記事データベース」（以下「朝日」）および、国立国語研究所による書きことばのコーパス「中納言」を用いた。また、適宜、インターネットの用例も参考にした。

次のページの表1に示すのは、前に出てきた名詞と同じ事柄をあらわす「同一」について、和語の連体詞「その一」で置きかえられるかどうかをもとにして、分類したものである。

Aとしたものは、たとえば、「同駅」に対する「その駅」のように、「その一」による置きかえがむりなく成り立つグループである。一字漢語が自立用法をもっており名詞として分類されるので、「同」は、「連体詞」と認定して問題がないように見える。

いう定義を与えている。具体例として「*魚釣りをして、それを家に持って帰った」をあげ、「それ」が「魚釣り」の「魚」を直接指すとは解釈できない、と述べている。なお、このような制約には例外が見られることも影山は指摘し、形態論研究の課題だとしている。

⁶⁵ 「語⁺」は影山（1993）にすでに見られるが、「同」と語⁺との関係について詳述されているのは影山（1997）であるため、ここでの引用は基本的に後者にもとづく。

表1 「同一」と「その一」の比較

A	同案 同駅 同園 同王 同科 同課 同会 同巻 同館 同艦 同期 同機 同級 同局 同区 同軍 同郡 同劇 同県 同語 同項 同稿 同号 同市 同式 同社 同集 同州 同塾 同署 同省 同章 同賞 同条 同職 同図 同税 同説 同庁 同党 同派 同版 同班 同藩 同表 同便 同兵 同欄 同論 同湾
B	同院(その病院) 同学(その学校) 同行(その銀行) 同校(その学校) 同 作(その作品) 同氏(その人) 同室(その部屋) 同書(その本) 同所(そ の場所) 同嬢(その{女性/女の子}) 同線(その路線) 同大(その大学) 同地(その土地) 同著(その{本/作品}) 同杯(その賞杯(をかけた競技 大会)) 同法(その法律)
C	同家(その家) 同月(その月) 同湖(その湖) 同港(その港) 同祭(その 祭り) 同国(その国) 同罪(その罪) 同寺(その寺) 同日(その日) 同車 (その車) 同舟(その舟) 同女(その女) 同船(その船) 同村(その村) 同町(その町) 同店(その店) 同島(その島) 同人(その人) 同年(その 年) 同馬(その馬) 同夜(その夜)
D	同委(その委員) 同苑(その墓苑etc.) 同教(その宗教) 同君(その人) 同紙(その新聞) 同誌(その雑誌) 同相(その大臣) 同邸(その{屋敷/ 家}) 同展(その展覧会) 同湯(その{温泉/銭湯}) 同峰(その山) 同流 (その流儀)

B の場合、同じく一字漢語が自立用法をもつものの、「その行(コウ)」「その法(ホウ)」など、形態的に不安定であったり、「同大」のように「大」の自立用法での意味(「大きい」「大便」「大学」などの意)と、「同一」における意味(「大学」の意)とが1対1で対応していなかったりするため、似た意味をあらわす、ほかの表現をとった方が「その」に続けやすいという特徴がある。Cは、一字漢語としては、自立用法が一般的でなく、その訓を用いることで「その」に続けることが可能なものである。Dは、一字漢語が自立用法をもたず、訓による言い方もとれないため、ほかの表現をとることで「その」に続けうるタイプである。また、「同委」「同展」など、一字漢語がそれ以上の単位からなる漢語の略語である場合もある。

問題があらうかと思われるのは、当該の一字漢語が、現代語として自立するのかわからないのが、判断しにくい場合もある点である。表にはのせなかったが、「同棟」というときの「棟」については、自立用法を認めて名詞とする辞書と造語成分として扱う辞書とでゆれがある。自立用法があるとすれば「その棟」という言い方が可能でAのグループになるが、自立用法を認めなければ、「その棟(むね)」という訓による言い方が可能なCのグループになる。自立用法を認めた場合、「トウ」も「むね」も「常用漢字表」で認められている読みであり、「その棟」と書かれたものからは、どちらの読みであるか判断しにくく、話しことばの中で

の使用例を比較しなければならなくなってくる。なお、「室（シツ）」は、「部屋」の意をもち、自立用法をもつ語として辞書に記載されるが、「室に入る」「室を出る」などの言い方は、やや古めかしいと判断して、表ではBに入れておいた。

一字漢語に自立用法があればA、なければCかDというように単純に区別できればよいが、Bに含めたような、AとC・Dとの中間的な例もあることを考慮するならば、「同一」の中に入る一字漢語について、上記のような検討を行うことも多少は意味があろうかと思われる。また、CやDに含まれる一字漢語が少なくないことから、形態的には、「同」はあくまで「連体詞的」であって、「連体詞」とは断言しにくいものの、機能的には連体詞のはたらしきをしていることは確かであり、その点を重視すれば連体詞として扱うことにも一理あるのかと判断する。このようなゆれが生じるのも、「同」のうしろにくる一字漢語が、意味的には一般の名詞とかわるところがないものの、形態的に不安定で造語成分的なものが多いことによるものであり、日本語における一字漢語の扱いのむずかしさを示している。

3.4 「同一」による言語単位の拡張

ここでいう言語単位の拡張とは、先行詞を指示する「同一」に他の形態素が結合して、合成語を作る場合を指す。

3.1でもとりあげたが、次のような例では照応詞が先行詞全体を指示対象としているので、文法上問題はない。

○身元を調べたところ、8日に火災が起きたブリヂストン栃木工場の精練棟に勤務していた男性社員（47）とわかった。県警は14日朝から、……同社員を含め……
(朝日新聞。2003. 9. 15)

これに対し、以下の例では、影山（1997）が指摘するように、語彙照応の制約への抵触が問題となる。

○社会保険庁は……同庁ホームページで年金見込み額の照会を受け付ける。
(日経新聞。2003. 12. 27)

○今月中旬以降テロが相次ぐトルコで、外貨獲得の柱である観光産業が打撃を受け、金融危機克服に取り組む同国経済に深刻な影響が及ぶ事態が懸念されている。

(日経新聞。2003. 11. 23)

上例では、それぞれ「同庁」と「ホームページ」との間、「同国」と「経済」との間にポーズ（音の切れ目）が確認され、影山の指摘する語⁺として処理することが可能である（ポーズを入れない話者もいる）。しかし、次のような例では語⁺の認定が上述の例よりも難しくなる。

○検察官が「今日も車で来ている恐れがある」と中署に通報。同署員が、地検庁舎のすぐ横に路上駐車していたワゴン車に乗って帰ろうとしたところを現行犯逮捕した。（朝日新聞。2003. 1. 18）

○東京都豊島区南池袋1丁目の貸金業「ファミリア」の社員ら2人を出資法違反の疑いで逮捕した。……逮捕されたのは、同社代表の三浦和仁（23）＝東京都新宿区新宿1丁目＝と同社員の斎藤裕哉（20）＝住所不定＝の両容疑者。

(朝日新聞。2003. 7. 3)

○九日午後二時ごろ、東京都港区芝三にある中央三井信託銀行の本社ビル（二十二階建て）の十四階にある社員食堂から煙が発生して警報機が作動、ビル内で勤務していた同行員ら約千人が一時ビルの外に避難する騒ぎとなった。

(日経新聞。2004. 2. 10)

これら3例では、「同」と先行詞との同一指示を保証する要素（「署」「社」「行」）に加えて、それぞれ「員」が付加されている。仮に上述の「竹中工務店」と「同社経営者」の場合と同様の解釈を施すのであれば、「同署、同社、同行」が先行詞の「中署、ファミリア、中央三井信託銀行」を指す、ということになる。そうすると、これらの3例において、「員」の前に音の切れ目が存在し、形態素連続全体としてのレベルは先の「同庁ホームページ、同国経済」と同じく、語⁺であると解釈する必要がある。しかしながら、実際には「署員、社員、行員」において、「員」の前にポーズが置かれることはないの

で、この解釈を支持するのは困難である。

以上では「同署員、同社員」に対する、次のAの解釈を検討したが、実際にはBの解釈の可能性もある。

A 同署員 = (同署) + 員, 同社員 = (同社) + 員

B 同署員 = 同 + (署員), 同 + (社員)

Bの場合、たとえば「同署員」において、「同」の部分には上述の例でいえば「中署」の「中」のみが含まれているのではなく、「署」相当の概念も内包されていると解釈できる。この場合、あえてポーズを置くとしたら、「同」とその直後の形態素との間であって、「員」とその直前の形態素との間ではない。この解釈が正しいとした場合、「同社員」を例にすると、前述の朝日新聞の2003年9月15日の記事のような、「同」が「社」の直前までを指示する解釈と、「社」も含める解釈とであいまいになり、また、朝日新聞の2003年7月3日の記事では「同社代表」というA型の解釈と「同社員」におけるB型の解釈とが一つの文章の中に混在している、ということになる。なお「中署署員」に対して、「同署署員」から前の「署」が省略された、とする解釈もあり得るが、朝日新聞2003年7月3日の記事のように先行詞に「社」が付いてない場合、「同社社員」からの「同社」の「社」の省略、という具体的な操作が施されたと考える根拠が乏しい。それと、省略という立場を取るとした場合も構造的にはBとして扱うことが可能であるため、「同」に「署、社、行」相当の概念が含まれるとし、一括して扱っても、論を進める上でさほど支障はないと思われる。

以上、Bの解釈であれば、「同署員、同社員」は影山(1997)のあげる「同社経営者」のような合成語とは構造が異なるが、「同」の直後にポーズが置き得る語⁺と認定され、語彙照応の制約に違反していないとすることが可能である。しかしながら、次の各例では、「同」とその直後の形態素との間にポーズを置くのは困難である。

○政府は二日の閣議で、イラクの治安情勢について「主要な戦闘は終結したものの、同国内における戦闘が完全に終結したとは認められない状態にある」との答弁書を決定した。(日経新聞。2003. 12. 3)

○中電は今後、周辺海域の埋め立て許可などを得なければならない。これに新町長が反対すれば、知事は無視できない。同社内には「推進派が負ければ、計画中止の検討も必要」との見方もある。(朝日新聞。2003. 1. 18)

○カリフォルニア州で昨年末、妊娠8カ月のレーシー・ピーターセンさん(27)が失踪(しっそう)。4月、同州の海辺で遺体が見つかった。おなかの男児も死んでい

た。夫（30）が逮捕され、いまでも裁判が続いている。同州法は胎児も殺人の被害者として扱うので、夫は2件の殺人罪に問われている。（朝日新聞。2003. 8. 26）

○台湾海峡で25日に墜落事故を起こした中華航空（本社・台北市）の株価が27日、台湾株式市場でストップ安となった。同社機は最近、墜落事故が相次ぎ、……

（朝日新聞。2002. 5. 28）

○アルゼンチンのラファエル・ビエルサ外相（50）は二十四日、ブエノスアイレスで日本経済新聞記者と会見した。南北米大陸を貫く米州自由貿易地域（FTAA）交渉について二〇〇五年一月の交渉完了期限を守れない可能性を示唆した。日本の債権者も巻き込んだ債務再編問題では、元本の七五%削減を柱とする同国案に重ねて理解を求めた⁶⁶。（日経新聞。2003. 11. 26）

○厚労省は給付優先。同省案では厚生年金の保険料率（労使折半、現行 13.58%）を04 年度から毎年0.354%幅ずつ上げて2022 年度に20%で固定する。

（朝日新聞。2003. 11. 24）

これらは、通常音の切れ目を伴わず、一続きで発音されると考えられるが、「国内、社内、州法」という二字漢語が存在するため、なお理論上は「同」とその直後の形態素との間に、ポーズを置くことが可能だ、と主張することができるかもしれない。ただし、「社機、国案、省案」までいくと、少なくとも一般的な二字漢語とは言いがたくなってくる。次の例ではどうだろうか。

○暴力団山口組系五菱会（静岡市）のヤミ金融事件で、……「ヤミ金の帝王」と呼ばれ、同会系のヤミ金融業者を統括していた梶山進容疑者（54）……

（日経新聞。2003. 11. 21）

○日本のポケットモンスターのアニメ映画「ミュウツーの逆襲」の全米公開に先だって、配給を担当する米映画会社ワーナー・ブラザーズが……同社系のロサンゼルス
のテレビ番組で一日朝、ハリウッドでの試写会の案内をしたところ、申し込みが殺到。（朝日新聞夕刊。1999. 11. 4）

⁶⁶ 辞書の記述を厳密に適用するなら、「同国案」の「同国」は直前の「日本」のはずだが、文脈上理解に困難が生じない限りで、それを「とばす」ことができる。なお、「同党案」や使用した資料内にはなかった「同庁案」なども類例としてあげられる。

○全日本空輸は十二日、……新設する運賃は「ゲット プレミアム」。同社便のエコノミークラスの前方には通常より二割幅が広いビジネスクラス並みの座席……

(日経新聞。2003. 2. 13)

○欧州連合 (EU) 議長国ベルギーのミシェル外相は13日付の同国紙ラツト・ニュースとの会見で、…… (朝日新聞。2001. 10. 14)

○川崎市川崎区の無認可保育所「ちびっこ園川崎」に預けた生後4カ月の娘が死亡したのは、保母と運営会社「ちびっこ園」(本社・富山市)に責任があるとして、…同園側が約2千万円を支払うなどの条件で和解が成立した。

(朝日新聞。2001. 9. 5)

○判決によると、このリゾート開発は日本生命が進めていたが、沖縄県知事の許可を得ずに造成工事をしたため、同年8月、都市計画法違反容疑で沖縄県警が同社側を那覇地検に書類送検した。(朝日新聞夕刊。2003. 8. 18)

○インドネシア農業省は、カナダでBSE(牛海綿状脳症、狂牛病)に感染した牛が見つかったことを受け、二十二日付で同国産の牛肉及び牛肉関連製品の輸入を禁止した。(日経新聞。2003. 5. 26)

○IOTOの「NEWアプリコット」シリーズやINAXの「パッソ」シリーズは水玉でお尻を洗う。……それぞれ同社比で、従来の約半分の水量で洗浄できるため経済的だ。

(日経プラスワン。2003. 8. 9)

これらの例でも、やはり「同」を含む下線部は一続きで発音されるのが普通であり、「同」とその直後の形態素との間や「同会、同社」と「系、便」との間にポーズを置くようなことはないと思われる。上の各例において、あくまで「同」の直後にポーズを置くと考えるのであれば、「国産」を除き、「会系、社便、国紙、園側、社側、社比」という単語の存在を主張しなければならないが、そのような語は管見では見あたらない。なお、上の例で「同国産、同社比」は、いわゆる接辞性語基(上記の「系、便、紙、側、産、比」など、造語成分などと称されるもの)が用言類で、その他は体言類である⁶⁷。

⁶⁷ 自立用法を持ち、そのまま単語となるものを語基、語基に結合して、形式的な意味をそえたり品詞性の決定にかかわったりするものを接辞とした場合、自立用法がなく、接辞性の強い「的」が「政治的、開放的」で語基に付加されるのと、「新聞社、出版社」における「社」の機能は類似している。しかし「社が決めた方針に従う」のような自立用法も存在し、純粹の接辞とは言いがたいゆえ、語基と接辞との中間的な単位を「接辞性語基」と呼ぶ。接辞性字音語基については、野村(1978)で詳論されている。なお、本節では字音でない「側(がわ)」もとりあげているため、接辞性語基としている。

ポーズを伴わず、一続きで発音される単位を語、ポーズを伴うが内部に助詞などを含まない単位を語⁺とした上で、ここまで述べてきたことをまとめると、以下のようになる⁶⁸。

- ① 照応詞の「同」が一字の漢語と結合する場合（「同社、同庁、同氏、同署」など）は全体として、語になる。
- ② 二字以上の漢語や、外来語と結合する場合（「同大統領、同大使、同システム、同パソコン」など）には、「同」の直後でポーズを置くことができ、全体としては語⁺となる。前述の朝日2003年9月15日の記事から日経の2004年2月10日までの記事の例もここに分類される⁶⁹。
- ③ 「同」と一字漢語との組み合わせの「同社、同署」などが、他の語と結合すると、「同社幹部」のように、語⁺に拡張される。
- ④ 「同」と一字漢語との組み合わせに、一部の接辞性語基が付加された場合（「同会系、同園側」など）、全体として語⁺とはならず、語のレベルに留まったまま、言語単位の拡張が行われる。前述の日経新聞2003年12月3日から日経プラスワン2003年8月9日までの記事の例。

3.5 先行詞の部分利用

3.4では「同」を用いた言語単位の拡張について検討した。ここでは逆に、先行詞となる形態素連続の一部のみを用いた照応表現について、考察を加える。

3.5.1 複合語内の1語を照応表現に用いるタイプ

ここでは、長い複合語を単語ごとに区切っていった際に、主要部（複合語の最も右側の語としておく）以外の語が、照応表現に用いられている場合について観察する。

○大阪教育大付属池田小学校（大阪府池田市）の児童殺傷事件で、重傷を負った児童8人の保護者が25日、同大学に対し、謝罪や慰謝料など総額約1億円の支払いを求める要望書を提出した。（朝日新聞。2003. 11. 26）

⁶⁸ 森岡（1970）が指摘する四語基以上の「連語」と語⁺との性格の異同について考察する必要があるが、ここでの考察の範囲を超えるため対象外としたい。また、本節では相対的に語のほうに重点が置かれるため、語と句との中間的な単位としては語⁺を設定しておけば、論を進めるのは可能だと考える。

⁶⁹ 237 ページの朝日の1月18日の記事から日経の2月10日の記事までをB型で解釈した場合。

この用例に対して、上述の国語辞典による「同」の定義をもとにして臨むなら、ここでの「同大学」の使い方は不適格である、ということになる。なぜなら、3.1で見た辞書の説明にあるように、「同」が「前にあげたものと同じものを繰り返す言う」ものであったり、「前の語を受け」るものであったりするならば、上の例で「同小学校」の使用は適格であっても、複合語（「大阪教育大付属池田小学校」）の主要部（「池田小学校」）に対する修飾要素に過ぎない「大阪教育大」に「同」が使用されることは、辞書の記述からは予測しづらいからである。しかしながら、以下に見るように、新聞ではこのような表現が多用される、という事実がある。私見では、先の「同」による言語単位の拡張よりも、ここで検討する先行詞の部分利用の方が、字数制限の厳しい分野に特徴的な表現であるように見受けられる。上の用例（朝日新聞の11月26日の記事）では、「大阪教育大学」ではなく、先行詞の一部分のみを利用し、「同大学」とすることで「大阪教育」の4文字分を「同」1文字で代用することになるので、3文字分のスペースを節約することができる。以下同様の例をいくつかあげる。

- 茨城県保健福祉部は25日、同県波崎町内で開かれているサッカー大会に参加した高校生のうち、……（朝日新聞。2003. 12. 26）
- 札幌東豊病院産婦人科の前田信彦医師らの研究によると、一九九八年八月一二〇〇二年六月に同病院を受診した女性患者四百十九例の悪性HPV感染率は十代が四五％、……（日経新聞。2003. 9. 15）
- テネット中央情報局（CIA）長官は「彼に答えさせます」と隣のフォーリー同局分析官にマイクを譲った。（日経新聞。2003. 8. 2）
- 山崎氏は開票後、山崎派事務所に同派議員を集め、「一人当たりの党員得票数からすると、断トツの成果を上げた」⁷⁰。（朝日新聞。1999. 9. 22）
- 内閣改造の前日に急転直下、行われた旧橋本派幹部の刑事訴訟劇。官邸の小泉総理にとって都合の良いこの展開に、同派の周辺からは……
(週刊新潮。2004年10月7日号)
- 長野県下諏訪町教育委員会は19日、町内の星ケ塔遺跡で、……採掘坑は、同町の

⁷⁰ 8月2日、9月22日の記事からわかるように、「同」による言語単位の拡張と部分利用は一つの照応表現において、両方あられうる。

鷲ヶ峰西方にある星ヶ塔山から見つかった。（朝日新聞。2003. 12. 20）

○上海市政府は二十四日、米映画・娯楽大手ユニバーサル・スタジオ社が同市進出を断念したことを認めた。（日経新聞。2004. 9. 25）

○「ごはんの味を子どもたちには覚えてもらいたい」と話すのは、千葉縣市川市の杉の木保育園栄養士・西寺一恵さん（四〇）だ。……同園では昼食とおやつのほか、午後六時過ぎまでいる子のための軽食も作る。（朝日新聞。1999. 8. 2）

これらの例について、大まかな傾向としては、「組織・集団」に相当する語が先行詞に多く見られる、という点が指摘できる。そして、先行詞の前部には後部と比べて相対的に大きな組織・集団が位置しており、後部の組織、もしくは人（「長官、栄養士」）と広い意味で全体一部分の関係にある。これらの例における照応表現では、先行詞前部の組織・集団が指示対象とされている。しかし、意味関係に関しては、次の例のように、先行詞の前部と後部とが全体一部分の関係にあるとは言いがたい場合もあり、相対的な傾向とするしかない。

○10日付の米紙ワシントン・ポストは、ブッシュ米政権が対イラク軍事行動に傾く理由としてあげていた同国のフセイン政権とテロ組織アルカイダとの関係について、……（朝日新聞。2002. 9. 11）

この例では「イラク」と「軍事行動」との間に全体一部分の関係を想定することはできないだろう。また、「イラク」の前に「対」という接頭辞相当の形態素も付加されているので、「イラク」の前と後ろ両方の形態素が照応表現において、除外されている。

朝日新聞の2003年12月26日から朝日新聞2002年9月11日までの例を見る限り、形態的には長い複合語（「語＋語」）の中から語（「山崎派、上海市」）全体を照応表現に組み込んでおり、語の一部のみが用いられているわけではない。しかし、先行詞内の語の一部のみを対象とした部分利用もあり得ることを次に観察する。

3.5.2 先行詞の接辞性語基を含まない照応

以下の例では、先行詞内の接辞性の語基が照応表現にはあらわれておらず、その直前の語基までが「同一」に含まれている。

○五日午後八時ごろ、北九州市若松区南二島の建材会社「太平工業」の北九州工場（鉄筋一階建て）内で爆発があり、……同工場は二〇〇二年四月に経営破たんした住宅資材メーカー「段谷産業」の事業を工場設備ごと譲り受け、住宅用建材のパーティクルボードを製造している。（日経新聞。2004. 1. 6）

この例の場合も、一般の国語辞典を頼りに「同」による照応表現を理解しようとするならば、「工場内」の「内」が無視されて「同工場」で照応表現が構成されているのは、不自然だということになる。以下、類例をあげる。なお、以下では上の例と同様の問題が指摘できる部分にのみ下線を記す。

○名古屋市発注の道路清掃をめぐる談合事件で、名古屋地検特捜部は4日、同市緑政土木局長の村瀬勝美（57）＝同市天白区＝、同局道路部長の長崎弘（51）、……
（朝日新聞。2003. 11. 5）

○ロシア軍のバルエフスキー第1参謀次長は18日、ラジオの生放送で、同国が保有する多弾頭の大陸間弾道ミサイルSS18 について……（朝日新聞。2002. 5. 19）

○三年近く衝突が続いてきたパレスチナ情勢が転機を迎えている。パレスチナ過激派がイスラエル人に対する攻撃停止を宣言、同国軍が撤退を開始した。
（日経新聞夕刊。2003. 7. 4）

○イスラエル紙ハーレツ（電子版）は二十日、同国外務省筋の話として、イスラエルが近くアラブ各国に外交関係改善のための特使を派遣する予定だと報じた。
（日経新聞夕刊。2004. 6. 21）

○7日付のイスラエル紙マーリブは、同国北部に迫撃砲などによる攻撃が相次いでいることを受け、……（朝日新聞。2002. 4. 8）

○巨額の公金を横領された青森県住宅供給公社側が苦々しげにいう。……（同公社庶務課長・須藤洋一氏）（週刊ポスト。2004年10月8日号）

○マスタードの種をパウダーにして大手調味料メーカーなどに卸す。種はほぼ100%カナダ産で、同国に約3万5千坪の自社農場を持つ。（朝日新聞。2002. 3. 26）

おおよその傾向として、①接辞性語基に前接する語が組織・集団をあらわし、②接辞性

の語基は組織・集団に属する事物を意味する、③照応表現は先行詞前部の組織・集団に対応することが多い、といった点が指摘できる。ただし、「カナダ」と「産」との間には、そのような関係は見られない。また、以上は網羅的なデータではないので、これ以外のタイプの可能性も否定できないが、「語基+接辞性語基」からなる語の中から、語末の接辞性語基を除いた部分に対応する照応表現の存在を証明するには、以上で一応は事足りると考えたい。3.5.2 で扱った照応表現のタイプは、長い複合語の中から1語全体を照応表現に適用する3.5.1 のタイプよりは、出現する確率は低いようである。これは句に近い「語+語」の構造よりも、「語基+接辞性語基」（全体は「語」）の構造の方が語彙照応の制約からの自由度が低くなる、ということの意味している。

3.6 おわりに

ここでは「同」が実際の運用場面において、辞書的な定義の範囲から外れて用いられるさまを観察した。照応詞が先行詞よりも大きな単位になる場合、先行研究で考えられたように、照応表現全体が語よりも大きな語⁺になる場合がある一方で、一部の接辞性語基が照応表現に含まれる際は、全体が先行詞よりも形態的に大きな単位であっても、あくまで「語」であることを指摘した。語には単一の語基からなる単純語と「語基+語基」の複合語、そして「語基+接辞」の派生語が含まれ、本節で主に問題とした「語」とは三つめの派生語であるといえるが、本節で見たような現象が複合語にも実例として観察されるものかどうかについては、別に調査が必要である⁷¹。

言語単位の拡張の検討に続いて、先行詞内部から一部の要素のみが照応表現に用いられる現象についても考察し、先行詞内の1語全体を照応に用いるタイプと接辞性語基を含む語の一部を照応に用いるタイプとがあることを指摘した。これらはいずれも、ことばの経済性を志向した現象といえる。なぜなら、このような表現により、繰り返しなどを避けて文を縮小できるからである。

しかし、次の現象は「同」の使用において、経済性以外の要因も作用することを示唆している。それは、「一法違反」という先行詞に対応する照応表現を例に説明すると、照応表現において必要最低限の単位である「違反」と「同」が結合する場合よりも、「法」まで含んだ形で「同一」が形成されることの方が圧倒的に多い、という事実を指す。

⁷¹ 一部自立用法のありうる接辞性語基もとりあげているので、厳密には「派生語的な語」とするべきかもしれないが、煩雑であるのと、特に解釈に支障はないであろうとの理由から「派生語」として扱う。

○公正取引委員会は十八日、独占禁止法違反（不当な取引制限）で県内の測量会社など四十五社に排除勧告した。公取委は昨年十二月、同法違反容疑で関係先を立ち入り検査。（日経新聞。2003. 11. 19）

このような「一法違反」という先行詞に対する照応表現としての「同法違反」は99～03年版の朝日新聞CD-ROM では950件あらわれる。これに対して、以下に示す「同違反」はわずか9件で、そこから先行詞が「罰則違反」のような場合を除いて、「同法違反」に対応する例のみを数えると、6件しかない。

○静岡県警は26日、JRバス関東（本社・東京都渋谷区）と、同社宇都宮支店の補助運行管理者（44）を道交法違反（酒気帯び運転の容認）の疑いで、福田被告を同違反（酒気帯び運転）の疑いで静岡地検浜松支部に書類送検した。

（朝日。2003. 9. 27）

たとえ「法」1字の差であろうと、経済性を追求するならば、「同違反」が優勢になるはずである。日経の11月19日の記事で「同法違反」を「同違反」にしたところで特に理解に支障が生じるとは考えにくい。ただし、「一違反」には、「公約違反」「ルール違反」「法律違反」など、「違反」の前に規則などを示す名詞がきて、「一違反」でその規則を守らないという意味をあらわす場合と、「スピード違反」「速度違反」「駐車違反」「ドーピング違反」など、「～に関する違反」を「一違反」があらわす場合とがある。それゆえ、「同違反」よりも「同法違反」としたほうが「～に関する違反」の意ではない点がはっきりするので、あいまいさを回避する目的からは、「同法違反」という長い形式に優位性があると見られる。「同一」の語に関しては、このような、経済性と競合する要因についても注意する必要がある。

4. 接尾辞的な一字漢語と類義の二字漢語における造語機能の比較

4.1 はじめに

現代日本語で接尾辞的に用いられる一字漢語には、「化」「的」など品詞転換機能をもつもののほかに、「難」「制」など実質的な意味は付加するが、品詞転換に関わらないものが多く存在する。そして、「難」や「制」に対しては、「困難」「制度」など、類義の二字漢語が存在し、両者の違いが問題となる。たとえば、「病（ビョウ）」と「病氣」の場合、単独では「病氣」が用いられ、合成語（「複合語」と「派生語」を含む用語として以下用いる）の構成要素としては、「血友病」「精神病」など、「病」が用いられるというように、一字漢語と二字漢語で役割分担がなされているといえる。しかし、「困難」や「制度」には、「生活困難」「選挙制度」など、合成語後項としての用法も存在する。したがって、似た意味の一字漢語と二字漢語を多く集めて比較・検討をする必要がある。

このような問題について、古くはワカバヤシ（1936）に指摘があり、そこでは「忠・忠義」「機・機械」「材・材料」などを例に「漢語ノヒトツノ特徴トシテ考エラレルコトワ、1字デモ2字デモ大シテ意味ノ變ラナイモノガ少ナクナイトユウコトデアル」（pp. 10-11）とされる。また同研究は、わかりやすさの点で「裁縫機」より「裁縫機械」の方が優れること、「電動機械」より「電動機」が「短カクテ云イ易クマトマッタ1語ノ感ガ深イ」（pp. 98-99）ことも指摘する。合成語の要素として造語力のある二字漢語を観察対象とする考え方は、影山（1993, p. 27）にもあり、そこでは後項としての「方法」について、その結合対象の性質が検討されている。

本節では、意味の似た一字漢語と二字漢語とが合成語後項としてあらわれる場合の造語機能や意味・用法について、主に新聞から得たデータをもとにし、記述的な立場から分析を行う。

4.2 資料と分析対象

まず、合成語の後項となる一字漢語と二字漢語の選択が必要だが、筆者の主観による選択をさけるため、①「常用漢字表」の2,136種の漢字のうち、字訓のみの77字を除外し、残りの2,059字を対象とする、②これらの漢字について、『岩波国語辞典 第7版』（以下『岩波』）、『新選国語辞典 第9版』（『新選』）、『三省堂国語辞典 第6版』（『三国』）、『明鏡国語辞典 第2版』（『明鏡』）、『新明解国語辞典 第7版』（『新明解』）を用いて、合成語後項としての記述の有無を確認し、684字を抽出、③北條（1973）、野村（1978）から「例」「域」「営」「肉」を追加する、といった手順を踏み、計688の一字

漢語を抜き出した。「下」や「強」など、後項として使う旨が記載されているもののほか、「貿易港」「逮捕歴」の「港」「歴」など、二字漢語との結合例が記述されているものも含んでいる。本節では、接辞的用法の定義は国立国語研究所（1976）にしたがい、詳細は省くが、おおむね二字漢語や外来語と結合する用法をさすものとして議論を進めた。

次に、688の一字漢語について、前述の5辞書の語釈にあらわれる類語を抽出するという方法をとった。たとえば、「医」は「病気を治療する人。医者」（『岩波』）と説明されており、「医者」を類語として抜き出す。あるいは「制」は「きまり。制度」（『明鏡』）と記されている「制度」を「制」の類語と見なす。なお「卒業」の略語「卒」などにも「大学卒」などの用法があるので対象とする。このようにして、182例を取り出すことができた。以下、この182例を基に具体的な検討を行う。5辞書の補足資料としては『大辞林 第3版』、用例に関しては「CD-HIASK2003 朝日新聞記事データベース」（以下「朝日」）を使用した。ただし、2003年以前または以後の用例を見る必要がある場合には、朝日新聞の「聞蔵Ⅱ」、毎日新聞の「毎日 News パック」も使用している。

4.3 造語力、周辺的な意味

4.3.1 後項としての用法に欠ける二字漢語および略語

前述の182例について、『大辞林』および「朝日」によって用例を見ていくと、後項としての用法がまったくないか、1例しか確認されないものがある。このようなケースについては、単独では二字漢語、合成語の構成要素としては一字漢語という傾向にそうものとして、ひとまずとらえることができるだろう。具体的には、以下のようなものがこれに相当する。

衣・衣服 戒・戒律 監・監房 岩・岩石 季・季節 境・境地 菌・黴菌 吟・吟詠 健・健康 鋼・鋼鉄 痕・痕跡 星・星座 史・歴史 囚・囚人 食・食事 税・税金 箋・便箋 炭・石炭。木炭 弾・弾丸 帳・帳面 通・通人 伝・伝記 動・震動 熱・熱中 碑・石碑 病・病気 服・洋服 文・文章 別・区別 毛・羊毛 律・音律。韻律 林・森林 曆・曆法

次に、「卒業」の略語である「卒」など、二字漢語から省略されたものが後項としての用

法を有している場合が 11 例ある。

圧・圧力 協・協会 現・現職 再・再選 債・債券 新・新人 選・選挙 卒・卒業 鉄・鉄道 毛・羊毛 連・連盟。連合

「圧」を「圧力」からの略と見る辞書とそうでない辞書が見られるのと、用法上も、「圧」と「圧力」では異なりがあるので、以下でもふれることがある。ほかの例では、用法は基本的に変わりがないが、省略されない語もあるので、「選挙」など、二字漢語が後項となる合成語が、量的に多い場合も見られる。「鉄」も「地下鉄」程度で、一般的には「軽便鉄道」「高速鉄道」など、「鉄道」が用いられる。

4.3.2 後項として一般的か非一般的か

意味的に似ていても、一字漢語と二字漢語のうち一方が専門語などに用いられ、数多くの語をつくっているのに対して、他方が文章の中で臨時的に造語を行う際に用いられるといった違いのある場合がある。たとえば、「炎」と「炎症」とを比べると、「結膜炎」「歯肉炎」など、前者に医学で用いられる語が多く存在するのに対して、後者の場合は「右肩炎症」「左肩炎症」など、「一炎」と名付けられる専門語ではない、臨時的な合成語が出現することがある。同じような例がいくつかあるが、「販売用土地」など、書きことばとして意味は理解できても、口に出して言いにくいようなものもある。

医（勤務医）・医者（熱血医者） 液（水溶液）・液体（油状液体） 宴（披露宴）・宴会（歓迎宴会） 筋（僧帽筋）・筋肉（皮下筋肉） 地（埋め立て地）・土地（開発用土地） 中（勉強中）・最中（シーズン最中）

これらとは逆に、一字漢語には、辞書にのっている合成語例しか確認されなかったケースとしては、

温（海水温）・温度（体感温度・臨界温度 etc.） 岸（太平洋岸）・海岸（沈降海岸・三陸海岸 etc.）

などがあげられる。ただし、辞書の見出し語として登録されている語である点、「一炎症」など二字漢語が後項の場合とは、合成語としての安定性が異なる。

4.3.3 周辺的な意味の差

語には概念的な意味のほかに、ニュアンスなど周辺的な意味が伴うとされるが、ここでは、合成語後項における一字漢語と二字漢語の違いが、そのような周辺的な意味の違いに求められるケースを見ていく。一字漢語がやや特殊な場合としては、

児（問題児）・児童（待機児童） 談（車中談）・談話（首相談話） 民（避難民）・民衆（一般民衆）。国民（日本国民）。人民（台湾人民） 連（重役連）・連中（政治家連中）

などがある。たとえば、「児」は「奇形児」「混血児」など、差別表現と見られる場合を含み、中立的な意味の「児童」と区別される。「民」は、「居留民」「開拓民」「遊牧民」など、歴史的な文脈あるいは海外の話に出てくる語や「避難民」「地元民」などがあるが、後者については、「避難者」や「地元市民」「地元住民」などの方が一般的に用いられる。「避難民」がもっぱら海外に関する記事で用いられ（戦前・戦中の日本人の描写にも若干用いられる）、「避難者」が国内記事にあらわれるのは、国内の人を記述対象とする場合に、「一者」と比べて「一民」がやや中立性に劣る語感を有していることの反映であろう。

また「談」と「談話」、「連」と「連中」においては、

外務相談話 幹事長談話 首相談話 スポークスマン談話 大臣談話
金持ち連中 金髪連中 左翼連中 側近連中 取り巻き連中 バンド連中

など、「談話」「連中」に容易に合成語の例が見つかるのに対し、「談」「連」は語例があまりない（ただし「後日談」「体験談」「経験談」など、「話」の意味の場合は除く）。たとえば「車中談」は、「聞蔵Ⅱ」（1984年～2010年）で3件、「毎日 News パック」（1987年～2010年）でも3件と、ほとんど使われていない。また、辞書の用例にある「首相談」について、「首相談話」と比較してみると、

首相談→聞蔵Ⅱ（3件）。毎日（0件）／首相談話→聞蔵Ⅱ（624件）。毎日（556件）

というように、両者の開きが明らかである。「車中談」「首相談」が使われている場合も、1960年代ごろの出来事を描写する記事などで使われており、現代の事柄についてはないという特徴も見られ、「一談」がやや古めかしい語感をもつことがうかがわれる。これらとは逆に、「学」と「学問」の場合は、「経済学」「社会学」「心理学」など、「学」が多く合成語をつくっているのに対し、「学問」は「字引学問」「本屋学問」「聞き取り学問」など、ややくだけた語感の合成語を形成しており、単独で用いられる場合は硬めの語感をもつのと対照的である。

4.4 造語機能の比較

4.4.1 結合対象の重なる一字漢語と二字漢語

以下では、結合対象の意味的性質や結合対象との意味関係といった面から考察する。その際、①結合対象が重なり一字と二字で造語機能が類似する、②結合対象が重なり共通の造語機能があるものの、用法が異なる場合もある、③結合対象が重ならず造語機能が異なるもの、にわけられる。②については、両者の違いがどこにあるのかを詳しく探る必要があるので、後述することとし、①と③を先に見る。①に相当するペアとしては、

益（評価益）・利益（評価利益） 価（予定価）・価格（予定価格） 工（防雪工）・工事（防雪工事） 公（西園寺公）・公爵（西園寺公爵） 婚（できちゃった婚）・結婚（できちゃった結婚） 誌（同人誌）・雑誌（同人雑誌） 字（再読字）・文字（再読文字） 車（冷蔵車）・貨車（冷蔵貨車） 線（X線）・光線（X光線） 葬（合同葬）・葬儀（合同葬儀） 体（白骨体）・遺体（白骨遺体） 値（検査値）・数値（検査数値） 調（詰問調）・口調（詰問口調） 電（特派員電）・電報（特派員電報） 年（13年）・年忌（13年忌） 波（電磁波）・波動（電磁波動） 番（電話番）・当番（電話当番） 比（構成比）・比率（構成比率） 帽（リバーシブル帽）・帽子（リバーシブル帽子） 免（懲戒免）・免職（懲戒免職） 麵（播州麵）・素麵（播州素麵） 列（文字列）・行列（文字行列） 録（留守録）・録音（留守番録音）。録画（留守番録画）

などがある。たとえば、「調」は「おもむき」の意味で使われている「近代調」のような場合を除き、「口調」と同じ意味に限って比較していることを断っておかなければならないが、そのように限定して見ていった場合、管見のかぎりでは以上の場合について、合成語の多寡はともかくとして、造語機能の面で明らかな差というのは見あたらなかった。

新聞などでは、文字数制限などにより、1文字でも短い方がよいという意識があるので、どちらを用いても意味に変わりがないのであれば、一字漢語が優先される。一方で、合成語の意味を明確にするという目的からは、「防雪工」でなく「防雪工事」が選択されることもある。

4.4.2 結合対象の重ならないもの

以下では、一字漢語と二字漢語の意味は類似しているにしても、何らかの理由で、同じ結合対象をとることがなく、造語機能に異なりが認められる例を見ていく。まず、下の例では、二字漢語は結合対象の末尾に「的」「系」などがついた形でないと結合しにくく、一字漢語と結合対象の品詞性に差が見られる。

苦（生活苦）・苦痛（肉体的苦痛） 権（選挙権）・権利（個人的権利） 剤（殺虫剤）・薬剤（非ピリン系薬剤） 質（神経質）・性質（物理的性質） 性（植物性）・性質（化学的性質）

これらの二字漢語においては、「肉体苦痛」「非ピリン薬剤」など、「的」「系」を省くと不自然になる。次に、以下の例においては、一字漢語と二字漢語のとの結合対象の意味的な性質や、結合対象との意味関係が異なる（丸カッコの中に語例を、山カッコの中に説明を記す）。

圧（蒸気圧〈前項は圧力の原因をあらわす〉）・圧力（政治圧力。値下げ圧力〈前項は何に関係するか、または動作をあらわす〉） 艦（駆逐艦〈前項は軍艦の種類〉）・軍艦（イラク軍艦〈前項は所属先をあらわす〉） 給（時間給〈前項は種類〉）・給与（秘書給与〈前項は受け手〉）。給料（未払い給料〈前項は状態をあらわす〉） 撃（第一撃〈前項は数をあらわす〉）・攻撃（波状攻撃〈前項は攻撃の種類〉） 語（外国語。現代語〈前項は場所や時間〉）・言語（コンピューター言語〈前項は言語の種類〉）

類)) 宗(浄土宗<前項は仏教宗派の種類)>・宗派(キリスト教宗派<前項は宗教名>) 唱(三重唱<前項は数をあらわす>)・合唱(混声合唱<前項は種類>) 錠(糖衣錠<前項は錠剤の種類>)・錠剤(ウコン錠剤<前項は原料>) 進(東北進<前項は方角>)・進行(デフレ進行<前項は事態・動作>) 速(第二速<前項は数をあらわす>)・速度(回転速度<前項は種類>) 帝(永楽帝<前項は固有名>)・皇帝(ドイツ皇帝<前項は場所など>) 典(憲法典<前項は種類>)・ハンムラビ法典<前項は固有名>) 泊(車中泊。箱根温泉泊<前項は場所>)・宿泊(長期宿泊<前項は時間をあらわす>) 秘(部外秘<前項は秘密にする相手をあらわす>)・秘密(営業秘密<前項は秘密の種類>) 面(北東面<前項は方角>)・方面(関西方面<前項は地方・地域をあらわす>) 立(株式会社立<前項は設立の主体>)・設立(工場設立<前項は設立の対象>) 流(小笠原流<前項は種類>)・流儀(外交流儀<前項は何に関するかをあらわす>) 類(第五類<前項は種類>)・種類(10種類<前項は数をあらわす>)

これらの場合、たとえば「会社立(会社が設立する)」と「会社設立(会社を設立する)」のように、同じ結合対象をとることもあるが、合成語の意味としてまったく異なるので、「修理代・修理代金」「治療法・治療方法」などのような、全体として類義のペアであるという意識は生じない。次に、以下の各語においては、結合対象が「どんな」に相当するか「何の」「どこの」に相当するか、といった違いが見られる。

行(上位行)・銀行(中央銀行) 校(名門校)・学校(美術学校) 稿(未定稿)・原稿(演説原稿) 作(話題作)・作品(芸術作品) 順(番号順)・順序(検査順序) 泉(間欠泉)・温泉(箱根温泉) 戦(消耗戦)・戦争(イラク戦争)

たとえば、「どんな作品か」という質問に対して、「話題作」「問題作」のように答えることができるのに対して、「何の作品か」という質問には、「芸術作品」「文芸作品」のように答えることができ、以上の例においては、そのことが後項としての一字漢語と二字漢語の造語機能上の区別に役立つように思われる。ただし、「商」と「商売」では、「宝石商・古物商」など「商」の前項は扱うモノ、「商売」は「対面商売・人気商売」など、どういう商売であるかを前項が示しており、先のケースと逆の関係にある。

これまでの例と異なり、以下にあげるものにおいては、結合対象の性質や意味関係は類似するものの、一字漢語と二字漢語のうち的一方と固定的な結びつきをもつ場合が少なくなく、基本的に結合対象が重ならない。

財（公共財）・財産（私有財産） 腫（骨髄腫）・腫瘍（卵巣腫瘍） 則（経験則）・
法則（自然法則） 知（暗黙知）・知識（基礎知識） 樹（街路樹）・樹木（森林樹
木） 楽（室内楽）・音楽（教会音楽） 界（自然界）・世界（可能世界） 業（自
由業）・職業（横文字職業） 溪（耶馬溪）・溪谷（秋川溪谷） 書（申告書）・書類
（応募書類） 職（事務職）・職業（カタカナ職業） 親（尊属親）・親族（扶養親
族） 式（卒業式）・儀式（入眠儀式） 審（法律審）・審理（事実審理） 診（細
胞診）・診断（受精卵診断） 道（紳士道）・道德（公衆道德） 薬（外用薬）・薬
品（化学薬品） 符（疑問符）・符号（繰り返し符号）

たとえば、「疑問符」と「繰り返し符号」において、「疑問」や「繰り返し」は、符号によって示されるものという共通点があるが、慣用的にそれぞれ「符」と「符号」とともに用いられ、「疑問符号」「繰り返し符」のような言い方はなされない。したがって、これらは、結合対象が重ならないという点においては、前述の一字漢語・二字漢語のペアと共通するものの、造語機能が類似している点では、4.4.1で見た例や以下でとりあげる、結合対象が重なる例と近い関係にある。また、通常は結合対象が重ならないものの造語機能は類似するので、たとえば「腫・腫瘍」のどちらも許容されるというような合成語が、つくられる（つくられている）可能性も否定できない。

4.4.3 結合対象が部分的に重なるケース

ここでは、結合対象が重なり合成語全体の意味がほぼ同じである場合もあるものの、部分的に用法が異なるケースを確認する。まず、先ほどと同じように、品詞性について見ていくと、以下の例では、一字漢語が動名詞（「する」のつく、動作をあらわす名詞）と結合する傾向があるのに対し、二字漢語は名詞とも結合するといった違いが見られる（「文房具」の「文房」のように例外もある）。

器（洗面器）・器具（医療器具） 機（計算機）・機械（産業機械） 具（装身具）・

道具（家財道具） 材（断熱材）・材料（耐火材料） 巢（転移巢）・病巢（乾せん病巢） 堤（防潮堤）・堤防（コンクリート堤防） 点（決勝点）・得点（大量得点） 農（自作農）・農家（中核農家）

上では、動作性のない名詞と二字漢語が結合した例をあげているが、たとえば「計算機械」「断熱材料」など、動名詞との結合例もある。これらとは逆に、「期・時期」においては、「時期」が「改選時期」など、動名詞との結合が一般的であるのに対し、「期」は、動名詞（「成長期」など）のほか、名詞（「青年期」など）とも結合例が見られる。

[結合対象の意味的性質]

軍（自国軍。イラク軍）・軍隊（自国軍隊） 策（救援策。継投策）・対策（救援対策。暴力団対策） 産（現地産。中国産）・生産（現地生産。オフショア生産） 社（旅行社。出版社。ダイヤモンド社〈固有名〉）・会社（旅行会社。印刷会社） 症（不眠症。不妊症）・症状（不眠症状。自覚症状） 政（共和政）・政治（共和政治。官僚政治） 僧（若手僧。虚無僧）・僧侶（若手僧侶） 犯（確信犯。放火犯）・犯罪（確信犯罪。カード犯罪） 評（文芸評。小泉改革評）・批評（文芸批評） 便（航空便）・郵便（航空郵便。バイク郵便） 部（操作部。平野部）・部分（操作部分。特約部分） 編（山田編）・編集（山田編集。雑誌編集） 簿（補助簿。出席簿）・帳簿（補助帳簿。電子帳簿） 訳（服部訳）・翻訳（服部翻訳。戯曲翻訳） 浴（全身浴。森林浴）・入浴（全身入浴。訪問入浴） 来（先月来。数日来）・以来（先月以来。卒業以来） 路（アクセス路。助走路）・道路（アクセス道路。高速道路）

結合対象が重なる例においては、両者は似た使い方をされているが、ほかの例では、一字漢語と二字漢語において、結合対象の範囲に違いがある。「部・部分」と「策・対策」を例にとり、やや詳しく見る。まず「部・部分」について、次の場合は両方とも可能である。

物体の一部→操作部・操作部分 溶接部・溶接部分 切除部・切除部分
空間的な場所→低層部・低層部分 共用部・共用部分 橋りょう部・橋りょう部分

身体部分については、「大たい部」など「部」が慣用的に用いられるが、「大たい部分」が使用されることもある。「平野部・沿岸部」など、地域をあらわす場合は「部」のみであるのに対し、

特約部分 主契約部分 元金部分 利息部分 上乗せ部分 執筆部分 修正部分

など、やや抽象的な「部分」の場合には、「部」でなく「部分」が用いられるというような違いが両者には見られる。

「策・対策」について、結合対象の範囲がやや広いのは「対策」で、「暴力団対策・ウイルス対策」など、前項に人間にとって好ましくないものがくる用法があり、さらにマイナス評価とまでいかなくとも、「議会对策・税金対策・小論文対策」など、対処が必要な事柄が前にくることもある。これらは、「ウイルスに対する策」「議会に対する策」をあらわしており、「対」なしの「一策」では意味をなさない。「策・対策」が大差なく用いられうるのは、前項が「救援・再建・復興」など動名詞であり、「救援対策・再建対策・復興対策」など「一対策」が「一するための対策」という意味で解釈される場合に限られる。「継投策・優遇策」の「継投」「優遇」などは「継投するための対策」「優遇するための対策」という解釈が想定しにくいので、「対策」と結合することはない。また「移民策」と「移民対策」では、前者が「移民させる策」で後者が「移民に対処する策」というように、結合対象が同じでも合成語全体の意味は異なる。

以上のように、一字・二字どちらを用いても、合成語が同様の意味をあらわす場合と部分的に重ならない場合とがある一字漢語・二字漢語のペアについては、語彙教育などでは注意が必要である。

[結合する動名詞の性質]

以下のペアにおいては、一字と二字とで結合対象が同じであり、合成語の意味も似る。

令・(禁止令)・命令(禁止命令) 難(経営難)・困難(経営困難) 法(治療法)・方法(治療方法)

しかし、たとえば「難」は「運営難（に陥った会社）」「歩行難（の方）」など持続的な状態をあらわす場合が主であるのに対し、

侵入困難（な家） 脱出困難な（刑務所） 説明困難 摘発困難

など、「困難」は、一回性の行為に関しても用いられる。同様に、「応募方法」「申し込み方法」など、「法」と異なり「方法」は簡易な手順の行為もあらわす。「逮捕命令」「支払い命令」の「命令」も同様に、一回性の行為に用いることができ、「逮捕令」「支払い令」のような言い方はしない。「一令」は「戒厳令」「施行令」などの語を形成している。このような差が生じる要因としては、影山（1993, p. 8）のいう「名付け機能」が考えられる。「春に吹く風」が春に吹く風であれば、どのような風でもよいのに対して、「春風」は「特定の性質を持った風に対する呼び名」であるとされる。「一法」や「一令」など、一字漢語が後項となる場合にもこのような性質があり、どんな方法や命令でもよいわけではないのに対して、野村（1974）で指摘されるように、四字漢語は句に近い性質をもっているため、「一方法」や「一命令」は特定の意味的な制限なく用いられ、両者の形成する合成語の範囲にずれが生じるのであろう。

[修飾用法・言い切り]

「用」と「用途」を比較すると、前者は「業務用エアコン」のように、うしろにくる要素を修飾する用法をもつが、後者は「ビジネス用途として最適」のように用いられ、修飾用法をもたない。同様の例には、

制（時間制利用）・制度 領（スペイン領カナリア諸島）・領土。領地

などがある。「デトロイト美術館所蔵作品」のように、「蔵」と「所蔵」の場合は、二字漢語の方が修飾用法の例が多い。一方、言い切りに関しては、「蔵」「所蔵」ともに用いられる。「刊・刊行」「完・完備」では、「2010年刊。」「2010年刊行。」または「冷暖房完・冷暖房完備」ともにあらわれるが、「2010年刊行の一」「冷暖房完備の一」のように、後に続く形は「刊行」「完備」に限られる。「制・制度」においては、「バスは予約制（です）」のような言い切りや、

○食事は一日二回配給制，朝晩6時だからそれまで自由にしていいよ。

(花沢健吾(2011)『アイアムアヒーロー』6。小学館)

のような中止用法では「制」が出現する。なお「制・制度」に関しては、「会員制・会員制度」「徴兵制・徴兵制度」など、どちらも可能な場合があるが、

○天下り法人をなくすには、公務員終身制など天下り不要の人事制度に改変する必要がある。(産経新聞。2012.1.26)

など、「一制」が下位概念、「一制度」が上位概念をあらわすという違いが見られる場合も少なくない。類例としては、

政治制度→議院内閣制 連邦制 二院制 大統領制 共和制／人事制度→終身雇用制 任期制 公募制／料金制度→定額制 従量制／賃金制度→時給制 月給制

などがあげられる。資料中、上位・下位の関係で特徴づけられる一字漢語と二字漢語は、ほかにはない。類義の一字と二字の漢語を対象としているので、概念レベルの異なるペアがないのは当然ともいえるが、その点で「制・制度」の使い分けは例外的である。

以上、一字漢語と二字漢語とで造語機能が類似し、結合対象が重なることがあるものの、部分的には一方に独自の用法が見られるケースについて、複数のペアに共通して見られる特徴を中心的に概観した。修飾用法などに一字漢語が使われるのは、形態的に二字よりも短いということが要因となっているようにも思われるが、「2008年刊書籍」よりも「2008年刊行書籍」の方があらわれやすいというように、常に当てはまるわけでもないので慎重に観察する必要がある。ほかのケースにおいても、あるいは一字漢語と二字漢語の何らかの特性の違いによって、上述のような用法差が生じている可能性も否定できないので、個々のペアについての詳細な調査を今後行うこととする。

4.5 一字漢語と二字漢語の関係の諸相

ここでは、いくつかの生産性の高い一字漢語およびその類義二字漢語をとりあげ、類

義語、対義語、多義語の観点から、やや詳細な造語機能の分析を行う。一つ一つの一字漢語と二字漢語のペアを単独ではなく、複数まとめて検討することで、それぞれの関係性を明らかにするためである。

4.5.1 類義語グループにおける比較

一字漢語と二字漢語が、それぞれほかの一字漢語や二字漢語と類義関係にあり、複数の類義の一字漢語・二字漢語のグループが形成されている場合がある。たとえば、一字漢語の「剤」「薬」と二字漢語の「薬剤」「薬品」であるとか、文書の類をあらわす「記」「書」「報」と「記録」「書類」「報告」などである。以下では、具体的に「代・代金」「費・費用」「料・料金」をとりあげ、それぞれの特徴を探る。一字漢語の「代・賃・費・料」については、野村(1975a)、木村(1986)に分析がある。これらを参考に、二字漢語も含めて検討するが、生産性が低いこと、「賃金」とほかの語の意味がややずれることから、「賃・賃金」には先に簡単にふれて、それ以外の6種を詳しく扱う。野村(1975a)、木村(1986)ともに指摘するとおり、「手間賃」などに使われる「賃」には、古めかしい語感があるのに対し、「賃金」は「生涯賃金・実質賃金」など、特別な語感を伴わずに用いられるため、このペアは4.3の周辺的な意味に差のあるペアとして扱うことが可能である。

さて、6種について「料・料金」から見ると、「料」は「通話料・入場料」など動名詞と結合しやすい。「基本料」は「基本料金」の略だろうと木村(1986, p. 99)にあるが、「料金」は動名詞と結合するほか、さまざまな修飾要素がつく点、「料」と異なる。

動名詞：利用料金 観覧料金 配送料金 派遣料金 参加料金 発送料金

種類：特別料金 正規料金 標準料金 暫定料金 市立料金／時間：週末料金 深夜料金／主体：子ども料金 大人料金 一名料金 ビジター料金

名詞と結合する場合について、「料」は「水道料・電話料」など、場所・設備の特徴をもつものに限られ、「ガス料」「電気料」は「ガス・電気」が設備でないため使えないとの指摘が木村(1986, p. 99)にある。一方、「料金」は「ガス料金」「電気料金」が可能であるほか、

端末料金 タクシー料金 プロバイダー料金 駐車場料金 新聞料金

などがあげられる。「料」が動名詞と結合しやすく、一般の名詞とはしにくいという条件を「料金」が補う形になっている。そうすると、「代」が名詞と結合しやすいため、その差が問題になる。「代」は「水道代・ガス代・電気代」のほか、

端末代 タクシー代 プロバイダー代 駐車場代 新聞代

などがある。「代」と「料金」は、「料金」の語感がかたく、「タクシー」や「ガス」などのサービスを提供する側が設定するお金という感じが強いのに対し、「代」は「物とひきかえにしはらうかね」（野村 1975, p. 91）とあるように、払う側から見たお金という感じが強い点で区別される。

「代」については、前述のとおり、名詞と結合したものが多い。「料」と同様、形容詞的な働きをするものにはつきにくく、「最終代金・正規代金・追加代金・オプション代金・片道代金」など、「代金」がその点を補っている。名詞との結合では、

チケット代金 機種代金 商品代金 料理代金 原油代金 土地代金 昼食代金

などがある。新聞では、「原油代」より「原油代金」の用例が多い。「代」は話しことば的という特徴があるが、「代金」にはそれが見られないようである。動名詞と結合する場合、「代」が「修理代・散髪代・理髪代」など、比較的、小規模な作業に対する報酬であるのに対して、「代金」では、

修理代金 印刷代金 空輸代金 下請け代金 工事代金

における「空輸」や「工事」など、やや規模の大きい作業の場合にも用いられる。さらに、木村（1986, p. 101）にも指摘があるように、「代」は自分がする行為に対して払うお金の意味では、「宿泊代」「食事代」など、語例がわずかなのに対して、「代金」では「宿泊代金」「食事代金」のほか、

購入代金 落札代金 利用代金 買い物代金 仕入れ代金

などがある。「チケットを購入するためのお金」という内容に対して、「チケット」「お金」を利用したのが「チケット代金」，「購入する」「お金」を利用したのが「購入代金」というように解釈できるが，後者のような合成語は「代」には見られない。「買う」行為に対して，「売る」行為をあらわす動名詞が前にくるのも「代金」の特徴で，

販売代金 輸出代金 売却代金 譲渡代金 換価代金

などがある。商品や資産などを顧客や銀行に売り，その代わりに相手から払われるお金ということだが，このような用法も，「代」には見あたらず，両者の違いとなっている。

最後に「費・費用」であるが，「費」は「建設費・渡航費」（動名詞），「原料費・住宅費」（名詞）など，どちらにも語例が多い。また，「料・料金」は「他者からうける利益とひきかえにしはらわなければならないかね」（野村 1975, p. 91）であるのに対し，「費」は「ある目的のためにかかる（＝必要な）かね」（野村 1975, p. 91）という点で違いがあるともされる。「費用」は「建設費用・渡航費用」のほか，「購入費用・撤去費用」など，動名詞と結合した例は多いが，「原料費用」など名詞との結合形はあまり見あたらない。「費」は，木村（1986, p. 102）で，①漢語以外の語種となじまないこと，②「臨時費・予備費」など，相言類系統の要素とも結合すること，などが指摘されている。この点，「料」「代」は語種制限はないものの，相言類系統の要素と結合しにくいので対照的である。「費用」は「追加費用・初期費用・機会費用」など，種類や時間などを限定する要素がつきうる。語種の面でも，

引っ越し費用 建て替え費用／リフォーム費用 インプラント費用／ホームページ制作費用

など，和語・外来語・混種語とも結合し，「費」が漢語以外と結合しにくい点をカバーしている。

以上に見てきた 3 ケースについて，結合対象の意味的な特徴をまとめた形で示すと，以下のようなになる。

表1 「料・料金」「代・代金」「費・費用」の結合対象

	料	料金	代	代金	費	費用
モノをあらわす要素	△	○	○	○	○	△
動作をあらわす要素	○	○	△	○	○	○
時間などを限定する要素	×	○	×	○	△	○

自立して用いられることがなく接辞的な性格が強い一字漢語は、先にも語例を列挙したが、たとえば「配達料」「新聞代」など、結合対象の品詞的な性質が固定的である場合、ほかの品詞性のものとの拡張的結合は生じにくいようである。そのため、「タクシー料」「利用代」などに違和感が生じる。一方、二字漢語は自立して用いられるため、「タクシーの料金」「利用するための代金」などの連語と同様の意味をあらわすために、概念的な部分を利用して「タクシー料金」「利用代金」などの合成語をつくることが可能である。その際、品詞的な面は特に制限としては働いていない。そうすると、「費用」が名詞と結合した例が少ない点について説明が必要だが、「弁護士費用」「皇室費用」など、「費用」が一般的に用いられる名詞との結合例もあること、「費」が名詞と問題なく結合し品詞的な制限がないので、わざわざ「費用」を使用する必要がないこと、などが理由としてあげられる。動名詞と「費」が結合するので、「費用」も動名詞と結合するのは、余剰的ではないかという問題もあるが、動名詞と結合する「料・料金」、名詞と結合する「代・代金」と同様、2とおりの表現があるのは、特段排除される事柄ではないものと考えられる。「費・費用」が名詞と結合する場合と動名詞と結合する場合とで数的にアンバランスな点は、明確な答えが出せないので課題としておきたい。

品詞的な制限について語の運用面から考えると、「料」や「代」の結合対象に品詞的な制限があるとはいっても、現実の社会においては、「タクシー会社が設定する料金」や「人がサービスなどを利用するのに要したお金」という事柄は存在するため、短い形でそれを言いあらわす表現が求められる。それゆえ、似た意味の二字漢語「料金」「代金」でそれをまかなう、という結果につながるととらえることができる。合成語の形成には、以上のように意味的・品詞的な要因がからんでおり、短いという効率の面からのみ、類義の一字漢語と二字漢語が論じうるわけではないことの証左として、ここで見た形態素は位置づけられる。

4.5.2 対義関係

たとえば、「増・増加」が類義の一字漢語・二字漢語の組み合わせであるように、「減・減少」も同様の関係にあるが、これらは、四つあわせて対義関係のグループとして扱うことも可能である。それぞれ、用法が共通する部分と異なる部分を詳細に記述する必要があるが、ほかには「着（名古屋着）・到着（名古屋到着）」に対する「発（東京発）・出発（東京出発）」などがある。四つともに後項となる例はあまりないが、たとえば「権・権利」に対する「義務」の場合、一字漢語には似た意味のものがなく、**「就学義務・注意義務」**のように、二字漢語に合成語が存在するため、単独では**「義務・権利」**で対義語ペアとするのが一般的であっても、合成語の要素としては**「義務」と「権」**が比較すべきペアであるというようなケースもある。ここでは、合成語の要素としての対義ペアのケーススタディーとして、「内・内部」と「外・外部」をとりあげ、それぞれの造語機能の記述を試みる。

まず、「内」と「内部」は「工場内・工場内部」「政権内・政権内部」など、建物や組織の中という意味では、似たような意味の語をつくるが、「区域内・時間内・想定内」など、やや抽象的な意味の場合は、「内部」は使えなくなる。そして、このような「内」とは「外」が対義関係となり、「区域外・時間外・想定外」のようなペアをつくっている。しかし、「外」は二字漢語では「港外・車外」など、具体的な場所を示す要素が前項になるものの、三字漢語では「工場外・銀行外」などの形に安定性が落ちる。このことを20数種の国語辞典で確かめると、①国語辞典において、「内」の用例に「工場内・ディスク内・キャンパス内」など、具体的な場所・モノが使われていても、「外」の用例には「予想外・時間外」などしかあがらないこと、②「内」が「場所・建築物・時間など範囲をあらわす語の下に付いて」（『小学館日本語新辞典』）と記述されるのに対し、「外」が同辞典で「名詞の下に付いて」とのみ記され、例として「予想外・時間外」があがっていること、③「内」が「なか。内部」（『三国』）と「内部」が使用されるのに対し、「外」は「外部」を用いず「そと。ほか」のように記述されるといった点が確認され、規範的には「外」は「内」と異なり、具体的な建物やモノの外側を示す場合には使いにくいと見なされていることがうかがわれる。しかし、実際の用例を見ていくと、「一内」の語の多さには及ばないものの、

○車両は、道路外に出るため左折するときは、……（道路交通法第 25 条）

○ピッチ内でも、ピッチ外でも非常にいい動きをしてくれて。

（TBS テレビ。2012. 8. 16）

のような例や「店舗外・改札外・建物外」などの例が散見される。したがって、以下では、どのような場合に「外」が後項として使われるのかを検討する。なお「外部」には、異なりとしては「暗室外部・市役所外部・タンク外部」などが散見されるが、何度も用いられる安定性のある語には乏しい。

まず、場所をあらわす名詞と結合した「外」と「内」の用例を量的な面から確認するため、「聞蔵Ⅱ」の 1985 年から 2010 年までの記事から抽出した語例を表 2 に示す。

表 2 場所をあらわす名詞と結合した「内」と「外」の用例比較

「—内」の用例のみ	住居内(147)・住居外。電車内(3,572)・電車外。庭園内(430)・庭園外。ガレージ内(103)・ガレージ外
「—内」が「—外」の10倍以上	スタジオ内(213)・スタジオ外(4)。車庫内(550)・車庫外(1)。浴室内(237)・浴室外(2)。車両内(450)・車両外(5)。列車内(1,576)・列車外(4)。ビル内(7,334)・ビル外(20)。団地内(3,152)・団地外(49)。公園内(16,827)・公園外(18)。駐車場内(914)・駐車場外(6)。空港内(2,942)・空港外(85)。原子炉内(880)・原子炉外(4)。踏切内(2,316)・踏切外(39)。住宅内(731)・住宅外(11)。建物内(2,650)・建物外(193)。アパート内(207)・アパート外(5)。マンション内(627)・マンション外(6)。校舎内(1,726)・校舎外(66)。病院内(5,644)・病院外(194)。施設内(6,877)・施設外(415)。工場内(6,407)・工場外(203)。銀行内(502)・銀行外(11)。線路内(2,163)・線路外(85)。教室内(1,334)・教室外(64)。病棟内(231)・病棟外(13)。水路内(156)・水路外(4)。通路内(54)・通路外(2)。オフィス内(137)・オフィス外(5)。スタジアム内(335)・スタジアム外(22)。ドーム内(720)・ドーム外(5)
「—内」が「—外」の4~10倍	店舗内(1,047)・店舗外(182)。フィールド内(97)・フィールド外(14)。球場内(97)・球場外(14)。路線内(48)・路線外(10)。歩道内(30)・歩道外(3)。堤防内(238)・堤防外(64)。改札内(235)・改札外(50)。学校内(3,252)・学校外(818)
「—内」が「—外」の2, 3倍以内	自宅内(563)・自宅外(290)。コート内(211)・コート外(84)。ゲレンデ内(43)・ゲレンデ外(22)。グラウンド内(406)・グラウンド外(156)
「—内」より「—外」が多い	土俵内(63)・土俵外(242)。道路内(73)・道路外(142)

「内」は一般的であるものの「外」が使われにくいケースが多いことは、表からも見てとれる。ただし、「—外」の用例が「—内」より多い場合や「—内」と「—外」との差が小さい場合もあることが注目される。「土俵外」は「土俵外に出すことによって」（『明鏡』の「相撲」の語釈）のような形で、いくつかの国語辞典において使用されている。つまり、「内」のように、規則的に場所やモノをあらわす名詞と結合するわけではないものの、「—外」が珍しくない個々のケースも存在することが確認される。

では、質的な面から考えると、どのような特徴があるのだろうか。「—外」の語が使

用されている文脈を検討していくと、①人やモノの、中から外への移動が焦点となる、②中でなく外での活動が焦点となる、といった場合に「一外」があらわれやすいことが観察される。①は、たとえば「〇〇富士が土俵外に押し出される」「車が車道外に出る」「ボールがコート外に出た」など、人やモノがある場所の中からその外へ移動するケースを意味し、無意志的な動きであるのが普通である。②は「堤防内での農業」「堤防外での漁業」のように、「一内」における活動に対して、「一外」での活動が問題となるようなケースをさしている。上の「ピッチ外」の例や「グラウンド外のつきあいも深い」「海外のライバルともコート外では友として遊び」など、「一内」が本業での活動の場、「一外」がプライベートな場をさす場合もある。なお、「団地内の人間と団地外の人間」「文壇外の作家」のように、活動でなく人などが内外の対比という観点から出現することもある。このような例と②の場合の共通点は、対比を目的として、1文中に「一内」と「一外」が双方出現しうることであり、一方①の場合は、通常「一内」の語は出現せず、「一外」のみがとりあげられるというように、表現上の違いがある。

「電車内」や「庭園内」に対して、「電車外」「公園外」が出現しにくい点に関しては、①広がりをもった空間が認識される、②その空間の中で行うことが問題となって「電車内でのマナー」「庭園内は禁煙です」などの言い方がなされる、③その空間の外での活動は基本的に関心の対象にはならない、④「電車」「公園」の外には道路、ほかの施設、家などがあり、もし話題にする場合はそれらを示す語を使うので、「一外」という言い方をする必要がない、といった認識が「一内・一外」の形成・使用に関与しているためだと考えられる。ただし、前述したように、本来は中にあるものが、その外に移動する場合や、内部との対比が問題となるような場合には、「一外」の表現が必要になり、ある程度の数の用例が出現する結果となる。その一方で、「内」は「{庭園に・庭園内に} たぬきが住み着いた」など、「内」抜きでも同様の内容をあらわすことが可能なこともあるが、「庭園内のレストラン」に対する「?庭園のレストラン」のように、「内」がある方が安定する場合や、「車両」や「改札」など、「内」がないと空間の内部であることが明確にならない語もあるため、意味を明示化する点からも「一内」が積極的に使用される。

ここまで見た合成語に対して、「想定外・予想外・意想外・時間外・区域外」など、辞書に記載のある「一外」の用法および合成語例については、「電車」や「公園」など具体的な場所を示す名詞と異なり、外にあるものを示す語がない。つまり、「公園の外」

は「道路」「ビル」など、その場所を示す語で言いあらわすことが可能であるが、「想定の外」に対応する単語はない。また、「(ある)区域の外」は「(ほかの)区域」であって、「区域」と同レベルの別語がない(「区域外に通学する」は「他区域に通学する」でも言いあらわしうる)。それゆえ、ある範囲の「想定」や「区域」があり、そこから外れる事態を描写する必要がある場合には「一外」が適しているということになる。したがって、これらの場合は、「一内」のみが一方的に使用されるのではなく、「一内・一外」が対等に近い関係にある。さらに、「意想外」のように「一外」のみが語として成立している場合もある。

以上をまとめると、①「内・内部」「外・外部」のうち、「外部」以外は後項として安定した用法がある、②「内」は広く用いられ、その用法の一部と「内部」が重なる、③「外」は「時間内・時間外」など辞書にも記載される、「内」の対義語としての用法がある一方で、規則的ではないが場所や組織をあらわす名詞などと結合するケースも生じている、ということになる。対義語の研究では、自立用法における意味・用法が問われることが多いが、合成語の要素としての用法の対応・非対応についても同様の検証が必要であり、その一端をここでは提示した。

4.5.3 多義について

本節で扱っている一字漢語には、たとえば「器」(器具・器械・器官)や「分」(身分・成分・部分・分量)など、複数の類義二字漢語が存在する場合がある。また、「問題」は、「過去問題・試験問題」などの意味では「過去問」の「問」と類義であるが、「環境問題」など、検討課題の意味は「問」にはない。この点、「帽・帽子」や「葬・葬儀」など、意味的に単純な対応を示すケースと比べて、注意深く検討する必要があるが、ここでは、「発」と「出発」「発信」を例に、それぞれの造語機能について比較を行う。

まず、「出発」「発信」が後項として用いられる場合は、

早朝出発 間際出発(前項は時間をあらわす) 東京出発(前項は起点をあらわす)
自動発信(前項は様態をあらわす) 流行発信 情報発信(前項は対象をあらわす)

などの合成語を形成する。「早朝」「自動」など、時間や様態を限定する要素は、「発」

とは結合せず、「出発」「発信」独自の用法である。また「情報発信」の「情報」など、フ格相当の要素は「発」の前項とならず、「発信」の意味では「ロンドン発」のように、電報・電信などの起点を前項があらわす。これらの用法に加えて、「発」は「官邸発・産地発・地元発・現場発・ネット発」、あるいは

○女優って自分発の仕事じゃないですか。（NHK ラジオ第1。2011.12.12）

のように、情報などを組織や人が外に出すという意味でも使用される。「発信」の項目で、このような意味を記す辞書を確認すると（以下では、電報などを送る場合を「発信①」とし、情報などを送る場合を「発信②」として区別する）、

岩波：通知や報告や消息などの情報（＝信）を送り出すこと。「一者不明の怪情報」

「インターネットは市民個人にも世界への一を可能にした」（第6版（2000年発行）から。第5版では、「電報や郵便を出すこと」のみ）

新選：情報を送ること。（第7版（1994年発行）から）

三国：情報などを送り出すこと。「流行一の地」（第6版（2008年発行）から）

となり、「発信」に情報などを送る意味が生じたのは比較的新しいことであると推察される。さらに、「発」は「ギリシャ発のユーロ危機」「イラン発・石油ショック」のように、どこかで危うい状況が起きたことをあらわす場合があり、「出発」「発信」には置きかえられない。この場合の意味を「発生」とよんでおく。二字漢語の「発生」が後項となる場合は、

事件発生 事故発生 ダイオキシン発生 津波発生 異常発生 同時発生

など、ガ格相当の要素や修飾要素が前項となり、起点をあらわすことはないので、「発」と造語機能が重ならない。

以上に見てきた「発」の用法および「5日発」「6発の弾丸」など、助数詞的な用法もあわせて、「聞蔵Ⅱ」を使って用例調査した結果を以下に示す（「発」単独だと検索結果が膨大で用法確認が困難なため、便宜的に、「発の」形で検索した）。

表3 「一発」の用法ごとの用例数（丸カッコ内は百分比）

	出発	発信①	発信②	発生	日時	数	計
1985	176(63.8)	20(7.2)	0(0)	0(0)	18(6.5)	62(22.5)	276(100)
1986	159(58.9)	20(7.4)	1(0.4)	0(0)	30(11.1)	60(22.2)	270(100)
1987	149(51.4)	21(7.2)	3(1)	1(0.3)	20(6.9)	96(33.1)	290(100)
1988	239(51.5)	29(6.3)	12(2.6)	0(0)	47(10.1)	137(29.5)	464(100)
1989	222(44.9)	24(4.9)	15(3)	1(0.2)	91(18.4)	141(28.5)	494(100)
1990	288(48.1)	39(6.5)	16(2.7)	2(0.3)	77(12.9)	177(29.5)	599(100)
1995	181(32.3)	47(8.4)	50(8.9)	4(0.7)	47(8.4)	232(41.4)	561(100)
2000	252(27.5)	30(3.3)	127(13.9)	41(4.5)	112(12.2)	353(38.6)	915(100)
2005	288(29.4)	15(1.5)	282(28.7)	2(0.2)	126(12.8)	268(27.3)	981(100)
2010	186(23.8)	11(1.4)	105(13.4)	47(6)	133(17)	301(38.4)	783(100)

表中「日時」は「1時発」などで、「出発」の場合と「発信①」の場合を含む。数を含む語が前にくるという理由から、「出発」「発信①」とは別個に採集した。「発生」の意味では、「4月10日発生の地震」のように、二字漢語「発生」が用いられ、「発」にこの用法はない。「数」は「6発の銃弾」など。「一発」の語全体を対象としていないので、注意が必要だが、おおまかな傾向としては、「発信②」「発生」の意味での「一発」の使用が徐々に広まっていく様子が見られる。なお、「発生」の意味の用例は、経済情勢のよくない年に出現しやすいという傾向がある。

場所以外の個人が前項としてあらわれるのは「発信②」のみであり、ほかの用法と比べて異質である。「発信②」の用例を見ていくと、早い時期に見られるのは、「地方発」（1990年）や「東京発」など、場所をあらわす名詞が前項となる例ばかりで、人が前にくるケースは、1988年に「私」発の福祉（スローガン）が孤例として見られるものの、一般的な使用としては、2000年の「自分発の」が資料内では早い例である。さらに古い例の収集も必要だが、現代語における多義の解釈としては、①「一発」は、移動の起点が前項となるのが基本的な用法であるが、通信手段の発達により、電報などの起点もあらず、②さらに、情報などの起点としての都市や地域をも示すようになる一方で、よくない事態の発生元もあらずようになっている、③「出発」「発信①」「発生」の意味では、場所以外の名詞は想定しにくく（ここでは「日時・数」はおく）、たとえば「〇〇大統領発の経済危機」などの言い方は、少なくとも現段階ではなされない、④「発信②」の場合、情報の起点として、基本的な用法にそう形で、場所をあらわす名詞が前項になるのが自然だと考えられるが、情報の性質上、組織や個人が源となりうる可能性

があり、それゆえこの用法においてのみ、前項の意味的な性質に多様性がある、⑤動きの源を意味する点が「一発」の各用法に共通する、といった把握が可能かと思われる。

「発」と「出発」「発信」「発生」の造語機能をまとめると、「発・発信」「発・発生」では、一字漢語と二字漢語がそれぞれ別種の合成語をつくるのに用いられており役割分担が見られる。「発信②」や「発生」の意味の「発」は「官邸発の情報」「欧州発の信用不安」のように（「聞蔵Ⅱ」で2010年の1か月分の用例を「発」のみの形で検索・整理した結果を基に述べる）、後にくる事柄を修飾する用法で用いられることが多く、動作的な意味があっても「する」をつけることはできない。これは、「国内産」「大学卒」の「産」や「卒」などが動作的な意味をあらわしながらも「する」がつかないのと同様である（「現地生産する」のように「一産」と類義関係にある「一生産」なら「する」がつく）。接尾辞的な一字漢語のうち、合成語全体をサ変動詞化する働きは「化」「視」にしかない。それゆえ、「情報発信する」の「発信」を「発」に置きかえることはできない。また、「する」はつきにくいものの、「発生」は「駅前で事件発生」「事故発生後」など述語として用いられることがあるが、これも「発」にすることはできない。つまり、「発」と「発信②」「発生」における用法差は、「発」に関する制限が要因となっており、偶然生じているわけではない。対照的に、「ロンドン発の電報」「15日発」など「発信①」の意味では「発」で間に合うため、「一発信」はあまり出現しない。

「発・出発」では「東京発・東京出発」など、似た機能を両者がもつ。意味に違いはないが、運用面に関しては、

○10時31分、公邸発。40分、皇居着。（産経新聞。2012.1.3）

のように、文字数制限のある新聞などでは短い語形が好まれ、また「公邸出発」「皇居到着」よりも、きびきびした感じがあるといった差が見られる。「発」は「出発」「発信」「発生」を含みうる広い意味をもつものの、造語機能には一定の制限があり、そこに二字漢語が入る余地があるが、この点は4.5.1の類義語グループの場合とも共通する現象である。

4.6 おわりに

以上、接尾辞的に働く一字漢語とその類義の二字漢語について、造語機能の比較を行ってきた。ワカバヤシ（1936）では、漢字制限の立場から一字漢語・二字漢語それぞれの利点・難点が説かれていたが、本節では実際の用例にもとづき、それぞれの一字漢語・二字漢語がどのような特徴をもつのか、記述的な観点から分析を施した。4.3と4.4では、多くの一字漢語・二字漢語ペアを対象として、複数のペアに共通して見られる造語機能上、意味・用法上の特徴を考えた。4.5では、いくつかのペアをとりあげ、類義・対義・多義の観点から、複数の一字漢語・二字漢語をグループとしてまとめて分析する必要性を説いた。意味が類似するなら、発音の便宜や文字数の制限から、短い語形つまり一字漢語が常に選択されてもおかしくはないが、実際には、一字漢語は結合対象に品詞的・意味的に制限が見られ、二字漢語による補填が生じている場合があったり、結合対象の意味的な性質や結合対象との関係が異なったりすることがあり、二字漢語にも後項としての役割が存在することが明らかになった。

4.5でとりあげたもののほかにも、生産性の高い一字漢語・二字漢語があるので、その分析も要る。本節では、国語辞典を類義のペアをとりだす手がかりとして使用したが、ほかの方法によっても要検討の類義ペアを抽出する必要がある。また、「季節」には後項としての用法がないのに対して、「季」には「行楽季」があるが、「行楽シーズン」の方が一般的であるというように、外来語で後項として機能し、漢語と対立関係にあるものも調査しなければならない。

5. 国語辞典と四字漢語—辞書にのる語とのらない語—

5.1 はじめに

国語辞典にのる漢語の語彙を眺めた場合、「芸」「社」などの一字漢語や「運転」「会社」などの二字漢語は、辞書の見出し語として一般的なものであり、普段よく使われるものについては、その多くを辞書中に見いだすことができる。これに対して、「反対方向」「有名女優」などの四字漢語の場合、日常的に使われることはあっても辞書にはのっていない、という語が少なくない。なぜなら、辞書のスペースに余裕がないという物理的な理由が大きいのだが、そこには「これらの意味が説明するまでもないから」（島村ほか（2004, p. 53））という言葉的な理由も存在する。「反対方向」「有名女優」は、それぞれ「反対」「方向」、「有名」「女優」の個々の意味を理解していれば、全体の意味を理解するのは、日本語を母語とする人であれば、それほどむずかしくないと、ひとまずいえる。しかし、ある四字漢語が一般に用いられる形であるかどうかは、日本人でも迷う部分であるため、「これこれの形がありうる、ということを示す」（島村ほか（2004, p. 53））というように、用例として四字漢語の形を示すのは、有用な方法である⁷²。一方、「四面楚歌」「呉越同舟」のような故事成語の類や、「運動中枢」「基礎体温」などやや専門的な語で、一般にも使われうるもの、あるいは「携帯電話」「専業主婦」など日常的によく使われ、単なる二字漢語の組み合わせ以上の意味・ニュアンスを伴うようなものについては、四字漢語を見出し語としてたてる必要がでてくる。たとえば、『学研現代新国語辞典 改訂第5版』は、約75,600語を収録すると凡例で説明するが、筆者の調査では、「神出鬼没」のように四字漢語全体で見出し語のものと、「貿易摩擦」のように二字漢語（ここでは「貿易」）の子見出しとして示される四字漢語とをあわせて、計1,702語（全体の約2%）が確認できている。

四字漢語と国語辞典について、以上のことを前提とした上で、本稿では、辞書にのる四字漢語とのらない四字漢語の性質について、国語辞典、新語辞典、文芸雑誌の三つの資料にあらわれた四字漢語を用いて、その要因を考えることにする。新語辞典については、『現代用語の基礎知識 2013』の索引を用いて、1,086（異なり語数）の四字漢語を抜き出した。新語辞典は、辞書の形式をもつと同時に、時事的な用語も多く含むものであり、国語辞典と雑誌との中間的な性格をもつ用例資料と考えて利用したものである。雑誌は、2013年発行の文芸雑誌『新潮』（110-8, 新潮社）、『文学界』（67-8, 文藝春秋）、『文藝』（52-3, 河出書房新

⁷² 引用元の文章は、宮島達夫氏により1959年に書かれた「調査単位の条件」によるものだが、この文章ののった書籍・雑誌の確認がとれなかったため、上記のような提示のしかたをとったことを断っておく。

社), 『ドラマ』(35-8, 映人社), 『SF マガジン』(54-8, 早川書房), 『群像』(68-8, 講談社)を用いて, 2,328(異なり語数)の四字漢語を抽出した。辞書類に加えて, 雑誌を用いるのは, 先述のように, 四字漢語は国語辞典にのっていない場合が多く, その実態をとらえるには, 日本語で書かれた実際の資料にあたって, 多くの用例を抽出する必要があるためである。

5.2 語の構造的な面からの観察

5.2.1 四字漢語の語構造

ここでは, 四字漢語の構造的な側面について, 3種の資料を比較する。まず, 四字漢語の構造は, 野村(1987)を参考にして考えると,

- A型 □□+□□: 緊急-事態 予備-知識 民間-企業
- B型 (□□+□)+□: 映画-化-権 入場-者-数 不可-知-論
- C型 (□+□□)+□: 低-脂肪-乳 富-栄養-化 無-国籍-者
- D型 □+(□□+□): 軽-自動-車 重-機関-銃 名-編集-長
- E型 □+(□+□□): 極-超-短波 準-禁-治産 人-代-名詞
- F型 □・□・□・□: 花・鳥・風・月 春・夏・秋・冬 都・道・府・県
- G型 (□・□)+□□/((□・□)+□)+□: 中-長-距離 正-副-議長/農-畜-産-品 幼-少-年-期

といった種類にわけられる。新聞を資料として四字漢語を分析した野村(1975)では, ここでA型と記した構造に所属する語がもっとも多く, 異なりで3,224語(91.2%)にのぼることが報告されている。3資料における語構成別の出現状況をまとめると, 表1のようになる。

表1 各資料における四字漢語の異なり語数と割合(語構成別)

	国語辞典	新語辞典	文芸雑誌
A型	1,646(96.7%)	1,024(94.3%)	2,173(93.3%)
B型	7(0.4%)	19(1.7%)	82(3.5%)
C型	14(0.8%)	22(2%)	34(1.5%)
D型	21(1.2%)	14(1.3%)	27(1.2%)
E型	3(0.2%)	7(0.6%)	0(0%)
F型	8(0.5%)	0(0%)	8(0.3%)
G型	3(0.2%)	0(0%)	4(0.2%)
計	1,702(100%)	1,086(100%)	2,328(100%)

表からは、新聞以外の資料においても、A型がほかの構造と比べて、突出して所属語数が多いことがわかる。ただし細かく見ると、「国語辞典・新語辞典・文芸雑誌・新聞」の順番で、A型の割合が高い点が注意される。新聞あるいは文芸雑誌では、「社会派的」や「被差別者」など、接辞的な一字漢語を複数含んだ四字漢語が出現するが、辞書には「社会派」や「被差別」など、接辞的な一字漢語を一つ含む三字漢語自体が登録されにくい。先述したように、辞書に立項して意味を説明するまでもないと判断されるためである。したがって、B型やC型は、実際の文章には出現するものの、辞書には「不可知論」「育成者権」など、定義する必要がある、比較的少数の語に限って登録されることになるので、A型の割合が新聞や文芸作品よりも高い結果になる。F型については、文芸雑誌に8例出現しているが、「士農工商」「東西南北」など、すべて国語辞典にのっている語であり、新しい形のものは見られない。また、新語辞典では、F型の語自体が出現していない。断定的なことをいうには、より多くの例で確認する必要があるが、すでに国語辞典にある「花鳥風月」「起承転結」などを日常的に用いることはあっても、そのような、四字それぞれが独立した意味をもつ四字漢語を新しくつくるのは、現代では容易なことではなく、また、それが必要な機会もないのだろうと思われる。

5.2.2 四字漢語の意味的な構造

「王位継承」は、「王位」と「継承」が、「王位を継承する」という補足関係（格関係）にあるのに対して、「一進一退」は「一進」と「一退」とが反対の意味を表す対立関係にある、というように、5.2.1において、A型とした四字漢語については、前後の二字漢語同士の意味的な関係が問題となる。野村（1987）では、二字漢語と二字漢語との間に想定される意味の関係として、以下の五つを設定する。修飾関係1は連用修飾、修飾関係2は連体修飾の関係であることを示す。

- ・補足関係：栄養豊富 素行不良 当選確実 実現可能 動脈硬化 海外公演
- ・修飾関係1：特別参加 完全消毒 徹夜交渉 徐行運転 一時停止 一斉調査
- ・修飾関係2：高級官僚 重要案件 勤労意欲 消費電力 野球選手 外国映画
- ・並列関係：党利党略 内憂外患 不眠不休 自由自在 東奔西走 自給自足
- ・対立関係：竜頭蛇尾 寸善尺魔 西高東低 大同小異 男尊女卑 優勝劣敗

本稿の資料における四字漢語を、これら五つの種類に分類するが、ここでは文芸雑誌中の四字漢語を、辞書に見出し語があるものとないものとのわけ、前者を「見出し語」、後者を「非見出し語」として表示する。判定に用いたのは、『日本国語大辞典 第2版』『広辞苑 第6版』『大辞林 第3版』『大辞泉 第2版』である。新語辞典は、5.2.1と同様である。以上にもとづき、各資料のA型の語を分類すると、以下のようになる。

表2 雑誌（見出し語・非見出し語とに区別）と新語辞典に出現した四字漢語の異なり語数と割合（二字漢語の意味的關係別）

	見出し語	非見出し語	新語辞典
補足関係	105(19.7%)	364(22.2%)	214(20.9%)
修飾関係1	34(6.4%)	108(6.6%)	71(6.9%)
修飾関係2	303(56.8%)	1,123(68.6%)	730(71.3%)
並列関係	81(15.2%)	37(2.3%)	3(0.3%)
対立関係	10(1.9%)	5(0.3%)	6(0.6%)
計	533(100%)	1,637(100%)	1,024(100%)

補足関係や修飾関係については、それほど大きな差が、グループごとの四字漢語の間に見られない。しかしながら、並列関係や対立関係の語については、故事成語的なものが多く、非見出し語の四字漢語や新語辞典の四字漢語にしめる割合は低い。ただし、並列関係について、表2の「非見出し語」の用例には「英雄賢者」「古語綺語」「警戒警備（する）」「詳細丁寧（な）」「単純素朴（な）」「普通一般（には）」のような形が、対立関係については、「成功失敗」「盛夏嚴冬」「前肢後肢」などの形が散見される。並列関係の語は、強調などの理由から臨時的に用いられており、一語としてのまとまりは低い類である。この点は、「時代時代」「部分部分」「要所要所」のように、同じ二字漢語を繰り返したものについてもいえることである（この3語は表2では除外している）。本稿では、四つの一字漢語から構成されるものを、すべて四字漢語として処理しているので、これらもその範囲に含まれるが、認定のしかたによっては、二字漢語同士の独立性が高いと考え、これらを非四字漢語と見なす立場もありうる。また、「成功失敗」「前肢後肢」などの対立関係の語は、「成功と失敗」「前肢と後肢」のように「と」を用いた形のほうが一般的な言い方である。

5.2.3 二字漢語の造語機能と意味的な構造

たとえば、「以外」という二字漢語は、「関係者以外」「苦痛以外」のような使い方をする「造語成分」として『三省堂国語辞典 第7版』に立項される。このような、いくつもの語の構成要素として用いられる二字漢語については、その点についての記述と用例が示してあれば、四字漢語（五字などの場合も含めて）の形をいちいち辞書の見出しにたてなくともよいという考え方ができる。並列関係と対義関係については、二字漢語同士が対等の関係で結合しているので、どちらかを造語成分的な要素として見ることはできない。それゆえ、ここでは、補足関係、修飾関係の中身をより細分化した形で、見出し語と非見出し語の四字漢語を比較することにする。

以下では、記号として、N（名詞）、V（サ変動詞語幹の二字漢語）、A（形容動詞として用いられる二字漢語）、M（副詞として用いられる二字漢語）を用いる。先に見出し語・非見出し語として示した四字漢語の前要素あるいは後要素として、二つ以上の語において用いられている二字漢語について、意味的な関係ごとに分類すると、以下のようになる。

表3 複数の語で構成要素となる二字漢語を含んでいる四字漢語の意味的な構造

	見出し語		非見出し	
	前の二字(語例)	後の二字(語例)	前の二字(語例)	後の二字(語例)
補足関係				
N+A	0	0	0	5(意味不明 体調不良)
V+A	0	0	0	2(使用可能 解読不能)
N+V	4(宗教改革 保守合同)	2(気分転換 地熱発電)	24(市場拡大 連載開始)	43(知識不足 作家志望)
修飾関係1				
A+V	0	0	10(過剰摂取 正式決定)	1(安全運転)
V+V	1(強制収容)	0	1(共同研究)	1(徐行運転)
M+V	1(同時進行)	0	3(同時収録 臨時開封)	1(原則公開)
修飾関係2				
A+N	3(特殊教育 必須科目)	0	13(巨大企業 有力企業)	4(必要事項 有名女優)
V+N	8(合成写真 冷凍食品)	18(引用箇所 展示会場)	40(火山活動 芸術運動)	48(研究結果 製作主任)
N+N	28(学校行事 文学雑誌)	35(金融機関 国民学校)	106(海上都市 女性軍人)	123(英語教師 温泉旅館)
計	45	55	197	223

複数の意味的な構造で出現する二字漢語については、該当する語数の多い構造で代表させた。ただし、「安定成長」(V+V)と「経済成長」(N+V)とが確認された「一成長」のように、該当語数に偏りのないものは表からは除外しておいた。

補足関係について、Vが要素となっている場合は、「宗教改革」「地熱発電」など、四字漢語が個別的・具体的な意味を表しうるため、国語辞典にのるような語が多く見られるのに対して、Aを含む四字漢語の場合、「体調不良→体調が不良」「使用可能→使用することが可能」

のように、句にした場合と意味にほぼかわりがなく、辞書にのせる必要のある語が見いだしにくいという差異がある。

修飾関係1では、「正式」「共同」「同時」など、後にくるVの表す動作を修飾するもので、いくつもの四字漢語に用いられるものがある。たとえば「正式」は「正式—」の語をつくりやすいが、近い意味をもつ「本式」は、あまり合成語の要素として用いられることがないというように、前要素として合成語の要素になりやすい二字漢語については、辞書に記述があったほうが便利である。一方、修飾関係1で、後要素として使われることが多いVというのは、資料中には見られなかった。もっとも、これは、もっと多くの用例で検討する必要がある。

5.3 四字漢語の意味・用法の面からの観察

以下では、個々の四字漢語の意味的な性質を考慮しながら、見出し語になりやすいものとなりにくいものを考えていくが、扱うのは、量的にもっとも多いA型の四字漢語に限る。この場合、二字漢語と二字漢語とが結合して四字漢語になるが、要素としての二字漢語そのものが、辞書にのっていないようなものである場合がある。「空流調節」「星間会議」「聖的機能」「層現都市」などにおける下線部がこれにあたり、二字漢語自体について、臨時的なものに過ぎないのか、一般的に用いられるものなのかの検討が必要になる。また、「有言実行」（不言実行）、「邦高洋低」（西高東低）、「卑種流離」（貴種流離〈譚〉）のように、四字漢語が既存の語（丸カッコ内の語）のもじりである場合、入れかえた部分の二字漢語および全体としての四字漢語は、通常、見出し語にはなりにくい。

それから、「当・同・本」など、連体詞的な一字漢語を含む以下のような四字漢語も、辞書にはのりにくい。

当—（当社指定） 同—（同書後半・前回同賞） 本—（本作全体・本誌読者）

二字漢語では、「当社」「同氏」「本学」などについて、「この会社。また、我が社」（『明鏡国語辞典 第2版』）、「その人」（『新明解国語辞典 第7版』）、「この大学。当大学」（『新選国語辞典 第9版』）と記されるように、連体詞的な「当—」「同—」「本—」の語で、よく使われたり、意味が特別であったりして見出し語に採用されているものも少なくない。しかし、「当社指定」「同書後半」など、四字漢語の形では、特別な意味を有することもなく、辞書

にのるとしても、用例での提示にとどまる。

5.3.1 接辞的な二字漢語を含み、説明不要なケース

四字漢語の構成要素である二字漢語そのものは、国語辞典に記載されているようなものである場合、説明するまでもない四字漢語の典型例として、まず接辞的な性格をもつ二字漢語を取りあげる必要がある。島村ほか(2004)では、「新計画」「計画的」など、接辞的な一字漢語を含む三字漢語(派生語)については、辞書にのらないものが多いとしているが、同様の性質を二字漢語が有している場合、四字漢語を個別に登録するよりも、二字漢語の説明において、接辞的に使われる場合の意味・用法を詳しく記述したほうが効率的である。ただし、二字漢語の場合、一字漢語と異なり、名詞として自立用法をもつものが多く、どのようなものを接辞的としてよいかの判断がむずかしい。以下には、まず一般的な国語辞典において、「接尾語的」「造語成分」「名詞の下に付けて」などの記述が見られる二字漢語を例示する。

—以下(家畜以下) —以外(家族以外・自宅以外) —以上(安堵以上・想像以上)
—以前(近代以前) —以来(事件以来・創刊以来) —関係(家族関係・団員関係)
—自身(皇帝自身・作者自身) —次第(脚本次第・教育次第) —自体(質問自体・存在自体)
—前後(還暦前後) —同士(貴族同士・姉妹同士) —同様(家族同様・計画同様)

接尾辞的な二字漢語を構成要素にもつ四字漢語は、単独で見出し語になることは、一般的ではないという傾向がうかがえる。ただし、たとえば「自分」の強調表現として「自分自身」が辞書にのるなど、これらの二字漢語を含む四字漢語が辞書にのる可能性がまったくないというわけではなく、例外的な語も存在する。なお、辞書に「接尾辞的」などの記載はない語でも、以下のようなものは、多くの四字漢語を生み出しており、造語力がある。

—一色(戦争一色) —格差(科学格差) —合戦(取材合戦) —気分(厭戦気分)
—規模(宇宙規模) —経験(軍隊経験) —主義(効率主義) —人生(作家人生)
—物質(化学物質) —方法(演出方法)

前にくる二字漢語の表す物事の位置や数量を規定する、次のような四字漢語も用例が多い。

- ・一各所（都内各所） 一周辺（基地周辺） 一全体（画面全体・公園全体） 一中央（画面中央） 一表面（惑星表面） 一部分（基幹部分）
- ・一一同（学生一同） 一数人（警官数人） 一全員（被告全員） 一全部（人間全部）

また、「読者」に対する「読者諸君」「読者諸兄」のように、敬意を添える目的から、いくつもの「一諸君」「一諸兄」の四字漢語が形成されている。

- 一旺盛（元気旺盛） 一可能（使用可能・実現可能） 一特有（高山特有・組織特有）
- 一不能（採血不能） 一不明（原因不明）

四字漢語が形容動詞的に用いられる、これらの語の場合、二字漢語そのものは、「接尾語的」「造語成分」などの扱いを受けることがないようであるが、上記のような用法があることを用例によって示す辞書が見受けられる。

前部分については、

- 異常一（異常事態） 一斉一（一斉送信） 一般一（一般雑誌） 個別一（個別活動）
- 最終一（最終候補） 重要一（重要単語） 専門一（専門雑誌） 直接一（直接対話）
- 同時一（同時受賞） 特殊一（特殊能力） 有名一（有名作家） 有力一（有力企業）
- 臨時一（臨時閉店）

など、後部分のモノや動作を修飾する二字漢語に、多くの四字漢語の構成要素として用いられるものが見られる。ただし、いずれも自立的に用いられる語であり、「国際会議」の「国際」など、非自立的なものは、まれである。以上のように、さまざまな語の構成要素として用いられる二字漢語については、四字漢語全体が即座に理解できるようなものである場合が多いが、その分、二字漢語自体の記述としては、複合語の一部としての用法について、詳しい言及が求められる。たとえば、『明鏡』で、「さまざまな「主義」（コラム）」のような欄を設けているのは、その具体的な実践だといえる。

5.3.2 要説明の要因とそれを有さない四字漢語

5.3.2.1 ほかの語との関係など

以下では、資料中の四字漢語について、見出し語になっているものの性質を考察しながら、それをもとにして、見出し語として説明する必要のない四字漢語の性質についても考えていく。

①成句的。二字漢語の用法が限定的

意気消沈 意気投合 意気揚揚 孤軍奮闘 才気煥発 前代未聞 超常現象 品行方正 陽動作戦

それぞれの下線部において、たとえば「消沈」「方正」などは、単独で辞書に見出し語として記載されているものの、用例として「意気消沈」「品行方正」などが掲げてあり、二字漢語単独での用法が明示されていない場合が多い。これらは、四字漢語での使用が慣用的なものとして、辞書にはのりやすい。

②固有名に近い語。使用される二字漢語は一般語

たとえば、「玉音放送」は、「一九四五年（昭和二〇）八月一五日、昭和天皇みずからの声でラジオを通じて全国民に戦争終結の詔書を放送したこと」（『大辞林 第3版』）のように、四字漢語全体としては、特定の年におこった一回性のできごととして記述されているが、語を構成する二字漢語そのものは、「天皇の声」の意である「玉音」と「放送」からできており、一般語のような見かけをもつ四字漢語である。この点で「東京大学」「佐藤首相」など、地名・人名などを表す二字漢語が含まれる四字漢語と区別される。後者のような語は、四字漢語の収集段階において除外したが、前者については、構成要素が一般語である点を重視して、資料の範囲に含めてある。同様のものとしては、

学徒動員 教派神道 国民学校 宗教改革 集団就職 神社本庁 表現主義 文芸復興 保守合同

などがあげられる。たとえば、「保守合同」は、「保守政党が合同すること」というような一

一般的な意味で記載されているわけではなく、1955年に当時の自由党と日本民主党が合同して自由民主党をつくったという、歴史的なできごととして記述されている。したがって、もしも、21世紀の現在のことについて「保守合同」を使う場合には「平成の保守合同」の「平成の」など、1955年のものとの区別を示す表現をそえる必要がある。上記の語と比較して、「大名行列」「秩禄処分」「天孫降臨」「兵農分離」などの場合には、下線部の語をもとにして、歴史的な事柄を表す語だとの推測がたてやすい。以上のような百科語的な性質をもつ四字漢語は、特定の事柄を表すので、辞書に記載する場合には、用例としての掲出では不十分で、意味の説明が必ず必要になる。

③専門的な語

それぞれの二字漢語は、単独で用いられることがあり、一般的なことばであっても、四字漢語としては、何らかの分野で使用される専門語である場合、二字漢語の意味の和よりも細かい説明が必要になる。厳密に言えば、先述の固有名詞的な語の中にも、専門的な内容を表すものが含まれるが、以下では、現代社会における事柄を示すのに用いられる語をとりあげ、歴史的なできごとなどを表す語は、対象外としておく。辞書のサイズによって、専門語の収録語数は異なるが、新聞や放送などを通して、一般にも知られるようになった語は、小型の辞書でも採録される。

暗黒舞踏（舞踊） 炎色反応（化学） 公正証書（法律） 集散花序（植物） 純粹
持続（哲学） 反対給付（経済）

これらの場合、二字漢語の意味をもとにしただけでは、四字漢語全体の意味について、見当をつけるのも一般には困難であり、意味の透明性は低い。一方、次のような四字漢語は、ある程度、二字漢語の意味から、語全体の意味も推測できる。

気象衛星（気象） 細胞分裂（生物） 自己破産（法律） 時代区分（歴史） 司法
試験（法律） 心筋梗塞（医療） 全体主義（哲学）

これらの場合も、正確に語の意味を理解するには、辞書などの定義がよりどころとなる。「化学で研究対象とする物質」である「化学物質」に対して、「化学工業で合成される物質、

あるいは人工の物質という意味で使われることがあるが、本来はそのような意味はない」（『広辞苑』）とされるように、二字漢語間に想定される意味的な関係の把握に、ずれが生じることもある。また、本来の意味と第二の意味とが、いずれも専門的な意味で用いられる場合には、まぎらわしさなどの問題も生じるであろうが、「黄金時代（歴史）」「戦国時代（歴史）」「通奏低音（音楽）」などのように、第一の意味が、カッコ内に記した分野で用いる専門的なものであり、第二の意味が「転義」「比喩的」などとして、専門性を離れた意味になる場合には、両者の差が大きく、まぎらわしさの度合いは低くなる。

以上の語に対して、たとえば「前もって準備する」という一般的な意味と法律用語としての意味とをもつ「事前準備」のような四字漢語の場合、二つの意味に派生関係があるとも断定しにくく、「①前もって準備すること。②〔法〕刑事訴訟上、迅速な審理のために第1回公判期日前に訴訟関係人が証拠の収集・整理を行うこと。」（『広辞苑』）というように、番号を使って意味の区別を行うといった方法がとられる。同様の例としては、

意思表示（法律） 異国趣味（芸術） 依存関係（論理学） 拒否反応（医療） 緊急事態（政治） 生活空間（心理） 中央機関（政治） 背信行為（法律）

などがある。これらの場合、一般的な意味しかないのであれば、二字漢語の意味から四字の場合の意味も、おおよそ想定できるので、見出し語とする必要もない。しかし、同時に専門的な意味も存在し、位相的な違いが、二つの意味の間に存在することを周知する必要から、このような四字漢語も登録対象となってくる。「情報提供」という語を例にすると、『広辞苑』は、政府が自発的に情報を公開する意の法律関係の語としてのみ、これを説明するが、この語には、「視聴者からの情報提供」のような一般的な使い方も見られる。一般的な意味のほうは説明するまでもないと考え、専門的な意味のみを記述するという方法があることを示すものとして、『広辞苑』の扱いを解釈することも可能である（一般的な使い方については、把握していなかったという可能性も否定しきることはできないが）。

また、以上は、一応、専門的な意味と一般的な意味の区別が、比較的、容易なケースであったが、「方向転換」のような場合は、「向きをかえること」も「方針をかえること」も、特定の分野で用いられる専門的なことばとは断定しにくく、いずれも一般的な意味ということで解釈する。以上のように、多義が認められる場合、意味のあり方がいくらか複雑になるため、その四字漢語は説明する必要がある語として、立項の候補となりうる。

④関連語との区別。上位語と下位語

ある二字漢語の意味について、それを下位分類する必要がでてきた場合、種差を示す二字漢語を前部分に用いて、四字漢語をつくることがある。たとえば、体温に着目して動物を分類すると「恒温動物・変温動物」のような区別が生まれ、手段に着目して労働を分類すると「精神労働・肉体労働」の区別が生まれるというようなケースである。類例は、以下のとおりである。

医療被曝（公衆被曝・職業被曝） 音声言語（文字言語） 合成繊維（化学繊維） 固定電話（携帯電話） 自然科学（社会科学・人文科学） 実践哲学（理論哲学） 商事会社（民事会社） 中間階級（有産階級・無産階級）

専門的な語である場合が多いが、これらの場合、専門語に見られる、意味が二字漢語の単なる組み合わせでは理解しにくいということに加えて、関連する語もあわせて理解すべきであるという点が特徴的である。なお、「人と人とを会わせること」を意味する「紹介」において、「他者」という要素は重要であり、他者同士でなく自分について他者に話をする「自己紹介」は、個々の二字漢語の意味から考えれば、理解しにくい部分を有する語だといえる。「一種の紹介」として、二字漢語の「紹介」に対して、四字漢語が下位語に相当するとも考えられるものの、「紹介」が本来の意味からずれており、上述の「音声言語」「肉体労働」などの例とは区別される。「母子家庭」も、「家庭」の定義に「夫婦」が含まれているのが、本来的であるとするならば、そこからやや意味のずれた使い方ということになるゆえ、やはり四字漢語全体の意味を説明しないと、理解が困難な語だと見なしうる。「紹介」や「家庭」の定義に「他者」「夫婦」という要素を含めずに説明する方法もありうるが、抽象的な定義になるおそれも否定できない。単純に後部分の二字漢語に対して、四字漢語全体が下位概念を表すとはしにくい点で注意がいるケースである。

以上は、二字漢語が上位語であり、それを構成要素としてもつ四字漢語が下位語を表す場合であったが、具体的な事柄を表すさまざまな語に対して、四字漢語がそれらの総称として用いられる場合というのものもある。たとえば、「皮膚感覚」が「温覚」や「触覚」「痛覚」など、個々の感覚の総称であるようなものであり、以下の類例が考えられる。

火山活動（噴火，噴気 etc.） 広告媒体（テレビ，新聞，看板 etc.） 交通機関（鉄道，船舶 etc.） 舞台装置（大道具，照明 etc.）

「舞台装置」は、「演劇などの効果を高めるために，舞台に装置するもの。大道具・小道具など」（『岩波国語辞典 第7版 新版』。以下『岩国』）などと定義される。意味を記した部分については，二字漢語の意味から，おおよそ察しがつくものの，「～など」で示される部分については，知らなかったり理解が不十分であったりすることもあるので，具体例が提示されることによって，当該の四字漢語が，どのような語をまとめて言い表すための語であるのかが，明確に把握されるようになる。

以上，成句的な語，固有名詞に近い語，専門的な語，上位語・下位語など関連語との区別が必要な語などについては，単なる二字漢語の意味の組み合わせよりも，特別な点が認められ，辞書に立項されることとなる。

5.3.2.2 意味の限定

以上，5.3.2.1 では，一般語ではなく専門語であることや，ほかの四字漢語との関係性などの観点から，辞書に登録されやすい語かどうかを眺めたが，以下では，四字漢語そのものの意味・用法の観点から，見出し語になりやすい語と，そうでないものの比較を行っていく。専門語かいなかの区別は設けずに検討するので，一部5.3.2.1 と重複する語も含まれる。なお，以下で語例として示す四字漢語のうち，資料とした国語辞典で見出し語になっていないものについては，脇にアスタリスクを付することとする。

まず，造語の観点から見ていく。「中間小説」「低回趣味」など，使用され始めた時期や使った人物が明確で，一般に定着したような語は，辞書に意味とともに記述される。文芸雑誌では，辞書にのることは，ほとんどないであろうが，「公開化粧*」「電車化粧*」などの臨時的な語が出現することがある。これは，「電車内で化粧をする」ことを一語化した表現であるが，言い得て妙といった印象とともに，笑いを生み出す効果がある。

四字漢語に比喻が関わる場合としては，「爆弾のようにインパクトのある発言」を意味する「爆弾発言」のようなものがあり，「爆弾」と「発言」そのものの意味からは，たとえば働いているかどうか予想しにくいので，一般に用いられるようなものは，登録の必要がある。「企業戦士」「人間模様」なども下線部の本来の意味からずれており，立項する辞書が見られる。政治などの話題で聞かれる「岩盤規制*」（岩盤のような規制）のように，新たな表現

も生み出される可能性がある。「自動車王国*」「サッカー王国*」の「王国」など、複数の語で比喩的な意味が共通して用いられる場合には、「ある方面で大きな勢力をもって栄えている国家・地域や団体などをたとえていう」(『大辞林』)のように、原義とは別に、一つの意味をたてて説明されるが、「爆弾—」「一模様」など、類例にとぼしい場合には、四字全体で個別に意味・用法を記述せざるをえない。

副詞的に用いられる「実際問題」のように、四字漢語の品詞性が構成要素の意味から予想しにくい場合はまれであるが(「実際」は副詞だが「問題」は名詞であり、「実際問題が」「実際問題を」のように名詞として用いられることが期待される)、後部分の二字漢語の表す意味的なカテゴリーに、限定やずれが見られる場合がある。たとえば、「監督」は動作の意味でも人の意味でも用いられるが、「映画監督」といった場合は、後者の意味に限られる。類例に以下のものがある。

科学万能(効能があること→考え方) 願望充足(満たすこと→精神の傾向) 近所
迷惑(迷惑な様子→そのような行為) 高校野球(スポーツの一種→試合・大会)

また、四字漢語の表す意味が、二字漢語の組み合わせから予想されるものよりも、限定が加わっている場合があるので、以下で、その点について考察を加える。

①主体の限定

安定成長(国の経済) 延長保育(保育所・幼稚園) 解散命令(裁判所) 高度成長(〈日本〉経済) 児童虐待(保護者) 就職活動(特に大学生) 世論調査(個人でなく公的機関など)

たとえば、「保育」単独であれば、動作の主体は親や保育所・保育士などであるが、「延長保育」の場合は、親は主体ではないというように、動作主体の面で限定がある。「意見交換*」「完全決着*」など、多くの四字漢語には、このような限定は見られないので、個々の二字漢語の意味を理解していれば十分ということになる。

②対象の限定

移動撮影(カメラ) 横断歩道(車道) 危険思想(国家・社会に対して) 禁断症

状（薬物など） 政略結婚（子女）

細かく考えれば、歩行者が横断するのは「車道」であるというような点は、「横断」と「歩道」を組み合わせただけでは出てこない意味であり、対象について限定が加わっていると考えられる。以上には、一応、主体か対象かが、比較的わかりやすいものをあげたが、そのいずれにも限定が認められる場合がある。「口述筆記」という場合、「A が口述して B が筆記する」としたのでは、内容がそれぞれ別である解釈も考えられるが、「A が口述して、その内容を B が筆記する」のように、対象の面でも限定されていると考えたい。次のようなものも、複数の動作の参加者が想定される。

修学旅行（引率者と児童・生徒。前者が後者を連れて旅行すること）

同伴出勤（水商売の人間とその客。前者が後者を連れて出勤すること）

参加者の関係が複雑であり、これらの語になじみのない人にとっては、辞書で定義されていたほうが助かる類の語である。

③その他

主体や対象の限定のほかには、次のようなものがあげられる。

[時間・時代]

時代小説（明治以前の時代） 戦争文学（近代・現代の戦争） 天気予報（当日から3日以内の天気） 不在証明（犯罪が起こったときに現場にいないこと）

[場所]

救命胴衣（海など） 経済特区（中国） 公衆電話・公衆便所（利用しやすい場所）
集中豪雨（狭い地域） 地球環境（表層） 転地療養（気候のよい場所） 人間関係
（社会・組織の中） 養護教諭（小学校・中学校・高等学校）

いつでも、どこでもよいというわけではなく、カッコの中に示したような時間や場所に限定して用いられる。

[目的]

暗証番号 (ATM などに使う番号) 乾布摩擦 (健康) 記者会見 (重要情報の提供)
区画整理 (都市計画) 国民投票 (国政の重要な事項) 総量規制 (環境保全)

これらに加えて、「懐中電灯」(乾電池)のように「手段」が限定されるもの、「単独行動」(他人と無関係)のように「条件」が限定的なもの、「長編小説」(複雑な構成)のように「内容」が限定されるものなどがある。

以上のように、主体、対象、場所など、四字漢語の表す意味にかかわるいずれかの要素に限定が見られる、つまり単なる二字漢語と二字漢語の足し算では、四字漢語全体の意味が十分に理解されにくいような語の場合には、国語辞典の見出し語となりやすい。辞書にまったくのっていない四字漢語、あるいは用例としてのみ記載されている四字漢語の中にも、以上のような意味の限定が見られるものが存在する可能性は十分あり、見出し語の候補として、採集・検討が必要である。なお、ここでは、候補とすべき語の特徴として、どんな点を注意すればよいのかを示すために、多めに用例と個別の説明を加えることにしたので、やや記述がこまごまとしたものになった嫌いがある。

5.3.2.3 名詞間に見られる意味的な特徴

次に、名詞と名詞の間に想定される意味的な特徴の類型について考える。「有名女優*」「意見交換*」のように、形容詞的な二字漢語や動詞的な二字漢語を含む四字漢語では、「有名な女優」「意見を交換する」のように、二字漢語の品詞性をもとにして、二字漢語同士の関係を容易にひきだせる場合が少なくない。これに対して、名詞と名詞が結合した四字漢語の場合、前部分の二字漢語と後部分の二字漢語の関係が多様になる。たとえば、「雑誌」が後部分にくる点で共通していても、「科学雑誌*」と「少女雑誌*」では、前者が「科学に関する雑誌」であるのに対して、後者は「少女のための雑誌」というように、意味的な関係は異なる。『岩国』の付録にある「語構成概説」では、このような点に配慮しており、名詞+名詞の複合名詞を12の主要タイプにわけて提示している。以下の表4には、『岩国』のあげる類型と語例をすべて掲げる。表の右側には、文芸雑誌に出現した名詞+名詞の四字漢語について、国語辞典の見出し語にあるものと、ないものとに区別し、数と語例を記した。合計で596語をここでは扱っている。

表4 名詞＋名詞の四字漢語において、前部分と後部分の間に見られる意味的特徴

	複合名詞の種類	『岩国』の語例	見出し語	語例	非見出し語	語例
1	AデアルB	父親 桜花 宝石 前提条件	24	有閑夫人	103	悪人芸者
	AニユカリノアルB	ローマ字 西洋半紙 胡蝶	0		0	
2	ソノBヲアト呼ブB	月組 富士山 第二工場	0		0	
3	Aニ属スルB	人手 星影 橋脚 原子核	4	陸軍軍人	40	惑星表面
	Aニ属スル、Bニ似タモノ	手首	0		0	
4	Aヲ所有スルB	船宿 金主	2	傷痕軍人	1	知識青年
5	Aニ関スルB	姉むこ 葉桜 印刷局 光量 自由主義 自動車工場 犯罪事例 科学雑誌 経営理念	60	文芸雑誌	179	石油工場
6	Aニ形状が似タB	弓なり 花笠 さおばかり 鈴蘭 殿様がえる板ガラス 鉄腕 銀世界	0		1	幼児体型
7	所Aニ実現スルB	野ばら しりだこ 西風 町工場 テーブルスピーチ 野天ぶろ 遠洋漁業 国家理念	51	海上都市	41	地下迷路
	時Aニ実現スルB	朝日 年男 古人 未来社会	3	近代社会	24	未来都市
8	Aノ存在ヲ特色トスル所B	砂浜 雨空 氷原	5	格差社会	6	住宅地域
	Aノ存在ヲ特色トスル時B	月夜 厄年 戦時	0		0	
9	Aノタメニ使ウB	荷車 雨具 計算機 少女雑誌	14	映画音楽	16	体育施設
10	Aヲ材料トシテ作ツタB	絹糸 しの笛 ゴムまり ガラス板 鉄橋 丸木舟 羊皮紙 玉子豆腐	0		1	金属製品
11	Aノ利用ヲ特色トスルB	かざぐるま 帆船 蒸気機関 電子顕微鏡 手まくら 足わざ	7	電子辞書	13	電気気球
12	Aガ原因デ生ズルB	ペンだこ 鉛毒 電光	0		1	工業廃水

いくつか、『岩国』の語例から逸脱する可能性があるものについて説明する。3の「Aニ属スルB」について、『岩国』があげるのは、「人手」や「橋脚」など、人やモノの一部がBである場合だが、本稿では「陸軍軍人」や「米軍兵士*」など「Aニ所属スルB」のように所属関係で結ばれる場合もここに含めた。8についても、『岩国』のあげる「砂浜」「氷原」などに対して、「格差社会*」などは抽象的な語であり、拡大解釈のおそれもあるが、「格差の存在を特色とする社会」というように解釈することも可能と考え、ここに含めた。このようなものを上記の12タイプに含めないとした場合、主要な類型でカバーできないものが多くなってしまっているので、それをさけたいと考えたためである。『岩国』が「漢語の複合語は和語系のものと一律には扱い難いが、以下ではなるべく併せて説く」とするように、6など、四字漢語に適当な例があまり見当たらないようなタイプもある。数が多いのは、5や7であり、これらの場合は、辞書にのっていないような語であっても、解釈は容易であることが多い。ただし、5の場合を例にすると、「交通事故」のように「交通に関する事故」よりも詳細な定義が求められる語や、「野球選手」など「特殊でなくても、使用頻度の高いもの」（『学研国語大辞典 第2版』の付録「語彙について」から）は辞書にのることになる。

表について考えると、たとえばある型に関して、「見出し語（100語）、非見出し語（0語）」のような場合があれば、その型の四字漢語は特別な意味をもつ場合が多いことがうかがえ、また反対に「見出し語（0語）、非見出し語（100語）」のような場合があれば、その型では

説明するまでもない四字漢語がもっぱらつくられているというような指摘が可能であるが、本稿で用いた程度の用例数では、そのような顕著な傾向は、いずれについても見られない。ただし、辞書にのっていない非見出し語として分類される四字漢語には、5や1, 3, 7のものが多く、ふだん私たちが目にする名詞＋名詞の四字漢語において、辞書にのっていないだろうと感じられるものの中には、これらの型に属するものが多いであろうとの推測は許されるであろう。

なお、たとえば不動産に関連して、「(～駅から) 徒歩物件*」という語が用いられることがあるが、この言い方に違和感があるとすれば、「徒歩で行ける(行く) 物件」のように、この語は解釈され、表4にあるような、一般的な関係がそこに見られないためだろう。文脈が与えられれば、四字漢語の意味の理解に、困難はほとんどない。こういう語の場合は、意味が特殊であるというよりも、名詞を並べただけの、ていねいさの足りない表現として認識され、辞書の見出し語になる可能性はきわめて低い。

5.4 おわりに

以上、ここでは、辞書の見出し語になりやすいか、なりにくいかという点から、現代日本語の四字漢語について検討してきた。ここで指摘したいくつかの要因は、国語辞典の編集に携わる立場の人にしてみれば、公にすることはなくとも、実際の編集において、ある語を見出し語にするかしないかの判断基準として、利用されていたものである可能性は十分あるだろう。しかし、それ以外の一般の人にとっては、どのような四字漢語が辞書にのり、どのようなものが除外されているのかは明らかなことであるとはいいがたく、そのことに鑑みれば、ここで行った分析にも、なにがしかの意義があると考えられる。

名詞＋名詞の四字漢語について、『岩国』を参考に語例を提示したが、名詞については、人を表す名詞や、場所を表す名詞といった観点からの分類も可能である。それらの名詞が結合して、表4に見たようなパターンの四字漢語となるにあたって、どのような意味的な制限があるのかという点を考える必要があるが、これについては改めて検討する。

6. 名詞+名詞の四字漢語について

6.1 はじめに

本節では、「英語教師」「大学病院」「医療問題」など、前部分と後部分の二字漢語がいずれも名詞であって、「勉強」のようなサ変動詞語幹としても機能する二字漢語や、「確実」のような形容動詞語幹として機能する二字漢語を含まない四字漢語について検討する。名詞+名詞の構造の四字漢語については、四字漢語を構成する二字漢語の組み合わせとして、もっとも数が多いことが野村（1975b）などで指摘されている。しかし、その整理や分類については、語用論的な要因などによって受ける影響が大きく、困難であることが影山（1993）で指摘されている。本節でも、徹底的な整理が可能なわけではないものの、名詞+名詞の四字漢語について考察し、名詞同士の組み合わせに、どのような意味的な制限があるのかという点について、いくつかの指摘を試みたい。

まず、名詞の分類については、益岡・田窪（1992）が基本的な意味範ちゅうとしてあげている「人名詞」「物名詞」「事態名詞」「場所名詞」「方向名詞」「時間名詞」を用いることとする。ただし、「事態名詞」は、より一般的な名称だと思われる「抽象名詞」を使用した。これらの名詞は、「ひと」「もの」「こと」「ところ」「ほう」「とき」といった名詞によって代表されるとされる。また、本節では、「会社が決めた」の「会社」や「学校の方針」の「学校」など、人名詞と同様のはたらきをもつものを「組織」として、別に枠を設けた。このような、名詞の意味的な性質に関しては、石野・荻野（1983）、石綿（1999）などを参考にしている。

6.2 分析対象とする四字漢語

ここでは、2013年に発行された文芸雑誌『新潮』（110-8、新潮社）、『文学界』（67-8、文藝春秋）、『文藝』（52-3、河出書房新社）、『ドラマ』（35-8、映人社）、『SFマガジン』（54-8、早川書房）、『すばる』（35-8、集英社）、『群像』（68-8、講談社）を用例資料として用いた。これらの資料から、860の名詞+名詞の四字漢語が抽出された。また、朝日新聞社の「CD-HIASK1999-2003 朝日新聞記事データベース」（以下「朝日」）も分析用に用いる。主なデータとしては、これらを使用し、必要に応じて、ほかの資料からひろった用例も用いることとする。6.1でのべた名詞の種類にしたがって、860語をふり分けると、以下の表1のようになる。

表1 名詞+名詞の四字漢語における名詞の組み合わせ

	人	組織	物	抽象	場所	時間	方向
人	43	7	7	40	3	3	0
組織	11	7	4	15	4	4	0
物	8	10	27	38	12	3	0
抽象	42	39	87	234	35	16	0
場所	11	10	18	36	40	5	1
時間	5	0	2	22	2	7	0
方向	0	0	0	0	0	0	2

※縦が前部分の場合、横が後部分の場合をあらわす。

抽象名詞として扱ったものの中には、「学校行事」「世界大戦」など、活動をあらわすものも多く含まれており、全体的な数が、ほかの名詞よりも多くなっている。それぞれの組み合わせの特徴については、以下で個別にとりあげる際に説明して補うこととする。

6.3 分析

6.3.1 人名詞を含む四字漢語

6.3.1.1 人名詞同士の結合

人名詞は、前部分として103例、後部分として120例が出現している。これらについて、それぞれ検討していくが、まず人名詞が同じく人名詞と結合する場合を確認する。

[後部分が前部分の名詞の数について限定を加える]

貴族同士 警官数人 女子連中 女性同士 選手全員 男子一同 男子連中 人間同士 被告全員 門徒一同

このうち、「同士」「一同」などは、造語成分的なためか「貴族の同士」「男子の一同」など、「の」をはさんだ句の形はとりにくい。「連中」は、「右翼連中」と「右翼の連中」のように、いずれの形もとりうる場合があるが、「女子の連中」「男子の連中」などは、あまり耳にすることもなく、個別に「～の～」の使いやすさに差があるのかもしれない。

[後部分が敬意をそえる]

天皇陛下 読者諸兄 農民諸君

[後部分が強調を加える]

皇帝自身 自分自身 作者自身 作者本人 作家自身 作家本人 選手個人

後部分としての「自身」「本人」は、それを用いずに、「作者が」「作家が」のようにいったとしても、「作者自身が」「作家本人が」と同様の意味をあらわすことができる。これらの語をつけ加えることの意義は、「ほかの人でなく」という意味をはっきりさせることにある。敬意を添えるタイプも強調を加えるタイプも、「～の～」という句の形では、通常用いられない。

[前部分が形容詞的にはたらき後部分を修飾するもの]

- ① 悪人芸者 女子学生 女子生徒 女性軍人 女性講師 女性作家 女性職員 男子生徒 男性読者
- ② 黒人選手 青年詩人 大衆作家 白人娼婦 幽霊部員

ここで①とした語は、「悪人芸者→わる芸者」「女性講師→女講師」のように、前部分の二字めの要素を省いたとしても十分に意味をなす、言い換えれば、後部分の名詞を修飾するのに重要なのは「悪」や「女」の部分であるため、これらのみで「芸者」「講師」を修飾する。一方、②の場合、「黒人選手→黒(い)選手」「青年詩人→青詩人」などの言い換えは不可能であり、前部分の二字めの必須度が高い。したがって、四字漢語の要素に意味の重複を感じるなどして言い換えをしたい場合、①のような語では、訓を用いるなどの単純な言い換えが可能であるが、②のようなものについては、前部分をまったく異なる言い方に改めるなどの方法をとる必要があるものとして、区別される。なお、「{大衆小説/大衆向き}の作家」「幽霊のような部員」という意味の「大衆作家」「幽霊部員」なども、前部分と後部分とが「悪人芸者」などに見られた「AであるB」のような単純な関係ではなく、短い単位への置き換えは困難である。

6.3.1.2 前部分として

人名詞が前部分として、ほかの種類の名詞を修飾することがある。主なものを以下に掲げる。

- ・組織名詞：学生劇団 個人商店 市民団体 市民病院 女子大学 母子家庭

- ・物名詞：遺族年金 同人雑誌 婦人雑誌 民族衣装
- ・抽象名詞：学生野球 家族以外 官僚主義 記者出身 皇帝以外 皇帝権力 黒人以
外 個人情報 作家体質 自己責任 児童文学 商人風情 少年野球 女性遍歴
選手年俸 選手不在 大衆文化 男性全般 読者対象 人間以上 人間群像 人間
精神 人間全部 農民階級 農民階層 農民精神 百姓一揆
- ・時間名詞：学生時代 少年時代 青年時代
- ・場所名詞：公衆便所 児童公園 社員食堂 市民会館

ここでは、「山」や「河原」のような、純粹に場所名詞と考えられるものに加えて、「公園」や「便所」など、人がつくったもので、場所としてとらえられる施設なども、場所名詞として扱っている。「大学」などを、それとわけて組織名詞としたのは、「大学が決定する」のように、「大学」あるいは「劇団」などは、人名詞と同様に、意志をもつ主体としての用法が備わるためである。

後部分に組織名詞や物名詞、場所名詞などがくる場合、それらに対して、前部分の人名詞は、主体をあらわしたり（「市民団体」など）、対象をあらわしたりする（「女子大学」「婦人雑誌」など）。抽象名詞が後にくる場合は、それに加えて、「個人情報」のように、「～に関する」という意味関係や、接辞的な「以外」「以上」などを含む四字漢語が見られ複雑である。

「～のための～」という意味の語は、組織名詞の場合も場所名詞の場合もつくられやすい。たとえば、「市民のための病院」の意で「市民病院」があり、「児童のための公園」の意で、「児童公園」があるというようにである（組織と場所の区別については、上述のとおりである）。また、「～による～」という主体の意味の語としては、「学生劇団」のような語があり、人が運営する団体・組織という意味で用いられる。これに対して、「公園」「食堂」など、施設をあらわす場所名詞が後部分にくる場合、「社員食堂」を「社員がつくった食堂」と解釈したり、「市民がつくった公園」という意味で「市民公園」を用いたりすることはないように、前部分に人名詞がきて、それが主体として解釈されるのは普通でないという制限が見られる。つまり、以下のような区別ができる。

【～のための～】

人＋組織：市民病院 女子大学／人＋場所：児童公園 社員食堂

【～による～】

人＋組織：学生劇団 市民団体 個人銀行／人＋場所（施設）：該当例なし

一般的に、公園や食堂などをつくるのは、公共団体や企業などであり、一般市民が主体となることはない。もしかりに、実際に学生が食堂をつくったというようなことがあれば、「この学生食堂は、学生自身がつくったものなのです」のような言い添えとともに、臨時的に「～による」の意で用いられる可能性もゼロではないが、あくまで例外的である。それゆえ、後部分が場所・施設で人名詞が前部分の場合は「～のための～」、組織名詞が前部分の場合は「～による～」の意味関係で一般に解釈されやすい。

また、語構造的な点について考えると、「公園」などをつくる主体が前部分に表される場合、「都立公園」「県営球場」など、「組織＋動作」の構成をもつ二字漢語が用いられる傾向が観察される。公共団体をあらかず多くの語は、形態的に一字漢語である場合が多い。つまり、「市」「県」「都」「町」「区」「公」などであり、これらを用いて「市病院」「県球場」「都公園」「区会館」「公機関」といった三字漢語にすると、語としての安定感に欠けると感じられるためか、実際にこれらの使用例を見いだすのは容易ではない。それゆえ、このような言い方の代わりに、「市立病院」「県営球場」「都立公園」「区立会館」「公設機関」などにおける「立」「営」「設」のように、動作的な意味を要素として含む二字漢語が用いられる。

以上の結果、後部分があらかず組織や施設の利用者に重点がある場合には「市民病院」、運営組織のほうに重点がある場合は「市立病院」というように、同じものについて、二つの言い方がなされうる。また、「社員食堂」や「学生食堂」があつて、「会社食堂」「大学食堂」がないというように、一方しか言いにくい場合もある。これらを「図書館」と比べると、「図書館」の場合、「大学図書館」（五字漢語）のように、組織をあらかず「大学」が前部分にきているが、これは「区立図書館」「都立図書館」などとの区別をする上で必要な要素である。

「食堂」の場合、会社や大学の外にある「食堂」との対比が意識されないため、わざわざ「会社食堂」「大学食堂」のような言い方をする必要がない。それゆえ、利用者の種類を表示する「社員食堂」「学生食堂」などの語しか用いられないのであろう。なお、語であることにこだわらなければ、「会社の食堂」「大学の食堂」のように、句として表現することが可能である。

6.3.1.3 後部分として

人名詞が、四字漢語の後部分として出現する場合、前部分には、次のような名詞が用いられる。

- ・組織名詞：家庭教師 高校男子 自軍選手 政府高官 中学教師 町会議員 米軍兵士 陸軍軍人 陸軍大将 陸軍中将
- ・物名詞：絵本作家 雑誌記者 肉体自身 筆頭演者 本誌読者 名物会長
- ・抽象名詞：一般市民 一般庶民 英語教師 外科患者 現役選手 原爆作家 混血孤児 視点人物 傷痍軍人 職業軍人 職業作家 抒情画家 新進女優 新入社員 成年選手 專業作家 專業主婦 戦国武将 先頭集団 専門医師 体育教師 中心人物 中年女性 中年男女 中年男性 天才打者 童話作家 日系移民 文学青年 民生委員 野球巧者 野球選手 靈能少女
- ・場所名詞：異界作家 英国紳士 沿線住民 海外作家 各国選手 近隣住民 作中人物 世界市民 地方作家
- ・時間名詞：現代作家 現代詩人 現代青年 最終候補 初代会長

このうち、抽象名詞が前部分となるケースについては、「混血」に「人種の異なる男女から生まれた子に両者の特質がまじりあうこと。また、その子」(『明鏡国語辞典 第2版』)という記述があるように、抽象名詞としての用法と具体名詞、ここでは人名詞、としての用法の両方をもつ語が見られる点に注意がいる。つまり、「混血」は人名詞としての派生的な用法ももつが、「混血孤児」のような言い方の場合は、「血がまじっていること」という抽象名詞としての用法が前面にでる、というような断りをしておく必要がある。「中年女性」の「中年」や「天才打者」の「天才」などにも同様のことがいえる。このように、抽象名詞と具体名詞の二つの用法をもち、四字漢語の前部分として用いられることもある名詞の範囲については、人名詞以外の物名詞や場所名詞への派生も考慮する必要があるので、抽象名詞の項目で、まとめてとりあげることとする。

6.3.2 組織名詞を含む四字漢語

6.3.2.1 組織名詞同士の結合

組織名詞と組織名詞が結合した四字漢語では、「大学生協」「大学病院」など、前部分のあらかず組織に所属するもの、あるいは、「教団本部」「協会支部」など、前部分のあらかず組

織の内部において、どのような位置づけにあるかを示す語が、後部分に示されるという組み合わせが見られる。

6.3.2.2 前部分として

前部分に組織名詞がくる場合、次のような名詞と結びついて四字漢語が形成される。

- ・人名詞：家庭教師 高校男子 自軍選手 政府高官 中学教師 町会議員 米軍兵士
- ・物名詞：球団資金 自社商品 他社製品
- ・抽象名詞：学校行事 学校制度 家庭環境 企業体質 球団体制 警察権力
- ・場所名詞：学園都市 自社沿線 私鉄沿線
- ・時間名詞：高校時代 大学時代 中学時代 中高時代

物名詞が後部分となる場合を、「人名詞＋物名詞」の場合と比較してみると、「人名詞＋物名詞」では「遺族年金」（「年金」は制度の意味ももつが、「遺族年金」は「金銭」の意味ということで解釈しておく）、「婦人雑誌」など、「～のための～」という意味関係をもつ四字漢語が見られたのに対して、組織名詞が前部分の場合は、それがあまり見られないという違いがある。「～による～」という、前部分が主体の意味になる場合は、「同人雑誌」があるのと同様に「自社商品」「他社商品」などがある。「企業向け製品」「法人向けパソコン」などの言い方があることを考慮すると、「組織（のための）物」の意味で四字漢語がつくられにくいのは、そのような名詞が必要ないというよりは、組織が前部分となる場合、主体としての解釈が先に立ちやすいためだろうと考えられる。比較のため、「～向け」の言い方を検討する。数十種の国語辞典に見られる「～向け」の用例をもとにすると、次のような分類ができる。

- ・人（向けの）物：子ども向けの本 少年向けの本 高齢者向けの雑誌 若者向けの雑誌
- ・場所（国）（向けの）物：中国向けの手紙 イギリス向けの輸出品 外国向けの商品 外国向けの製品 外国向けの郵便物 外国向けの小包
- ・人や場所（国）向けの抽象（物）：子ども向けの番組 中国向け輸出 海外向けの放送

「番組」や「放送」などの内容を抽象的な物と考えて、上記のような表記をとった。これらのうち、「子ども向けの本」「高齢者向けの雑誌」「外国向けの郵便物」「外国向けの小包」は、それぞれ「児童書」「シニア雑誌」「国際郵便」「国際小包」などの語で、同様の内容を表現することが可能である。また、「子ども向けの番組」「海外向けの放送」の場合、「子ども番組」「海外放送」という言い方もある。ただし、「子ども番組」は、子どものための番組としか解釈しにくい、「海外放送」のほうは、外国の放送局が主体となる放送、という解釈も可能性としては考えられる。それゆえ、同様の意味をもつ「対外放送」「国際放送」のほうが、その点でまぎらわしさの度合いが小さくなる。両者の比較からわかるように、「子ども」や「婦人」など、人名詞が前にくる場合は、「～向け」があってもなくてもよい場合があるが、「外国向け(の)商品」「中国向け輸出」など組織名詞の場合は、名詞同士の意味のつながりをはっきりさせるために、「～向け」の必須度が高いという傾向が見られる。名詞同士の結合によってできた四字漢語は、要素間の関係を示す形式的な手がかりがないが、「～向け」を用いることで、その関係は明瞭になる。「A向けB」は、三語からなり、やや長いと感じられる可能性がある反面、要素間の関係がわかりやすい点で、すぐれた形式ととらえることもできよう。このようなことから、「組織名詞+物名詞」の四字漢語においては、「～のための～」という意味関係をもつものが一般に見られないという結果になる。

以上のような場合において、人名詞と組織名詞とが異なるふるまいを見せる点は記述しておく必要がある。

6.3.2.3 後部分として

組織名詞は、後部分として次のような四字漢語の中で用いられる。

- ・人名詞：学生劇団 国民学校 個人商店 市民団体 女子大学 母子家庭
- ・物名詞：胃腸病院 車両工場 食肉会社 石油工場 鉄道会社 鉄道業界 郵船会社
- ・抽象名詞：医療機関 英語学校 海運会社 各種団体 割烹旅館 既存球団 救急病院 旧制高校 金融機構 軍事政権 軍需工場 航空会社 国営企業 国際結社 宗教法人 新聞各社 専門学校 中央機関 課報機関 人気球団 美術大学 保険会社
- ・場所名詞：温泉旅館 県内企業 周辺勢力 水上警察

ここでは、場所名詞との結合における制限について、ケーススタディーとして「海外」「外国」「国外」、「在外」（抽象名詞）が前部分にくる場合を例としてとりあげる。これらと組織名詞との組み合わせについて、「朝日」と国立国語研究所の書き言葉コーパス「中納言」をもとにしてまとめたのが次の表である。スラッシュの左が「朝日」の1999年から2003年版のCD-ROMにおける件数、右が「中納言」における件数を示す。なお、具体的な国名との結合を示すために、例として「アメリカ」を加えてある。「海外営業所」「海外オフィス」「海外支社」「アメリカ支部」などは、表では空欄になっているが、インターネットなどでは使用例が見られる。

表2 場所をあらわす名詞と組織をあらわす名詞との組み合わせ

	海外	外国	国外	在外	アメリカ
営業所					
オフィス					
教室	1件/0件				
公館	0件/1件			365件/126件	
工場	56件/8件				
子会社	93/41	2件/81件		0件/6件	
支社					
支店	38件/0件	1件/0件	0件/1件	0件/2件	1件/0件
支部	5件/2件				
事務所	14件/15件			1件/2件	
代理店	4件/1件				
店舗	15件/11件				
道場	1件/0件				
分校					0件/1件

ここでは、たとえば「海外支店」は日本に本店をもつ店・会社の支店であるというように、日本の企業などが主体である場合を○で示しているため、日本以外の国が主体となる「外国公館」あるいは「外国企業」のような例はのぞいてある。まず、「海外」などの後部分となる名詞は、国内の、おおもとなる「会社」や「教室」に対して、部分としての拠点を示すものである必要がある点が指摘される。それゆえ、「会社」「企業」「銀行」「学校」などとは結合しにくい。「外国」はこれらの名詞と結合し、「外国企業」「外国銀行」のように、日本以外の国の組織という意味で用いられる。

次に、表からうかがわれる組み合わせの傾向を考えると、①日本の団体・組織がほかの国で活動を行う場合、「海外」を用いた語が一般的である、②「外国」は、日本以外の国をあ

らわすのが普通で、日本の団体・組織が海外に設けた拠点の意味では一般に用いられない、③「国外」は、「海外一」が生産的であることから、あまり活用されていないが、「国外支部」のように、意味的には「海外」と同様の役割を果たしうる、④「在外一」は、多くが「海外一」で言いかえられるが、「在外公館」は慣用的な言い方であり、「海外一」としにくい、⑤「アメリカ企業」など、具体的な国名が前部分にくる場合、「外国」と同様、主体の意味で解釈されやすいが、「支店」の「支」や「分校」の「分」など、母体が日本国内にあることを予想させる要素が含まれている場合は、まぎらわしさが減り、結合例が見いだしうる、といったことが指摘できる。ただし、「海外一」は「海外企業」「海外銀行」のような例においては、「海外の国の企業」「海外の国の銀行」の意であり、日本の企業・銀行が海外に展開したものの意味ではなく、また、「外国一」も「外国子会社」の「子」のように、日本の親会社に対する下部組織ということがわかる要素が含まれている場合には、主体が外国の団体・組織ではなくなるので、注意がいる。日本側が主体で、外国に活動の場を広げる場合は、常に「海外一」、外国側が主体の場合は「外国一」というように統一されていけば簡単だが、現状では、そうっていない。

意味的に類似の名詞を集めて、それらを含む結合形の比較を行えば、どのような組み合わせの制限があるのかについて理解を深めることができる。ここでは、そのことの一例として、組織名詞とその活動の場所を示す名詞との組み合わせについて検討した。

6.3.3 物名詞の場合

物名詞を含む四字漢語について、問題となるケースについては、ほかの名詞との関連でとりあげるので、ここでは、組み合わせの実例を示すにとどめる。前部分として物名詞がくる場合の例には、次のようなものがある。

- ・人名詞：絵本作家 雑誌記者 本誌読者 名物会長
- ・組織名詞：絵画教室
- ・抽象名詞：仮面祭祀 金銭感覚 酸素濃度 食糧事情 心臓発作 物件情報
- ・場所名詞：住宅地域 脊梁山脈 名物球場 薬品工場 洋画劇場
- ・時間名詞：黄金時代 聖書時代 文字以前

後部分に物名詞がくる四字漢語は、以下のようなものである。

- ・人名詞：遺族年金 同人雑誌 婦人雑誌 民族衣装
- ・組織名詞：球団資金 自社商品 自社線路 自社路線
- ・抽象名詞：一般雑誌 医療器具 化学肥料 健康飲料 抗生物質 交通標識
- ・場所名詞：世界地図 地上線路 道路地図 脳内麻薬 舞台装置 露天風呂
- ・時間名詞：初期作品 初期長編

6.3.4 抽象名詞の場合

6.3.4.1 具体名詞としての用法が一般的でない二字漢語

抽象名詞は、数が多く、さまざまな四字漢語の構成要素として用いられることは、これまでも見てきたとおりである。ここでは、抽象名詞が具体名詞として用いられる場合についてくわしく見ることにする。抽象名詞→具体名詞とは、たとえば「天才」がすぐれた才能という抽象的な意味をあらわすのに加えて、そのような才能をもつ人をあらわすというような現象をいう。あるいは、「景勝」が景色の優れていることに加えて、そのような土地をあらわすというような場合である。このような現象は、「建築」「監督」などについて、それらが「建てた物」や「監督する人」をもあらわすというように、サ変動詞語幹の二字漢語に関して指摘されることの多かったものであるが、「天才」「景勝」のように、「する」のつかない名詞についても確認できることである。この点について、『新明解国語辞典 第7版』を用いて確認する。単純な名詞として登録されている二字漢語のうち、「～すること」のような抽象名詞としての意味に加えて、「人」や「場所」の意味が記されているものを抜き出すと、次のように整理される。

- ・人名詞 (146)：偉才 先任 名代
- ・組織名詞 (10)：善隣 中農 敗軍
- ・物名詞 (129)：海産 少数 予備
- ・場所名詞 (15)：環海 景勝 弾着
- ・時間名詞 (6)：極暑 極寒 定休

語構成に関しては、「愛妻」「喀痰」「在俗」「製菓」「佩刀」のように、動詞要素が二字漢語の前部分にくるか、「海産」「近刊」「金製」「自筆」「新編」のように、それが後部分にく

るものが多くをしめる。これらは、現代語の用法として「する」をつけるのが一般的でないため、名詞として登録されるが、意味の面では、動作的な意味を含んでいるので、その点で「在宅」「自署」など一般のサ変動詞語幹と共通する。動詞的な要素を含まない二字漢語で、具体的な意味を有するものとしては、「凡愚」のように形容詞的な要素が前部分にくるものや「不才」「無銘」など否定をあらわす要素が前部分にくるもの、それから「外角」「世俗」「門下」など二つの名詞要素からなるものがあげられる。

このような抽象名詞としての用法と、それ以外の種類の名詞としての用法をもつ語に関しては、四字漢語の構成要素として用いられる場合について、どの用法で用いられているのかを注意深く判断する必要がある。その際、まず問題になることとして、抽象名詞以外での使用が一般的かどうかという点があげられる。たとえば、「補欠」は、欠員を補うことという意味のほか、人名詞として「補欠がいる」のように用いられるが、同じく人名詞の用法が記されることの多い「新入」の場合、「新入が」のような用例が容易には見つからないため、具体名詞としての安定性に不安が残る。このような点を人名詞を例にして検討する。まず、次のようなものは、人をあらわす用法が一般的と思われる。

逸材 顧問 主事 食通 前座 総務 側近 補欠 名代 有志

これらの多くは、単独で人をあらわす名詞として用いられる。これに対して、先に見た「新入」など、「新入社員」「新入部員」のように、前部分で用いられることが多い11語について、「朝日」の2003年版で用例を確認すると、次のようになる。

表3 抽象名詞と具体名詞をかねる語の用法

	単独用法	修飾用法	前部分	後部分
血縁	28	13	39	7
後継	98	35	553	7
後任	465	132	78	1
古参	2	9	11	13
新進	4	12	64	0
新卒	15	14	65	2
新入	0	2	340	0
世俗	3	6	65	0
前任	9	55	346	0
同業	7	39	258	0
独身	75	47	112	0

「単独用法」は、「後任がない」「新卒が育つ」など、二字漢語が単独で用いられる場合であるが、単独用法のうち、「後任の大臣」「新卒の社員」など、後にくる名詞を「～の」で修飾する用法については、これを「修飾用法」として、別個に扱った。「前部分」は「後任候補」,「後部分」は「大学新卒」といったように、語構成要素として用いられた場合の用法を示す。

表からは、「後任を選ぶ」における「後任」のように、単独で人名詞の意味で一般的に用いられる語がある一方で、「新入」「前任」「同業」などのように、「新入社員」「前任者」「同業者」など、合成語の前部分として用いられる用法が一般的であるものも見られ、人名詞としての用法が、各語に一律に認められるわけではないことがわかる。また、「新卒」と「新卒者」、あるいは「日系」と「日系企業」のような、似た意味で用いられる組み合わせについては、用例を観察すると、口語的な場面や見出しなどにおいては、「新卒」「日系」がよく用いられ、改まった場や文章では「新卒者」「日系企業」のほうがふさわしいというように、両者に文体的な差が見られる場合もある。

四字漢語の構成要素として考える場合、前部分としての用法においては、これらの二字漢語の意味を具体名詞ではなく、本来の抽象名詞として処理してよいであろう。つまり、

後継社長→後をつぐ社長／新入部員→新しく入った部員／同業他社→業が同じ他社

のように解釈し、「後継（人の意味）である社長」「新入（人の意味）である部員」「同業（組織の意味）である他社」のように処理する必要はないということである。そして、「新入」や「前任」など、抽象名詞としての用法に偏るものについては、その種類や特徴を検討しなければならない。

6.3.4.2 抽象名詞としての用法に衰えの見える二字漢語

先に、具体名詞としての用法があまり一般的でないような二字漢語について見たが、ここでは、反対に、本来は抽象名詞であっても、その用法が衰えつつあり、具体名詞としての用法のほうが一般的であるような場合を検討する。

現代語としては、すでに抽象名詞としての用法が一般的でない語の例として、まず「少年」があげられる。この語は「②年が若いこと。幼いこと。「其の中に一の女を見て／十訓抄七」

『大辞林 第3版』のように記され、抽象的な意味を古くは有していたことがわかるが、現代では、このような使い方は一般に行われていない。それゆえ、四字漢語の前部分に「少年」があらわれる「少年棋士」のような例では、「年が若い棋士」という解釈よりも、「少年である棋士」のように、人名詞が並んだものと解釈するのが自然である。

この例のように、ある二字漢語において、抽象名詞での用法が古い時代のものである場合は、現代語の用例については解釈が簡単である。その一方で、抽象的な意味が一般に国語辞典で認められているような語であっても、現在は具体名詞としての性格が強くなっていて、解釈に二義性が生じる場合があるのではないかと、というのがここでの疑問であり、以下で検討を加える。たとえば、組織名詞の「警察」は、「行政上の作用」という抽象的な意味に加えて、「機関」としての意味が記述されるのが一般的であるが、「民衆の生活を保護するために悪をふせぐおおやけの機関」(『三省堂国語辞典 第7版』)のように、一部の辞書では「作用」の意味を記していない。現代の日本語話者の感覚としては、「警察」の語に、「作用」の意味を意識しにくくなっていることの反映として、この辞書の記述をとらえるならば、「警察組織」「警察機関」といった語には、次の二つの解釈がなりたつ。

A：警察という活動を行う {組織／機関}

B：警察という {組織／機関}

つまり、作用の意味を意識する立場からすれば、Aの解釈になり、「警察」と「組織」「機関」との関係は、「行政組織」「司法機関」などと同様になるのに対し、抽象的な意味を意識しない話者にとっては、Bの解釈しかなく「会社組織(会社という組織)」「学校組織(学校という組織)」と同様の意味関係の語と見なしうる。

本節では、資料収集の段階で、このような語については、抽象名詞の意味を採用して、抽象名詞＋組織名詞の構成として扱っておいたが、組織名詞＋組織名詞という解釈も、考え方によっては可能であることを考慮するなら、二字漢語自体の意味のとらえ方が、四字漢語を構成する二字漢語同士の関係の把握に、びみょうに影響を及ぼす可能性があることを示す事例として注意される。このような現象は、人名詞としての用法をもつ「側近」「有志」などにも観察される。これらは、

側近：貴人・権力者などのそば近く仕えること。その人。

有志：ある事柄に、志や関心を持っていること。その人。(いずれも『岩国』より)

という意味をもつが、次のような意味で理解している話者も少なくないのではないかと思われる。

側近：地位の高い人につきしたがっていて、仕事を助けたりせわをしたりする人。

(『例解新国語辞典 第8版』)

有志：特に関心のある人 (『三省堂現代新国語辞典 第4版』)

抽象的な意味を意識する場合には、「側近議員」「有志ボランティア」は抽象名詞＋人名詞という解釈になり、具体的な意味しか意識しない場合には、人名詞＋人名詞という解釈が強くなる。

以上のような二字漢語は、現代語において、名詞としての所属に動揺の見られるケースとして興味深い。また、四字漢語の構成要素として見る場合には、単純に抽象名詞あるいは人名詞などというような分類が施しにくい例として、注意して扱う必要がある。

6.3.5 場所名詞の場合

場所名詞について、問題になる部分については、すでに述べてきたので、ここでは、場所名詞＋場所名詞の語について、用例を示すにとどめる。

- ・ Aにある B：海上都市 空中庭園 空中都市 地下迷路 地方都市 天上世界
- ・ Aのある B：油田地帯 要塞区域
- ・ 基準 Aに対する B：基地周辺 自宅周辺 地球全土 都内各所

6.3.6 時間名詞の場合

6.3.6.1 前部分として

時間名詞が四字漢語の前部分として使われる場合、組織名詞と方向名詞以外の名詞との結合例については、資料とした文芸雑誌から用例が得られた。ただし、組織については「戦後国家」のようなものが例になると考えれば、結合自体が不自然なわけではないようである。方向名詞については、「未来方向」「現代方面」とか、時間名詞が後部分になっている「垂直

以降」「北東時代」とかいった言い方が極めて不自然であるように、両者を結合させて何かを表現すること自体が制限されている。「南東方向」「関東方面」の「南東」「関東」のような具体的な方向・方面をあらわさず、「近代以降」「大学時代」の「近代」「大学」のように、ある時点をあらわすこともないため、どんな意味なのか判然としない。「法律方面」のような「方面」の使い方、「現代文学方面」のような言い方ならありうるかもしれないが、「現代」のみでは、そのような使い方として了解することも難しい。したがって、時間名詞と方向名詞との結合は、一般的ではないと見なしておく。

ほかの種類の名詞と結合した例としては、次のようなものがあげられる。

- ・人名詞：現代作家 現代詩人 現代青年 初代会長
- ・物名詞：初期作品 初期長編
- ・抽象名詞：夏季大会 近代美術 現代科学 今次国会 時代小説 正月行事
- ・場所名詞：現代都市 未来都市

いつの作家であるのか、あるいは、いつの社会であるのかを示すために、「現代」や「未来」が修飾要素として用いられている。これらの多くは、「現代の作家」「初代の会長」のように、「AのB」で表現することも可能であるが、「?夏季の大会」「?秋季の大会」「?今次の国会」など、「の」を入れた言い方があまり一般的でないケースも見られる。これらは、話しことばとしては「夏の大会」「秋の大会」「今の国会」が普通であり、それを書きことばとして表現する場合には、「の」を使わずに四字漢語で短く表現することが優先され、「の」を入れるなら「夏の大会」などで十分だとの意識がはたらくなどするためであろう。「最終結果」に対しては、「最終的な結果」が句として対応しており、「最終の結果」は出現しにくい。

「現代社会」と「近代社会」、「夏季大会」と「秋季大会」、「初期作品」と「後期作品」のように、時間に関して細分化したい場合には、時をあらわすさまざまな二字漢語が存在しているので、これらを使えば容易に単語がつかれるように感じられるが、四字漢語で簡単には表現しにくい場合もあるようである。たとえば、過去の事柄についていう場合である。時間区分に関し、「近代—」などに対して「現代—」の形式の各語があり、今の時間をあらわすのに「現在時刻」が存在する。また、「未来都市」「未来社会」のような「未来—」の言い方や「将来世代」のような言い方が、今より先のことについて語る場合に使用可能である。これに対して、「過去」「昔年」「昔日」「昔時」「以前」などでは、前部分としての使い方が一

般的でない。それゆえ、上述の四字漢語のうち、「現代青年」（「現代学生」のような言い方もある）のような言い方は、話しことばにおける「今の若者」「最近の若者」に対する書きことば的な表現と解釈することができるが、これに対する「昔の若者」「以前の若者」などに対しては、適当な単語は存在せず、「過去青年」「以前学生」とは言いにくい。無理に四字漢語で表現する必要はないと考えれば、話しことばの表現をそのまま書きことばにおいても使用すればよいと思われるが、実態としては、過去をあらわす単語の不足を補う形として、「既往」を用いたものが散見される。

既往洪水 既往債権 既往施策 既往障害 既往資料 既往最高潮位（六字漢語）

これらは、「過去 {の／に起こった} 洪水」「{過去／これまで} の資料」などに対応する意味を単語で言いあらわしたものであり、「既往症」「既往歴」など、既存の「既往一」の語からの類推によってつくられたものだと考えられるが、「既往」が話しことばで用いられるような、一般的なことばではないため、「現代」「現在」や「未来」「将来」など、現在やこれからについて表現する場合に用いられる造語成分と比べて、文体的にアンバランスになる点が問題として残る。「過去問」と同様の意味で「過去問題」が用いられることもあることを考えれば、「過去」を造語成分としてなじませていくほうが賢明なようにも思われるが、言いやすさなど、ほかの点で「過去」には問題があるのかもしれない。

このように、さまざまな事柄を言いあらわす二字漢語が発達しているとはいえ、それらを要素として、いつでも容易に四字漢語の形成が行われるわけではない点には、注意が必要である。

6.3.6.2 後部分として

時間名詞が後部分として出現する四字漢語には、次のようなものがある。

- ・人名詞：学生時代 少年時代 青年時代
- ・組織名詞：高校時代 大学時代 中学時代 中高時代
- ・物名詞：黄金時代 聖書時代 文字以前
- ・抽象名詞：還暦前後 現役時代 現実時間 日照時間

「高校時代」「大学時代」などは、「高校生時代」「大学生時代」の意味に相当する表現であると考えれば、人名詞に準じるものとして扱うことが考えられるものの、「小学校時代」と並行的な表現であると考えれば、組織として扱うことも不当ではないため、一応、組織として扱っておいた。「黄金時代」などの場合、単純に「AのB」に置きかえることはしにくいですが、このような、「AのB」への置きかえがしにくい類例に「一人生」という言い方がある。「教師人生」「作家人生」「野球人生」などの語や、次のような使い方が見られる。

○平岡さんの俳優人生としても、…… (NHK 総合。2013. 9. 19)

○なかなか楽しい警察官人生でした。(テレビ朝日。2013. 10. 19)

句として表現するのであれば、「としての」のような形式を用いるべき意味が「一人生」によってあらわされている。ただし、「野球人生」あるいは「相撲人生」などの場合には、さらに「野球選手としての人生」「相撲取りとしての人生」のように、人をあらかず適当な表現を補って理解する必要がある。

このほかに注意される表現として、時間名詞と時間名詞が結合したグループのうち、「後期近代」「前期近代」のように、前部分が限定要素、後部分が時代区分をあらわす名詞である四字漢語があげられる。これらは、「近世初期」があるように、「近代後期」「近代前期」のように、時代区分を前にもってきた言い方も可能である。概念的な意味としては、同様の事柄をあらわしうる点が、時間名詞を含むほかの四字漢語と異なるところである。ただし、文章・発話の流れを視野に入れた場合、「明治時代のはじめのころ」「大正時代の最後」といった句に対応する語としての表現としては、「近代前期」「近代後期」などの言い方のほうが自然であり、順番が逆になった「前期近代」「後期近代」のような言い方は、文章の中でつくられた表現というよりは、専門的な単語、もしくは、見出しや表中で用いる単語として、文章・発話から独立してつくられた語、といった性質が強くなる。

6.3.7 方向をあらわす名詞の場合

表1で見たように、方向をあらわす名詞を含む四字漢語は数が少なく（「方向」自体もここに含めておく）、それが前部分と後部分にくる場合とをあわせたとしても、3例しか適当なものが見あたらなかった。「垂直方向」「水平方向」「外野方向」である。

そこで、ここでは2003年版の「朝日」を使い、『分類語彙表 増補改訂版』の「方向・

方角」カテゴリーにおさめられている二字漢語（「する」のつく名詞をのぞく）について、それが合成語の構成要素として用いられる場合を調べた。どのような組み合わせがあるのかを示したのが、後の表4である。

表には、方向名詞が方向をあらわすという、本来の意味で用いられているものを記載しており、方向名詞が特定の場所をあらわす名詞として用いられているようなケースは、のぞいている。たとえば、「東北出身」「南方施策」などにおける「東北」は、本州の東北地域のことをあらわし、「南方」は「特に、戦前、東南アジアの諸国や南洋諸島をいった」（『大辞林 第3版』）のことであり、場所の意味が加わっている。このような場所の意味で使われているのか、本来の方向の意味で用いられているのかは、方向名詞を含む合成語全体の意味から慎重に判断する必要がある。「東北」と聞くと、場所としての「東北」が思い浮かびやすいが、「中国東北」のような場合には、方向の意味をあらわしているというようにである。

6.4 「名詞+名詞」の語における重言

物名詞と物名詞が結合してできる四字漢語としては、次のようなものがある。

金属製品 砂糖原料 植物辞典 表紙装丁 名作短編 洋服筆筒

「金属製品」では、「金属」が「製品」の材料に相当し、「洋服筆筒」では、何のための「筆筒」なのかを「洋服」があらわしている。ここでは、「名作短編」のような語について、重複の問題を検討する。重複は、同じ要素が余分に繰り返されることで、「東京に上京する」「後で後悔する」のような言い方が例としてあげられる。これらの場合、「上京」の「京」や「後悔」の「後」が、すでに「東京」「後で」の意味を含むので、文中に改めて表現する必要がない。ただし、「東大病院に入院する」のように、語内部の要素よりも、文中に示す語に具体的な情報が加味されていれば、許容されやすいケースもあることが知られている。このような観点から「名作短編」を見た場合、「名作」の「作品」の意味と「短編」が重複しているように思われるが、この場合、単なる作品ではなく、小説や映画などの作品であって、彫刻や陶芸の作品ではない、という限定が加わっているので、重複ではないととらえることもできる。

表4 方向をあらわす名詞を含む合成語（外来語などとの結合例も含む）

	前部分	後部分
方向	方向音痴	水平方向 垂直方向 都心方向 東西方向 基地方向 左翼方向 中堅方向 投手方向(以上三つは野球関連)
一方		
他方		
両方		日米両方(の国籍を持つ)
対岸	対岸ラオス(との間の中州に仮設小屋ができる)	人工島対岸(のゴルフ場開発で出た残土)
水平	水平方向 水平距離	
斜交		
垂直	垂直方向 垂直尾翼	
鉛直	鉛直方向	
風向		
途方		
先途		
方面		本州方面 関西方面
城東	城東地域(不動産で)	
城西	城西地域(不動産で)	
城南	城南地区(不動産で)	
城北	城北地域(不動産で)	
洛東		
洛西		
四方	四方八方	
六方		
八方	八方美人	四方八方
十方		
方位	方位磁石 方位磁針	
方角		
風位		
恵方・吉方		
鬼門		
東西	東西方向 東西両社 東西交通	古今東西
南北		
北東	北東地方 北東方向 (山の)北東斜面	
東北		中国東北
東南		
南東	南東方向 南東地区	首都南東(の野菜市場)
南西	南西方向 南西諸島	首都南西
西南	西南海岸 西南地域	
西北		
北西	北西地区 北西方向	
極北		
極東		
中東		
東方	東方海域	
西方		九州西方 中国西方 首都西方
南方	南方海上	
北方	北方領土	首都北方 帝国北方
東部	東部海岸	同市東部
西部	西部地区	
南部	南部地域	同国南部
北部	北部方面	同国北部
以東		本州以東
以西		本州以西 関西以西 関東以西
以南		関東以南 本州以南
以北		関東以北

このような重言的な問題をさけたいなら、「名短編」のように、名詞要素を含まない「名」を使用するという選択肢がある。物名詞＋物名詞の四字漢語において、重複の意識が生じる可能性のある表現を以下にまとめて記す。なお、後部分が和語や外来語であるケースもあわせて例示する。

表5 名詞＋名詞の合成語における重複感の度合い

A	悪性腫瘍 旧式車両 軽量シャッター 高額商品 高級食品 硬質素材 長寿番組 長身選手 軟質金属
B	温製料理 古参会員 新刊書籍 新進作家 短編作品 長編作品
C	快作漫画 旧作映画 高所地域 小身旗本 新人隊員 短文随筆 名作文学 名物商品
D	軽装ファッション 好物料理 古刹寺院 弱点部分 終盤時期 新患患者 深層部分 中盤段階 本館ビル 名作作品 名刹寺院

Aの語は、「悪性腫瘍→性質が悪い腫瘍」「高額商品→額が高い商品」のように、「悪」「高」などの形容詞的な要素が直接かかる相手は、前部分の「性」「額」などである。「性」や「額」は、「腫瘍」や「商品」のもつ性質の一つであり、同じ要素が繰り返されているわけではないと判断されるので、この場合は、重複の感は生じにくい。次に、Bは「製」「刊」のように、動作的な意味が前部分の語に含まれるケースで、これらは単独でも「料理」や「書籍」の意味をもっているが、うしろに「料理」「書籍」がくる場合には、「あたたかく用意した料理」「新しく刊行した書籍」のように、動作的な意味で解釈することが可能であるため、この場合も重複と考へなくてすむ。Cは、前述の「名作短編」のような場合で、「旧作」「新人」よりも具体的な情報が「映画」「隊員」によって加えられるので、許容されやすい表現だが、意味的には、「旧映画」「新隊員」のような語でもじゅうぶん言い表すことができる内容である。最後のDが重複の感が生じやすいもので、たとえば「古刹」には「寺」の意味がすでに含まれるので、「寺院」は余分である。前部分の二字漢語で十分なところに、その意味の把握が不十分なため、同様の意味をもつ語を後につなげてしまうという仕組みによる。句として表現する場合、形容詞や形容動詞などの修飾要素と被修飾要素である名詞とは、通常、別々の語で表されるのに対して、二字漢語には、すでに形容詞＋名詞の構造をもつものが多く、それらとほかの名詞を結合させて四字漢語など大きな単位の語をつくる際に、要素間の関係に対する意識が働きにくくなる傾向として解することもできる。

6.5 おわりに

以上で見てきたことについて、名詞の種類ごとに要点をまとめる。

人名詞は、前部分としても後部分としても、様々な四字漢語の形成にかかわっている。前部分として使用される場合、時間名詞や方向名詞とは結合しにくい、この点はそれぞれの名詞について述べる際にふれる。名詞同士の意味関係に関して、「市民病院」「女子大学」や「児童公園」「社員食堂」など「人のための{組織/場所(施設)}」と解されるようなケースは一般的であり、語例が少なくない。一方、「学生劇団」「市民団体」など「人による組織」の四字漢語は、比較的、容易に見つかるが、「人による場所(施設)」と解される四字漢語は、一般的でない。個人または数人から構成される「個人銀行」の場合「個人のための銀行」だろうかという迷いが初見では生じそうだが、職員の使う「職員便所」を「職員による便所」と迷うことはないように、後者のような人名詞と施設を表す名詞とが結合した四字漢語においては、解釈は一義的であるのが普通である。これは、施設と呼びうる場所は、一般に公共団体や企業が設立の主体であり、個人が行うことではないという、現実に関する知識が背景にあるためではないかと推測した。後部分として使われる場合、結合する名詞の種類についての制限は、方向名詞との結合が一般的でないことぐらいである。

組織名詞は、人名詞と同じようなふるまいを見せ、前部分としても後部分としても、盛んに用いられる。前部分として使われる場合について、「人名詞+物名詞」との比較を行い、「婦人雑誌」など「人のための物」という意味関係の語が少なくないのに対して、「組織のための物」という意味関係をもつ語が一般的でない実態を指摘した。そして、①組織名詞が前部分である場合、「自社商品」または「工場製品」は、「{自社/工場}で作っている品物」つまり「{自社/工場}による品物」と解釈されやすいこと、②「企業向け製品」など「一向け」の形式によって、「組織のための物」が表現されやすいこと、などを確認した。普通、企業などの組織は生産者であり、個人などの人は消費者であるという常識があるため、これと異なる「企業=消費者」であるようなケースを表現するには、関係性をはっきりさせるために「向け」が必要になるということではないかと考えた。後部分として使用される場合について、資料中には時間名詞と結合した例がなかったが、「近代国家」「近代企業」などをこれに相当するとすれば、方向名詞以外とは、結合例が見られるということになる。

物名詞は、ほかの種類の名詞との結合に際して、特別に制限があるという事実は認められず、多くの四字漢語の要素として用いられる。

抽象名詞は、数が多く結合パターンも多様である。抽象名詞について、顕著な特徴は、具

体名詞としての用法を獲得し、抽象名詞と具体名詞両方の使い方が行われるものが少なくない点である（具体名詞が抽象名詞になることは一般的でない）。それゆえ、たとえば「新入」には動作の意味と人の意味とがあり、「新入部員」のような結合形に対しては、「抽象名詞＋人名詞」という解釈と「人名詞＋人名詞」という解釈の二つがありうることになるが、「新入」の場合は「新入部員」「新入社員」のごとく、前部分として用いられることが多く、単独で人を表す用例があまり見られないことから、「新しく入った{無音/社員}」のように「抽象名詞＋人名詞」という解釈をするのが適切であろうと主張した。一方、「警察」「側近」などの場合は、単独で人を表すことばとして用いられることが多く、抽象名詞としての意味が意識されにくくなっており、「警察組織」「側近議員」は、「抽象名詞＋組織名詞」「抽象名詞＋人名詞」ではなく「組織名詞＋組織名詞」「人名詞＋人名詞」と意識されつつあるのではないかと指摘した。具体名詞としての意味・用法を有するとされる抽象名詞の中にも、具体名詞として意識される度合いには強弱があることを述べたものである。

場所名詞は、後部分として使われた場合、「学園都市」（組織名詞＋場所名詞）、「露岩地域」（物名詞＋場所名詞）、「工業都市」（抽象名詞＋場所名詞）など「A ノ存在ヲ特色トスル所 B」という意味関係になるものや、「市民球場」（人名詞＋場所名詞）、「公共用地」（抽象名詞＋場所名詞）など「A ノタメニ使ウ B」という意味関係になるものが多い。「植物公園」のような「物名詞＋場所名詞」の場合、「植物の存在を特色とする所」なのか「植物のために使う所」なのか、はっきりとわけにくい。両方の意味を兼ね備えていると考えることもできそうである。また、「組織のために使う所」という意味関係の語が見つけれなかったが、理由はよくわからない。「工場用地」などが例となるかとも考えたが、「場所名詞＋場所名詞」と見るのが適切だという考えも成り立ちそうである。「人名詞＋場所名詞」が「A ノ存在ヲ特色トスル所 B」の意味関係になる例も一般的でない。三字漢語の「学生街」は、例外的なケースである。「児童」「学生」「青年」「老人」「男性」「女性」などが恒常的に特別に多く存在していることで特徴づけられる「地方」「地域」「都市」「地帯」などが一般的でないという理由によるものであろうか。

時間名詞は、前部分として使用される場合、「現代作家」「初期長編」「近代美術」「未来都市」のように、方向名詞をのぞくほかの種類の名詞とは結合形が見られる。問題は、後部分として使用される場合である。「20世紀初頭」「日照時間」「大会前半」など、「初頭」「時間」など後部分の時間名詞に対して限定を加えるために、一定の長さをもった期間や現象・活動を表す名詞が前部分に必要とされると考えるならば、「時間名詞＋時間名詞」「抽象名詞＋時

間名詞」の結合が基本的なパターンであり、それ以外の名詞との結合は、個々の時間名詞における拡張的な用法と見るべきではないかと思われる。論考の中では、この点について、扱いが厳密ではなかった。このように考えれば、「一日程（行事日程）」「一日時（大会日時）」「一期間（冬期休暇期間）」「一周期（五年周期）」「一以来（一昨年以来）」「一上旬（来月上旬）」など、多くの時間名詞において、前部分には、通常、時間名詞あるいは抽象名詞がくるものだと理解することができる。そして、「一時代」の場合は、「徳川時代」「石器時代」「鎌倉時代」など、その時代を特徴づける事柄を表す名詞として、時間名詞・抽象名詞以外にも、さまざまな種類の名詞と結合する点で特別な性質をもつというように記述することができるだろう。このような拡張的な用法は、個々の時間名詞について確認する必要がある。たとえば、「一以前（三月以前）」「一元年（平成元年）」などは、前部分に時間名詞がくるのが基本的な用法だが、「常識以前」「サッカー元年」など、抽象名詞と結合する用法があり、後者では比喩的に用いられている。「一以来」の場合も、規範的に見れば、いまだ俗用という段階なのかもしれないが、「{高校／大学}以来会っていなかった友人」や「学生以来のこと」など「時代」を省いたような表現も、インターネットなどでは使用例が見られるため、拡張が生じつつあるケースとして注意される。時間名詞の意味・用法の拡張の問題として、今後、事例を収集・検討する必要がある。

方向名詞は、前部分として使用される場合、「南西方向」のように「方向」と結合するか、「南西諸島」のように場所名詞と結合するのが通常の用法である。方向名詞は、空間上の向きにかかわる名詞であるため、場所名詞と関連性が見られるのは当然であるとも考えられる。「六時方向」のように、時間名詞と「方向」が結合した場合でも、「六時」は実質的には南を指しており、字義どおりに時間を表す名詞として用いられているわけではない。したがって、このような本来の意味からずらして用いられるような場合をのぞくと、場所名詞以外のものとは、一般に結合することがない。後部分として使用される場合も同様である。

以上、ここでは、名詞＋名詞の構造をもつ四字漢語について、名詞同士の組み合わせにどのような意味的な制限が見られるのかについて検討してきた。あまり、注目されてこなかった内容ということもあり、名詞をいくつかの種類にわけた上で、組み合わせについて手探りで考察することになった。したがって、それぞれの種類の名詞に共通して見られる組み合わせの制限は何なのかなど、考えが及ばなかった点も多々ある。また、人名詞、場所名詞というように、個別のグループごとにとりあげて、さらに詳細に検討する必要もあるだろう。

なお、名詞と名詞との関係が複雑なタイプの語をより多く集める必要があるが、その際、

辞書に登録される語彙的な四字漢語と、文章などの中で臨時的に用いられる四字漢語とにわけて考察する必要がある。前者の例としては、会社に対する帰属意識が強いことを表す「会社人間」があげられる。この語は、「会社の人間に聞いてみる」などにおける「会社の人間」とは違う、特別な意味を有している四字漢語として辞書に立項される。一方、たとえば、

○学部教授会が学長の決裁の下に、ストライキを決議した学生大会の議長以下九名の責任者の停学処分を発表した夜、経済学を専攻する学内自治会副委員長が単身、私の家を訪問した。一言いうたびに、相手の反応をたしかめるように鋭く凝視する目つきは、あたかもみずからに不動の真理がそなわっているかのようだった。(中略)「経済学部の教授がたが反対声明を出したかね。私はまだそのことは聞いていない。有志の声明は出された。慎重な審議が望ましいとね。それが反対かね」「反対です」茶菓子を出した典子のほうなど見むきもせず、政治青年はきっぱりと言い切った。

(高橋和巳 (1962)『悲の器』新潮文庫)

における「政治青年」の場合、やはり「政治の青年」というような単純な言いかえはできないが、文脈を支えとして、おおよそ、政治的な活動に深くかかわる青年という程度の解釈が、さほど困難もなく行われうる(文章中、「政治青年」よりも前に「政治」や「青年」が使用されているわけではないので、前に出現した語を利用して作られた語ではない)。このような、創造的な臨時の名詞+名詞の四字漢語は、おそらく文芸作品などの中で、頻繁にはなく時たま出現する性質の語なのではないかと思われるが、実例が乏しいので、収集と意味的な特徴の分析を今後行わなければならない。

7. 三字漢語・四字漢語の形成における注意点

7.1 はじめに

ここまで、IVにおいては、三字漢語と四字漢語を中心的にとりあげ、語構成や意味について論じた。まず、現代語で非常によく用いられる接頭辞的な一字漢語の例として「新」と「同」を選び、その特徴を記した。次に、接尾辞的な一字漢語の問題として、「一内・一内部」「一制・一制度」のように、類義の二字漢語が多く存在する点に着目し、一字漢語と二字漢語のいずれが語の要素として用いられやすいのか、どちらも用いられる場合には、どのような使い分けがあるのかといった点について、大量のペアについて検討した。

次に、四字漢語について、国語辞典との関係および名詞＋名詞の四字漢語を中心的なテーマとして考察した。二字漢語と異なり、四字漢語は、あまり国語辞典に立項されることがないとされるが、「心筋梗塞」など辞書にのる四字漢語も、ある程度は観察される。どのような場合に、四字漢語全体で辞書に登録する必要があると判断されるのかを考察した。最後に、二字漢語＋二字漢語の組み合わせにおいて、もっとも数が多いとされる名詞＋名詞の四字漢語を対象として、組み合わせにどのような意味的制限があるのかを分析した。名詞には、人名詞や場所名詞などがあるが、これらが自由に結合するわけではなく、組み合わせが成立しにくい場合もあることなどを指摘した。以下では、一字漢語や三字漢語を語構成要素として、新たな概念に対応する語をつくる際の検討項目について述べる。

7.2 造語における検討項目

すでに述べたように、現代では、新たに二字漢語をつくるのは困難になっており、新しい概念に対応する新語をつくるには、接辞と二字漢語からなる三字漢語や、既存の二字漢語を組み合わせた四字漢語などが中心的になる。その際、①接辞として一般的かどうか、類義の二字漢語などを用いたほうが理解しやすい表現になるかの検討、②二字漢語を組み合わせる四字漢語とした場合、二字漢語同士の意味関係が明確であるかの検討、③余分な表現が語自体あるいは前後の表現の中に含まれていないかの検討、といった点が、わかりやすく無理のない表現とするためのチェック項目となる。接尾辞的な一字漢語については、たとえば「料」と「料金」など、二字漢語との比較をIVで行ったが、接頭辞的な一字漢語においても、たとえば「直取引」「直談判」の「直（じか・じき）」に対する、「直接談判」「直接交渉」の「直接」のように類義の二字漢語が存在する場合があります。「直・直接」の場合は、「直接」のほうが多くの合成語の中で用いられている。このような、接頭辞的な一字漢語と似た意味を

もつ語や句表現については、後掲の「資料」に一覧の形で示してある。

四字漢語の中に、本来なら、いらないと考えられる二字漢語が含まれていることがある。

○本日、途中休憩はございません。お手洗いは事前にお済ませください。

(東京・ニッショーホールロビー。2014. 7. 26)

「休憩」は、何かの途中で一時的に休むことを意味するので、「途中」が不要である。催し物などで、始まる前の時間は「休憩」ではないから、ほかの「一休憩」との区別のために「途中休憩」が必要になるわけでもない。ただし「本日、休憩はございません」だと、落ち着かない感じがするという意見もあると思われるが、その場合は「本日、休憩時間は{ございません/設けておりません}」などの言い方にすれば、この問題は解消する。強調のためという考え方もありそうだが、話し手や書き手が、実際に強調という目的を意識しているかどうかは、簡単に第三者が断定できるものではないので、安易に強調という理由で説明すべきではない。

接辞を含む語においても、同様のことがある。「婉曲」は、「婉曲的に(言う)」というような形で用いられることがあるが、「婉曲」は形容動詞であり、本来「婉曲に(言う)」で十分だとされる。筆者は、「的」をつけた言い方になれていて、「婉曲的に→婉曲に」との指摘を受けた際は、一瞬とまどったものの、確かに「婉曲に」で間に合うと納得したという体験がある。重言について、指摘された側では、「誤用と違い、内容が誤って伝わるわけではないからよいではないか」「揚げ足取りだ」という感情を抱きやすい。それゆえ、冗長である理由の説明と、代わりとなる簡潔な表現の提示が決定的に重要である。

122 ページの資料にも示したように、接頭辞として用いられる一字漢語と副詞などとの組み合わせによって生じる重言は、数が多い。接頭辞と意味的に重なる表現が隣接しているケースとしては、「改めて再認識」「いまだ未解決」「まだ未提出」などがある。一方、接頭辞と、意味的に重なる表現との間にほかの表現が入るケースとしては、「各世帯ごとに」「過半数を超える」「既分譲済(み)」「再出発し直す」「第一日目」「対前年度比」「築百五十年経って」「満十周年」「約一年ほど」「毎日曜日ごと」などがあげられる。後者については、一覧にない例として、「奪三振を奪う」または「諸先輩たち」「諸先輩方」「諸先生方」のような表現が追加できる。新聞や雑誌など、校正・校閲をになう人のいるメディアでは、通常、見られない表現であるが、個人のツイッターやブログなどでは、頻繁に用いられている。「奪

三振」は、

○西武の先発・菊池は9回無失点、14 奪三振の好投を見せた。(読売新聞。2014. 8. 14)

のような形で用いられるのが普通であるが、新聞でも地方版などでは、次のような記事が散見される。

○完投の佐藤は相手打線を3安打に抑え、11 奪三振を奪う好投を見せた。

(読売新聞大阪朝刊徳島。2011. 9. 11)

○斉藤は投げても11 奪三振を奪う好投で、東海大相模は九回に1点奪うのがやっとだった。(毎日新聞地方版／神奈川。2013. 5. 4)

「諸一」は、「多くの」の意をもち、後にくる「たち」「方(がた)」などと意味が重なる。複数を示すには「諸」か「たち」「方(がた)」などのいずれかでよいこと、複数性に加えて敬意を表したいなら「方」のみでよいことなどがはっきりと認識されていない場合に、上記のような表現がなされるようである。「第一日目」「第一回目」なども、「目」のほうは、順序を示すことばだとはっきりしているが、「第」のほうは、順番の意であることがそれほど強く意識されずに、「第一日目」といっても、それほど不自然ではないと感ぜられるようである。「既分譲済(み)」「約一年ほど」などの場合に、「既」と「済(み)」、「約」と「ほど」が比較的どちらも意味がはっきりしていて、修正しようという意識が起りやすいのとは、わずかなりとも程度の違いがあると考ええる。もちろん、いずれについても、語ごとの意味を明確に把握している話者にとっては、受け入れがたい表現であろうことはいままでもないが、個人差があることも無視できない事実である。

7.3 接辞抜きでも済むケース

重言というほどではないものの、ある接頭辞を省いたとしても、それがついている場合と同等の意味を表しうる場合というのがある。これは、ワカバヤシ(1936)で指摘された問題であり、たとえば「在満州」などにおける「在」については、「実際ワ「在-」ヲ全然ハブイタダケデスムバアイガ多イ」「在満州ノ日本軍」ワ「満州ノ日本軍」(ワカバヤシ(1936, p. 62))のように記されている。「在満州の日本軍」のほうは「満州にいる日本軍」の意であること

がはっきりした表現であるのに対して、「満州の日本軍」のほうは、「A(場所)のB(人・組織)」という形式と用いられる語の意味から、「AにいるB」であることが理解されるという違いがあるものの、「～の～」は基本的な形式であり、後者の言い方で特に理解しにくいわけではない。ワカバヤシは、ほかに「有資格者」は「単ニ「資格者」デヨイ」、「要注意」は「単ニ「注意」デスムバアイガ多イ」などと述べている。これらの場合も、「有」や「要」に相当する意味を本来的に「資格者」や「注意」がもつというわけではないので、やはり重言とは異なるが、表現を簡潔にするという点では、共通性が見られる。

7.3.1 「要一」の語

以下では、「要」を例として、どんな場合に「要」がなくても済むのかを具体的にみる。「要」は、「要確認」「要検討」「要注意」「要相談」「要注目」「要予約」「要冷蔵」など、サ変動詞語幹の二字漢語と結合した例が多く、「その動作を行うことが必要である」という意味を表す。わずかながら、「要問い合わせ」「要申し込み」など、和語複合動詞の連用形と結合した語も見られる。

道路脇の看板などに「要注意」と記して、交通事故などへの注意喚起がなされることがあるが、「注意」と書かれていることもあり、どちらも看板を見た人に注意を促す点で共通している。このような場合「要注意」と「注意」は、いずれを用いても意図した内容が通じる関係にある。ただし、命令に近い表現であるため、商品の客に対して示す「要相談」「要予約」「要冷蔵」などは、「要」抜きでは使いにくい。文中で同様のことがなりたつケースもある。

○ただし、カラーボックスなど、木枠の両面に化粧板を張ったパネルで作った家具には
注意。テープをはがす際、化粧板も一緒にはがれることがあるという。

(朝日新聞。2013.9.30)

この文では、「注意」が用いられているが、「化粧板が一緒にはがれることがある」ので、注意がいる、という内容を表しており、「要注意」を用いることも可能である。「注目」と「要注目」にも、同様の傾向が見られる。次の二つの文を比較されたい。

○精神的支柱の成田、高橋が抜けた NEC は、武富士で主将を務めた内藤が加入。フラ

ンスで2年プレーしたりベロ井野も要注目。(毎日新聞夕刊。2009. 11. 24)

○181センチと長身から投げ下ろす右腕・小俣は直球とカーブの緩急が身上。左打ち・山口の長打力も注目。(毎日新聞。2014. 6. 30)

これらの例における「注目」と「要注目」は、それぞれ置きかえが可能である。形式的には、「注意」「注目」しか文中にあらわれていないものの、文末で用いられているこれらの表現からは、「注意が必要です」「注目に値する」といった含意が読み取れるため、実質的には、「要注意」「要注目」と置きかえ可能な表現となっている。

7.3.2 「要―」の長い語の場合

このような、「要」を用いずに済むケースとして、さらに「(要+○○) +○ (○)」という形式をとる「要―」の語がある。たとえば、「要注意人物」は「要注意の人物」つまり「注意すべき人物」の意であるが、「注意人物」でも同様の意味を表しうる。ただし、「注意人物」に対して、「最近は多く「要注意人物」という」(『明鏡国語辞典 第2版』)のような指摘もあり、意味がほぼ同じであることと使用傾向とは区別される。同様のケースとして、「要救助者」と「救助者」というのがある。

○【図・写真】訓練で倒壊したビルから要救助者をつり上げる警視庁の国際緊急援助隊
(5日、東京都立川市)(日本経済新聞。2010. 3. 6)

○写真=ヘリコプターで救助者をつり上げる訓練(宝塚市内で)(読売新聞。2006. 1. 21)

実例の「国際緊急援助隊」のように、救助活動を行う側には、通常、何らかの名前がついており、助けられる側の意味で「救助者」という語が用いられる。助けが必要な緊急の場面であることから、「要」がなくても「救助が必要な人」の意で「救助者」が理解されうるため、上記のような言い方になる。もっとも、「救助された人」の意や「救助を行う人」の意で「救助者」が用いられているケースもあり、その場合は、「要救助者」とは意味が異なり、置きかえは不可能である。次は、「注意箇所」「要注意箇所」の例である。

○アンダーパスは、道路が線路の下を通るなど立体的に交差していることから雨水がたまりやすく、短時間の大雨でポンプなどの排水処理能力を超えた場合に冠水しや

すい。HP では地図と注意箇所の通称名などを記したリストを掲載した。

(読売新聞。2014. 6. 29)

大雨が降った場合などにおける「アンダーパス」(鉄道や道路の下を通る地下道(『大辞泉 第2版』)に起こる危険について述べた文であり、「注意箇所」から容易に「注意すべき箇所」という意味が引き出される。それゆえ、「要」がなくとも十分に意図した内容が伝わるが、「要」のついた「要注意箇所」もよく用いられる。

以上の例よりも、「要」を用いる必要性が高いケースに「要介護認定・介護認定」あるいは「要介護度・介護度」がある。「要介護認定」は、「介護保険法に基づき被保険者の介護サービスの給付申請を受け、どの程度のサービスが必要かを決定する認定」で、「必要度により、要介護五～一、要支援二～一、自立の八段階に分類される」(以上『大辞林 第3版』による)であるため、正式名は「要介護認定」、段階を示す際にも、要介護の度合いすなわち「要介護度」というように認識されやすい。

○24時間の訪問介護と訪問看護サービスは、事業所から30分以内の地域に住む要介護認定を受けた高齢者に対し提供する。(日経産業新聞。2012. 10. 24)

○特別養護老人ホーム(ことば)寝たきりなど自宅での生活が難しい高齢者を介護する施設。要介護度が3以上の人が8～9割いる。(日本経済新聞。2013. 8. 14)

しかし、介護保険制度にかかわる用語としては「要介護認定」であっても、常に「要」をつけないと、意味が伝わらないというわけでもない。次のような例がある。

○訪問看護サービス事業所の名称は「ルネサンス リハビリステーション」。介護認定を受けた高齢者に対し、在宅でのリハビリを提供する。(日経MJ。2014. 3. 7)

○厚労省は、待機者のうち、介護度が重い「要介護4, 5」で自宅で暮らしている約8万6000人(前回比約1万9000人増)について、入居の必要性が高いとみている。

(読売新聞。2014. 3. 26)

これらの場合、「要」はないものの、文脈も手がかりとなって、「介護認定→介護の認定→介護が必要との認定」「介護度→介護の度合い→介護が必要なその度合い」くらいの意味で

理解される。このようなことは、どの接頭辞であっても可能なわけではない。たとえば、否定を表す「未」が用いられた「(保険の) 未加入者」などの場合、文章の中で1度「未加入者」という形で示したから、2度目以降は「加入者」でも理解されるだろうということにはならない。「加入者」と「未加入者」では、まったく意味が異なる。一方の「要」は、「要」抜きの言い方から含意される「必要だ」「すべきだ」といった意味をはっきりと示す役割を果たしているにすぎず、否定の接頭辞のごとく、表す内容の客観的な違いにまでつながるわけではないので、前述したような現象が起こりうるのである。

以上のように、ある接頭辞を含む合成語において、接頭辞を省いた形で同等の内容を表現することが可能かどうかという観点から、漢語の接頭辞を分析することもできる。接尾辞の場合の例としては、「故障中」「休業中」などの「中」があげられる。『サザエさん⑦』（朝日文庫、1951年8月から1952年1月分の作品が収録される）には、こわれた郵便ポストの表面に「故障」というはり紙がえがかれている作品がある。現在では、このような場面に「故障中」という表現をとられることが多くなっており、「研究中」「運動中」などと異なり、人間の活動でない語に「中」をつけることの適否などが論じられることもある。その問題にここで踏み込むことはできないが、「故障」や人間活動の「休業」であっても、道具や店先のはり紙などに記す場合には、わざわざ「中」をつけずとも「故障」「休業」で十分読み手に意図が伝わる点が注意される。

資料 漢語の接頭辞およびそれと置きかえ可能な語と句

接頭辞	用例	類語	句
亜	亜熱帯		第二の～。～に次ぐ
悪	悪条件		悪い～。好ましくない～。まずい～
暗	暗褐色		暗い～。くろずんだ～
異	異民族		違う～。同じでない～
一	一個人		ある～。ただの～／すぐれた～ (「一見識」)
遠	遠距離		遠い～
温	温湿布		あたたかな～
過	過保護		過度の～。度を超す～。度が過ぎる

			～
下	下半身	した	した（がわ）の～
快	快進撃		すばらしい～。こころよい～
怪	怪文書		怪しい～。疑わしい～。不思議な～
該	該人物		その～。この～。当の～
各	各省庁		それぞれ（の）～。おのおの（の）～
活	活火山		活動している～／生きている～ （「活社会」）
管	管楽器	ふえ	
緩	緩斜面		ゆるやかな～。ゆるい～
既	既発表		既に～した
希	希硫酸		うすい～／まれな～（「希元素」）
貴	貴営業所		あなたの～／値段が高い～（「貴金属」）
擬	擬古典主義		見せかけの～。～になぞらえた
義	義兄弟	かり	義理の～
逆	逆比例	さかさま。反対	
旧	旧大蔵省		昔の～。古い～。以前の～。もとの～
急	急停車		急な～。突然の～／けわしい～ （「急傾斜」）
休	休火山		やすむ～
極（きょく）	極陰性		極端な～
筋	筋繊維	筋肉	
近	近未来		近い～
銀	銀世界	ぎんいろ	
軽	軽労働		軽い～。手軽な～。簡単な～
現	現内閣	今	今の～。現在の～

減	減ページ		～を減らすこと
原	原材料	もと	もとの～
古	古民家		古い～。昔の～
故	故山田氏		亡き～
誤	誤操作		あやまった～
好	好成績		よい～。好ましい～／美しい～ （「好青年」）
高	高学歴		高い～
抗	抗ヒスタミン		～に抵抗する。～を抑える
広	広範囲		広い～
公	公倍数		共通の～／公共の～（「公教育」）
後	後半生	あと。のち。うしろ	あとの～。のちの～／うしろの～ （「後半分」）
極（ごく）	極超短波		極端な～
今	今国会		この～／今の～（「今シーズン」） ／きょうの～（「今早朝」）
権	権大納言		定員外の～
再	再調査		二度目の～。再び（の）～。改めて～
最	最先端		もっとも～。一番～。
在	在ロンドン		～にある。～にいる
昨	昨十五日		きのうの～。過ぎ去った～／今の 一つ前の（「昨シーズン」）
至	至東京		～に至る。～まで
私	私生活	わたくし	個人の～。わたくしの～
死	死火山		生気がない～
自	自意識	自分	自分の～／～から。～より（「自九 時至十二時」）
直（じか・じき）	直取引	直接	直接の

七	七福神	なな。ななつ	
膝	膝関節	ひざ	
実	実生活		実際の～
弱	弱酸性		弱い～
主	主産地	おも	おもな～
終	終列車	おわり。おしまい	
重	重工業		大きい～／きつい～（「重労働」）
準	準決勝		～に次ぐ（辞書では「それに次ぐ」の意と記述される）
純	純日本式		まじりけがない～。純粹な～
諸	諸外国		多くの～。もろもろの～。いくつかの～
初	初対面	はつ	はじめての～。はじめて～。最初の～
女	女生徒	おんな	女性の～
小	小都市		小さい～
省	省エネルギー		～の消費を省くこと
少	少人数		少ない～
上	上天気	うえ（「上甲板」）	よい～。優れている～
新	新会社		新しい～
心	心不全	心臓	
深	深呼吸		深い～
真	真犯人		本当の～
正	正社員		正式の～／ゆがみのない（「正三角形」）
性	性教育	セックス	
聖	聖家族	サンタ。セント（「聖パウロ」）	神聖な～
赤	赤血球	あか	あかい～／むきだしの～（「赤裸

			裸」)
税	税控除	税金	
絶	絶不調		きわめて～。まったく～。
先	先場所		前の～
前	前校長		前の～／～に先立つ。～になるまえの（「前近代的」）
全	全国民	オール（「全日本チーム」）	すべての～。全部の～／全部で～（「全十冊」）
素	素粒子	もと	
粗	粗造成		大ざっぱな～／見かけの～（「粗収入」）
総	総支配人		すべての～。全体の～
続	続赤穂浪士	続編	
村	村議会	むら	
他	他町村	ほか。別	ほかの～。別の～。よその～
多	多方面		多くの～。たくさん～
駄	駄菓子		粗末な～。つまらない～
対	対共産圏		～に対する
大	大会社		大きい～。すぐれた～
耐	耐アルカリ		～に耐える。～におかされない
短	短距離		短い～
単	単細胞		一つの～
長	長距離		長い～
超	超党派	スーパー。ウルトラ	とびきりの～。極端な～
直（ちよく）	直輸入	じか	じかに～。すぐに～
珍	珍答案		珍しい～／滑稽な～（「珍道中」）
追	追起訴		あとからする～
低	低気圧		低い～
徒	徒競走	かち	歩く～

当	当大学		この～。その～。私どもの～
等	等間隔		等しい～。同じ～
同	同年配		同じ～／その～（「同事件」）
内	内出血	なか。うち	内側の～／内々の～（「内祝言」）
難	難問題		難しい～。困難な～
軟	軟口蓋		柔らかい～
濃	濃硫酸		濃い～
白	白血球	しろ	白い～
半	半病人		なかば～。半分～
汎	汎アジア主義	全。パン	すべての～
反	反政府	アンチ	～にそむく。～に反対する
非	非協力的		～でない。～しない
被	被選挙		～される
妃	妃殿下	きさき	
美	美少年		美しい～
微	微調整		かすかな～。わずかの～／細かい （「微粒子」）
病	病大臣		病気の～
貧	貧書生		貧しい～／貧弱な～（「貧打線」）
不	不明朗		～がない。～でない。～しない
副	副総理		次の～
弊	弊事務所		わたくしどもの～。手前どもの～
別	別世界		よその～。ほかの～。異なる～
母	母集団		親の～。もとになるところの～
亡	亡祖父	故	死んだ～
某	某青年		ある～
没	没個性		～がない。～に欠ける
本	本大会	きょう（「本三日」）	この～。その～。当の～／正式の ～。正しい～（「本建築」）

毎	毎土曜日	ごと	それぞれの～。
満	満五歳	まる	
未	未発表		まだ～していない。まだ～でない
密	密入国		秘密の～
明	明五月十五日		次の～。あくる～
無	無意識		～がない。～しない
名	名選手		名高い～。すぐれた～
綿	綿製品	木綿	
猛	猛攻撃		激しい～。たけだけしい～
約	約五分		およそ～。だいたい～
有	有意義		～がある
要	要注意		～する必要がある
洋	洋菓子	西洋。欧米	西洋風の～
翌	翌二〇〇二年		次の～。あくる～
来	来シーズン		きたる～。次の～
乱	乱気流		動きの激しい～。乱れる～／乱暴な（「乱開発」）
立	立候補		～に立つ。～に立てる
両	両陛下		両方の～
令	令夫人		よい～
連	連安打	連続	連続の～
牢	牢役人	ろうや	
老	老先生	老人	老いた～。年とった～
和	和菓子	日本	日本式の～。日本風の～

〔注〕ワカバヤシ（1936）、野村（1978）、山下（2008）を参考にして、二字漢語などと結合し接頭辞としてはたらく一字漢語を抜き出した。語と句の欄は、『岩波国語辞典 第7版新版』『新選国語辞典 第9版』『新明解国語辞典 第7版』『三省堂国語辞典 第7版』『明鏡国語辞典 第2版』『旺文社国語辞典 第11版』『小学館日本語新辞典』『大辞林 第3版』『学研現代新国語辞典 改訂第5版』に、見出し語の語釈や類語として記載されている表現のうち、

言いかえとしてそのまま使用しうるもののみを記した。たとえば、細かい意味・ニュアンスの差を考慮しなければ、「和菓子」は、「日本菓子」あるいは「日本式の菓子」「日本風の菓子」というように表現することが可能である。このような方針であるため、「楽隠居」の「楽」など、言いかえ候補となる適当な表現が記されていない一字漢語については、上の一覧には、記していないことを断っておく。

V おわりに

1. 本研究で問題としたこと

本研究では、現代日本語において用いられる漢語について、一字漢語から四字漢語まで単位数の小さな語から順に意味・用法や造語機能について検討した。一字漢語や二字漢語については、すでに大量の語が存在しており、それらがどのように用いられるか、つまり意味・用法が主たる問題となり、一方、三字漢語や四字漢語については、接辞として機能する一字漢語や、四字漢語の語構成要素として機能する二字漢語の造語機能が主たる検討課題となった。ただし、現代語においても、時には新たな二字漢語が生み出されることもあることから、二字漢語の形成についてもⅡにおいて検討した。

1.1 意味・用法について

本研究では、わかりにくさや重言の要因となる漢語を整理する、つまり漢語整理の観点から既存の二字漢語または一字漢語の意味や用法についてとりあげてきたが、これらを漢語のもつ長所ととらえる立場もありうる。以下では、各項目について、現象とその長短を記す形で全体のまとめを行う。

一字漢語の中には、ある程度、自立用法をもつものがあることをⅡで示したが、単独の要素からなる語という点で、たとえば「鉄」など自立する一字漢語は、和語の「手（て）」や「いる」などと同様、単純語に分類される。二つ以上の要素からなる複合語や派生語の場合、要素間の文法的・意味的な関係を理解しなければならない点で複雑であるが、単純語はそれがない分、簡潔な形式である。「鉄」や「服」のほかにも、「本」「棒」「肺」「象」「塾」など、単独で日常的に用いられ、十分わかりやすい語が見られる。一方、一字漢語は、拍数が少なく、「カイ（会・回・界・快・階・戒・解・怪）」「ジン（陣・仁・腎）」など同音語が多くなるというマイナス面がある。そのようなことから、「帽」「要」「著」に対する「帽子」「要点」「著作・著述」など、一部には、二字漢語など、ほかの表現をとったほうが、特に耳で聞いた場合にわかりやすくなるものも見られる。

次にⅢで検討した二字漢語についてであるが、検討した項目と現象を簡単に示すと、次のようになる。

- ・「動詞要素＋名詞要素」の二字漢語：文中に語内部の動詞要素や名詞要素と同じ内容の

動詞・名詞が格成分として出現することがある。

- ・漢語略語：5拍や6拍の長さをもつ三字漢語や四字漢語，五字漢語などが，3拍，4拍程度の二字漢語に省略される。
- ・対義関係の二字熟語：対義関係の一字漢語が構成要素として含まれる語の中には，二字熟語としても対義関係になる場合と，ほかの意味関係になる場合とが見られる。
- ・異音同表記語：一つの漢字表記に対して，複数の読み方が認められることがある。それは，1語における単純な読みのゆれである場合がある一方で，読み方によって別の語を表す場合もある。

「動詞要素＋名詞要素」からなる二字漢語については，1語で示される情報の豊富なことなどが長所として指摘されることがある。

一般に，漢語は和語や洋語に比べて「分析的」であり，細かい意味を表し分けることができるという特徴をもつ。たとえば，「○○に入る」という和語動詞句は，次のように，一つの漢語で表すことができる。(石井 (2011, p. 43))

この記述の後に「病院に～→入院，幼稚園に～→入園」などの例が示されている。また，「犯罪を犯す」のような言い方の場合，「犯罪」が単に「罪」では示しにくい意味を獲得しており，細かい意味が表現されていると見ることできる。このような点が「動詞＋名詞」の二字漢語のよい面としてあげることができるが，前者については，Ⅱにおいてもふれたように，「言いわけられるという意味では長所であり，言いわけなければならず，ゆうずうがきかない，という意味では短所である」(宮島 (1977a, p. 31)) という指摘がある。一つの現象であっても，どのような観点から見るとによって，長所とも短所とも受け取られうるわけである。後者つまり「犯罪を犯す」などの表現については，意味的に同様の内容をもつ要素が繰り返されることによって重複感が伴う点が短所である。人によって，ある表現に重複を感じるかどうかには差が見られることを考えれば，場合によっては，そもそも重複が問題とならないような表現を模索すべきであることを本研究では主張している。

漢語略語は，省スペースなどが動機となつてつくられることが多く「スペースに，きびしい制限のある新聞は，明治以来，数多くの略語・略称を生み出し，普及させ，そして一般語彙として定着させてきた」(田中 (1999, p. 292)) のように指摘される。話しことばの場合に

は、「原子力発電所」「運転休止・運航休止」などよりも「原発」「運休」のほうが短くていいやすいと評されることもある。これらを短所として見る場合は、漢字を見ないと意味が理解しにくい語が多い、あるいは、耳で聞いただけではわかりにくい、といった指摘につながる。よく使われる語のうち、5拍、6拍であっても、それに対する略語がない場合も珍しくない。それゆえ、5拍以上でもよほど必要性の高い場合を除けば、略語を生み出さないほうがコミュニケーション上は望ましいと考えることもできる。また、紙の新聞などと異なり、一般の文章（たとえばレポートや手紙など）やインターネット上の文章においては、語の長さを短くすることに細かく気を配らなくてもよい場合もあり、そこでは、たとえば「運転休止」を「運休」とする必要性は大きくない。一方、話しことばとしては、7拍の「うんてんきゅうし」が長いと感じられ、4拍の「うんきゅう」を使いたいということがありうる。このように考えるならば、文章や改まった場面では元の語を使い、くだけた場面における発話の中で、何度も同じ語を口に出す必要がある場合に限って略語を用いる、というように、書きことばと話しことば、公的か私的かという点を加味して使い分けを行うという対処法も有効である。

次に、対義関係の二字熟語の場合にうつる（二字の語が必ずしも二字漢語であるとは限らないので「二字熟語」としている）。「高」と「低」、「上」と「下」などの一字漢語は、一般に反対の意味を表す語として認識されており、「高級・低級」や「上品・下品」など、それらを要素として含む二字熟語においても、全体として対義関係が成立している場合が少なくない。それゆえ、一字漢語の学習において理解した対義関係を二字熟語においても当てはめることができるということで効率的である。ただし、「下校」の対義語は「上校」でなく「登校」であるというように、二字熟語において対義関係が成り立たない場合もあり、熟語のあり方が必ずしも体系的とはいえない問題がある。

以上に加えて、語構成をもとにして、過剰に対義語が生み出される恐れもある。たとえば、「無断」を記載している辞書はあっても、「有断」は通常のっていない。「無断」については、辞書に「無断欠勤」「無断借用」などの用例が示されることがある。「欠勤」や「借用」は、普通しかるべき相手に断りを入れてから行うべき動作であるが、その断りが欠けている、いわば異常な行為を一言で言い表すために「無断欠勤」「無断借用」といった言い方が必要とされる。したがって、無断でなければ「欠勤」「借用」を用いればよいのであり、「有断」および「有断欠勤」「有断借用」といった形式は不要である。しかし、単純に「有」と「無」を対応させることにより、インターネットなどでは、「有断」の使用が散見される。さらに、

「惜敗」に対して、「惜勝」というような言い方を見かけることもあるが、この場合は「惜しくも勝つ」という意味が不自然であり、「辛勝」のほうが適切な文脈であるため、誤用として扱われる。「有」の反対は「無」であるから、「無断」の反対は「有断」であるというように、単純な類推により、必要性のない余分な語が生じうる点は問題である。

最後に異音同表記語の場合を確認する。これについては、あまり長所が指摘されることはない。強いてあげるならば、「一寸」「経緯」などの表記を媒介にして、「イッスン」「ケイイ」といった漢語と「ちょっと」「いきさつ」といった和語との意味の共通性が理解されうるといふ点がある。そして、これを読みが確定できないという短所として見る立場からは、Ⅲで見たように、和語のかな書きというような対策がとられている。加えて、「追従」における「ツイジュウ」と「ツイショウ」など、漢語同士の組み合わせで意味が異なる場合も少なくなく、使い分けが注意される場合もあるが、これについて、文脈によって使い分けは可能だといふ指摘がなされることはあっても、積極的に望ましい現象としてとらえられることはないようである。

以上の項目について検討した上で、Ⅲの最後に同音語のない漢語文章語について考察を加えた。重言や耳で聞いてわかりにくい漢語略語、異音同表記語などは、漢語の問題点として指摘されることのあるテーマであるが、同音語・同音異義語が多い点も、そこに加えることができる。漢字によって同音語の区別が可能であるといった主張、あるいは、漢字・漢語でなく和語や外来語を用いることによって同音語の問題が解消できるといった主張は、従来も聞かれたが、それらとはやや異なり、本研究では、同音語のない漢語文章語というテーマで考察した。やさしい表現を理想とする立場からは、漢語文章語の多くは難語であるとされ、積極的に日常語への言い換えが必要とされるのであるが、同音語が存在しないのであれば、そのまま用いたとしても、それほど問題にならないのではないかと考えたためである。同音語の組み合わせについては、たびたび言及されることがあっても、同音語のない語については、ほとんど指摘がなく、それを補う形でこの問題を扱った。なお、「馬から落馬する」などの重言と同様、同音語も言語遊戯の観点からは、笑いを生み出す重要な手段として用いられる。

漢語に見られる以上のような現象について、本研究では、漢語整理の点からは問題が大きいという認識をもちながらも、それぞれの論考においては、このような現象の見られる語の種類・範囲、あるいは用法上の特徴などについて、できる限り記述的に分析を行うという方針でのぞんだ。それゆえ、現象の評価においては、短所のほうを強調する形になったが、先

にもふれたように、上記の現象を漢語の長所として論じる立場もありうる。

1.2 造語機能について

1.2.1 二字漢語

本研究では、Ⅱにおいて二字漢語の形成について述べ、Ⅳでは、三字漢語や四字漢語の形成について論じた。

二字漢語については、語が短いことや、短いにもかかわらず、和語などと比較して細かい意味を表現しうる点などが長所として指摘されることがある。しかしながら、現代では、すでに多くの二字漢語が存在しており、一般的に使用される一字漢語の数も限られることから、二字漢語の生産は活発ではない。そのような事実があるものの、「開缶」「開頭」の「開」など、中には、新しい表現を生み出している字音語基が存在することなどをⅡで指摘した。ここでは、新語辞典において、主に若者の間で用いられる語としてあがっているものを参考にして、二字漢語形成の実態について補足しておく。

使用したのは、『現代用語の基礎知識』の1989年版、1994年版、1999年版、2004年版、2009年版、2014年版で、若者語や流行語をとりあげる「時代・流行」あるいは「風俗・流行」の項目の語を対象とする。この中で、「開一」のように、造語力のある字音語基がもとになって新語が生み出されているケースとしては、次のようなものがある。カッコ内の説明は、同書からの引用である。

共一：共話（1989。たえず相手の話に相槌を打ったり、途中から引取ったりして渾然一体となる話の仕方） 爆一：爆食（1989。いわばやけ食い）／爆睡（1994。1999。2004。2009。2014。思いっきり寝てしまう） 完一：完飲（2004。飲み物をすべて飲むこと）／完食（2004） 一災：核災（2014。福島第一原発などの核による災害のこと） 一活：（2014。婚活。保活。離活。涙活） 美一：美婆（2014） 一婚：楽婚（2014）

たとえば、「完一」には「完済」「完走」などの既存の語があり、後部分に動作を表す語基を当てはめれば「完飲」「完食」などの語がつくられる。

略語によって二字漢語の形式をとる場合も少なくない（かなで書かれやすい略語もあるが、以下では、漢字表記で統一する）。

般教（1994。一般教養） 機変（2004。2009。機種変更） 自販（2004。自動販売機）
着拒（2004。2009。着信拒否） 百均（2004。百円均一） 専門（2004。専門学校） 情
弱（2014。情報弱者）

多項省略の語が多く、「専門」のみが下略の語である。これらに加えて、「自弁（2014。自分で作った弁当）」や「災間（2014。東日本大震災以降、いまは震災後ではなく、「あの震災」と「次の震災」の間でしかないというとらえ方）」のように、元となる表現が語としては確立していないため、略語としては記述されにくいものの、正確に述べようとするとき長くなるような表現を二字漢語の形に圧縮したと見られる語もある。

二字漢語の場合、三字漢語や四字漢語のように、臨時的な語が頻繁につくられるわけではないものの、以上のような形で新規の二字漢語が生み出される余地がある。

1.2.2 三字漢語・四字漢語

現代語において、三字漢語や四字漢語は、新語や臨時語の形成に重要な役割を果たすが、造語の際には、重言や要素間の意味関係が明確であるかどうかなどについて、十分な注意が払われなければならない。四字漢語は「予算を獲得する→予算獲得」「神社に参拝する→神社参拝」など、文から助詞や活用語尾を除いただけで、意味に特別な点のない臨時語が多くつくられる。新聞など、スペースに余裕のない文章などではしかたのない面もあるが、過度に四字漢語などの名詞表現に頼ってしまうと、助詞の使い方についての能力は低下し、「いかに国民が活字に渴望していた」（TBS。2013. 4. 17）の「に」や「国民の生活を大きく影響しますから」（国会中継。2014. 2. 6）の「を」など、標準的ではない助詞の用法が出現することになるから、安易に四字漢語の形をとらず、適切に助詞を使うことのほうに意をくばるべきである。

新語をつくる際、接頭辞的にはたらく「新」や複合語を多くつくる「主義」などは、大きな役割を果たすが、現在では外来語の使用が盛んになっており、接辞あるいは造語成分としても、外来語との張り合いの中で、一字漢語や二字漢語があまり使用されなくなる可能性もある。たとえば、山下（2008）で造語成分とされている外来語と、それと類義の一字漢語や二字漢語とを語構成要素として比較した場合、①漢語が優勢、②外来語が優勢、③両者が張り合っている、というような大まかな分け方ができる。

まず①の例としては、接頭辞の「逆」「同」や接尾辞の「中」などがある。これらの場合、

意味的に対応する外来語が接辞としては一般に用いられず、競合は起こっていない。次に、②のケースとしては、よいという意味の「グッド」がある。ワカバヤシ (1936) では、「良成績→よいせいせき」という言いかえが示されているが、現在、「良 (リョウ)」は、接頭辞としては一般に用いられていない。似た意味の「グッド」は、「グッドアイデア」「グッドデザイン」「グッドタイミング」など、ほかの外来語と結合して用いられており、「よい〇〇」という内容を一言で表す機能をもつ。また、「ギガ」や「ナノ」など単位の接頭辞は、これに相当する漢語や和語がないので、外来語がそのまま用いられる。

最後に③であるが、外来語に対して、対応する漢語がある例としては、次のような場合がある。

アンチー／反一・対一・非一　イズム／主義　ウルトラー／超一　オイル／油
 サブー／副一　スーパー／超一・特別一　セミー／準一　ニューー・ネオー／新一
 ノン一／非一・無一・不一　ポストー／以後　マン／一人 (じん)・一家 (か)　ミ
 ニー／小型一　パンー／全一・汎一　ワースト一／最低一

このうち、たとえば、「ニュー」「ネオ」に対する「新」や「イズム」に対する「主義」などの場合、「ニュー」や「イズム」も用いられることがあるが、一般的には「新」「主義」が盛んに使われており、簡単に外来語に置きかわる気配は見えない。「チック」と「的」も同様である。これらは③といっても、かなり①に近いものとして位置づけられる。

「オイル」と「油 (ユ)」や和語の「油 (あぶら)」の場合、「潤滑油」や「椿油」など、漢語や和語と結合する際は「油 (ユ・あぶら)」が用いられ、「オイル」は、「エンジンオイル」または「オリーブオイル」など外来語と結合するのが普通である。しかし、「サラダ油」「オリーブ油」のような結合が見られる一方で、「果皮オイル」「健康オイル」「ツバキオイル」「にんにくオイル」「ひまわりオイル」など、「オイル」が漢語・和語と結合した例も見られ(「健康油」「にんにく油」なども使われている)、「オイル」と「油 (ユ・あぶら)」で張り合っている様子がうかがえる。

このように、造語成分として使用できる外来語の存在を考慮するならば、新しい語をつくる場においては、三字漢語や四字漢語が最適なのか、外来語あるいは外来語を含む混種語などのほうがむしろわかりやすい表現になるか、などといった点が比較検討されなければならない。

2. 今後の課題

本研究では、用例資料として、主に新聞を用いたため、スペースなどの制限から新聞で使用されやすい漢語略語をのぞけば、書きことば、あるいは文章語として使われる漢語が検討の対象となるが多かった。しかし、略語や言いかえの論において、たびたびふれることがあったが、文章語と反対の文体的価値をもつ俗語についても、考察する必要がある。また、大人の使う一般的な漢語とは別に、子どものうちに覚える基本的な漢語や、幼児などに特有の漢語についても、考えなければならない。友定（1984, p. 223）では、「成人が幼児に向かってだけ用いる、一般成語とは異なることば」を育児語とよんで、その中で、漢語に由来するものを考察している。幼児の側に視点を置いた場合は、幼児語という言い方がなされる。友定の考察の中で、全国的に分布する語としてあげられる「キントト（金魚）」「オネショ（寝小便）」「キシヤポッポ（汽車）」「テンテン（頭）」などは、一般に幼児のことばとして扱われ、成人同士の会話では用いられない。これに対して、同様に語例としてあげられている「バンザーイ（万歳）」「サイナラ（左様なら）」「コンチワ（今日は）」など、本来の言い方から語形が少し変化している言い方の場合、くだけた言い方あるいは口頭語として、成人同士でも用いられる。成人が用いる一般語、文章語の漢語のほかにも、このようなくだけた言い方というのも考察対象に加えた場合には、たとえば、よく指摘される「タイイク（体育）」に対する「タイク（体育）」のような例も、子どものときに覚えて、教育を受ける間に、本来の形を意識するようになる語としてとらえることができ、ほかにも同じようなケースがあるのかどうか、調べる必要があるだろう。

俗語については、次のような指摘がある。

ある語が俗語であるのか日常語であるのかといった区別は認定の基準が定まっていない現状では明確ではない。国語辞典でも、俗語・卑語・隠語の類を「俗」としてひとくくりにするものもあれば、俗語、卑語、口頭語のように区別するものもあり、さらに、このような区別をしないものもある。（『日本語学研究事典』p, 155）

ここで、以上のような問題点をくわしく検討することはできないが、まずは、俗語として扱われる漢語に、どのようなものがあるのかを、新語や新用法の採用に積極的な『三国』を資料として概観し、今後の検討材料としたい。

辞書の調査を行った結果、俗語とされる漢語 288 例が確認できている。語構成の内訳は、次のとおりである。

一字漢語 (25) 二字漢語 (162) 三字漢語 (44) 四字漢語 (22)

ここに含めていないものとして、「ションベン (小便)」「キツチャ (喫茶)」など本来の語形から変化しているものが 6 例、「着拒 (←着信拒否)」「路駐 (←路上駐車)」など略語とされているものが 19 例ある。また、「爆」は、「激しく」の意で「爆売れ」のように用いられる、造語成分としての用法に加えて、「爆笑」の略語としての使い方もあり、いずれも俗語的である。語形に変化の起こっているものや略語の場合、本来的な言い方ではないという規範意識がはたらいて、俗と感じられることが多いようである。ただし、「春闘 (←春季闘争)」「労基署 (←労働基準監督署)」など、公の場でも用いられ俗語とされない略語もあるので、俗語として扱うには、くだけた言い方であることも条件となる。また、略語の中には、「サツ (←警察)」「ブツ (←物品・現物)」など、隠語とされるものも含まれるが、一般的に、隠語に対応する特別の記号は、国語辞典では設けられておらず、このようなものは俗語として扱われやすい。

以下、ほかのケースについて、俗語とされる要因を考えていく。

[下品であること]

くだけた言い方を俗語に含めず、「内容的に卑猥にわたったり下品に流れたりする点があるため、人前でおおっぴらには使用することがはばかれる表現」(『新明解国語辞典 第 7 版』)のように、俗語の範囲をせまく設定した場合、「御大層 (口頭語的表現)」など、俗語以外の表現がとられる。『新明解』で「俗語的表現」という言い方で規定されるものは、288 例のうちでは、「ケツ (尻)」「ションベン (小便)」に限られている。このほか、卑猥・下品という点では、「一物」「男性」「魔羅」(いずれも陰茎の意)などが、前述のような俗語の定義に当てはまりそうである。

[本来の品詞からずれている]

たとえば、名詞および感動詞的に用いられる「畜生」の場合、「『一』と言ひざま拳を振あげて [浮雲]」(『新潮現代国語辞典 第 2 版』)のように、俗語的な使い方が、以前からすで

に存在しており、俗だという印象をもたれることはあっても、現代語において、それが誤りだとか不適切だとか言われることはない。一方、たとえば、従来、造語成分として用いられてきた「超」が、「超おいしい」「超かわいい」のように近年になって副詞的に用いられるようになったというような場合には、使用の是非について、いろいろと議論されることになる。『三国』では、「一九八〇年代に広まった言い方」というように、年代についてのみ注記するが、「一九八〇年ごろ若い世代から副詞的な「超面白い」のような用法が広まったが、俗用」(『岩国』)、「近年若者の間で使うようになった俗語的な言い方」(『明鏡』)というように、二つの辞書では、若者という点に言及があり、『三国』とはじゃっかんのスタンスの違いが感じられる。このような品詞性のずれに対して、まだ一般化する前の段階だと判断される場合、たとえば本来は名詞である「基本」が、「〔副詞のように使って〕基本的に。「一、毎日来る」(『三国』)のように用いられることに対して、「副詞的用法になじまない」(『明鏡』)のごとく、否定的な評価が記されることもある。

形容動詞の「綺麗・奇麗」が、名詞として「綺麗をみがく」のように用いられることについて、『三国』では7版からとりあげているが、『岩国』や『明鏡』では、扱われておらず、このような新しい用法に関しても、規範的な立場からは、『三国』と異なる記述方法がとられうるのではないかと推察される。

[本来の意味からずれている]

「尻(ケツ)」や「甚六」は、もともとの意味が、俗語として扱われるが、これに対して、ある語に複数の意味があり、本来の意味では一般語、文章語であり、派生的な意味において、俗語として認定されるものがある。たとえば、「大統領」は、共和国の元首というのが本来の意味であり、芝居などで、役者に親しみをこめてよぶ場合は、俗な意味として記述される。このようなケースは、意味を勘違いしたというような使い方ではないので、誤りとされることはない。「黒書」「午後一」「十八禁」に対する「白書」「朝一」「十八金」など、もじりの元となった語が想定できる場合や、からかいなどの気持ちをこめて使われる「鎮座」「武勇伝」「本尊」などの場合も同様である。

また、意図的に使われたのかどうかは、軽々しく判断できないが、比喩的な意味が俗語として扱われるものも少なくない。たとえば、次のようなケースは、『岩国』では、「比喩的(に)」な意味として記述されている(以下でカッコ内は、『三国』による)。

化石（時代おくれ） 軍用金（事業をするのに必要な費用） 甲羅（人間のせなか） 宗旨（方面。部門） 真空（ものごとがまったくないところ） 造作（目鼻立ち） 他力本願（他人によって事をする事）

比喩的な使い方について、規範的な観点から注記されることもある。「流産」には、「計画が完成せずにとちゅうでだめになること」（『三国』）という意味があるが、『明鏡』では、これは本来の意味を「比喩に使った、好ましくない言い方」とであると判断している。

[新語・新用法]

近年使われるようになった語、あるいは新たな意味・用法で用いられるようになった語のうち、主にくだけた場面で用いられるものにおいて、俗語として扱われるものがある。「秒殺（〔格闘技などで〕あつという間に打ち負かすこと）」（『三国』は6版から立項）や「携番（携帯電話の番号）」（同辞典の7版から）などが前者に該当し、「草食（異性への関心をあらわにせず、おとなしいこと）」「二次元（漫画やアニメ、映像の世界「一恋愛」）」「脳内（頭の中に（だけ）あること。「一妄想」）」などが後者に該当するだろう。このほか、もっぱらネットの利用者によって用いられるインターネットスラングをどのように扱うかも、辞書によって方針の異なる部分だと思われるが、『三国』では、「絵師（インターネット上に、じょうずなイラストを発表する人）」「弾幕（〔インターネットで〕動画の上に、画面が見えなくなるほどたくさん表示された、視聴者のコメントの文字）」などの用法を記載している。

[誤用]

以上において、いくつか誤りなどとして扱われる例にふれることがあったが、ほかにも誤りや不適切な表現であるとして、特に注意が払われる語が存在する。記述主義的な立場をとる『三国』では、多くの語について、俗語のマークをつける以上のことはしていないが、「誤飲」の意で用いられる場合の「誤嚥」に「→誤飲」、「秒殺」の意で用いられる「瞬殺」に「→秒殺」というように、矢印を用いて、望ましい語を示す場合もいくらかは見られる。

『明鏡』で288語に関する記述を確認すると、以下の語については、俗語マークをつける以上の対応がとられている。意味の部分は『三国』による。矢印の右が『明鏡』の記述。

○確信犯：悪いこととわかっていながら、罪をおかす〈こと／人〉→気になることば

- 俄然：断然→誤り
- 奇特：めずらしくて変わったことを熱心にするようす。「一なコレクター」→誤り
- 号泣：大いになみだを流すこと。「静かに一する」→誤り
- 大丈夫：よろしい。けっこう。「おさらをお下げしても一ですか・『レジぶくろは一 [=ご不要] ですか』『はい、一です [=いりません]』」→本来は不適切
- 的：[「一に (は)」の形で] …として。「わたし一には納得できない・テレビ一には、悪役がいたほうがいい」→標準的でない
- 破天荒：型破りで豪快なようす。「一な人」→誤り
- 方：何かに関して、ぼかして言うことば。「お会計の一、六千円になります」→ぼかす必要のない場面や、対比するものがない場合に使うのは適切でない

『岩国』では、これらのうち「確信犯」に対しては、「全くの誤り」とし、ほかの語については、以上のような用法があることにふれていないが、意図的にとりあげなかった可能性もある。本来は誤りだとしても、辞書にその意味・用法がのっていれば、ある程度、多くの人が使っている言い方だと利用者に判断され、それが一つのきっかけとなり、かえって使用が広まるおそれがある、という点が考慮されることもあるだろう。

国語辞典において、俗語という呼び方のもとに一括される語に関しては、おおよそ、以上のような性質が観察される。

漢語は、漢字で表記され、本来の音訓で読まれるのが基本だとされるが、「カッコ (格好)」「バンザイ (万歳)」あるいは「チッキショー (畜生)」(笹原 (2013, p. 271)) のような、本来的ではない語形をもつ語や、「ガマン (我慢)」「トウトウ (到頭)」など、かな書きが行われる語も少なくない。俗語について、このような点を確認するため、『三国』で俗語のマークがついている漢語のうち、かな書きでもよい、あるいは、かなで書く場合の表記が示されているものを抜き出すと、まず、見出し語において、かな書きで示されるものに、「ガイシャ (被害者)」「サツ (警察)」がある。それから、見出しには、漢字表記も記されているが、「イッキ」とも書く(「一気飲み」の意で用いる「一気」について)、「(格好)」「丸カッコは、かな書きしてもよいことをあらわす)、「ふつう仮名書きにする(子どもの意の「砂利」について) など、何らかの形でかな書きの選択肢が示されているものには、次のような例があげられる。

一杯一杯 餓鬼 榎櫃 (カリン) 携番 尻 拳固 午後一 御大層 自己中 小便
(シヨンベン) 畜生 茶々 超 鉄板 天辺 (テッペン) 軟派 脳味噌 発展 風
俗 物 (ブツ) 本 没義道 薬 (ヤク)

これらは、俗な意味の場合に、かな書きの選択肢が示されるもので、語の文体的な特徴と表記とに関連が見られるが、次のような語では、俗語的用法ではない場合にも、かな書きが行われており、文体的特徴と表記との直接的な関係は指摘しにくい。なお、副詞の「結構」や「普通」、形式名詞的な「方」などが、実質的な意味のとぼしい語類としてかな書きされやすいことは、従来、指摘されてきたとおりである。

俄然 奇麗・綺麗 結構 娑婆 雪駄 提灯 瘋癲 普通 方

笹原 (2013, pp. 269-272) では、語義の希薄化によって、かな書きが行われるようになった漢語の例として、「超」や「方」の派生的な用法をとりあげているが、さらに「サイコウ・サイコー (最高)」「サイテー (最低)」など、国語辞典では、かな書きについて言及されていない事例についても詳述しており、実際の表記活動においては、以上に見た例のほかにも、俗語的あるいは口頭語的な漢語の中に、かな書きされやすいものがあることが予測される。

漢語は、書きことばで用いられるのが普通だが、中には、話しことばでも用いられる、日常語となった漢語も含まれるというのが、一般的な解釈ではないかと思われるが、一般に文章語として扱われるような漢語が、改まった場においては、話しことばとしても頻繁に出現するケースがある。たとえば、「真摯」「払拭」などの語である。「真摯」については、類語の「まじめ」よりも、改まった場にふさわしいという意識がはたらきやすいものと思われる。また、「払拭」については、一般的な語の中にこれと同音のものがなく、耳で聞いても、ほかの語と紛れることがない。このような、会話において、改まった言い方をとりたい場合に用いられる漢語については、書きことばの資料だけを観察していても、詳細を把握することはできないので、話しことばにおける用法を観察して、動向を確かめなければならない。

参考文献

- 浅井真慧 (1996) 「ニュースのことば 50 年」『放送研究と調査』46-6
- 朝日新聞社用語幹事 (編) (2010) 『朝日新聞の用語の手引』朝日新聞出版
- 安部清哉 (1989) 「常用漢字の送り仮名」『漢字講座 11 漢字と国語問題』明治書院
- 安部清哉 (2009) 「語彙史研究と語彙的カテゴリー」『シリーズ日本語史 2 語彙史』岩波書店
- 安部清哉・斎藤倫明・岡島昭浩・半沢幹一・伊藤雅光・前田富祺 (2009) 『シリーズ日本語史 2 語彙史』岩波書店
- 荒川清秀 (1986) 「字音形態素の意味と造語力」『愛知大学文学論叢』82・83
- 荒川清秀 (2002) 「日中漢語語基の比較」『国語学』53-1
- 飯田晴巳 (2009) 「重複表現」中山緑朗 (ほか編) 『みんなの日本語事典』明治書店
- 飯間浩明 (2009) 「インターネットの新語」『語彙・辞書研究会 第 36 回研究発表会予稿集』三省堂
- 池上 彰 (2011) 『その日本語, 伝わっていますか?』講談社
- 池上禎造 (1962) 「漢語の造語力の現状」『言語生活』129 (のちに『漢語研究の構想』(岩波書店, 1984) に収録)
- 池上禎造 (1984) 『漢語研究の構想』岩波書店
- 石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 石井正彦 (2011) 「語彙から見た語の一般的性質」斎藤倫明・石井正彦 (編) 『これからの語彙論』ひつじ書房
- 石井正彦 (2013) 「臨時的な四字漢語の形成」『現代日本漢語の探究』東京堂出版
- 石野博史 (1993) 「略語の造語法」『日本語学』12-10
- 石綿敏雄 (1999) 『現代言語理論と格』ひつじ書房
- 石綿敏雄・荻野孝野 (1983) 「結合価からみた日本語文法」『朝倉日本語新講座3 文法と意味 I』朝倉書店
- 石綿敏雄・佐竹秀雄 (1986) 「日本語情報処理における最適化表記」『情報化社会における言語の標準化』文部省科学研究費特定研究「言語の標準化に関する総合的研究」
- 市川 孝ほか (編) (2012) 『三省堂現代新国語辞典 第 4 版』三省堂
- 井上ひさし (1989) 「「一番最初」「いま現在」は間違いか」『日本語相談 1』朝日新聞社
- 岩淵悦太郎 (1965) 『現代の言葉 正しい言葉づかいと文章』講談社

- 梅棹忠夫ほか（監修）（1995）『講談社カラー版日本語大辞典 第2版』講談社
- NHK 放送文化研究所（編）（2011）『NHK 漢字表記辞典』NHK 出版
- 大島中正（1992）「異音同表記語」『同志社女子大学日本語日本文学』4
- 太田眞希恵（2010）「伝統離れの「乳離れ」、伝統継承の「初産」」『放送研究と調査』60-12
- 大塚みさ（2013）「最近の国語辞書の新傾向」『日本語学』32-2
- 大野晋・田中章夫（編）（1995）『角川必携国語辞典』角川書店
- 岡本千万太郎（1954）『日本語の批判的考察』白水社
- 荻野孝野・小林正博・井佐原均（2003）『日本語動詞の結合価』三省堂
- 荻野綱男（1996）「言語データとしての話者の内省・新聞 CD-ROM・国語辞典の性質」『計量国語学』20-6
- 荻野綱男（1998）「サ変動詞語幹の動詞用法と名詞用法」文部省科学研究費補助金重点領域研究「人文科学とコンピュータ」1997 年度研究成果報告書『新聞記事の CD-ROM を用いた文法研究』
- 荻野綱男（2002）「計量言語学の観点から見た語彙研究」『国語学』53-1
- 荻野綱男・野口美和子（1988）「辞書における反対語記述の問題点」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 9—IPAL (Basic Verbs) をめぐって—』情報処理振興事業協会
- 荻野綱男・野口美和子（1996）「反対語意識の構造」『日本語研究』16
- 沖森卓也・中村幸弘（編）（2003）『ベネッセ表現読解国語辞典』ベネッセコーポレーション
- 沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子（2011）『図解日本の語彙』三省堂
- 奥秋義信（2011）『残念な日本語』毎日新聞社
- 奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』大修館書店
- 奥津敬一郎（1996a）「連体即連用？ 第 12 回 変化動詞文 その一」『日本語学』15-10
- 奥津敬一郎（1996b）「連体即連用？ 第 13 回 変化動詞文 その二」『日本語学』15-11
- 奥津敬一郎（1996c）「連体即連用？ 第 14 回 変化動詞文 その三」『日本語学』15-12
- 奥津敬一郎（1997a）「連体即連用？ 第 15 回 変化動詞文 その四」『日本語学』16-1
- 奥津敬一郎（1997b）「連体即連用？ 第 16 回 変化動詞文 その五」『日本語学』16-2
- 影山太郎（1980）『日英比較 語彙の構造』松柏社
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

- 影山太郎 (1997) 「文法と形態論」『岩波講座 言語の科学 3 単語と辞書』岩波書店
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 影山太郎 (2007) 「形態論から見えてきた新しい意味機能」『言語』36-8
- 影山太郎・柴谷方良 (1989) 「モジュール文法の語形成論—「の」名詞句からの複合語形成—」『日本語学の新展開』くろしお出版
- 影山太郎・斎藤倫明 (2013) 「語種と語形成」『レキシコンフォーラム』6, ひつじ書房
- 樺島忠夫 (1977) 「漢字の造語力」『言語』6-8
- 神尾昭雄 (1980) 「「に」と「で」」『言語』9-9
- 加茂正一 (1955) 「重言」国語学会 (編) 『国語学辞典』東京堂出版
- 鴨下信一 (2008) 「口頭語の力」『調査情報』483
- 川上真紀子 (2001) 「造語成分からみた語の省略法の類型化」『早稲田大学大学院文学研究科紀要第3分冊』47
- 菅野 謙 (1993) 「マスコミ言語の省略表現」『日本語学』12-10
- 菊沢季生 (1926) 「漢語の整理と略字の使用に就て」『国語教育』11-2
- 菊沢季生 (1933) 『国語科学講座2 国語位相論』明治書院
- 菊谷 彰 (1983) 「馬から落ちて落馬して—重複表現—」『放送教育』38-4
- 北原保雄 (編) (2002) 『明鏡国語辞典』大修館書店
- 北原保雄 (編著) (2005) 『続弾! 問題な日本語』大修館書店
- 北原保雄 (編) (2010) 『明鏡国語辞典 第2版』大修館書店
- 北原保雄 (2011) 『日本語の常識アラカルト』文藝春秋
- 北原保雄・東郷吉男 (編) (1989) 『反対語対照語辞典』東京堂出版
- 木村英樹 (1986) 「一料 一代 一賃 一費 (一金)」『日本語学』5-3
- 木村義之 (2011) 「ことばと社会」『図解日本の語彙』三省堂
- 教科研東京国語部会言語教育研究サークル (編) (1964) 『語彙教育 その内容と方法』むぎ書房
- 共同通信社 (編) (1949) 『ニュースマンズ・ハンドブック』板垣書店
- 共同通信社 (編) (1964) 『新・記者ハンドブック』共同通信社開発局
- 共同通信社 (編) (2010) 『記者ハンドブック 第12版』共同通信社
- 金田一京助 (編) (2010) 『例解学習国語辞典 第9版』小学館
- 金田一京助ほか (編) (2002) 『新選国語辞典 第8版』小学館

- 金田一京助ほか（編）（2011）『新選国語辞典 第9版』小学館
- 金田一京助全集編集委員会（編）（1992）『金田一京助全集 第4巻』三省堂
- 金田一春彦（編）（2002）『学研現代新国語辞典 改訂第3版』学習研究社
- 金田一春彦，池田弥三郎（編）（1988）『学研国語大辞典 第2版』学習研究社
- 金田一春彦，金田一秀穂（編）（2012）『学研現代新国語辞典 改訂第5版』学研教育出版
- 工藤力男（2004）「重言〈過半数を超える〉の論理」『成城文芸』186
- 国広哲弥（1991）『日本語誤用・慣用小辞典』講談社
- 国広哲弥（1995）『日本語誤用・慣用小辞典 続』講談社
- 国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』大修館書店
- 国広哲弥（2010）『日本語誤用・慣用小辞典 新編』講談社
- 窪園晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版
- 窪園晴夫（2002）『新語はこうして作られる』岩波書店
- 倉島節尚（2002）『辞書と日本語：国語辞典を解剖する』光文社
- 倉島節尚（2008）『日本語辞書学への序章』大正大学出版会
- 倉島節尚（編）（2006）『日本語辞書学の構築』おうふう
- 倉持保男（2006）「辞書に載せる意味」『日本エドワード・サピア協会研究年報』20
- 慶野正次（1972）『動詞の研究』笠間書院
- 見坊豪紀ほか（編）（2001）『三省堂国語辞典 第5版』三省堂
- 見坊豪紀ほか（編）（2008）『三省堂国語辞典 第6版』三省堂
- 見坊豪紀ほか（編）（2014）『三省堂国語辞典 第7版』三省堂
- 小泉 保（1978）『日本語の正書法』大修館書店
- 国語学会（編）（1955）『国語学辞典』東京堂出版
- 国語学会（編）（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
- 国立国語研究所（1961）『同音語の研究』（国立国語研究所報告 20）秀英出版
- 国立国語研究所（1976）『現代新聞の漢字』秀英出版
- 国立国語研究所（1983）『現代表記のゆれ』（国立国語研究所報告 75）秀英出版
- 国立国語研究所（1984）『語彙の研究と教育（上）』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（1997）『日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂
- 国立国語研究所（2004a）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 国立国語研究所（2004b）『言葉の「正しさ」とは何か』（新「ことば」シリーズ17）国

立印刷局

- 後藤 斉 (2000) 「日本語コーパス言語学と語の文体レベルに関する予備的考察」『東北
大学文学研究科年報』50
- 小林英樹 (1997) 「VNr-Nrタイプ動名詞の目的語(補語)について」『日本学報』16
- 小林英樹 (2001) 「動詞的要素と名詞的要素で構成される二字漢語動名詞に関する再考」
『現代日本語研究』8
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」『講座現代国語学Ⅱ ことばの体系』筑摩書房
- 斎賀秀夫 (1982) 「当用漢字表と語彙」『講座日本語の語彙7 現代の語彙』明治書院
- 斎藤倫明 (2004) 『語彙論的語構成論』ひつじ書房
- 斎藤倫明・石井正彦 (編) (1997) 『語構成』ひつじ書房
- 斎藤倫明・石井正彦 (編) (2011) 『これからの語彙論』ひつじ書房
- 榊原昭二 (1987) 『娯用誤用事典』ぎょうせい
- 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』角川書店
- 阪倉篤義 (1986) 「接辞とは」『日本語学』5-3
- 阪倉篤義・林大 (監修) (2004) 『講談社国語辞典』講談社
- 笹原宏之 (2011) 「さまざまな語彙研究 文字・表記論と語彙」『これからの語彙論』ひつじ
書房
- 笹原宏之 (2013) 「漢語表記のゆれ」『現代日本漢語の探究』東京堂出版
- 佐竹秀雄 (1987) 「表記辞書と仮名・漢字変換」『朝倉日本語新講座1 文字・表記と語構成』
朝倉書店
- 佐竹秀雄 (2001) 「研究対象の量とサンプリング」『日本語学』20-5
- 佐竹秀雄 (2011) 「国語辞典と語彙」『これからの語彙論』ひつじ書房
- 佐竹秀雄 (2012) 「日本語の攻防 文字・表記 文字体系」『日本語学』31-12
- 産経新聞社 (編) (2012) 『産経ハンドブック』産経新聞社 (非売品)
- 塩田雄大 (2011) 「「美男子」が多いのはどの地域?」『放送研究と調査』61-10
- 時事通信社 (編) (2010) 『最新用字用語ブック 第6版』時事通信出版局
- 柴田 武 (1951) 『文字と言葉』刀江書院
- 柴田 武 (1988) 『語彙論の方法』三省堂
- 柴田 武 (2004) 『人前で使える日本語』祥伝社

- 島村直己・鶴岡昭夫・正保勇（編）（2004）『国立国語研究所の語彙調査 資料集』国立国語研究所
- 島村礼子（1985）「複合語と派生語」『津田塾大学紀要』17
- 島村礼子（1997）「英語との比較を通してみた日本語の「名詞＋名詞」複合語」『平成7年度 COE 形成基礎研究費研究報告（1）』神田外語大学
- 朱 京偉（2011）「蘭学資料の四字漢語についての考察」『国立国語研究所論集』2
- 朱 京偉（2013）「日本語の造語力としての和製漢語」『レキシコンフォーラム』6
- 白川博之（監修），庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 白川博之（2003）「重言」北原保雄（監修）『岩波日本語使い方考え方辞典』岩波書店
- 新村 出（編）（2008）『広辞苑 第6版』岩波書店
- 杉岡洋子（2006）「語や接辞の意味が語形成に果たす役割」『日本語学』25-6
- 杉本つとむ（1980）「漢字」『月刊ことば』4-6
- 杉本つとむ（1998）『日本文字史の研究 杉本つとむ著作選集5』八坂書房
- 杉本つとむ（監修）（1982）『国語辞書を読む』開拓社
- 滝島雅子（2013）「放送用語委員会 漢語や硬い表現を避け，わかりやすく」『放送研究と調査』63-1
- 田窪行則（1986）「一化」『日本語学』5-3
- 武久 堅（監修）（2004）『今さら他人に聞けない間違いだらけの日本語』実業之日本社
- 武部良明（1979）『日本語の表記』角川書店
- 武部良明（1981）『日本語表記法の課題』三省堂
- 武部良明（1988）「二字漢字語の音訓読み分けについて」『国文学研究』94
- 武部良明（1989）「漢字制限と書きかえ・言いかえ」『漢字講座11 漢字と国語問題』明治書院（のちに『文字表記と日本語教育』（凡人社，1991）に収録）
- 武部良明（1990）「送り仮名による書き分けについて」『国文学研究』102
- 武部良明（1991）『文字表記と日本語教育』凡人社
- 田中章夫（1978）『国語語彙論』明治書院
- 田中章夫（1999）『日本語の位相と位相差』明治書院
- 田中章夫（2002）『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版
- 田中章夫（2009）「字音語の生態」『日本近代語研究5』ひつじ書房

- 田中真一・上野誠司 (2002) 「「新」・「旧」の意味論と音韻論」『音韻研究』5
- 田野村忠温 (2009) 「コーパスからのコロケーション情報抽出」『阪大日本語研究』21
- 玉村文郎 (2002) 「対照語彙論」『朝倉日本語講座4 語彙・意味』朝倉書店
- 張麗華 (1992) 「「VN」漢語動詞の統語機能」『日本学報』11
- 陳力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
- 土屋信一 (1965) 「話しことばの中の漢語」『言語生活』169
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12 (のちに『寺村秀夫論文集 I』(1993, くろしお出版) に収録)
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語の意味とシンタクス I』くろしお出版
- 友定賢治 (1984) 「漢語に由来する育児語について」『漢語漢文の世界 2』溪水社
- 中川秀太 (2005a) 「推論による VN の外部表示の特殊化」『日本語文法』5-1
- 中川秀太 (2005b) 「字音形態素「同」と照応」『早稲田日本語研究』13
- 中川秀太 (2005c) 「動作性複合名詞と動詞との連合における重複表現について」『国文学研究』147
- 中川秀太 (2010) 「字音形態素「新」の造語機能」『漢語の言語学』くろしお出版
- 中川秀太 (2012a) 「対義関係の二字熟語について」『十文字国文』18
- 中川秀太 (2012b) 「漢語略語の意味・用法について」『社会言語学』12
- 中川秀太 (2013) 「字音語基の造語力」『現代日本漢語の探究』東京堂出版
- 中川秀太 (2014a) 「名詞要素を内部にもつサ変動詞語幹における格助詞の用法」『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』44
- 中川秀太 (2014b) 「国語辞典と四字漢語—辞書にのる語とのらない語—」『都留文科大学研究紀要』80
- 中川秀太 (2015a) 「漢字制限と漢語のイイカエ」『わかりやすい日本語』くろしお出版 (刊行予定)
- 中川秀太 (2015b) 「接尾辞的な一字漢語と類義の二字漢語における造語機能の比較」『レキシコンフォーラム』7 (刊行予定)
- 中川正之 (1992) 「漢語の語構成」『日本語と中国語の対照研究論文集 (下)』くろしお出版
- 長嶋善郎 (1980) 「語構成の比較」『日英語比較講座 1 音声と形態』大修館書店
- 長嶋善郎・山崎幸雄 (監修) (2007) 『日本語を使いこなす 言葉の実用辞典』小学館
- 中村一男 (編) (2002) 『反対語大辞典 第 53 版』東京堂出版

- 中村通夫・金田一春彦・奥田靖雄（編）（1957）『講座現代の用字・用語教育 3』春秋社
- 竝木崇康（1985）『語形成』大修館書店
- 成田徹男・榊原浩之（2004）「現代日本語の表記体系と表記戦略」『人間文化研究』2
- 西尾寅弥（1961）「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43（のちに『現代語彙の研究』（明治書院，1988）に収録）
- 西尾寅弥（1965）「単語の成り立ち」『口語文法講座 6』明治書院
- 西尾寅弥（1980）「略語の構造」『言語生活』339（のちに『現代語彙の研究』（明治書院，1988）に収録）
- 西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』明治書院
- 西尾実ほか（編）（2000）『岩波国語辞典 第6版』岩波書店
- 西尾実ほか（編）（2009）『岩波国語辞典 第7版』岩波書店
- 西尾実ほか（編）（2011）『岩波国語辞典 第7版 新版』岩波書店
- 西野保行（2007）「常磐新線からつくばエクスプレス（TX）竣工への道（Part2）」『鉄道ピクトリアル』57-2
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院
- 仁田義雄（1986）「動詞と格体制」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 7』情報処理振興事業協会技術センター
- 仁田義雄（1993）「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 仁田義雄（2010）『仁田義雄日本語文法著作選 3 語彙論的統語論の観点から』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法 2 格と構文・ヴォイス』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（編）（2010）『現代日本語文法 1 総論・形態論』くろしお出版
- 日本語教育学会（編）（2005）『日本語教育事典 新版』大修館書店
- 日経新聞社（編）（2011）『NIKKEI 用語の手引 2011年版』日経新聞社（非売品）
- 日本国語大辞典第2版編集委員会（編）（2000-2001）『日本国語大辞典 第2版』小学館
- 日本新聞協会新聞用語懇談会（編）（1955）『新聞用語言いかえ集』日本新聞協会
- 日本放送協会（編）（1953）『難語言言いかえ集』日本放送出版協会
- 日本放送協会（編）（1962）『難語言言いかえ集 第7版』日本放送出版協会
- 野村雅昭（1973）「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」『国立国語研究所論集』4

- 野村雅昭 (1974) 「三字漢語の構造」『国立国語研究所報告』 51
- 野村雅昭 (1975a) 「〈代〉〈賃〉〈費〉〈料〉のつかいわけ」『言語生活』 282
- 野村雅昭 (1975b) 「四字漢語の構造」『国立国語研究所報告』 54
- 野村雅昭 (1977) 「造語法」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』 岩波書店
- 野村雅昭 (1978) 「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告』 61
- 野村雅昭 (1984) 「語種と造語力」『日本語学』 3-9
- 野村雅昭 (1987) 「複合漢語の構造」『朝倉日本語新講座 1 文字・表記と語構成』 朝倉書店
- 野村雅昭 (1988a) 「二字漢語の構造」『日本語学』 7-5
- 野村雅昭 (1988b) 「漢字の造語力」『漢字講座 1 漢字とは』 明治書院
- 野村雅昭 (1989) 「語構成」『講座日本語と日本語教育 1 日本語学要説』 明治書院
- 野村雅昭 (1999a) 「字音形態素考」『国語と国文学』 76-5
- 野村雅昭 (1999b) 「語彙調査データによる基本漢語の抽出」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』 11
- 野村雅昭 (1999c) 「サ変動詞の構造」『日本語研究と日本語教育』 明治書院
- 野村雅昭 (2002) 「〈出入〉をあらわす字音語基の造語機能」『国文学研究』 136
- 野村雅昭 (2004) 「漢語の現在」『日本語学会 2004 年度秋季大会予稿集』
- 野村雅昭 (2007) 「語彙・文字」『国語と国文学』 84-5
- 野村雅昭 (2008) 『漢字の未来 新版』 三元社
- 野村雅昭 (編) (2013) 『現代日本漢語の探究』 東京堂出版
- 橋本五郎 (監修) (2004) 『乱れているか? テレビの言葉 新日本語の現場 第2集』 中央公論新社
- 林大 (監修), 尚学図書言語研究所 (編) (1986) 『言泉』 小学館
- 林巨樹・松井栄一 (監修), 小学館辞典編集部 (編) (2006) 『現代国語例解辞典 第4版』 小学館
- 林 四郎 (1982) 「臨時一語の構造」『国語学』 131
- 林 四郎ほか (編) (2006) 『例解新国語辞典 第7版』 三省堂
- 林 四郎 (監修), 篠崎晃一ほか (編) (2012) 『例解新国語辞典 第8版』 三省堂
- 原 富雄 (1955) 「漢字制限と漢字おきかえについて」『国文学 解釈と鑑賞』 20-2
- 反対語対照語辞典編纂委員会 (編) (1998) 『活用自在反対語対照語辞典』 柏書房
- 日向敏彦 (1982) 「機能別漢字表」『講座日本語学 6 現代表記との史的対照』 明治書院

- 日向敏彦（1985）「漢語サ変動詞の構造」『上智大学国文学論集』18
- 日向敏彦（1992）「字音語の造語力」『日本語学』11-5
- 平井昌夫（1961）『わかりやすい文章の書き方』講談社
- 比留間直和（2012）「新聞表記と常用漢字表改定」『論集文字：漢字の現場は改定常用漢字表をどう見るか 第1号 改訂版』ポット出版
- 福永恭助（1926）『国語国字問題』聚英閣
- 福永恭助（1951）『これからの文章はこう書くのだ』森北出版
- 福永恭助・岩倉具実（編）（1939）『口語辞典』口語辞典出版会
- 北條正子（1973）「主要接辞・助数詞一覧」『品詞別日本文法講座 10 品詞論の周辺』明治書院
- 保科孝一（1925）「漢語整理の急要」『国語教育』10-10
- 毎日新聞社（2013）『毎日新聞用語集 2013年版』毎日新聞社（非売品）
- ましこひでのり（2010）『知の政治経済学』三元社
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 松井栄一（編）（2005）『小学館日本語新辞典』小学館
- 松村明（監修）・小学館『大辞泉』編集部（編）（1998）『大辞泉 増補・新装版』小学館
- 松村明（監修）・小学館『大辞泉』編集部（編）（2012）『大辞泉 第2版』小学館
- 松村 明ほか（編）（2005）『旺文社国語辞典 第10版』旺文社
- 松村 明（編）（2006）『大辞林 第3版』三省堂
- 松本 曜（1997）「空間移動の言語表現とその拡張」『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』研究社出版
- 丸山直子（2005）「話しことばにおける漢語」『東京女子大学比較文化研究所紀要』66
- 水谷静夫（1958）「同音異義語」『言語生活』81
- 水谷静夫（1978）「和語と漢語の造語力」『和語漢語』（「ことば」シリーズ8）文化庁
- 水谷静夫（編）（1987）『朝倉日本語新講座 1 文字・表記と語構成』朝倉書店
- 水野義道（1987）「漢語系接辞の機能」『日本語学』6-2
- 宮地 裕（1973）「現代漢語の語基について」『語文』31
- 宮島達夫（1969）「近代日本語における漢語の位置」『教育国語』16（のちに、鈴木康之編『国語国字問題の理論』（むぎ書房、1977）に収録）

- 宮島達夫 (1977a) 「語彙の体系」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』岩波書店 (のちに『語彙論研究』(むぎ書房, 1994) に収録)
- 宮島達夫 (1977b) 「単語の文体的特徴」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院 (のちに『語彙論研究』(むぎ書房, 1994) に収録)
- 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房
- 村石昭三 (1992) 『気がつかない誤りに気がつく 間違い漢字・勘違いことば診断辞典』創拓社
- 村木新次郎 (1987) 「対義語の輪郭とその条件」『日本語学』6-6
- 村木新次郎 (1989a) 「現代日本語における分析的表現」『国文学 解釈と鑑賞』54-7
- 村木新次郎 (1989b) 「対義語」『ケーススタディ日本語の語彙』桜楓社
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 村木新次郎 (2002) 「意味の体系」『朝倉日本語講座 4 語彙・意味』朝倉書店
- 村木新次郎 (2004) 「漢語の品詞性を再考する」『同志社女子大学日本語日本文学』16 (のちに『日本語の品詞体系とその周辺』(ひつじ書房, 2012) に収録)
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 最上勝也 (2000) 「放送用語言い換えの系譜」『言語』29-10
- 森岡健二 (1970) 「日本文法体系論 (18)」『月刊文法』2-11
- 森岡健二 (1982) 「対義語とそのゆれ」『日本語学』1-1
- 森岡健二 (1988) 「略語の条件」『日本語学』7-10
- 森岡健二 (1994) 『日本文法体系論』明治書院
- 森岡健二ほか (編) (2000) 『集英社国語辞典 第2版』集英社
- 森岡健二ほか (編) (2012) 『集英社国語辞典 第3版』集英社
- 森田良行 (1992) 「新漢語成立に伴う動詞性の問題」『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院
- 森田良行 (1996) 『意味分析の方法』ひつじ書房
- 森山卓郎 (1988) 『現代日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森山卓郎 (2000) 『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房
- 安井稔・中村順良 (1984) 『代用表現』研究社出版
- 矢田 勉 (2013) 「日本語の攻防 文字・表記 カタカナとひらがな」『日本語学』32-12
- 山口明徳 (2001) 「言葉の乱れ」『UP』30-2

- 山口明穂ほか（編）（2013）『旺文社国語辞典 第11版』旺文社
- 山下喜代（1999）「字音接尾辞「的」について」『日本語研究と日本語教育』明治書院
- 山下喜代（2000）「漢語系接尾辞の語形成と助辞化」『日本語学』19-13
- 山下喜代（2008）『日本語教育のための合成語のデータベース構築とその分析』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究C
- 山下喜代（2013）「接辞性字音形態素の造語機能」『現代日本漢語の探究』東京堂出版
- 山田 進（2000）「語彙（理論・現代）」『国語学』51-2
- 山田忠雄ほか（編）（2005）『新明解国語辞典 第6版』三省堂
- 山田忠雄ほか（編）（2012）『新明解国語辞典 第7版』三省堂
- 山田俊雄ほか（編）（2000）『新潮現代国語辞典 第2版』新潮社
- 山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館
- 山梨正明（1992）『推論と照応』くろしお出版
- 山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
- 愈 暁明（2008）「日本語の重言をめぐって」『日本語言文化研究』8
- ゆもとしょうなん（1977）「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』27
- ゆもとしょうなん（1978）「同音語の発生」『教育国語』55
- ゆもとしょうなん（1979）「あわせ名詞の構造」『言語の研究』むぎ書房
- 吉沢 信（2014）「放送用語委員会 吟味して語を選ぶ」『放送研究と調査』64-3
- 米川明彦（1989）『新語と流行語』南雲堂
- 米川明彦（1998）『若者語を科学する』明治書院
- 読売新聞社（編）（2011）『読売新聞 用字用語の手引 第3版』中央公論新社
- 読売新聞社スタイルブック委員会（編）（1954）『読売スタイルブック』読売新聞社
- ワカバヤシマサオ（1936）『漢語ノ組立ト云イカエノ研究』カナヤ
- 綿谷 雪（1964）『言語遊戯の系譜』青蛙房
- Jacobsen, Wesley M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kurosio Publishers

旧稿との関係

I 研究の概要→書き下ろし

II 自立用法をもつ一字漢語および二字漢語の形成に力のある一字漢語の分析

1. 自立用法をもつ一字漢語→書き下ろし
2. 字音語基の造語力→『現代日本漢語の探究』, 東京堂出版, 2013年

III 二字漢語の意味・用法における諸問題

1. 推論によるVNの外部表示の特殊化→『日本語文法』5-1, 2005年
2. 名詞要素を内部にもつサ変動詞語幹における格助詞の用法→『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』44, 2014年
3. 動作性複合名詞と動詞との連合における重複表現について→『国文学研究』147, 2005年
4. 重言(重複表現)についての整理→書き下ろし
5. 漢語略語の意味・用法について→『社会言語学』12, 2012年
6. 対義関係の二字熟語について→『十文字国文』18, 2012年
7. 異音同表記語について→書き下ろし
8. 漢語の文章語について→書き下ろし

IV 字音形態素の造語機能

1. 字音形態素「新」の造語機能→『漢語の言語学』, くろしお出版, 2010年
2. 「新」と「初」→書き下ろし
3. 字音形態素「同」と照応→『早稲田日本語研究』13, 2005年
4. 接尾辞的な一字漢語と類義の二字漢語における造語機能の比較→『レキシコンフォーラム』7, 2015年(刊行予定)
5. 国語辞典と四字漢語一辞書にのる語とのらない語→『都留文科大学研究紀要』80, 2014年
6. 名詞+名詞の四字漢語について→書き下ろし
7. 三字漢語・四字漢語の形成における注意点→書き下ろし

V おわりに→書き下ろし

付記

新聞記事CD-ROMは、朝日新聞と日本経済新聞社の許可を得て使用した。